

妖精の尻尾の双竜

urul629

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フィオーレ王国のとある街にある、とあるギルド……数多の伝説を作ってきたギルドの名は「妖精の尻尾」

彼らが作ってきた数多くの伝説……その中心には、決まって二体の竜の存在が確認された。

一体は辺りいっぺんを燃やし尽くし、もう一体は全てを凍てつくし、押し流して行ったという。

これは、「妖精の尻尾の双竜」と呼ばれた少年少女の冒険譚である。

はい、というわけでどうもおはこんばんちは。

今まで読み専だった者ですが、なんだか我慢できなくて書いてしまいました。

初投稿兼初執筆ということで駄文になっていると思いますが、気に入っていただければ幸いです。

オリジナルドラゴンスレイヤーとかいう何番煎じですが、これが私の書きかった事です！（・ω・）キリッ

あと、批評は作者の絹（し豆腐よりも繊細なシャボン玉メンタルです）ので、できる限りご勘弁を……アワワ

目次

プロローグ

プロローグ

ようこそ妖精の尻尾へ！

双竜と猿と牛

チーム

日の出

潜入せよ、エバル邸

日の出の秘密

親愛なるカービィへ

鉄の森編

鎧の魔導士

その列車は竜を乗せて行く

呪歌

死神は二度笑う

妖精女王と水竜

妖精達は風の中

乙女の魔法

炎と水と風

最強チーム

悪魔の島編

ナツ vs. エルザ

2階

呪いの島

月は出ているか

286 275 264 248 230 214 204 192 179 166 153 136 122 111 92 78 64 50 24 6 1

デリオラ	299
月の雫	312
グレイとリオ	324
レアVS毒爪のトビー	335
勝手にしやがれ	360
ウル	371
永遠の魔法	385
真実は氷の刃	406
ガルナ島最終決戦	417
時のアーク	434
BURST	446
村人の秘密	457
届け あの空へ	470
人格輪転	486
輪転の結末 幸か不幸か	507
回想 双竜誕生	
ドラゴンの子	527

プロローグ プロローグ

「……ゼルネール？　ねえ、どこ行ったの？　かくれんぼなの？」

とある島の森の中。

少女が言葉を紡ぐ。

しかし帰ってくるのは……何も無い

「……ねえ、返事してよ、ゼルネール。どこなの？」

レアの負けなの、早く出てきてよゼルネール」

いつもなら帰ってくるはずの親の声。

しかし、少女がいくら待っても返事は無く、紡がれた少女の言葉は空しく森の中に消え去る。

「……なんで？　なんで何も言わないの？　ゼルネール……怒ったの？」

何か言っつてよゼルネールう……」

グスつと鼻の吸る音が聞こえる。

それに呼応するかのようには、空はモクモクと雲がかかっている、あつという間に薄暗い曇天の空が出来上がった。

ピチヨン……

雫が地面を叩きつける。

一つ…また一つと、滴る雫の数は増えていく。

そうして気づいた頃には、雫は滝のように天から降り注ぐ。

しかし、少女は全身を濡らしながらも、その場を動かなかった。

否、動けないが正しいだろう。

そんな少女はその場で蹲り、頭を抱え、頬を濡らした。

「ヒック……ヤダ……ヤダよゼルネール！」

お願い!! もうワガママ言わないの! いい子にするの!
だから一人にしないでツ!! おいてかないでよゼルネール!!!」

叫ぶ、叫ぶ、叫ぶ。

しかし、天は少女を嘲笑うかのように雨足を強め、ゴロゴロと雷がいかづち空を斬り裂く。

絶望に打ちひしがれる少女。

親に置き去りにされ、小さな島でたった一人。

この世界で生きていくには、現実は厳しく、あまりにも酷だろう。
だが、運命は少女を見離さなかった。

心にポツカリと空いてしまった空白を埋めるかのように、少女には
命よりも大切と言える場所ができた。

少女は、小さな事で老人に手を引かれ、その場所へ一歩……足を踏
み入れた。

くくく

舞台はフィオーレ王国……人口1700万人の永世中立国。

そこは『魔法』が当たり前に溢れた世界。

魔法は普通に売り買いされ、人々の生活に根付いていた。

その魔法を駆使して、生業としている者たちがいる。

人々は彼らを『魔導士』と呼んだ。

魔導士たちは様々なギルドに所属し、依頼に応じて仕事をすする。

そのギルド、国内に多数。

そして、とある街に、とある魔導士ギルドがある。

かつて……いや、後々に至るまで数々の伝説を残してきたギルド。

そのギルドの名は……

フェアリーテイル
妖精の尻尾

〃〃〃

マグノリア……ファイオーレ王国内にある大きな街の一つ。

この街に、とある巨大なギルドある。

名を妖精の尻尾。
フェアリーテイル

数多の魔導士を抱え、数々の雑誌にもその者の活躍は載っており、今ではその名を知らない方が珍しいくらいにはビッグネームのギルドだ。

そんなギルドの一階の酒場を覗いてみると、男たちが昼間から酒を飲んだくれており、仲間たちとドンチャン騒いでいた。

そんな酒場のカウンターに、むさ苦しい男たちとはどうも反りが合わないであろう水色の髪の少女がいた。

特徴的な水色の髪はサイドテールに纏め、表情の読めないジト目の瞳は鮮やかな蒲公英色である少女……名を『レア・ギルティ』は手元の新聞に視線を落とし、頬を緩ませていた。

「ナツ……ドラゴン探したらレアも混ぜて欲しかったの……」

そう心の中で文句垂れるレアだが、表情は変わらず頬を緩ませた微笑を浮かべている。

レアが心の中で向けた件の少年、ナツはハルジオンサラマンダーに火竜竜が出た

という噂を聞きつけ、相棒猫のハッピーを連れてさっさとギルドを飛び出してしまったのだ。

普段のレアであればなぜ自分も連れて行かなかったのかと不貞腐れるところだが、今回ばかりはレアもナツの突拍子もない行動を許していた。

「(気持ちにはわかるの…。……………ゼルネール…)」

レアとて、消えた自分の母、『ゼルネール』の手がかりが見つかったとなればじつとできる自信は無いと断言できた。

その過程で、今の相棒と出会えたのだから。

そんな過去の思い出を思い出していたレアの元に、羽のある金の毛色の猫が降り立った。

「どうしたのかしら？ そんな物思いに耽ったような顔して」

「……………別に物思いに耽っていた訳ではないの」

どこかキツイ言動の金色の猫……………名を『フリーシャ』は赤色のワンピースを靡かせながら着地し、紫色のツンとした瞳をレアに向けた。いつもと変わらないジト目を向けられたフリーシャだが、そんなことは意に介さず言葉を連ねる。

「ふーん……………であれば、リーシャ達の最初の出会いの時でも思い出していたかしら？」

当たらずとも遠からずという事で、レアは表情を変えずに小さく頷いた。

ちなみに『リーシャ』とはフリーシャの一人称である。

とある雪山の中、当時1歳だったレアは自身の背丈ほどもある巨大な卵を見つけたのだ。

ひよんなことからレアはその卵を洞窟に匿い、2週間かけて温めた

のだ。

そうして卵から孵ったのがフリーシャである。

フリーシャ自身、レアに与えられた名前を大層気に入っており、最初は常に自分の名前を周りに自慢していたのだ。

彼女の一人称はその名残からくるものだ。

レアはフリーシャとの会話に一区切りつけ、再び手元の新聞に視線を落とす。

気になったフリーシャは再び羽を出し、レアの手元を覗き込む。

その次の瞬間、ああと納得したように頷いた。

「またナツかしら？ 相変わらず派手にやってるのよ」

「ん。けど、それがナツなの」

「これが昨日の夜の事だから、そろそろ帰ってくるはずなのよ」

レアとフリーシャは一人の少年の話題で会話を弾ませる。

すると、レアは周囲の気温が若干高くなり、嗅ぎ慣れた匂いがギルドの門のすぐ外まで来ていることに気づいた。

レアが門の方へ振り向いたタイミングと門が開いたタイミングはほぼ同時だった。

「ただいまあ!!」

「ただー」

レアが視界に捉えたのは、桜色の髪に竜の鱗のようなマフラーを巻いた見慣れた少年……名を『ナツ』と、フリーシャと同等の身長の青い猫……名を『ハッピー』

そして、金髪のセミロングの見慣れない美少女だった。

ようこそ妖精の尻尾へ！

「ナツ、ハッピー、おかえりなさい!!」

帰ってきたナツとハッピーを最初に言葉でもてなしたのは、白髪に真つ赤なドレスが印象的な妖精の尻尾の誇る看板娘……名を『ミラジエーン』

ギルドメンバーからは『ミラ』の愛称で万人に慕われている。

そんなミラに遅れて、他のギルドメンバーもナツのやらかしたハルジオンの一件の新聞を片手に揶揄いながら迎え入れる。

……が、次の瞬間。

「テメエ！ サラマンダー 火竜の情報嘘じゃねえか!!」

「うごっ!?!」

ナツが笑っていた男の一人に飛び蹴りを喰らわせたのだ。

どうやらハルジオンに サラマンダー 火竜が出たという噂を流した張本人らしく、ナツからすれば噂に流されて酷い目にあつたという認識のようだ。

これは彼なりの八つ当たりなのであろう。

そこからはあれよあれよという間にギルド内は喧嘩する者でいっぱいになる。

売り言葉に買い言葉の フェアリーテイル 妖精の尻尾。

ナツが片っ端から売っていく喧嘩をほぼ全員が買っていく、至る所で酒瓶や皿、拳句の果てには椅子や机なども宙を飛び回っている。

そんな様子を、ナツと共に門を潜ってきた金髪美少女は感極まった様子で眺めていた。

「すごい……。あたし、本当に フェアリーテイル 妖精の尻尾に来たんだ……!」

一切の曇りを知らないその笑みはまさに自分はココに来た。たったそれだけの事だが、その事すらとても貴重な一瞬だと感じ、この瞬間を心に留めようという心情がいとも簡単に読み取れた。しかし、少女が現実を知る2秒前。ドツドツド！という中の喧騒に負けなくらいの足音が彼女の耳に劈く。

「ナツが帰ってきたってえ!?!」

次に聞こえてきたのは怒号。

驚いた少女は肩を震わせ、怒声の聞こえた方向に視線を向けると……絶句した。

「テメエ!! この間の決着^{ケツ}着けんぞ!!」

「グレイ……アンタなんて格好で出歩いているのよ」

「はっ! しまった!!」

少女の目に映ったのは、パンツ一丁の黒髪の青年である。

パンツ一丁である(大事なことなので二回言いました。)

当の本人……名を『グレイ・フルバスター』も本当にたった今気づいたような反応を見せるが、次の瞬間にはそんなことも忘れたかのようにナツに突つかかっていた。

そんな様子を見ていたグレイに一言入れた女性……名を『カナ・アルベローナ』は呆れたようにため息を吐いた。

「全く……これだから品のない男どもは、イヤだわ」

そう吐き捨てたカナは持っていたワイングラスを置き、そばに置いてあった大樽を担ぎ上げては直接グビグビと酒を飲み始めた。

露出の多い水着のような格好をした女性が大股開いて酒を飲む姿

のどこに品があるというツツコミが聞こえたのはここだけの話。

「くだらん」

カナのその男勝りな姿に呆気に取られていた少女だったが、逆立つた白髪に学ランと呼ばれる珍しい服装、そして下駄というかなり奇抜なファッションの大男……名を『エルフマン』の野太い声によって現実に引き戻された。

「昼間っからビービーギャーギャーガキじゃあるまいし……」

しかし外見からは予想がつかないくらいの冷静な物言い。

もしかしたら、この男が目の前の喧嘩を止めてくれるのではないか。

少女がそう思ったのは時間にしてたった数秒だった。

「漢なら拳で語れエ!!」

「結局喧嘩なのね……」

結局エルフマンも見た目に違わずの脳筋思考だった。拳を振り上げては喧嘩の渦の中へ突っ込んでいく。だがその次の瞬間。

「邪魔だ!!!」

「しかも玉砕!?!」

エルフマンはナツと 그레이 のダブルアッパーによって吹き飛ばされてしまった。

見事な速落ちニコマである。

いい意味で期待に込えてくれている。

「ん？ 騒々しいな」

そう言って現れたのは短く刈り込んだ茶髪にブルーのサングラスをかけた爽やかイケメンだった。

この人物に関しては少女も見覚えがあった。

「あ!! 『彼氏にしたい魔導士』 上位ランカーのロキ!!」

このチャラ男……名を『ロキ』は少女の愛読する週刊誌『ソーサラ』のランキング掲示板の一つの『彼氏にしたい魔導士』ランキングの上位を常にキープしている。

その証拠というやらなんやら、彼の両隣には美女が一人ずつ。

文字通り両手に花である。

だがしかし、彼も妖精の尻尾の魔導士である。フェアリーテイル

当然のことながら彼も一癖も二癖もある人物の一人である。

「混ぜてくるね〜♡」

「頑張つて〜♡」

「(はいッ！ 消えた!)」

彼の場合、こんな具合に女に甘い。

彼の女に弱い性格故に、ナンパの数は両手では数えきれない。

さらに彼女の数も数えようものならば、それだけで一日が終わるのではないかと思う。

少女は自分の中の理想と現実にての妖精の尻尾フェアリーテイルの差にぐったりと項垂れた。

「な……何よコレ……まともな人が一人もないじゃない……」

現在少女の頭の中では妖精の尻尾フェアリーテイル⇨変人の集まりという方程式が半ば成り立ちつつあった。

「そうやって落ち込む少女の前にまた新たな人(?)が現れる。

「理想と現実のあまりにも大きすぎる差という名の炎によって真っ白に燃え尽きた遺体かしら?」

「つて誰が遺体よー!!!」

あまりにも失礼な物言いに少女は憤慨して目の前の誰とも知らない誰かにツツコミを入れる。

すると少女は自身の目をパチクリさせた。

目の前にいたのは赤いワンピースを纏い、金色の毛色をした二足歩行の猫だったからだ。

しかも背中には翼が生えている。

少女は最近、というかほんの数分前にも目の前の存在と似た人物……というより猫と話していたので思わず口にした。

「え? メスのハッピー!?」

「あんなだらしなくて情けない兄と一緒にしないでほしいかしら。

リーシャはフリーシャ。リーシャの名前は覚えておくといいのよ」

「よ……よろしく……」

かなり高圧的な態度を取られ、少女は身を一步引いた。

しかし、少女は再びその目をパチクリさせることとなる。

というのも、彼女には、フリーシャのある言葉が胸に引っかかったのだ。

「(え!? 兄!!? この子がハッピーの話していた妹!? 全然似てないじゃない!!)」

そう。実は彼女、^{ギルド}ここに来る途中、ナツとハッピーと三人でだべりながらここまでやってきたのだ。

その際に、ハッピーから妹の存在は聞かされていた。

しかし、あまりにも似ていないのだ。

性格にしろ容姿にしろ、目の前の猫からはハッピーと感じ取れる部分が皆無に等しかった。

そんな少女の心の中の疑問に答えたのは、驚くほど抑揚の少ない平坦な声だった。

「ハッピーとフリーシャに血の繋がりは無いの。ただ、小さい頃からずっと一緒に育ってきてるから、お互い兄妹として認識しあっているの」

少女は驚いて声の方向……フリーシャの後ろの方向へと視線を飛ばした。

目に映ったのは、水色の髪を靡かせた少女だった。

右側にサイドテールにした髪は腰まで届いており、表情は一貫して無表情だ。

ジト目の蒲公英色の瞳はじつと金髪少女を見つめていて離さない。服装は水兵のような白いセーラー服に白いベレー帽と、中々コスプレのような姿だが、その無表情も相まってフランス人形のような儂げな可愛さがある。

フリーシャの後をついてきた『レア・ギルティ』だった。

最初こそ、レアのその抑揚の少ない声や感情の読み取れない無表情は少女にとって恐怖であったが、今ではもうそんな感情は無くなっており、逆にその少女の容姿に惹かれていた。

魔性の魅力があるのかしらと少女は心の中で呻いた。

「レア・ギルティ。よろしくなの、金髪さん」

「……あー、こちらこそよろしく、レアさん！ 新入り……つて自分で言っているのかな……？ あたし、ナツに誘われてここまでやってきた、ルーシイって言います」

一瞬反応に遅れてしまった少女……名を『ルーシイ』だったが、慌

ててそう言った。

新入りという言葉聞いたレアはうんうんと数度頷き、後ろを振り向いた。

ガッツ!!!

その瞬間、鈍い音が響き渡る。

「……」

「れ…レア……さん？」

「誰なの！ 誰がハッピー投げてきたの!? 流してあげるから素直に拳手しろなの!!!」

鈍い音の正体は、レアとハッピーの互いのデコをぶつけ合って鳴り響いた音だった。

結果ハッピーは完全に意識が飛んでおり、人知れずフリーシャに連れられて介抱されていた。

しかし、問題はこれからだった。

レアはハッピーをぶつけられたことに憤慨し、野郎どもが右往左往へ飛び回る喧嘩のなかに突っ込んでいってしまった。

その無表情もほんの少しだけ崩れており、眉がちよびつとだけ吊り上がっていた。

ルーシイはそんなレアを見て『レアまで!』と心の中で嘆き、再び地面に突っ伏した。

「や…やっぱり……このギルドにまともな人はいないのかなあ…?」

「あら、新人さん?」

自分では無理なのかと感じていたルーシイの元に、救いの声が聞こえた。

ハツとなってルーシイはガバツと顔をあげると、綺麗な白髪に真っ赤なドレスを纏った美女が目に映った。

フェアリーテイル
妖精の尻尾の看板娘のミラである。

「ミ……ミラジエーン!!? きゃー!本物♡」

目の前にいる本物のミラに、ルーシイはメロメロになる。

というのも、彼女はロキの件でもあったルーシイの愛読する週刊誌『ソーサラー』にてグラビアアイドルをしており、表紙を飾るほどの人気ぶりだ。

ルーシイも例に漏れずそのファンの一人であり、彼女の顔が視界に入るや否や、一瞬で顔をトロツとろけさせ、完全に見惚れている。

だがまたもや一瞬で現実を思い出し、ハツとなってミラに問題の件について聞いてみた。

「ア……アレ、止めなくていいんですか？」

「いつもの事だから放っておけばいいのよ」

しかしミラの返答は無視が一番とのこと。

笑顔を浮かべているミラだが、ルーシイはそれが何処か諦めの感情が混ざっている気がし、あらあらとボソツと呟いた。

だが、悲劇は突然に。

ミラがそれにと続けようとした所、ヒューと何かが飛んでくる音が聞こえてきたその次の瞬間、ガンツと再び鈍い音が響く。

音の発信源はミラの頭であり、彼女はそのまま力無くパタッと倒れた。

一連の流れを見ていたルーシイは一瞬で顔を真っ青にした。

「きゃーッ!! ミラジャーンさぁーん!!!」

「楽しいでしょ?」

「(怖いですうー!!!)」

ルーシイの魂の叫びに応えるかのように、ミラはすぐにムクツと体を起こす。

しかし、その額からはダラッと血が流れており、彼女の変わらない笑顔も相まって、何処かのホラー映画としか思えない形相になっている。

ミラの頭に飛んできた物の正体は割れた瓶であり、一步間違えれば刺さってもおかしくない危険な状況だった。

そんな危険な状況だったにも関わらずミラ自身はケロッとしている様子も、ルーシイの恐怖を煽っていたところだろう。

だが、こんな事はまだ序の口。

ミラはフラフラとかなり危ない足取りでルーシイの元を後にした次の瞬間。

ズギャンツ!!!

男がグオツと音を上げながらルーシイの隣にあつた机に突っ込んできたのだ。

ルーシイは肩をビクツと震わせながら、飛んできた男と男が飛んできた方向を交互に見やった。

彼女の目に映つたのはやけに肌面積が多い黒髪の青年と、何かの布を片手にヒラヒラさせながらへっへーんと得意げに笑っているナツの姿だった。

そこでルーシイはふと疑問に思った。

ナツが持っているあの布はなんだろうと。

そこからルーシイが答えを導き出すのにかかった時間は十秒もかからなかった。

そして、答えが分かったと同時に、彼女の顔色がサーツと良くない色へと変色していく。

おそろおそろ、彼女は今尚倒れているであろう男に視線を向けると。

「あゝあゝあゝあゝ!!! 俺のパンツーーーー!!!」

「こつち向くなーーーー!!!」

彼の股の間のイチモツを脳裏にしっかり焼き付けることになってしまった。

飛んできた男はさつきまでパンツ一丁だったグレイである。

しかし、彼の今の状態はパンツすら履いていない。

つまり完全に全裸である。

そう、ナツがヒラヒラさせていた布の正体はグレイのパンツであったのだ。

公共の場で全裸になるのはさすがにまずいと感じたグレイはその場でしゃがみ、ルーシイと向き合う。

「お嬢さん、よかつたらパンツを貸して……」

「貸すかー！ーッ!!!」

しかしあろうことか彼はルーシイに対して下着を借りれるかせがんだのだ。

マナーの欠如もいいところである。

ルーシイが思わずグレイの顔面に拳をめり込ませたのは変態に対する正当防衛として片付けられるだろう。

だが、それから彼女に纏う火の粉はもはや火炎放射と差し支えない物だった。

「やれやれ、デリカシーの無いやつは困るね……」

「漢は拳でエーッ!!!」

「邪魔なのー!」

「あーうるさい……落ち着いて酒も飲めやしない」

どこからともなく現れたロキによってルーシイは横抱きに、つまりお姫様抱っこをされて連れて行かれたかと思えば、ロキは戻ってきたエルフマンによって吹っ飛ばされる。

ルーシイは綺麗にロキの腕から抜け落ちると、ストンと地面に落ち

る。

前も見えていないエルフマンはそのままルーシイをも吹っ飛ばしかけるも、それはレアの蹴りによって阻止され、再び吹き飛ばす。

謎の食物連鎖である。

レアによって吹き飛ばされたエルフマンはカナの背後にあった山積みにされた空の酒樽をボウリングのピンの如く次々と吹き飛ばした。

そしてここにきてただ酒を飲んでいただけだったカナも堪忍袋の緒が切れたようだ。

「アンタら、いい加減にしなさいよ…」

苛立ちが頂点に達しているカナは懐からカードを取り出す。

カードが光り出すと魔法陣が展開され、光はさらに強くなる。

「アツタマきた!!」

「ぬおおおおおっ!!!」

「困った奴らだ」

「かかってこーい!!!」

「押し流すの…!」

カナのそれが起点となり、他の者も各々の魔法を展開し始める。

まさに一触即発の雰囲気ルーシイは目を見開かせており、血を拭き取ったミラも笑顔ながらこれは少しマズいと感じ始める。

そんな時だった。

「やめんかバカタレエツ!!!」

「デカー…!!!?」

巨人が現れた。

それは比喻でもなんでもなくその通りである。

身長は体格の大きいエルフマンですら余裕で見下ろすほどの大きさであり、吹き抜けになつてゐる2階の天井ギリギリである。

鬼の形相をしており、頭からはツノまで生えている。

突然現れた鬼の巨人による一喝により、さつきまで騒がしかったギルド内はまるで嘘だったかのようにしんと静まり返つた。

「あら、いらしたんですか？ マスター 総長」

「マスター!!？」

ルーシイから本日何度目かとなる驚愕による叫び。

しかしそれも無理は無いだらう。

あんな破天荒なギルドメンバーをまとめるギルドマスターがこの巨人だというのだ。

ミラの言葉に巨人もうんと軽く返事をしたこともあり、間違いは無いだらう。

巨人の一喝により各々解散していく中、たった一人だけ大声で笑つた。

「だーっはっはっはっはっはっは!!!!みんなしてビビリやがつて！この勝負は俺の勝…びっ!!！」

空気の読めないナツは巨人によつて踏み潰され、短い悲鳴をあげた。バカタレ

あれだけ暴れ散らかしていたナツがこうも簡単に、呆気なく鎮圧されたことに、ルーシイは小さく肩を震わせた。

ハルジオンにてナツの強さを目の当たりにしていた分、余計に恐怖の感情は強く働いた。

最初は小さかった恐怖も、巨人がだんだんこちらに近づくとつれて膨れ上がっていく。

「ん？ 新入りかね？」

「は、はいいっ…」

遂に声をかけられた。

恐怖が最高潮に達しているルーシイはそうくぐもった返事しかできず、瞬きすらも彼女にとっては許されない状況だった。

「ふんぬううう……!!!」

すると巨人は力むような声を上げる。

恐怖によって思考もままならないルーシイは一体何をされるのかと、餌を求める魚のように口をパクパクとしかできない。

だが、巨人のその巨体はみるみる内に小さくなっていく。ルーシイの視点は天井から徐々に下に向いていき、やがては自分の目線よりもさらに縮んでく。

もうすでに彼女の心には恐怖心など無く、驚嘆が上回ってええー!?と声をあげた。

「よろしくネー！」

最終的に巨人は小さな子供くらいの大きさの小さな老人となっていた。

道化師がかぶるような二股の帽子をかぶり、立派な口ひげを生やして右手を上げるさまはまさに小人のおじいさん。

あの時の威厳、威圧感はどこ吹く風だった。

この老人こそが妖精フェアリーテイルの尻尾のマスター……名を『マカロフ』である。マカロフはどう!と後ろ向きに回転しながら飛んでいく。

その身体は真っ直ぐ2階の吹き抜けの手すりまで飛んでいき…。

ガンツ!!

背中から思いつきりぶつかった。

なんとも締まらない。

ギルド内は微妙な空気になるが、マカロフ自身はそんな事なかった

かのように手すりによじのぼって、1階にいるギルドメンバーに向き直る。

「まくたやってくれたのお貴様らア！ 見よ、評議会から送られてきたこの文書の量を!!」

マカロフは懐から取り出した大量の文書をヒラヒラと見せつけながら怒鳴りつける。

その分厚さは辞書と比べても勝るとも劣らないほどの量であり、ギルドメンバーの面々は揃ってげっ!という風に顔を顰める。

ちなみにマカロフが口にした『評議会』とは、魔導士ギルドを束ねる機関。

魔導士ギルドが所属する「地方ギルド連盟」を管理する団体であり、罪を犯した魔導士の検挙や問題を起こしたギルドに制裁を加えたり、魔法界の中で絶対の権力を有している。

「まずは…グレイ。密輸組織を検挙したまではいいが……その後、街を素っ裸でふらつき、挙句のはてに干してあった下着を盗んで逃走」

「いや……だつて裸じゃマズイだろ…」

「まずは裸になるなよ」

まずはグレイにほこを向けて、マカロフはため息を一つ。

グレイの脱ぎ癖による事案を大に発表されたことにより、当の本人は恥ずかしそうに抗議の声を上げるもエルフマンの正論により論破。

だがそんなエルフマンとて他人事ではない。

「エルフマン。貴様は要人護衛の任務中に要人に暴行」

「『男は学歴よ!』なんて言うからつい…」

マカロフは首を高速に振ること4回。

エルフマンは自身の信条を貶されたことによる暴走を咎められる。エルフマンの座右の銘を全否定したような言葉であり、エルフマンの気持ちもわからなくはないが、本当に手を、しかも護衛対象に対して手を出してしまえば元も子もない。

それこそ破門になってもおかしくないぐらいの不祥事であり、絶対については済まされない。

「カナ・アルベローナ。経費と偽って某酒場で飲むこと大樽15個。しかも請求先が評議会。」

ロキ…。評議員レイジ老師の孫娘に手を出す。某タレント事務所からも損害賠償の請求がきておる」

次にカナ、ロキと順に矛先を向けられる。

詐欺にも近いそれを公言されたカナはバレたかと小さく零し、女の敵と後ろ指を指されてもおおかしくないロキは気まずそうに視線を宙に漂わせている。

ここまでも数々の不祥事を声に出して読み上げたところだが、これらも未だ前座に過ぎない。

「そしてナツ……」

「ガックシと首を垂れるマカロフ。」

その姿はミラの諦めの笑顔に近い何かがあった。

「デボン盗賊一家壊滅するも民家7軒のうち4軒を壊滅。チューリイ村の歴史ある時計台を破壊。フリージアの教会全焼。ルピナス城一部損壊。ナズナ溪谷観測所崩壊により機能停止。ハルジオンの港半壊」

今までとは比にならないほどの量の損壊を一人で叩きだした。

その本人はというと、マカロフに踏み潰されて未だ復活しきれてい

ないようで、うつ伏せの状態です。突っ伏して顔を顰めさせながら黙って聞いていた。

ついでに言えば、何回目かの登場になる週刊誌『ソーサラー』にて掲示されている妖精の尻尾の問題行動の大半がナツ一人の物であると知ったルーシイはヒクヒクと顔を引き攣らせていた。

だがその数秒後、新たな疑問がルーシイの頭をよぎる。

「あれ…？デボン盗賊一家壊滅の際の民家壊滅がナツ一人だけの作業じゃ無いなら、残りの3軒は誰が…？」

その回答はすぐにマカロフの口より答えられた。

「さらにレア。デボン盗賊一家壊滅するも、民家7軒のうち3軒を壊滅。オニバス駅にて魔道四輪車を6台故障。発電所故障によってフリージアの大規模停電。ルピナス城地下崩壊。リント鉱山破壊による落石によりグロン遺跡一部破壊」

ナツに負けず劣らずの損害をこの少女は叩き出していた。

思わぬ答え合わせにルーシイは目をギョツとさせ、レアの方を見た。

ツーンとした無表情は相変わらずであったが、その頬には小さく汗が垂れているのをルーシイは見逃さなかった。

そして改めてマカロフの方を見上げると、呆れなのか怒りなのか、文書を握っている拳はさらに固く閉じられ、文書の方に皺が寄っていた。

「貴様らア……ワシは評議会に怒られてばかりじゃぞお……！」

眉間に寄るシワの数はさらに増え、マカロフは体全体をプルプルと震わせている。

今マカロフが挙げたのはあくまで一例であり、妖精の尻尾の不幸事

はこんなものでは無いのだ。

マカロフが出す負のオーラに感化され、ギルド全体はどんよりと暗くなる。

ほとんどの者が下を向いても尚プルプルと震えているマカロフに、ルーシイは再び恐怖の熱が再燃する。

だが、マカロフは次の瞬間……あろう事か、持っていた文書に火をつけた。

「が、評議員などクソくらえじゃ」

「……………え？」

一ギルドマスターが世のギルドのトップに真つ向から喧嘩を売る発言と行動に、ルーシイは素つ頓狂な声を漏らした。

マカロフは燃やした文書をポイツと下に投げ捨てると、待つてました！と言わんばかりに、ナツが四つん這いの状態から落ちてきた燃える文書に食らいつき、ムシヤムシヤと食べ出した。

「よいか…………。理を越える力とは全て理の中より生まれる。魔法は奇跡の力なんかではない。我々の内にある気の流れと、自然界に流れる気の波長が合わさりはじめて具現化されるのじゃ。それは精神力と集中力を使う。いや、己が魂全てを注ぎ込むことが魔法なのじゃ」

もう既にさつきまでの暗い雰囲気は消え去り、全員が上にいるギルドマスターの言葉を、表情を、そして目を正面から受け止める。

そしてルーシイは気づいた。

ここにいる者たちは、ただ頭のネジが二、三本抜け落ちた変人集団なんかでは無いのだと。

ただただ自由なのだ。

それぞれが、それぞれの道を進んでいるだけなんだと、ルーシイは気づいた。

「上から覗いている目ン玉気にしていたら魔道は進めん。評議員のバカどもを恐れるな！自分の信じた魔道を進めエい!!」

不敵な笑みを浮かべる我らがマスターを見て、他の者たちも笑みを浮かべる。

それはルーシイとて、そして普段から無表情のレアでさえ例外では無かった。

「自分が信じた道を進めエい!! それが妖精の尻尾フエアリーテイルの魔導士じゃ!!」

巻き上がる歓声。

それは本日最高潮の盛り上がりを見せ、さっきまでの喧嘩による刺々しい雰囲気は完全に形を潜め、みんながみんな笑い合っていた。

ルーシイは、そんな風になくなるギルドの様子を見て、期待で胸をいっぱいにしたのだった。

双竜と猿と牛

すっかり夜は更けていく中、妖精の尻尾フェアリーテイルの中は昼の時と相変わらずバカ騒ぎしていた。

「ナツ。遅くなっただけど、おかえりなの」

「おう！ ただいま、レア！」

レアはこの時間になってようやくナツに話しかけた。

それに対しナツは大量の燃え盛るファイヤーグルメ（物理）を前にニカつと笑って応えた。

短くそれだけ済ますと、ナツは目の前のファイヤーグルメに食らいついた。

「それで、他の人から聞いたけど、ハルジオンに出た火竜サラマンダーって言うのが、ナツの名を語った別人だったって事かしら？」

「そう言う事みたいだね」

ムシヤムシヤと料理を貪っている隣で、猫同士が簡単なやりとりをする。

火竜サラマンダーがハルジオンに出たという噂をギルドメンバーから聞いたナツはそこに向かった訳だが、フリーシヤが言った通り、それはナツの字あざなを語った偽物であったに過ぎなかった。

そこまですらばナツにとって迷惑ではあるものの、大した問題にはならなかった。

しかしその偽物はその名を利用して多くの女性を誑かし、他国に売り捌く奴隷商に手をつけていた。

火竜サラマンダーの名に加え、妖精の尻尾フェアリーテイルの名まで勝手に名乗っていたことに対して激怒したナツは、その場で偽物をボコボコにし、ハルジオンの港を半壊させたと言うのが簡単な事の顛末だ。

「ナツが火^{サラマンダー}竜なら、オイラはネコマンダーでいいかなあ」
「その理屈だと、リーシャもネコマンダーってことになるかしら」
「……マンダーってなんなの？」
「聞くところ絶対そこではないのよ……」

ハッピーの意味不明発言からレアの天然発言に、フリーシャはこめかみを押さえつけた。

レアはこのように天然なところがあり、その天然ぶりにはあのナツできえ振り回されるほどにはレア・ギルティというキャラクターはフワフワしている。

「ナツー！ 見て見て！ギルドマーク入れて貰っちゃったあ！」

フリーシャがボケの処理に頭を抱えていると、ミラに手の甲へ妖精の尻尾のマークフェアリーテイルを入れて貰ったルーシイが嬉しそうに見せびらかしながらこちらへと寄ってきた。

「よかったな、ルイージ」

「ルーシイよ!!」

しれっとボケるナツにルーシイはフンガーとなりながらツツコミ返す。

しかしそんな事知らないというかのように、ナツはレアと一緒に依頼書を貼っている依頼板リクエストボードの立ち眺めだす。

金が無いため報酬の良いのをというハッピーのリクエストに答えるかのように、手頃の依頼はすぐに見つかった。

「盗賊退治で23万Jだ!!」

「ん、お得。これで決まりなの」

ナツはレアの言葉にだな！と返事をして依頼書をボードから引きちぎった時だった。

「父ちゃん、まだ帰ってこないの？」

そんな今にも泣きそうな声が耳に入る。

揃って声の聞こえた方向へ視線を送ると、そこにはマカロフと同じくらいの少年……名を『ロメオ』がカウンターのテーブルに座っているマカロフを見上げる形で詰め寄っていた。

この少年、妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士……名を『マカオ』を父に持つ魔導士の息子である。

話によれば、彼の父マカオは依頼に出たきり帰ってこないのだと言う。

しかも彼の父の言葉で3日で帰ると言ったにも関わらず、既に1週間が経過しているのだ。

単純に考えれば何かあったと考えるのが普通であり、ロメオの心配は他の人の常軌を逸する。

彼も声を荒げて探しに行くよう訴えるが、返ってきた言葉は、ロメオにとつてはあまりに無慈悲だった。

「探しに行ってくれよ！ 心配なんだ!!」

「冗談じゃない!! 貴様の親父は魔導士じゃろ！ 自分のケツも拭けねえ魔導士なんぞ、このギルドにはおらんのじゃ!!」

帰ってミルクでも飲んでおれい!!」

突き放すかのようなマカロフの言葉に、とうとうロメオは涙をその目に浮かべる。

悔しさのあまり力なく俯く。

「バカーー!!」

「おふー！」

その悔しさをバネに、ロメオはその拳をマカロフの顔面にめり込ませてから、タツタツタと逃げるようにギルドを出ていった。

「厳しいのね……」

「あんなこと言っても、本当はマスター総長も心配してるのよ」

その様子を遠目で見ていたルーシイは気の毒そうに溢し、ミラは皿を洗いながらマカロフを擁護するようにそう言った。

一方、レアはその様子を黙って見て、何時ぞやの自分と今のロメオの姿を重ねていた。

『何か言つてよゼルネール……』

「……！」

ロメオの今の気持ちは痛いほどレアに伝わっていた。

ずっと一緒にいると信じていた大切な人が、ある日突然居なくなり、孤独に苛まれる。

その孤独感、喪失感に、レアは胸を締め付けられるかのような錯覚を覚える。

「……」

ズシンツ!!

そして、それはレアだけでは無かった。

「オイナツ！ 依頼板クエストボード壊すなよ!!」

音の鳴った方向を見ると、ついさつき引きちぎった依頼書クエストボードを依頼板の元の場所にめり込ませたナツが、自分の荷物を持ってさつさとギルドを出て行ってしまった。

いつも依頼板を眺めるだけで仕事に出かけない妖精の尻尾の魔導士リクエストボードの一人、ナブの注意も聞かずにギルドを後にする姿はどこか重い雰囲気があった。

「ナツ……」

「総長マスター……ナツのやつ、ちょっとヤベェんじゃねえの？」

ナブの言葉を皮切りに他の者たちもやれガキだの、やれマカオの自尊心が傷つくだの口々にナツを非難するかのような言葉を放つ。

しかしそれらはあくまでもマカオ思つてのことだった。

騎士には己の騎士道があるように、魔導士にだって、譲れないプライドなどもあるのだ。

しかし、マカロフはこれらの言葉をバツサリと切り捨てた。

「進むべき道は誰が決めるでもねえ。放っておけい」

そう言つてロメオに殴られたことなど無かつたかのようにパイプを加え、煙をふかした。

「……ど……どうしちゃつたの？ アイツ急に……」

「ナツも、ロメオくんと同じだからね。……自分とダブっちゃつたのかな」

事情を知らないルーシイにミラはそう答える。

どこか悲痛な表情を浮かべるミラはルーシイのえ？という返答に続けて口を開く。

「ナツのお父さんも、出ていったきり帰ってこないのよ。お父さん……って言つても、育ての親なんだけどね。

しかもドラゴン」

最後のミラの爆弾発言に、ルーシイは椅子から転げ落ちた。
なんとかカウンターにしがみついて座り直すも、育ての親がドラゴンという事実はルーシイにとっては信じられないものであり、声を荒げるが、ミラが静かに「ね」と静止の声をかけ落ち着かせる。

「小さい時、そのドラゴンに拾われて：言葉や、文化や：魔法なんかを教えて貰ったんだって。

でもある日、ナツの前からそのドラゴンは姿を消した」

「そっか……それがイグニール」

そうしてルーシイは合点がいった。

ハルジオンで初めて出会ったとき、ナツは本物のドラゴン：イグニールを探して火竜の噂を聞きつけてきたのだと。

彼があの時見つけた彼の魔法：滅竜魔法ドラゴンスレイヤーを教えたのだと。

一人で答え合わせをしていた時だった。

ルーシイは突然隣に人の気配を感じ、慌てて横を見ると、ナツと負けず劣らずの量の荷物をまとめたレアがいた。

「レ……レア……？ 急にどうしたの？」

「レアも、マカオ探しに行くの。ナツだけだと心配だから」

「あらあら」

レアはそれだけ言うと、フリーシャを連れて駆け足でナツを追いかけていった。

その様子に、ミラはかわいい子供を見るかのように微笑ましく眺め、ルーシイはただ呆然と、その背中を眺めていたのだった。

くくく

「でね！ あたし今度ミラさんの家に遊びに行くことになったの」

「♡」

「下着とか盗んじやダメだよ」

「盗むかー!」

「違うかしらハッピー。彼女にはそんな度胸も覚悟も無いのよ」

「盗む気もないわよ!!」

マカオが向かったというハコベ山への馬車の中。

その中には、馬車に酔ってぐったりしているナツとレア、寄り添いあつて座っているハッピーとフリーシャ、そして何故かルーシイが乗車していた。

「はあ…はあ…」

「な、なんで…：…ルーピンが、うつぶ…：…いる、の?」

しれっとボケるレアにルーシイは自分の名前を訂正するツツコミを一つ入れてから目をキラキラさせながら答えた。

余談だが、今のレアのルーピン発言、いつもの天然発言だったりする。

「だって、せつかくなら何か妖精の尻尾フェアリーテイルの役に立つことがしたいなあ
〜」

と、ルーシイは言っていたが、猫2匹は役立つことをして自分の株を上げたいんだと謎に確信していた。

しかし、そんな軽い気持ちで行くほど、この先の場所は甘くない。

「つていうか、ナツは分かってたけど、レアも酔いやすい体質なの!」
「まあ、そうなのよ。ナツとレア、二人揃ってグロッキーになるから毎度毎度大変なのかしら」

「うつ、大きい声出さないで…：…気持ち悪いの」

レアは口を抑えながら本当に苦しそうにそう訴える。

何か別の話題をと考えたとき、ルーシイはポンと手を叩いた。

「ねえねえ、そういえば聞きたかったんだけど、妖精の尻尾に《双竜》つていう二人組がいるでしょ？ 一人は火竜サラマンダーのナツ、もう一人は？」
「ああ。それなら…」

ルーシイの質問にフリーシャが答えようとした時だった。
突然馬車がガタツと音を立てて止まった。

「止まった!!」

「復活なのー!」

「今日は比較的短い距離でよかったかしら」

「あい」

馬車が止まったことにより乗り物酔い組は揃って喜びを露わにする。

ネコたち介護組も二人の早い復活に安堵の息を漏らした。

これ以上は馬車では進めないと、運転手の忠告が入り、ルーシイが礼を言つて扉を開けたときだった。

目に入ったのは辺り一面真っ白な景色だった。

「何コレ!? いくら山の方とはいえ、今はまだ夏季でしょ!!?」

轟々と横から殴りつけるような吹雪にルーシイは怯みまくり、中々馬車から降りられないでいるが、吹雪なんぞ気にしないと云わんばかりにナツとレアはさっさと馬車を降りる。

それに観念したかのように、ルーシイも馬車から降りた。

「寒っ!!」

「そんな薄着してっからだよ」

「だらしないの」

「アンタらも似たようなモンじゃないっ!!」

この場合はルーシイの方が正しい。

ルーシイが言ったように今は夏季であり、街中では薄着であっても若干暑いと感じるくらいだ。

それが一変して真冬の空になれば対策をしていなければ動くこともままならないはずだ。

ルーシイはノースリーブにショートパンツというバリバリの夏の格好出し、ナツに關しては上半身の前が完全にオープン状態である。

この中で一番服を着ているレアであっても、セーラー服とそれは決して真冬の寒さに耐えられる格好とは言い難い。

毛皮で全身を覆っているネコ2匹を除き、正常な反応を示しているのは1人だけという異常光景だが、ツツコむ者は誰もいない。

ルーシイはナツのリュックに背負われている毛布を無理やりぶんどっては包まり、腰から鍵束をとっては銀の鍵をかざした。

「ひひ…ひ…開け…ととと…時計座の扉…ホロロギウム!」

「おおー!」

「時計だ!」

ボフンと煙が巻き上げ、晴れて現れたのは古時計の星霊だった。

ナツとハッピーは目を輝かせ、レアとフリーシャは特に興味が無いのか、黙ってホロロギウムを見ていた。

顕現させた星霊で何をするのかと思えば、いつの間にか振り子の部分にルーシイが入り込んでいた。

『「あたし、ここにいる」と申されております」

「何しにきたの?」

レアが冷たくそう言い放つが、寒さでそれどころでは無いルーシイは再び口をぱくぱく動かす。

しかしやはりルーシイの声は聞こえず、続けてホロロギウムが代弁する」

「何しにきたといえ、マカオさんはこんな場所に何の仕事をしに来たのよ!？」と申ししております」

「知らねえでついてきたのか？ 凶悪モンスター『バルカン』の討伐だ」

ナツが質問に淡々と答えると、今尚毛布に身を包んでいるルーシイはギョツと目を開かせた。

馬車の中での元気は完全にどこ吹く風だった。

『あたし帰りた』と申ししております」

「はいどうぞと申ししております」

「あい」

「帰りの馬車は無いから気をつけて帰るようにと申ししておりますなの」

「かしら」

ルーシイのことは軽く流し去り、二人と2匹と一体は歩を進め始めたのだった。

「マカオー!! いるかー!! バルカンにやられちゃったのかー!!」

「ナツ。縁起でもないの。うわっぷ!？」

「レアは気が抜けてるんじゃないかしら?」

叫ぶナツにそうツッコんだレア。

だがその直後、雪に足を取られて彼女の体はあっという間に雪に埋もれた。

次の瞬間。

ドゴオオン!!!

「バルカンだー!」

ナツ目がけて巨大な猿、バルカンが襲いかかってきた。

吹雪のせいで視界が悪い中、ナツは間一髪でバルカンの不意打ちを避ける。

そのまま追撃を仕掛けるかと思いきや、バルカンはナツを無視して、ある一点に突っ込む。

その一点とは、ルーシイを中に入れているホロロギウムの元だった。

「人間の女!」

突然目の前に現れたルーシイが驚いているのを他所に、バルカンはホロロギウムを担ぎ上げ、「うほほ」と喜びの声を上げながらその場を去っていった。

バルカンが去っていったタイミングで、レアは「ぷはっ」と少し色っぽく声を上げながら雪から這い上がった。

「アイツ、喋れるのか」

「ん。喋れる魔物は珍しいの」

冷静に分析している中、ルーシイの助けを求める悲鳴が…響くこととはなく、ホロロギウムがそれを代弁するというシニールな絵面が出来上がった。

~~~~~

「なんでこんな事に……なってる訳……!!?」

「と申されましても…」

「なんかあの猿テンション高いし!!」

ルーシイは現在、窮地に立たされていた。

ホロロギウムごとルーシイを誘拐したバルカンは洞窟に着いたかと思うと、最深部にゴトつと置き、何故かその周りで踊り始めたのだ。ここに来た事に何度目かわからない後悔の念を抱くルーシイだが、一度それを仕舞っては冷静に状況を分析しようとホロロギウムのガラス部分に顔を近づけて外の確認する。

「女！」

「ヒッ！」

そしてそれを待つてましたというが如く、バルカンはルーシイの顔に自身の顔を近づける。

数秒の後。

ボンっ!!

ホロロギウムが消え、ルーシイは外に追い出されてしまった。

「ちよ……ちよつとオ！ ホロロギウム!!消えないでよ!!」

「時間です。ごきげんよう」

「延長よ！ 延長!!ねえっ!!!」

ルーシイは喉が裂ける勢いで叫ぶも、返答はなし。

一方バルカンは、ようやく壁無しでルーシイとご対面できたのが嬉しいのか、フンスフンスッ！と鼻息を荒くしている。

完全に変態の所業である。

「もう！ 覚悟を決めるしかないっ！」

いかげん目の前の猿の変態具合に嫌気が差したのか、ルーシイは

さつきまでの弱気な様子とは一変し、腰の鍵束に手を伸ばす。  
先ほどのホロロギウムとは違う金の鍵を手にしてかぎす。

「開け！ 金牛宮の扉、タウロス!!」

「Mオー!!!」

現れたのは巨大な斧を担いだバルカンの大きさにも劣らない体格を持った牛だった。

「あたしが契約している星霊の中で一番パワーのあるタウロスが相手よ！ エロザル!!」

そうしてバルカンと対峙するルーシイ。  
だったが。

「ルーシイさん!! 相変わらずいい乳してますなあ」

「そうだ……こいつもエロかった…」

タウロスもルーシイの体（主に乳）を見てバルカン同様鼻息を荒くしていた。

重大な欠点を今思い出したかのように、ルーシイは頭を抱えてため息を吐く。

「ウホッ！ オデの女とるなっ！」

「オレの女？ それはM<sub>モ</sub>O聞き捨てなりませんなあ」

「そうよタウロス！ あいつをやっっちゃって!!」

バルカンの発言にピクツと反応したタウロスはツカツカと距離を詰める。

傍らから見れば巨大怪獣のぶつかり合いというお年頃の男子にとっては胸熱のシーンに見えるだろう。



『オレの女』ではなく『オレの乳』と言ってもらいたい」  
「もらいたくないわよっ!!!」

しかしどちらも中身がエロいのでただの淫獣のぶつかり合いという胸糞もいところであった。

ギャグみたいなノリで進んでいるが、ルーシイにとっては苦しい状況であった。

さつきまでホログラムを時間いっぱい召喚していた事が今現在彼女の首を絞めていたのだ。

星霊魔導士は召喚と星霊をルーシイたちの世界にとどまらせる事に魔力を使い、現在のルーシイの魔力は多いとはいええず、タウロスを今戦わせる事ができる時間も五分と無いだろう。

であれば、今の彼女の勝機とは相手が対応できないくらいのパワーで一気押し切ることである。

それをタウロスもわかっているのか、斧を構えて一気にバルカンに距離を詰める。

「うおおおおお!!! 火竜の鉄拳!!」

そこに、ようやくバルカンに追いついたナツがナイスタイミングで右の拳に炎を纏わせ、勢いよく殴り飛ばした!

「MOふっ?!」

「そっち!!!」

タウロスを……。

「なんで怪物が増えてるのよ!?!」

「それ味方!! あたしの星霊!!!」

遅れてレアたちも到着した。  
が、やはりタウロスのことを敵側と勘違いしていた。  
そして吹っ飛ばされたタウロスはというと。

「MO…ダメっぽいですな……」

「弱……ッ!!」

完全にノックアウト状態であった。

ルーシイも仮にも自分が契約している星霊だということの中に中々ひどい言いようであるが、一撃で落とされては致し方ないといえるかもしれない。

「ルーシイ無事見ただね」

「ま、まあ……一応」

ハッピーがそう言っただけでルーシイの元に駆けつける。

だがルーシイとしては、自分の星霊が呆気なく、それも味方に吹っ飛ばされた事になんとも言えない気持ちになっていた。

「ナツ、突っ込みすぎなの」

「レアだってそう変わらねえだろ」

レアはそう言いながらナツの横に並び、ナツも慣れた様子で言葉を返し、腕をグルングルンと振って準備運動を始めていた。

レアも戦うのかと察したルーシイだったが、未だにレアの魔法がどんな魔法なのか知らないルーシイは疑問符を浮かべる。

「うしっ！ やるか、レアー！」

「ん！ 肩慣らしには丁度よしなの！」

二人と対峙したバルカンはニンマリと悪い笑みを浮かべていた。

「オデをただのバルカンと思うな！」

そう言ったバルカンは胸を叩き始めた。

ゴリラ特有の行動であるドラミングだ。

するとバルカンの周りで不思議なことが起こり始めた。

なんと周囲に氷が浮かび上がってきたのだ。

ドラミングを続けるごとに氷の鋭利さは増していき、やがてドラミングが止まると、氷…もはや氷柱と行つていいそれらは一斉にナツたちの方へ向いた。

「ウホオ!!」

そうしてバルカンが地面に拳を叩きつけると、宙に浮いている氷柱は一斉にナツたちに向かって飛んでいった。

ものすごい勢いで飛んでくる氷柱はまさに氷のミサイル。

ナツとレアは咄嗟にそれぞれ左右に分かれて氷柱を全弾避けた。

大量にあった氷柱だったが、途中で方向転換はできないらしく氷柱は全て氷の壁に突き刺さって終わる。

しかし、ナツにとっては避けた先に運が無かった。

ドカツ！

「「「あ」」」

「……あああああああ!!!」

「ナツーーーーー!!!」

「オデ…女好き…男いらん」

ナツは偶然空いていた壁の穴からバルカンによって押し出され、崖へと真つ逆さまに落ちていった。

「ハッピー、ナツをお願いなの！」

「あいさー！」

素早いレアの指示にハッピーはナツが落ちた穴へと飛び出した。ちなみにレアが避けた先は丁度ルーシイがいる場所、つまり洞窟の最深部である。完全に逃げ場がない状態に追い込まれた。

「何なの!? バルカンってこんな事もできるの!!?」

「普通はできないのよ! おそらく変異種かしら」

そう、バルカンは普通こんな魔法は使えない。

明らかな異常個体であったが、フリーシヤは不敵に笑った。

「けど、あのバルカンも相手が悪かったかしら」

「そ、そうよね。落とされちゃったけど、ナツがいるんだもん」

「確かに、火の魔道士ならあんな氷の魔法はほとんど意味は無いかしら。でも、本当の意味で相手が悪かったのは別の部分にあるのよ」

バルカンがレアたちに向き直り、再びドラミングを始めた。

氷が宙に浮き、鋭利さがさつきにも増して鋭くなる中、レアは両手を広げてルーシイとフリーシヤの前に立った。

「ダ、ダメ! レア、避けて!!」

「ウホオオオオオオ!!」

ルーシイが悲鳴をあげるも、バルカンの雄叫びと地面を叩きつける音に掻き消され、さつきよりも数と鋭利さを増した氷柱が飛んでくる。

鋭利さを増したおかげか素早さもさつきより増しており、氷柱は瞬きをしている間にあつという間に懐まで飛んでくる。

レアに当たる瞬間、ルーシイは反射的に目を閉じた。

ああ、何ということだ……。

あの人形のように小さく、華奢な体のレアがこうも無惨に無慈悲に無秩序に無策に無意味に……。

しかし、ルーシイはいつまで経っても聞こえてくるはずのレアの悲鳴が聞こえず、それどころか衝撃も無く、恐る恐る目を開いた。

ルーシイの目に映ったのは、無数の氷柱がレアに着弾する事なく、レアの周囲をグルグルと回り、最終的にはレアの口の中に入っていくところだった。

「はあああああ!!?!」

思わず叫ぶ。

だが、この光景には見覚えがあった。

どこかで既視感を覚えていた。

つい先日、ハルジオンにてナツがボラの炎を食べていた……。

「まさか!?!」

ここまで考えてやっとルーシイも悟った。

思えば、ここまでも気づける要素はいくつもあった。

ナツとハッピーと同じように、レアと常に一緒にいるフリーシャ。

ギルドにてマスターが読み上げたナツに匹敵する不祥事の数々。

ナツと同様乗り物に酔いやすい体質。

そして馬車の中のフリーシャの「ナツとレア、二人揃ってグロツキーになるから毎度毎度大変なのかしら」という言葉。

毎度ということは、既に何回か仕事を共にしたかがある。

これほどの共通点があつて尚気づかなかつたとは……。

「……水竜」  
リヴァアイアサン

「んくっ……ふはっ、ご馳走様なの」

少し色っぽく息を吐いたレアは満足そうにバルカンを一目見て、顔

だけルーシイに向けた。

「わかっていいるとは思うけど、改めて自己紹介なの。

フェアリーテイル妖精の尻尾の『双竜』の片割れ、レア・ギルティ。よろしくなの」

そうやってレアは顔を正面に向き直した。

「食べたら力が湧いてきたの！」

その声にバルカンはハッ！と我に帰り、氷がダメなら自分が！とレアに向かつて突進を仕掛ける。

レアは勢い良く息を吸い込む。

そして。

「水竜の咆哮!!!」

渦巻く水流のブレスがレアの口より放たれた。

バルカンは顔を真っ青にさせ、慌ててそこから回避行動を取った。

躲されたブレスは真っ直ぐ飛んでいき、ドゴオオン！と洞窟を貫通し、ナツが落ちた穴を拡張させた。

「す…すげえ」

「竜の肝は水を喰らい、竜の鱗は水の形を変え、竜の爪は水流を纏うかしら」

「氷だったじゃない！」

ナツと同じ滅竜魔導士であることはルーシイにも理解はできた。

しかし、あの時ナツが火を食べたのとは訳が違う。

水の滅竜魔導士であるレアが氷を食べたことがルーシイにとっては謎であった。

だが、すぐにフリーシャが答えてくれた。

「氷だって元は水かしら。」

水の魔法と一括りに言っても色々あるかしら。水流を操る魔法や水中で効力を発動する魔法、水の温度を変える魔法もそうなのよ。

レアはそれらを巧みに操って、あらゆる状態の水を操ることができるとのよ。普段は水蒸気を食べて魔力を供給し、水の魔法もレアには効かないかしら」

フリーシヤの説明にルーシイはポカーンとなった。

彼女の説明の通り、レアはあらゆる水を操ることが可能であり、その様と魔法の様子から水リヴァイアサンの字で呼ばれている。あざな

ちなみにこの字あざなに関してはレア自身知らず、フリーシヤも知らなかった故に帰ってから調べて初めて知ったのはここだけの話。

「ナツが帰ってこないならレアだけでやるの。フリーシヤ、ルーシイの側をお願いなの」

「しようがないかしら」

レアとフリーシヤは短いやりとりを終え、ブレスから横に逸れたバルカンに向かう。

未だに顔を真っ青にしているバルカンはレアに接近に対して反応が遅れてしまう。

気づいて迎撃しようとしてももう既に時は遅し。

「水竜の鉤爪!!」

「ウホオ!!?」

水流を纏ったレアの蹴りがバルカンの顔面にクリーンヒットした。バルカンはそのまま後方へ飛んでいった。

「俺も混ぜろオオオ!!」

ドカアアアアン!!

そしてナツがハッピーによって崖から復活したと同時に、ナツのすぐ隣の壁に激突し、亀裂を入れた。

「ナツ、遅い。もう終わったの」

「何イイイ!!?」

戻ってきたナツは戦いに参加できず不完全燃焼で不貞腐れる中、異変が起きる。

突然、さつきレアによって吹き飛ばされたバルカンが光だした。

「な…何だ何だ!?!」

突然のことに、ナツはばつと距離をとって構える。

バルカンはしばらく発光し続けると、ボウウン!!とバルカンの巨体が消えた。

代わりに現れたのは紫の髪の丸刈りの男だった。

「マカオ!?!」

「え!!?」

そう、この男こそ、ナツたちが探していたマカオ本人だった。全身ボロボロであり、今は気絶しているようだった。

「バルカンに接テイクオーバー収テイクオーバーされてたんだ!」

「接収?」

「体に乗っ取る魔法なのよ」

マカオも見つかり一件落着。

かと思いきや、マカオは不安定な体勢のまま、ズルツと滑って、ナ



ツが落とされた穴に身を投げ出した。

「あーっ!!」

すぐに動き出した4人。

一番近くにいたナツがマカオの足を掴むも、気絶したマカオは重力に非常に従順な状態であり、完全に真つ逆さまである。

ナツが踏ん張るも、踏ん張りの効かない氷の上ということもあり、そのままつると滑って一緒に崖から追い出された。

その足をレアが掴むが、マカオの体重に加えナツの体重も合わせり、とても女子一人で持ち上げられるものでも無く、同様に崖から投げ出される。

レアの足をハッピーとフリーシャが掴んだ。

空中で制止した三人と二匹だったが、ジリジリと崖に吸い込まれていっている。

「三人は無理だよ！ 羽も消えそう!!」

「弱音吐いてるんじゃないかしらッ!!」

「んんっ！」

「くっそおおおっ!!!」

もうダメかと思われた時だった。

ガシッ!

ハッピーの尻尾が何者かに掴まれ、急に安定感が増したのだ。

そうして、そのまま三人はゆっくりと引き上げられる。

「MO大丈夫ですぞ」

「タウロス!!」

「牛ーっ！」

「いい怪物だったの！」

ハッピーを掴んだのはルーシイであり、そのルーシイを支えていたのは序盤にナツによって吹き飛ばされ、伸びていたタウロスだった。パワー一番は伊達ではなく、三人は着実に引き上げられ、無事…とは言えないが、マカオの救出には成功した。

そして、意識を取り戻したマカオだが、息が荒い。安静にし、上半身を脱がせると、腹部に痛々しい傷があった。

「接テイクオーバー」  
「収テイクオーバーされる前に相当激しく戦ったみたいだね」

「マカオ！ しっかりしろよ!!」

ハッピーは応急セットを広げて治療を行うが、とても応急処置では抑え切ることができず、今もドクドクと血が流れ出ている。

このままでは確実に助からない。

今から山を降りて病院に向かおうにも、その頃には出血多量である世行きだ。

ルーシイは半ば諦めかけるも、二人は違った。

ナツは手に炎を纏い、レアはマカオから離れて水を出し、温度変化で氷を生成する。

炎を出したナツはその手でマカオの傷を押さえつける。

ジュウウウウウウ!!!

「ぐあああああ!!!」

「ちよっ…何してんのよー!」

「今はこれしかやれねえ! ガマンしろよマカオ!!」

ルーシイ! マカオを押さえつける!!」

「あぐあっあああ!!!」

そこでルーシイもナツの意図に気づいた。

傷口を焼くことで火傷させ、止血しようとしているのだ。

そして、ナツのやる事を行動する前から気づいていた、というより、ナツならそうするだろうと確信していたレアは塞いだ傷口を冷やすための氷を生成しているのだ。

「死ぬんじゃないぞー！ ロメオが待ってんだ!!」

ナツが傷口を塞ぎ、レアがその後の処置をテキパキとこなす。

「ふがつ！ あつ！ ぐ…。」

レア：ハア：クソ…！ 情けねえ…。 19匹は倒し…たん…だ…」  
「…………え？」

突然話し出したマカオの言葉に、ルーシイは絶句した。

「うぐぐ…20匹目が魔法を使う異常個体で…テイクオーバー接収…され…グハッ！」

「わかったからもう喋んな!! 傷口が開くだろ!!」

「(ウソ…!? あの猿…一匹じゃなかったの!?)」

ルーシイの驚きは最もだ。

ナツが最初に言ったように、バルカンは凶悪モンスターの一匹だ。並の魔導士では一匹でも手に余る相手であり、その群れなんて一人で受ける仕事ではなかった。

「チクシヨウ…！ これ…じゃ…ロメオに…合わせる顔が…ね…くそっ…！」

「19匹も倒したら充分英雄なの！ だから今は黙っててなの！ でないとホントに殴るの!!」

「(…………すごいなあ。 やっぱり…敵わないや)」

レアが珍しく声を荒げ、表情も顰めながら氷を火傷した腹に押しつ

ける。

必死になるみんなの様子を見て、ルーシイの表情はどこか影を帯びたものになっていった。

こうして、マカオは無事救出され、マグノリアに戻ったのだった。

くくく

夕日が沈みかけたマグノリア。

公園の傍らで本を読んでいる少年が一人。

ふと読むのをやめて顔を上げた。

見えたのは肩を支えられながら歩く自分の父と、笑顔で片側を支える少年、もう片側を無表情ながらもどこか朗らかな雰囲気を出している少女だった。

平気そうな父の顔を綻ばせるロメオであったが、すぐにその表情は暗くなる。

マカオがこの仕事を引き受けたのは、ロメオの周りの子供たちが妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士をバカにされた事からくる悔しさにより、同じギルドの魔導士である父にお願いした事が発端であったのだ。

その結果一週間も返ってこなくなるという大ごとになったのは自分のせいなのだ、自分を責めていた。

しかし、マカオはそんなロメオを叱るなんてことはせず、ギユツと抱きしめた。

「心配かけたな。スマねえ！」

「! ……いいんだ。オレは魔導士の息子だから……」

「今度クソガキどもに絡まれたら言っちゃれ」

そうしてマカオはロメオにニヒリと笑ってみせた。

「テメエの親父は怪物19匹倒せんのか!? ってよ」

「!! ……うん！」

嬉しさのあまり、涙を流す。

この人こそ、自慢の父なのだと言うことがとても誇らしく思え、この瞬間の彼の顔は、この一週間の中で最も輝いていた。

ロメオは思い出したかのように遠くにいるナツたちに向かって手を振った。

「ナツ兄ー！ハッピーー！レア姉ー！フリーシャー！　ありがとうー！！！」

ナツは背を向けたまま手を振り、レアも小さく微笑んで小さく手を振り返す。

「それと、ルーシィ姉もありがとう！！」

ルーシィもロメオにレア同様小さく手を振り返し、公園を後にした。

吹雪に見舞われ、体の芯まで冷え込んだルーシィだったが、その温かい心によって、寒さなんてとうに忘れていた。

そして彼女は、このギルドを心から好きになれる。

そんな予感がしていた。

## チーム

現在、ルーシイは感動していた。  
ハコベ山への道中、ルーシイはある悩みがあった。  
単純明快、これから住む場所のことだ。

しかしその悩みはマグノリア帰って割とすぐに解決した。

商店街近くの家賃7万Jの家。

ルーシイはここに住むことになっていた。

7万Jとなると少し高く感じるが、ルーシイ曰く、7万にしては間取りも広いし収納スペースも多い。

新築同様の真っ白い壁に仄かに香る木の香り。

レトロな暖炉に加え、竈までついていた。

「いいトコ見つかったなあ」

現在入浴中のルーシイはご満足気に背伸びした。

風呂からあがり、体を拭き、タオルを体に巻いて、自分がこの家で一番気に入っている自分の部屋に入ると。

「よっ」

「んー」

「あたしの部屋ー！！！！」

まさに我が物顔でソファに座り、バリバリお菓子を零しながら食べてるナツ。

その傍らで正座しながらストローをさしたジュースを飲んでいるレア。

さらに小さなテーブルに座り、はぐはぐと口いっぱい魚を食べているハッピーと、ちまちま魚を食べているフリーシャがいた。

「何であんた達がいるのよー！！」

「まわっ!!?」

ルーシイの回し蹴りが見事ナツとハッピーに命中し、壁に叩きつけられる。

ちなみにルーシイはレアとフリーシヤも狙ったが、レアは首をクイツと曲げ、フリーシヤは翼を出して飛んで逃れたのだった。

「だって、ミラから家決まったって聞いたから…」

「聞いたから何!? 勝手に入ってきていい訳!？」

親しき仲にも礼儀ありって言葉知らないの!?! あんた達のやった事は不法侵入! 犯罪よ!! モラルの欠如も良いトコだわ!」

「オイ…そりゃあキズつくぞ…」

「キズついてんのはあたしの方よー!!」

ルーシイは蹴り飛ばしたナツにツカツカ詰め寄り説教垂れる。

そこにレアもジューズ片手に割って入った。

「ルーシイ、諦めるの。ナツもレアもお互いの家でよくやるから慣れた方が身のためなの」

「あんた達普段何やってんのよ!」

逆効果だった。

ルーシイのツツコミに、ナツは情けない表情を見せる。

レアはこれといって表情の変化を見せなかったが、ナツと自分でこれが日常の為、何がダメなのだと不貞腐れている。

「いい部屋だね」ガリガリ

「爪研ぐなっ! 猫科動物!!」

「ホント、何でこの家今まで使われて無かったのかしら」

「飛ぶのも禁止っ!!」

ルーシイがナツとレアと絡んでいる隙に、ネコ二匹は自分の本能の

ままに行動を起こす。

ルーシイがネコ達の対応に当たっていると、自由になったレアが、机に置いてあった紙の束を手を取った。

「ん？ コレ何なの？」

不思議に思っただけで中身を読もうとしたレアだったが。

「ダメー!!」

「!?」

血相を変えたルーシイがレアからぶんどり、胸に抱えた。

「なんか気になるな。何だ、ソレ」

「ん。気になるの」

「何でもいいでしょ!!」

「てかもう帰ってよー!!」

ナツとレア、二人揃って興味津々にルーシイの抱える紙の束を見るが、ルーシイも譲る気は全く無い。

ルーシイの必死に訴えるも。

「やだよ。遊びに来たんだし」

「遊ぶの!」

「超勝手!!」

二人も譲る気は無かった。

「てかルーシイ。グレイじゃないけど服を着るかしら」

「あんた達のせいよ!!」



くくく

「まだ引越してきたばかりで家具も揃ってないのよ。遊ぶモンなんか何もないんだから紅茶飲んだら帰ってよね」

ナツとレアに紅茶をだして不貞腐れるルーシイだったが。

「残忍な奴だな」

「あい」

「人の心無いの？」

「かしら」

「紅茶飲んで帰って言っただけで残忍だの人の心無いだの……」

ナツとレアの言葉にいよいよルーシイも怒りを露わにする。

仏の顔も三度までである。

しかしそんな事は知らないナツはある事を思いつく。

「そうだ！ ルーシイの持つてる鍵の奴等全部見せてくれよ」

「ん。私も気になるの」

ナツの提案にレアも便乗する。

しかしルーシイは変わらず不貞腐れている面持ちのまま答える。

「いやよ！ すごく魔力消耗するじゃない。それに、鍵の奴等じゃなくて星霊よ」

ルーシイがそう答えるが、ハッピーが続けて口を開いた。

「ルーシイは何人の星霊と契約してるの？」

「6体。星霊は1体2体って数えるの」

ハッピーの疑問にルーシイはプラスアルファして答え、三本の銀の鍵ともう三本の金の鍵を分けて出した。

「こっちの銀色の鍵がお店で売ってるやつ。時計座のホロロギウム、南十字座のクルツクス、琴座のリラ。

こっちの金色の鍵は黄道十二門っていう門ゲートを開ける超レアな鍵。金牛宮のタウロス、宝瓶宮のアクエリアス、巨蟹宮のキャンサー」

「巨蟹宮!! 蟹か!?!」

「カニー!」

「うわー…また訳わかんないトコにくいついてきた」

ルーシイがそう説明すると、ナツとハッピーがほとんど関係無い所に食いつき、ルーシイは額を抑える。

黙っているがレアとフリーシャはというと…。

「(カニ…美味しそうな)」

「(煮ても焼いてもいいし…カニ味噌はどうするかしら…)」

似たり寄ったりの思考であった。

と、ルーシイがハツと何かを思い出した。

「そーいえば、ハルジオンで買った子犬座のニコラ、契約するのまだだったわ。

ちようどよかった! 星霊魔導士が星霊と契約するまでの流れを見せてあげる」

「おおっ!!」

ルーシイがそう言って立ち上がり、それに釣られ他の4人も立ち上がった。

「血判とか押すのかな?」

「痛そうだなケツ」

「お尻？」

「そつちのことじゃないかしら」

ナツ達のコントを一通り流し、ルーシイは銀の鍵を取り出した。

「血判とかはいらないのよ。見てて。

我：星霊界との道を繋ぐ者。汝：その呼びかけに応え、門ゲートをくぐれ」

そう唱えると、空中に鍵穴のような物が現れ、それは形を崩れ円となり、次第に大きくなる。

「開け、子犬座の扉。ニコラ!!」

ルーシイが次にそう唱えると、辺りは一瞬カツ！と眩しく光り、次の瞬間バフッとルーシイの目の前に煙が現れる。

煙が晴れ、現れたのは…。

「プーン!!」

二頭身に真っ白い体、角のようなとんがりコーンのような鼻。

何とも形容し難い生物が現れた。

すたっ！と着地すると、ニコラと呼ばれたその星霊は体を小刻みに震わせている。

「ど…どんまい！」

「失敗じゃないわよー！」

ナツの言葉にルーシイは拳を上げてそう思いつきり返す。

よく見ればニコラもルーシイの真似をして拳を上げている。

ナツ達の反応は似通ったものだった。  
ただ一人を除いては……。

「……！ 何この子……かわいい……!!」  
「プーン」

「やだ！ レアわかってるじゃない!!」  
「そ…そうか？」

ナツ達が微妙な反応を示すなか、唯一レアだけが食いついた。  
レアはニコラを抱え、キラキラした目で見つめている。

「ニコラの門はあまり魔力を使わないし、愛玩星霊として人気なのよ」  
「ナツ。人間のエゴが見えるよ」  
「うむ」

「人間誰しもエゴの塊かしら。人間に限ったものでも無いかもだけ  
ど」

「なんか悟り開いてるわよ!? この猫!!」  
「プーン」

割かし失礼な物言いにレア以外のそれぞれの反応を見せる。  
と、ニコラのレアの腕から抜け、ルーシイの前に立った。

「じゃ……契約にうつるわよ」  
「プーン」

ルーシイはそう言ってメモ帳を取り出した。

「月曜は？」  
「プウウーン」

ルーシイの問いにニコラは首を横に振った。

「火曜」

「プーン」

今度はこくんと首を縦に振った。

「水曜」

「ププーン」

「木曜も呼んでいいのね♡」

その後も淡々と契約が行われていく中、残された四人はポカーンとなる。

「地味だな」

「あい」

耐えきれなくなったナツがそう呟き、ハッピーが答える。

ルーシイがメモを終え、ニツコリとした。

「はいっ！ 契約完了!!」

「ププーン!!」

ルーシイがメモ帳を懐に仕舞い、ニコラは飛び跳ねた。

「ずいぶん簡単なんだね」

「確かに見た感じはそうだけど、大切な事なのよ。

星霊魔道士は契約：すなわち約束ごとを重要視するの。だからあたしは絶対約束だけは破らない：ってね」

「ホへえ」

何気に深い言葉だったので、レアはそう零して感嘆した。

「そうだ！ 名前決めてあげないとね」

「ニコラじゃないの？」

「それは総称でしょ」

そう言っつてルーシイは顎に手を当てて考える。

しばしの無言の中も、ニコラはピクピクと震えている。

やがてポンツと手を叩き、ルーシイがしゃがんだ。

「おいで！ プルー」

「プーン！」

「プルー？」

「プルー！ 語感がかわいいの！」

「やっぱり!? レア分かってるわね！」

ルーシイの名付けの感性にまたもやレアだけが共感を示した。

ナツとハツピーの顔は疑問に満ち、フリーシヤは何故かドヤ顔していた。

「プルーは子犬座なのにワンワン鳴かないんだ。変なのー」

「プーン」

「あんたやフリーシヤもにやーにやー言わないじゃない」

「にやー」

「そんな取っつめたかのように言わなくていいわよ!!」

フリーシヤとルーシイでそんな漫才を展開すると、プルーはルー

シイの腕から抜け出し、ナツとレアの前で踊り始めた。

「な……何かしら」

「何かの儀式かしら？」

ブルーが最後に腕を頭の上でまるっと作ると、謎のダンスを終えた。

「ブルー!! おまえいいコト言うなあっ!!」

「なんか伝わってるし!!」

ナツはブルーの目の前にガバツと前かがみになり、レアにも伝わっているようで、ナツの隣でウンウンと激しく頷いていた。

「星霊かあ……。」

確かに雪山じゃ牛に助けてもらったなあ

「そうよっ! あんたはもっと星霊に対して敬意を払いなさい」

ルーシイはナツのハコベ山でのタウロスへの仕打ちに憤慨していたが、ナツは聞こえていないかのように考え込む。

「あん時はルーシイがついてくるとは思わなかった」

「ん。でも、結果ルーシイがいなかったらマカオを助けられたかどうかも怪しかったの」

ナツに続いてレアも口を開く。

「ナツ。どうしたの?」

「レアもどうしたのかしら?」

二人して珍しく考え込み、ナツがバツと立ち上がった。

「よし、決めた!! プルーの提案に賛成だ!

レア、お前はどうか?」

「ん、私も賛成。ルーシイ。

私たちがチーム組むなの!」

レアがルーシイにそう提案を持ちかけた。

「なるほどーっ!」

「確かにそれはいいかもしれないかしら。」

ルーシイもまだ妖精の尻尾で仕事に行つたことが無いし、リーシャ達がサポートする形で着いていけば丁度いいのよ」

ネコたちも賛成の意を示した。

そしてルーシイも。

「いいわね、それ!! 面白そう!!」

満場一致だった。

こうして滅竜魔導士と星霊魔導士のチームが爆誕した。

「さっそく仕事行くぞ! ホラ!!もう決めてあるんだー!!」

「もう♡ せっかちなんだからあく」

ナツがそう言つて机にパンツと依頼書を叩きつけ、ルーシイは文句垂れるが満更でもない様子で依頼書を手に取つた。

「シロツメの街かあ……。」

うっそ!!! エバルー公爵って人の屋敷から一冊の本を取ってくるだけで20万J!!!」

「な!! オイシー仕事だろ?」

確かに一見お得だった。だがこういう場合大抵は裏があるものだが、それにルーシイが気づいたのは少し後になってからだった。それは依頼書の端の方に書かれていた内容だった。

『エバルー公爵』



※注意 とにかく女好きでスケベで変態！ ただいま金髪のメイドさん募集中！』

そういうことである。

ルーシイも金髪。つまり……。

「ルーシイ金髪だもんな」

「ん。メイドさんの格好で忍び込んでもらうの！」

「あんたたち、最初から……」

ルーシイはブルーと同様にピクピクと体を震わせ、最終的には、

「ハメラれたーっ！！！！」

体を捻ってうがーっと思った。

そんなルーシイを見て、ナツはニヒリと悪い笑みを浮かべる。

「星霊魔導士は契約を大切にしているのかあ」

「ん。えらいの」

「ひでえーっ！！！！」

騙したなあ！！ サイテーー！！

ルーシイはそう言ってナツとレアに噛み付くが。

「ん？ 何も騙してないの。チーム一緒に組むし、ただ一緒に仕事行くだけなの」

「純粹か！！？ メイドなんてイヤよっ！」

レアの天然が炸裂してあっけらかんと躲される。

メイドを嫌がるルーシイに、ナツがさらに追い討ちをかけた。

「少しは練習しとけよ。ホレ……ハッピーに言ってみろ。『御主人様』って」

「ネコにはイヤ!!」

今日も今日とてルーシイは絶好調である。

そんな嫌々なルーシイを引つ張って行きながら五人はシロツメの街へと向かった。

~~~~~

ナツ達がルーシイの家を出た数時間後、レビイ達が依頼板リクエストボードの前に立っていた。

「あれ？ エバルー屋敷の一冊20万Jの仕事……誰かにとられちゃった？」

「ええ……ナツとレアがルーシイ誘って行くって」

「あくあ……迷ってたのになあ……」

レビイの疑問にミラが答えた。

答えを聞いたレビイはあからさまに不貞腐れる。

「レビイ……行かなくてよかったかもしれんぞい。

その仕事……ちとめんどうな事になってきた……たつた今依頼主から連絡があつてのう」

そこへ割って入ったのは総長マスターのマカロフだった。

「あ！ ギルドマスター」

「キャンセルですか？」

「いや……」

ミラの質問にマカロフは不敵に笑った。

「報酬を200万Jにつり上げる……だそうじゃ」

「10倍っ!!?」

「本一冊で200万だと!!?」

これだけでギルド中がザワザワと騒がしくなった。

200万ともなれば、それは討伐系の仕事と変わりなかった。

急に値上げしたそんな仕事を逃して勿体ない思いをしている中、半裸のグレイがニヤリと笑ってタバコを吹かした。

「面白そうな事に……なってきたな」

く 一方その頃シロツメへ向かう馬車では く

「馬車の乗りごころちはいかがですか？ 御主人様、お嬢様」

「……冥土^{メイド}が見えるの」

ナツとレアが馬車で酔いつぶれ、ルーシイがお返しと言わんばかりに煽っている。

苦しみのあまり、レアの口癖がナツにうつっていた。

「御主人様役はオイラだよ!!」

「うるさいネコ!!」

「リーシャにもお嬢様って言うてみるかしら！

ホラ、リーシャの足でも舐めるのよ」

「もつとイヤよ！ 黙りなさいネコちゃん達!!」

日の出

「言ってみれば随分と簡単な仕事よねー」

シロツメの街に向かう馬車の中、ルーシイはそう言った。

馬車に乗る前よりも声が生き生きしているルーシイに、ネコ2匹は不思議に思った。

「あれ？ 嫌がってたわりにはけっこう乗り気？」

「トーゼン!!」

ハッピーが疑問を口にして、ルーシイは腕を組んでガッツポーズを見せる。

「なんだってあたしの初仕事だからね！ ビシツと決めるわよ！ 要は屋敷に潜入して本を一冊持ってくればいいんでしょ？」

「スケベオヤジの屋敷にかしら」

「そう、スケベオヤジ」

フリーシャがスケベオヤジの単語を強調するが、ルーシイは出発前の反応はもう見せなかった。

寧ろ乗り気に自身のフェロモンをネコ2匹に見せびらかす。

「こー見えて、色気には自信あるのよ。うふん♡」

「ネコにはちよつと判断できないです」

「ネコにそんな色気出して悲しくないのかしら？」

「うるさいわね！」

しかしネコ2匹は冷たくあしらい、フリーシャの辛辣な言葉にルーシイもいつものツッコミを返した。

「言つとくけどこの仕事……あんたらやる事ないんだから、報酬の取り分4・2・2・1・1だからね」

「ルーシイ1でいいの？」

「謙虚でいい事かしら」

「あたしが4よ!!」

今度はルーシイが報酬の件でマウントを取ろうとするも、これもまたネコ2匹にいじられ、結果いつもと同じ構図になる。

ちなみルーシイの中での配分の順番は左からルーシイ、レア、フリーシヤ、ナツ、ハッピーだった。

何故女性陣は配分が多くなっているのか……。

これが女尊男卑である。

「ちよ……ちよつと待て……オレたち……も……やる事……ある」

と、酔っているせいで口を閉ざしていたナツが酸っぱい顔をしながら言った。

「捕まったら助けてやる」

「そんなミスしません」

ナツが言うも、ルーシイはキツパリそう言った。

「魚釣りでもエサは無駄になる事多いんだよ」

「あたしはエサかいっ!!」

「待って……助けてなの、うつぶ……」

やはり絶好調なルーシイだった。

くくく

シロツメの街。

山に囲まれ、奥に屋敷が見える小さな街。

「着いた！」

「馬車には二度と乗らん…」

「右に同じくなの…」

「いつも言ってるよ」

「無理だから諦めるかしら」

街に着いたルーシイ一行だが、約二名が仕事を始める前から既にロボロで、そう文句を垂れた。

「とりあえずハラ減ったな。メシにしよメシ！」

「ホテルは？荷物置いてこよーよ」

ナツとハッピーがそう言って歩を進める中、ルーシイだけが立ち止まる。

「あたしおナカすいてないんだけどお。アンタたち自分の”火”とか”水”食べれば？」

ルーシイの何気ない一言がナツの顔を引き攣らせ、レアもルーシイをいつもにも増したジト目で見た。

「とんでもねえ事言うなあ」

「ホントなの」

「？」

しかし理解出来ないルーシイは頭に？を浮かべる。

「オマエは自分の”プル”や”牛”食うのか？」

「食べる訳ないじゃない!!」

「それと同じなの」

「そ…そう?」

ナツとレアのそんな例えにルーシイも納得した。

要するに自分の火や水は食べられないということだ。

滅竜魔導士の意外な弱点にめんどくさく、とルーシイは内心思った。

「そうだ!」

「?」

「あたしちよつとこの街見てくる。食事はみんなでどうぞ」

ルーシイは何を思いついたのか、四人の返事も聞かず、さっさと街に向かって歩き出した。

「何だよ…みんなで食った方が楽しいのに」

「あい」

「きつと今までボッチでルーシイはそんな事知らないの」

「そんな事あるかしら?」

レアのボケか天然かよく分からない発言に、フリーシヤは苦笑いを浮かべた。

くくく

シロツメの街のとあるレストラン。

ナツは注文した品を貪り食い、ハッピーは魚に限定して口に放り込んでいる。

その傍らでレアはスープパスタを、フリーシヤは寿司を無言で食べていた。

「脂っこいのはルーシイにとつておこっか」

「脂っこいの好きそうだもんね」

「ん。なら、これも脂っこいの」

ナツ達の会話に無言だったレアが加わり、いつもの天然をかまして側の骨付き肉を手を取った。

「あたしがいつ脂好きになったのよ」

「お！ ルー…シイ？」

聞き知った声に四人は振り向いたが、2パターンの反応を見せる。

男性陣は絶句して思わず口に含んだ物も少し落としてしまう。

女性陣は男性陣ほどでは無いもののやはり絶句し、ルーシイの方を見開いて凝視している。

この反応も無理はない。

四人の目に映ったのは…。

「結局あたしって、何着ても似合っちゃうのよねえ……。お食事はおすみですか？御主人様、お嬢様。まだでしたらごゆつくり召し上がってくださいね♡ うふ♡」

髪をツインテールにし、メイド服を身にまとったルーシイだった。

ポカーンとした四人だったが、急いで身を寄せあった。

「どーしよお〜！ 冗談だったのに本気にしてるよ〜！ メイド作戦」

「今さら冗談とは言えねえしな。こ…これでいくか」

「も…もしかしたら案外上手くいくかもなの…」

「であればリーシヤたちは楽しんで報酬ゲット…案外アリかもなのよ」

「聞こえてますがっ!!?」

ひそひそと話していた四人だったがバツチリルーシイの耳には届いていた。

当の本人はまさかの事実にうそーんと白目を向いた。

くくく

「立派な屋敷ね。ここがエバルー公爵の…」

「いいえ。依頼主のほうです」

ルーシイ達の目の前に佇む大きな屋敷。

ハッピーの説明にルーシイも納得する。

なんせ本一冊の為に20万出す人なのだからとルーシイは思ったが、彼らはまだ報酬が10倍に膨れ上がったことを知らない。

と、ナツがその大きな扉を叩き、甲高い音が響く。

「どちら様で?」

「魔導士ギルド妖精の…フェアリー…」

「!! 静かに!!」

ナツが名乗ろうとすると、中から聞こえた男の声は慌てて遮った。

「すみません…裏口から入っていただけますか?」

五人は疑問に思いながらも、黙って裏口に回った。

中に入ると、奥さんらしき人が出迎え、応接間らしき所まで案内してもらおう。

ソファに腰掛け、しばらく待っていると、人当たりの良さそうな男性が現れた。

「先ほどはとんだ失礼を…。私が依頼主のカービィ・メロンです。こっちは私の妻」

「うまそうな名前だな」

「メロン！」

「ちよつと！ 失礼よ！」

「あはは！ よく言われるんですよ」

カービィはそう言ってナツ達の失礼な態度も笑い飛ばした。ちなみに黙っていたレアとフリーシャはというと…。

「(メロン……ジュルリ)」

「(そのままでもいいし、絞ってジュースに……炭酸を加えてもいいかしら。あと凍らせる方法もあるかしら)」

やはり似たり寄つたりの思考だった。

カニの時といい今回といい、この四人はそういった食のことで謎に反応することは多い。

「まさか噂に名高い妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士さんがこの仕事を引き受けてくれるなんて……」

「そっか？ こんなうめエ仕事よく今まで残ってたなああって思うけどな」

「ん。お得なの」

「(仕事内容と報酬がつりあってない。きつとみんな警戒したのよ)」

ナツがケタケタ笑いながらそう言って、レアも頷くなか、ルーシィは内心そう考えた。

「しかもこんなお若いのに。さぞ、有名な魔導士なんでしょうな」

「ナツとレアは二人で双竜あぐなって呼ばれてるんだ」

「おお！ その字あぐななら耳にした事が」

ハッピーがナツとレアをそう紹介すると、カービイはあからさまに驚いた。

「……で、こちらは？」

「あたしも妖精の尻尾の魔導士です!!」

カービイはルーシイに目を向け、じーっと見つめる。
やがて……。

「その服装は趣味か何かで？ いえいえ……いいんですがね」

「ちよつと帰りたくなってきた」

事情を知らないカービイはルーシイをコスプレ好きの魔導士だと勘違いした。

依頼主にそう言われ、悲しくなったルーシイはしくしく泣く。

一連の流れにナツはゲラゲラ、ハッピーは口を両手で押さえ頬を膨らませながらプークスクスト、レイは片手で口を抑えてクスクスト、フリーシャは腕を組んで顔はそっぽをむきながらも肩を震わせて、それぞれ笑っていた。

「仕事の話しましょう」

気を取り直して、カービイは真剣な面持ちで話し始めた。

ルーシイも初仕事に唾を飲む。

「私の依頼したい事はただ一つ。エバルー公爵の持つこの世に一冊しかない本、日の出の破棄、又は焼失です」

「!!」

予想していた仕事内容と大きく外れていたルーシイは思わず目を

見開く。

「盗ってくるんじゃないのか？」

「実質上、他人の所有物を無断で破棄する訳ですから…盗るのと変わ
りませんがね……」

「驚いたあ…。あたしてつきり奪われた本かなんかを取り返してく
れって感じの話かと」

未だ驚いているルーシイを置いてナツがゲラゲラ笑いながらソ
ファをパシパシ叩く。

「焼失かあ……。だったら屋敷ごと燃やしちまうか!!」

「ん。依頼達成なの」

「あい！」

「かしら」

「ダーメ!! 確実に牢獄行きよ！」

ナツに便乗しまくるその他3人纏めてルーシイがツツコミ入れ、再
び神妙な顔に戻る。

「一体…何なんですか？ その本は…」

「どーでもいいじゃねーか」

「ん。20万入れば本燃やすも家燃やすも変わらないの」

「変わるわよ！ 大事な事よ!!」

レアの物騒な発言に、ルーシイが二段構えでツツコム。

しかし続きの言葉が中々出てこず、カービイはルーシイ以上に深刻
そうな表情を見せる。

だが次のカービイの発言に、五人は驚愕を露わにする。

「いいえ……200万Jお払います。成功報酬は200万Jです」

「につ!!?」
「ひゃ!!!」
「くう!!!?」
「まっ!!!」
「んん!!!?」
「なんじゃそりやああああつ!!!」
「おやおや……値上がったのを知らずにおいででしたか」

ナツ達の予想以上の反応に、カービイはケタケタと笑う。

「200万!!? ちよつと待て!!5等分すると………うおおおっ計算
できん!!!」

「簡単です。オイラが50万、ナツが50万、レアが50万、フリー
シヤが50万、残りはルーシイです」

「頭いいなあ!!ハッピー!!!」

「残らないわよっ!!」

「一旦黙るかしらオスども。レアとリーシヤで100万、ナツとハッ
ピーで100万、残りはルーシイ。これで万事解決なのよ」

「ん!! フリーシヤ、ハッピー以上に頭がいいの!」

「だから残らないわよっ!! ハッピーの計算と何も変わってないじゃ
ない!!!」

「まあまあ、みなさん落ち着いて」

突然掲示された莫大な金に目がくらみ、完全に混乱する五人。

これにはカービイも苦笑いだった。

「な……な……何で急に、そんな……200万に……」

未だ200万の衝撃の熱が冷めぬ中、ルーシイはポカーンとした表情でカービイに聞いたが、当の本人は以前にも増して神妙な面持ちだ。

「それだけでも、あの本は破棄したいのです。私は、あの本の存在が許せない」

悔いるように吐き捨てたカービイの言葉にルーシイは疑問を覚える。

しかし……。

「おおおおっ!!!」

突然顔が燃えだしたナツに隣にいたルーシイがビクツツとなる。

「行くぞレア、ルーシイ!! 燃えてきたあ!!!」

「ん!! 200万なの!!!」

「ちよ……ちよつとオ!!」

立ち上がったナツとレアはルーシイのそれぞれの手首を握り、そのまま走って屋敷を飛び出した。

そんな3人とそれに着いていく2匹のネコを、カービイとその妻はどこか険しい目で見送ったのだった。

~~~~~

「失礼しまあす♡ 金髪のメイドさん募集を見て来ましたあ♡ すみませーん、誰かいませんかあ」

場所は変わってエバルー公爵邸前。

ルーシイは屋敷内に潜入する為に屋敷の主であるエバルーを呼び出している。

「うまくやれよルーシイ」

「がんばれ〜！」

「しつかりなの〜」

「ボロは出すんじゃないかしら〜」

ナツ達はエバルー公爵邸の周りの木々の影に隠れ、ルーシイの行く末を見守っている。

ルーシイ本人も自分で言ったように色気には自信があり、この仕事も簡単なものだと思いきや、悪どい笑みを浮かべている。

その時、ボコつとルーシイの足元の近くのタイルが盛り上がった。かと思うと、

ドムツ!!

「ひっ！」

ズシン!!

「メイド募集？」

現れたのはゴリラだった。

いや、ゴリラ型のメイドだった。

力士にも匹敵するゴツイ体にピンクの髪をツインテールにしているメイドがタイルを突き抜けて穴から飛び出してきた。

「御主人様！ 募集広告を見て来たようですが」

「うむう」

ゴリラメイドが穴に呼びかけると、穴の中からそんな声がこだまして聞こえ、次の瞬間……。

ぬぼんっ！

鼻髭を立派に生やした真ん丸なオヤジ、屋敷の主であるエバルー公爵が飛び出してきた。

「ボヨヨヨヨ~~~~ン。我輩を呼んだかね。どれどれ……」

飛び出したエバルー公爵は早速ルーシイのメイド選別に入り、ルーシイの胸やら足やらをじい~~~~と見つめる。

見つめられているルーシイも笑顔を浮かべながらも鳥肌が立ちまくるが我慢を貫き通す。

だがしかし……。

「いらん！ 帰れブス」

「ブ…!？」

興味の無くなったエバルー公爵はふいっとそっぽを向き、シツシツと手を動かした。

そこからは色んな意味で散々だった。

自分のような偉い人間には美しい娘しか似合わないと言って地面から飛び出したのはこの世の終わりかとも思われる程のブスのオンパレード。

ルーシイは啞然としながら一番最初に出てきたゴリラメイドに摘まれ、ポイツと投げ出されたのだった。

~~~~

見事に潜入作戦が玉砕したルーシイはメイド服からさっさと着替え、木の下でしくしくと力なく項垂れていた。

「使えねえな」

「ちがうのよ!! エバルーって奴、美的感覚がちよつと特殊なの!!」

辛辣なナツの言葉にルーシイは涙目になりながら猛抗議するが、ハッピーに「言い訳だ」と一蹴されムキーツと悔しさを露わにする。

そんなルーシイの肩にポンと置かれる手が一つ。

「ん、今回は流石に同情するの。ドンマイなの…」
「えくん、レア〜」

珍しくレアがルーシイを慰め、ルーシイもそんなレアに泣きついた。

「こうなったら”作戦T”に変更だ！」

「ん！ 一番手っ取り早いの」

「あのオヤジ絶対許さん!! で、作戦Tってなんなの？」

立ち直ったルーシイは今度は怒りを表に出し、闘志を燃やす。
そんなルーシイが作戦内容を聞いたら、ハッピーが勢いよく答えた。

TOTSUGEKI
「突 撃 ーーー!!!」

「それ…作戦なの？」

疑問を覚えるルーシイに反応を示すものは誰一人と居なかった。
この場にはルーシイを除き、脳筋しか居ないことが証明された。

潜入せよ、エバルー邸

エバルー邸上空、ぱたぱたと動く影が一つ。

「羽…まだ消えないわよね」

「心配しなくても今日はまだ大丈夫なのよ」

その正体は赤いワンピースを着た羽を生やした金のネコ、フリーシャと、同じく金髪の美少女、ルーシィであった。

メイドによる潜入作戦が失敗した彼女らは別の方法で潜入する為にエバルー邸の屋上にハッピーとフリーシャの力を借りて来ていた。

「なんでこんなコソコソ入らなきゃいけないんだ？」

「決まってるじゃない！ 依頼とはいえどろぼーみたいなモンなんだから」

ナツが不貞腐れて文句垂れるが、ルーシィは当たり前だと言わんばかりに強めに返した。

「ルーシィ。作戦Tは突撃のTなの。正面玄関から入って邪魔者は全員ぶっ飛ばすの」

「ダーメー！」

「で…本をナツに燃やしてもらおうの」

「だからそれじゃダメなの!!」

レアも不満な為、何とかルーシィを説得しようと試みるも、全て一蹴される。

「あんたらが今まで盗賊退治やら怪物退治やらいくつの仕事してきたのか知らないけどね、今回のターゲットは街の有力者！ ムカツク変

態オヤジでも悪党じゃないのよ。へタな事したら軍が動くわ」

ルーシイの発言は的を得ていた。

実際ナツもレアもルーシイの言った盗賊退治や怪物退治の仕事を引き受けた事がほとんどで、こういう泥棒まがいのデリケートな仕事を引き受けることは少なかった。

ルーシイの言う通りここで突撃して本を無理やりにも燃やせば逮捕待ったナシだ。

「何だよ、オマエだって「許さん!!」とか言ってたじゃんか」

やはり納得いかないナツはそうやってブーたれるが、ナツの言葉にルーシイがニヤリと笑う。

「ええ、許さないわよ!! あんな事言われたし!! だから本を燃やすついでにあいつの靴とか隠してやるのよっ!!! ウフフフ…」

「うわ…小っさ…」

「あい…」

「子供のイタズラなの…」

「かしら…」

ルーシイは拳を握りしめそう言うが、周りの反応はとても悲しいものであった。

男性陣は呆然とし、女性陣は完全に哀れな子供を見る目でルーシイを眺めていた。

と、ルーシイは真剣な眼差しをナツ達に再度向けた。

「とにかく、暴力だけはダメよ。暴力だけはね」

そうやって念を押すルーシイだがナツはというと、

顎をしゃくらせて、下唇を出っぱなしながら目を細めルーシイの声

を右から左へと流している。

レアも表情の変化こそ無いが、頬杖をついている。

「何よその顔と態度!!」

耐えかねたルーシイはナツの頭に鋭いチョップをお見舞いする。

ナツは言ってる事とやってる事が違うとツツコミながら渋々ガラスに自身の手のひらを押し付けた。

押し付けられたガラスはナツの高い体温によつてドロつと融けだした。

ナツはそのまま手を窓の鍵にかけ、中から開けた。

ルーシイからさすが火竜サラマンダーと一言貰い、中に入る。

中に入ると、そこは物置のようで、早速ハッピーが置いてある髑髏を被つて遊び始める。

「ナツー、フリーシャー。見て見て〜」

「お！ 似合うぞハッピー!」

「ええ、下衆なハッピーに良く似合うかしら」

かなりの毒舌で罵るフリーシャだが、褒め言葉と受け取ったハッピーはレアとルーシイにも見て見て〜と見せびらかしている。

仕事に戻り、ハッピーが扉から外を確認してGOサインが出たので、全員部屋の外に出ては、ルーシイの指示で壁に沿ってかさかさとして動き出す。

「おい、ルーシイ。まさかこうやって一コーコ部屋の中探してくつものりなのか?」

「トーゼン!」

「誰かとつかまえて本の場合聞いた方が早くね?」

「ん。じゃないと文字通り日が暮れるの」

隠密行動に不慣れなナツとレアはそう文句垂れる。
だがレアの言うことも最もだ。

エバルー公爵は腐つても街の権力者。

屋敷もそれなりに大きく、大きな部屋が少なくとも十数部屋はある
だろう。

ここからたった一冊の本を見つけるとなると骨が折れるというも
の。

「見つからないように任務を遂行するのよ。忍者みたいでかつこいで
でしょ?」

「に…忍者かあ」

「じゃ、じゃあ…私はいくノ一なの?」

「別にそこに食いつかなくてもいいわよ」

ルーシイの「忍者」という一言に食いついた竜二匹。
早速心がフワフワしだした所にツツコミを入れる。
と……。

もこつ

ズボオ!!

「侵入者発見!!」

「うほおおおおおおおつ!!」

地面が盛り上がったかと思えば突如その地面から飛び出した入口
で見たゴリラメイドとその愉快なブスメイドの仲間たち。

突如現れたメイド集団にハッピーは驚きの余り髑髏の被り物がす
ぽんと抜ける。

「ハイジョ シマス」

ロボットの様に怪しく目を光らせるゴリラメイド。

だがゴリラがなんのその。

ナツは首に巻いていたマフラーで顔を隠し……。

「忍者あつ!!!」

「くノ一いつ、なの!!!」

「はいいいつ!!?」

それぞれの足に火と水流を纏った二匹の竜がメイド軍団を文字通り一蹴した。

「まだ見つかる訳にはいかんでござるよ。にんにん!」

「にんにん、なの」

「普通に騒がしいから……アンタら……」

隠密行動をする気のない忍者コンビにルーシイはガツクシと肩を落とす。

「いけない!きつと誰か来るわ! どっかの部屋に入りましょ!!」

「来るなら来いでござる!」

「いいから隠れるの!!」

と、ルーシイがナツを半ば強引に引っ張って、レアも連れて一つの部屋に入った。

そこは……。

「うおおっ! スゲエ数の本でござる!」

「あい! でござる」

ナツの言った通り、見ただけでも百は超えていよう本が棚にギツシリと詰まっていた。

ルーシイがボヤいたように、頭の悪そうなエバルー公爵だが以外と

蔵書家であり、ここにある本は全部読んだという。

「探すぞーっ!!」

「あいさー!!」

「はあー。こんな中から一冊を見つけたのはしんどそお…」

「うほっ!! エロいのみっけ!」

「魚図鑑だ!!」

「ん……。字ばかりなの」

「レア…普通はそうかしら」

完全に関係ない事で盛り上がっているその他4人。

まともに探しているのはルーシイだけだった。

「金色の本発見なの!」

「ウパー!!」

「アンタら真面目に探さないよ!! って、ウパ?」

とうとう耐えきれなくなったルーシイは表情をクワツとさせてツツコミを入れる。

だがそのツツコミでレアに視線が集中し、手に持っている本が全員の目に止まった。

表紙には「DAY BREAK」と大きく書かれている。

^{デイ・ブレイク}
「日の出!!!」

「見つかったーっ!!」

「こんなにあっさり見つかったちゃっていい訳!？」

レアがたまたま手に取った本が目的の本であったが為に驚愕に満たされるも、直ぐに冷静さを取り戻す。

「ん。ナツ」

「おう！ さて、燃やすか」

「簡単だったね！」

「ちよつ…ちよつと待って！」

レアが日の出をナツに投げ渡し、ナツが手に火を灯して燃やそうとした所、それを遮ったのはルーシイだった。

ナツから本をぶんどったルーシイは表紙を見て驚きと喜びを表情に浮かべる。

「こ…これ…作者ケム・ザレオンじゃない！ あたし大ファンなのよー！ うっそお!? ケム・ザレオンの作品全部読んだハズなのにー！ 未発表作って事!? すごいわ!!」

ケム・ザレオンとは魔導士でありながら小説家であった人で、彼の冒険譚を書き起こされた小説は根強い人気を誇っているのだ。

読書家のルーシイもこのビックネームに食いつかないはずも無く、目をキラキラさせている。

「いいからはやく燃やそうぜ」

しかし小説などには興味が無いナツはケム・ザレオンの幻の小説よりも200万の方大事な為、さっさと燃やそうと提案する。

「何言ってるの!? これは文化遺産よ!! 燃やすなんてとんでもない!!!」

「仕事放棄だ」

だが根っからのケム・ザレオンファンのルーシイ。

依頼主が明言した通り、この本は世界で一冊しか無い幻の本。

大ファンとしてちゃんと読みたいと思っているルーシイは燃やすことを断固拒否するも、ハッピーの的確な言葉にうっと喩る。

「大ファンだって言ってるでしょ!!」

「今度は逆ギレかしら……」

手をブンブン振って抵抗するルーシイに4人の視線は冷たく哀れなものになる。

「じゃあ、燃やしたって事にしといてよ！　これはあたしがもらうから!!」

「ウソはやなの」

ルーシイがそう提案するも仕事には熱心な4人だ。

嘘を吐いてまで報酬を貰うのは妖精フェアリーテイルの尻尾の恥だと感じるのだ。
しかし、タイムリミットだ。

「なるほどなるほど、ボヨヨヨヨ……」

貴様らの狙いは”日の出”デイ・ブレイクだったのか。泳がせておいて正解だった！　我輩って賢いのう。ボヨヨヨヨ

屋敷の主、エバルー公爵の登場だ。

ゴリラメイド達同様に、エバルー公爵は床を突き抜けてナツ達の前に現れた。

「ホラ…もたもたしてっから!」

「ぐ…ごめん」

「(この屋敷の床ってどうなってるんだろ)」

エバルー公爵が現れたことで身構えるナツとレア。

ハッピーはとうとうとさつきから連続で地面から飛び出すこの屋敷の住民の行動のせいで、そんな疑問が頭をチラつかせる。

「フン……魔導士どもが何を躍起になって探しているかと思えば……そんなくだらん本だったとはねえ」

「くだらん本？」

「人の本をくだらないっていうのは関心しないの」

「偉ーい我輩にケチつけるか小娘！ 我輩の物になんと言おうと我輩の勝手よ」

飛び出したエバルー公爵はドシツと着地してはレアと簡単に言葉を交わす。

だが、ルーシイはエバルー公爵の言葉に依頼主の屋敷で抱いたのと同じ疑問を浮かべた。

依頼主のみならず、所有者のエバルー公爵でさえくだらないと言わしめる本。

「も……もしかしてこの本、もらってもいいのかしら？」

「いやだね。どんなにくだらん本でも、我輩の物は我輩の物」

一抹の希望に縋ってそう零すも、エバルー公爵もそう言って譲る気はさらさら無かった。

ケチと文句を言うルーシイだがうるさいブスと小学生のような喧嘩をする2人。

「燃やしちまえばこっちのモンだ」

「ん。目的は本の破棄」

「ダメ！ 絶対ダメ!!」

ナツとレアの言葉に駄々をこねるルーシイだが……。

「ルーシイ!!」

「仕事なの!!」

ナツと珍しく声を荒らげるレアがルーシイを叱る。
するとルーシイの次の行動に、他の者は口をあんどりさせる。

「じゃせめて読ませてー！」

「「「ここですか!!」」」

「なの!?!」

ルーシイは敵陣のど真ん中の地べたに座り、あろう事か敵の目の前で本を読み出した。

突拍子の無い突然の行動にエバルー公爵も揃って、表情がほとんど動くことの無いレアでさえも（。D。）となっていた。

「ええい！ 気に食わん!! 偉ーい我輩の本に手を出すとは!! 来い!!! バニツシユブラザーズ!!!」

エバルー公爵がそう叫ぶと、何処からかズズツと鈍い音を立てる。

音の方向に視線を向けると……。

「やつと仕事ビジネスの時間タイムか」

「仕事もしねえで金だけもらってちやあママに叱られちまうぜ」

本棚が動き、隠し扉が現れた。

本棚の側面にはご丁寧に「隠し扉 御開帳」と書かれ、中から2人の男が現れた。

「グッドアフタヌーン」

「こんなガキ共があフェアリーテイルの妖精の尻尾の魔導士かい？ そりやあママも驚くぜ」

一人は額に上、顎に下、右頬に左、左頬に右と書かれた特殊メイク

をし、自身の背丈ほどもある巨大な平鍋を背負っている。

もう一人はバンダナを額に巻き、右腕に刺青を入れ、さつきからマザコンな発言が目立つ大男。

そして二人の共通点として、前者は左腕に、後者は右腕に、狼の紋章が記された布を紐で結び、それぞれの反対の肩からかけている。

「あの紋章！ 傭兵ギルド南の狼だよ!!」

「こんな奴等雇ってたのか？」

ハッピーは二人の持つ紋章を見てピンと来ていた。

南の狼。

確かな実力を持った傭兵ギルドであり、魔法を使える者はそうそうと存在しないが、魔導士にも対抗できる体術を持ち、権力者の護衛としての依頼を受け持つことが多いという。

「ボヨヨヨ！ 南の狼は常に空腹なのだ！ 覚悟しろよ!!」

両者睨み合う。

緊張感が極みに達する。

……が。

『おい!!』

そんな緊張感も一瞬で霧散した。

こんな状況下でも本を読むことを止めないルーシイに、その場にいらる全員からツッコミを入れられる。

新○劇でもこんな一体感のあるツッコミはほとんど無いだろう。

「なんとふざけた奴等だ」

「これが妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士か……」

「バニッシュブレードよ！ あの本を奪い返せ!! そして殺してし

「まえっ!!!」

エバルー公爵がそう指示して動くようにする中、本を読んでいたルーシイが小刻みに震えだした。

「これ…。ナツ、レア！ 少し時間をちょうだい!!この本には、なんか秘密があるみたいなの!!」

かと思えば、突然駆け出すルーシイ。

「ルーシイ！どこ行くんだよ!!」

「どっかで読ませて!!」

ルーシイはそれだけ言うと、ボタンと扉から飛び出し、駆けていくのだった。

「(ひ…秘密だ?! わ…我輩が読んだ時は気づかなかった。

あ…あいつ、まさか財宝の地図でも隠したのか!? こ…こ…こうしてはおれん!!)」

エバルー公爵の頭の中でそう結論づけると、キュピコーンと目を輝かせ、体を回転し始めた。

「作戦変更じゃ!! あの娘は我輩が自ら捕まえる!! バニツシユブラザーズよ！ そのガキ共を消しておけ!!」

体を回転させたエバルー公爵は頭から地面に突っ込み、ドリルのように地面に潜っていった。

「やれやれ、身勝手な依頼主は疲れるな」

「まったくだ」

「めんどくせえ事になってきたなあ」

「ん。本燃やすだけの簡単な依頼だったのに…」

お互いうんざりする中、ナツは腕をぐりぐりんと回し、レアは手首足首を回して各々準備運動に入る。

「ハッピーはルーシイを追ってくれ」

「フリーシャもお願いなの」

「相手は”南の狼”二人だよ！」

「そうよ！ こっちは四人。数の有利で行けばすぐ終わるかしら!!」

ナツとレアの提案に反対のネコ二匹。

だが、次のナツとレアの一言で作戦会議は終結する。

「二人で双竜」

「揃えば最強なの」

言葉はこれ以外に不要。

目の前の狼を挑発する発言だった様だが、ハッピーとフリーシャにとつて、この言葉はこの状況において何よりも信頼できる言葉だった。

「ナツ、レア！ 気をつけてねー」

「油断して足元すくわれるんじゃないかしら！」

「おー！ ルーシイ頼むぞーっ！」

「ここは任せるのー」

ハッピーとフリーシャはそれだけ言って部屋から飛び出し、ルーシイを追いかけたのだった。

「来い！ ”火”の魔導士に”水”の魔導士」

「ん？ 何で火と水って知ってたんだ？」

ナツはそんな疑問を浮かべる。

目の前の男二人の前ではまだ魔法を使っていなかったハズ。だが何故かバレている。

そんな疑問はすぐさま明かしてくれた。

「すべては監視水晶にて見ていたのだよ」

「あの娘は鍵：所有系^{ホルダー}。星霊魔導士だな。契約数7。空を飛んだ猫共は疑うまでもなく能力系^{アベリテイ}『翼^{エーラ}』」

「そして小僧、貴様はガラスを溶かし、足に火を纏った：能力系^{アベリテイ}の火の魔導士と見てまず違いないだろう。

小娘、貴様は足に水を纏い、メイドの服や髪が濡れていたことから、能力系^{アベリテイ}の水の魔導士と見て間違いないだろう」

長々と解説したが、要は水晶を通してナツ達の行動は筒抜けだったという事だ。

ナツはよく見てんなあと関心する中、手に火を纏い悪魔の笑みを浮かべた。

レアもそれにシンクロするように、足に水流を纏った。

「じゃあ、覚悟はできてるって事だな？ 黒コゲになって、」

「地の果てまで流される覚悟が、なの」

「残念ながらできてないと言っておこう」

そう言った男は「なぜなら」と言いながら背中に背負っていた平鍋を手に持って構えた。

「火の魔導士は、私の最も得意とする相手だからな。水の魔導士も、その経験を活かせば取るに足る相手では無い」

自信満々にそう宣言する狼の片割れだが、竜の二匹は「ふーん」と、興味なさげに反応したのだった。

日の出の秘密

「どうやら妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士は、自分たちこそが最強かなんかと勘違いしているらしい」

「まあ、確かに噂はいろいろ聞く。魔導士ギルドとしての地位は認めよう」

「…が、所詮魔導士」

「戦いのプロ、傭兵にはかなわない」

二匹の竜と対峙する狼はそう発破をかける。
が……。

「だったら早くかかって来い」

「私たちも、あまり時間は掛けたくないの」

ナツは手に纏っていた炎の形を come on と変えて挑発する。

「兄ちゃん…マジでコイツらナメてるよ……」

「相手が私の得意な火の魔導士とあつては……簡単な仕事イージービジネスになりそうだな」

挑発に乗った大柄な弟。

だが平鍋を持った兄が鎮め冷静にそう言い放った。

すると、兄はどう！と地面を蹴り、二人に急接近して、手に持った平鍋を横に振り払った。

「おっと」

「うぶっー！」

ナツは間一髪避けられたが、油断しまくっていたレアは平鍋が直撃

し、吹き飛ばされる。

そのせいで、ナツもレアに視線が向いて目の前の相手への注意が疎かになる。

飛び上がった身動きの取れないナツは弟に服を掴まれ、ぶあつ！とレアが吹き飛ばされた同じ方向に投げ飛ばされる。

レアが吹き飛ばされたことよって部屋には風穴が空き、二人揃ってロビーに出た。

幸いな事に、レアもナツもこれといった傷は受けていなかった。

「うう、痛た…」

「雇い主人家そんなにブツ壊しているのか？」

吹き飛ばされた二人は今度こそ油断なく上にいる兄弟を見据えた。

「貴様キコウらは魔導士の弱点を知っているかね？」

突如そんな事を尋ねる平鍋を持った兄。

だが、この質問にナツとレアは顔を青くさせた。

「の…乗り物に弱い事か（なの）!?!」

「よ…よくわからんが、それは個人的な事では？」

シンクロする二人の回答に兄弟揃って微妙な表情をするが、兄が答え合わせをしながら2階から飛び降りた。

「肉体だ」

「肉…体？」

「なの？」

思わない回答に二人は啞然とする。

しかしポカーンとする中でも、兄弟の攻撃は二人に襲いかかった。

「魔法とは知力と精神力を鍛錬せねば身につかぬもの」

「結果…魔法を得るには肉体の鍛錬は不足する」

「すなわち…日々体を鍛えてる我々には、”力”も”スピード”も遠く及ばない」

などと、兄弟は攻撃を繰り出しながらそう持論を並べる。

弟の話では昔、相手の骨を砕く”呪いの魔法”を何年もかけて修得した魔導士がいたという。

その魔導士と対峙した際、魔導士が呪いをかけるより早く相手の骨を拳で砕き、一撃で沈めたという。

「それが魔導士というものだ」

「魔法がなければ普通の人間並みの力も持つてねえ」

今も尚攻撃を続けるバニツシユブラザーズ。

だがその攻撃は二人掠ることも無く空を切り、ナツとレアは一旦距離を取った。

「つかさあ、そーゆうワリにはまったく攻撃当たってねえぞ」

「ん。力説してるのにこれじゃあ説得力皆無なの」

と、ナツは舌をべーと出しながら、レアは事実を淡々と並べて煽りまくる。

最も、レアの場合は天然も混じっている為、純粹に煽っている訳では無いが。

「なるほど。スピードはたいしたものだ。少しは鍛えてるな」

「兄ちゃん…アレならよけれねえ」

今なお兄弟をヘイカモンと言いながら煽るナツと黙ってこちら見

据えるレアを見ながら、弟はそう思案した。

「合体技だ！」

「OK!!」

流星にナツも煽るのを止め、二人の行動を見る。

兄は平鍋を水平に構え、飛び上がった弟は鍋の部分に乗る。

「余裕こいていられるのも今のうちだぜガキ共!! オレたちがなぜ

「バニッシュブライザー」と呼ばれているか教えてやる!!」

「消える…そして消すからだ」

静かにそう告げた兄は覇気を込める。

そして……。

「ゆくぞ！ 天地消滅殺法!!」

「HA!!」

言うが早いか、兄は弟の乗った平鍋を振り上げ、弟はそのまま天へ飛んだ。

飛んだ弟に釣られるように、ナツの視線は上に吸われる。

それと同時に、兄は二人に距離を詰める。

「天を向いたら…」

「ナツツ!!」

「地したにいる!!」

「ふんにゆっ!!」

勢いよく平鍋を振った兄だが、攻撃は腕を水流で纏ったレアに受け止められる。

「地したを向いたら…」

「任せろっ！」

「天うえにいる!!」

「オラア!!」

「ぬごっ!!」

次にナツ達目掛けて急降下した弟だったが、既に迎撃態勢を整えていたナツによってあっさりと吹っ飛ばされる。

「何ッ!？」

「んぐぐぐ…んなのおおお!!」

「グオオッ!？」

弟が吹っ飛ばされたことで完全に気がそっちに向いてしまった兄。

レアがその気の緩みを見逃すはずも無く、受け止めていた平鍋を掴み、弟と同じ方向に投げ飛ばした。

受け身を取り損ねた兄弟は勢いよく体を地面に叩きつけられるも、よろつとふらつきながらも立ち上がる。

「バカな…!」

「オレたちの合体技、天地消滅殺法をマトモに受けきるなど…!!」

「だってこの攻撃、普通二対一で初めて意味のある攻撃なの」

レアから最もな指摘を受け、ナツはもういいやと、頬を膨らませる。

「これでふつとべ!! 火竜の咆哮!!」

ナツは炎のブレスをバニッシュブラザーズに向けて吹く。

しかし当の本人は炎のブレスを見ても物怖じない。

いや、寧ろ笑っていた。

「来た!! 火の魔法!!」

「終わった」

と、兄は持っていた平鍋を構える。

すると、炎のブレスは瞬く間に平鍋へと吸い込まれていく。

「対火の魔導士専用…兼必殺技！
火の玉料理!!! 私ミの平鍋は全ての
炎を吸収し、威力を倍加させ…」

炎を吸収している平鍋はその勢いのまま向きを変え、ナツとレアに
炎を吸収している面とは反対方向に向けると……。

「噴き出す!!」

ズゴオオ！と轟音を立てて炎が噴き出され、ナツとレアを包み込ん
だ。

「妖精の丸焼きだ！ 飢えた狼にはちょうどいい!!」

「炎の魔力が強ければ強いほど自分の身を滅ぼす。

グッバイ」

完全に勝ちを確信したバニッシュブラザーズ。

しかしこんな所でくたばる『双竜』などでは無い。

次に兄弟が目にしたのは、炎で身を包みながらも悪魔の笑みを浮か
べながら二人の元へ突っ込むナツと、全身に水のベールを纏い、炎を
一切受け付けていないレアの姿だった。

「何!!」

「火が効かねえ!!? いや…いくら火の魔導士と水の魔導士でもそれは
…!!」

「聞こえなかったか？」

と、ナツはそのままの勢いで兄弟の顔面を鷲掴みにし、一言。

「ふっとべ!!」

レアも水のベールを解除し、腕に水流を纏い、高く跳んだ。

「火竜の——」

「水竜の——」

「翼撃!!」

ナツに掴まれた二人は吹き出す炎によって宙に舞う。

しかし攻撃はまだ終わらない。

天高く跳んだレアは水流を纏った腕をなぎ払い、吹き飛んだ兄弟を荒れ狂う水流に巻き込む。

宙に舞う水流に踊らされたバニツシユブラザーズは壁を突き抜け、見えなくなるまで吹き飛ばされた。

最初の宣言通り、黒コゲになり、地の果てまで流されたのだった。

「な…何なんだ…この魔導士は…」

兄の疑問に答える者は周りに誰もいない。

「ママあ…妖精さんが見えるよ」

弟はあまりの衝撃に幻覚が見えていた。

宙で追撃を行ったレアがナツの傍に着地する。

ナツはフーッと息をつく。

「さーて、ルーシイ探しに行くか」

「ん。ところで、あの人たち何だったの?」

「俺に聞かれても……」

ボロボロになったロビー。

だがそこに倒れていたゴリラメイドは怪しく目を光らせるのだった。

くく

時は少し遡り、屋敷の下水道。

本を読む時間が欲しいと言ったルーシイは危機に陥っていた。

風詠みの眼鏡と呼ばれる魔法アイテムを使用し、通常よりも何倍もの速度で本を読み進め、本の謎を解いた所までは良かった。

だが、完全に油断しきっていたルーシイは壁から突然生えてきた工バルー公爵の手によって腕を掴まれ捕まったのだ。

本の秘密を吐かなければ腕をへし折ると脅しに出ていた。

星霊を召喚する為の鍵は腕を掴まれた時に落としてしまい、もつと言えば現在両手が使えないルーシイは鍵を持つこともできない状態だ。

「調子にのるでないぞ、小娘がああ!! その本は我輩の物だ! 我輩がケム・ザレオンに書かせたんじゃからな! 本の秘密だって我輩のものなのじゃあっ!!!」

先程ルーシイが無駄にエバルー公爵を挑発したせいで、エバルー公爵は本気でルーシイの腕を折ろうと力を込める。

と……。

ボキッ!!

そんな音が聞こえた。

ルーシイのものかと思えたが、まだその域まで達していない。

ルーシイは音のなった方向に目を向けると……。

「おおお、ぎゃあああああつ!!」
「ハッピー!!」

翼を生やした青い猫、ハッピーがエバルー公爵の腕を肘の折れる反対側から飛んできた勢いのまま蹴りを打ち込んでいた。

折れてはいけない方向に腕が折れ、エバルー公爵は痛みのみあまりルーシイから手を離す。

ルーシイもすぐさまそこから離れ、地面に落ちた鍵の束を手にとった。

「ナイス、かつこいー♡」

ルーシイの言葉にハッピーはにっと笑う。

すると翼が消え、ハッピーは着地をしようと空中でぐるぐるくと回った後に……。

ポチャン……

下水に飛び込んだ。

「ルーシイ！」

「あ、フリーシャ」

と、遅れてフリーシャもルーシイの元に合流した。

「おのれ……。何だ、その猫共は！」

「ブク…バツビイベブル」

「ハッピーです」だってさ」

「ハッピー。さっさとあがってくるかしら穢らわしい。ちなみにリー

シヤはフリーシヤかしら」

「びぶ…びぼびいべぶル…ブクブク」

「……ハッピー。体洗うまでリーシヤに近づくと無いかしら」

何とか腕を戻したエバルー公爵は壁に風穴を開け、そのまん丸い体を表に出した。

ルーシイは鍵を手に構え、不敵な笑みを浮かべる。

ついでにフリーシヤは水に沈んでいるハッピーにこれでもかという軽蔑の視線を向けている。

「形勢逆転ね。この本をあたしにくれるなら許してやってもいいわよ。一発は殴りたいケド……」

「さて、観念するかしら」

フリーシヤもルーシイと再度合流して、彼女が翼とは別に持つもう一つの魔法、爪を発動させる。

緑色の爪を手に纏ったフリーシヤが構え、ルーシイは驚きながらも今はと、エバルー公爵に照準を合わせる。

だがエバルー公爵はニヤリと笑う。

「ほおう……星霊魔法か、ボヨボヨ。それにその猫は爪か。だが文学少女のくせに言葉の使い方を間違えておる。形勢逆転とは勢力の優劣状態が逆になる事だ。猫が二匹増えたくらいで、我輩の魔法、土潜在はやぶれんぞ!!」

するとエバルー公爵の足元が抜けると、再び地面に潜った。

「これ……魔法だったのかあ」

ようやく水からあがったハッピーが散々披露された地面に潜る行動が魔法だと理解し、納得した。

そんな中、エバルー公爵は地面からアッパーをルーシイとフリーシヤに仕掛ける。

それを避けられれば再び地面に潜っては二人に攻撃を仕掛けると、ヒットアンドアウェイで攻撃を繰り返す。

「この本に書いてあったわ。内容はエバルーが主人公のひどい冒険小説だったの」

「我輩が主人公なのは素晴らしい。しかし内容はクソだ。ケム・ザレオンのくせにこんな駄作を書きおつて！ けしからんわあつ!!」

「無理矢理書かせたくせになんて偉そうなの!？」

「偉そう？ 我輩は偉いのじゃ！ その我輩の本を書けるなどものすごく光栄なことなのじゃぞ!!」

「脅迫して書かせたんじゃないっ!!」

ハッピーとフリーシヤはルーシイの言葉を疑った。いくら町の有権者であろうと、脅迫して自身の小説を書かせるなどあるのだろうか。

しかしエバルー公爵は……。

「それが何か？ 書かぬと言う方が悪いに決まっておる!!」

悪びれもせず、寧ろ嬉々としてそう言い放った。

遠回しな肯定を含んでいるエバルー公爵の回答。

しかし本人は嫌らしい笑みを浮かべながら自身の髭をキュツとつまんで整えると、再び地面へ潜った。

「偉ーいこの我輩を主人公に本をかかせてやると言ったのに、あのバカ断りおつた。だから言つてやったんだ。書かぬというなら奴の親族全員の市民権を剥奪するとな」

またもや耳を疑う爆弾発言が猫二匹の耳に入った。

市民権を剥奪されれば、商人ギルドや職人ギルドに加入出来なくなる。

つまり、職、大袈裟な言い方をすれば国から生きる権利を奪われるという事他ならない。

しかしこんなクズにそんな権限があるのというのも猫二匹は疑問に思った。

だがルーシイはイエスと答えた。

封建主義のこの土地はまだその権限は残っており、エバルー公爵は確かにこの辺りでは絶対的な権力をふるっている。

「けっきょく奴は書いた!! しかし一度断った事はムカついたから独房で書かせてやったよ!!」

ボヨヨヨヨヨヨ!! やれ作家だ文豪だ……とふんぞり返っている奴の自尊心を砕いてやった!!」

地面に潜っていたエバルー公爵は遂にルーシイを捉え、足首を掴んだ。

が、ルーシイは掴んだその手を連続で踏みつける。

狙いを分散させる目的で離れていたフリーシヤも合流して、地面から伸びている腕を切りつける。

エバルー公爵はいてつと言いながらもその手を離さない。

「自分の欲望の為にそこまでするのはどうなのよ!! 独房に監禁された3年間!!彼はどんな想いでいたかわかる!!?」

「3年も……!!?」

絶句した。

フリーシヤは思わず振るっていた腕を止め、ハッピーは口元を手で抑えていた。

しかしエバルー公爵は高らかに笑った。

「我輩の偉大きさに気づいたのだ!!」

「違う!!自分のプライドとの戦いだっただ!!」

書かなければ家族の身が危ない!! だけどアンタみたいな大バカを主人公にした本なんて……作家としての誇りが許さない!!」

ルーシイの怒りの籠った叫びに怯み、連続で踏みつけられた手を痛め、エバルー公爵はようやく掴んだ手を放した。

一旦距離を取ったエバルー公爵は訝しげにルーシイを見た。

「貴様……なぜそれほど詳しく知っておる?」

エバルー公爵からの問いの解答は簡単だった。

「全部、この本に書いてあるわ」

「はあ? それなら我輩も読んだ。ケム・ザレオンなど登場せんぞ」

ルーシイは手に持つ本をエバルー公爵の見せびらかしそう言うが、エバルー公爵の表情はさらに疑問に満ちた。

だが、続くルーシイの言葉に、嫌でも理解した。

「もちろん普通に読めばファンもがっかりの駄作よ。でも、アンタだって知ってるでしょ? ケム・ザレオンは元々魔導士」

「な……! まさか!!」

「彼は最後の力をふりしぼって……この本に魔法をかけた」

「おおっ!!」

ルーシイの暴いた秘密に、ハッピーとフリーシャは感嘆の声を漏らした。

「魔法を解けば我輩への怨みを綴った文章が現れる仕組みだったのか!? け……けしからんっ!」

「発想が貧困ね…。確かにこの本が完成するまでの経緯は書かれてたわ。だけど、ケム・ザレオンが残したかった言葉はそんな事じゃない。本当の秘密は別にあるんだから」

唯一、駄々を捏ねて読み始めたルーシイだけが気づいた。

本に残った魔力の残穢を感じたルーシイは秘密があると悟り、そして解き明かした。

ハッピーはその秘密が気になってなにになに？と縋り、フリーシヤはその残穢を読み取ったルーシイの筋の良さに感心した。

伊達に入手困難な黄道十二門の鍵を三本契約しているだけの事はあると。

「だからこの本はアンタには渡さない!! てゆうかアンタには持つ資格なし!! 開け! 巨蟹宮の扉:キャンサー!!」

そしてルーシイは遂に、ずっと持っていた金の鍵を使った。

現れたのは高身長で頭はカニのハサミを模したヘアスタイル。

両手に散髪用のハサミを持ち、腰には散髪用よ道具の入ったポシェットを下げ、背中からはカニの足が6本生えている。

「蟹キターー!!! 絶対語尾に「カニ」つけるよ!! 間違いないよね! カニだもんね!!」

オイラ知ってるよ。”お約束”って言うんだ!!」

「ハッピー」旦黙るかしら」

妙な所で勝手に盛り上がる青い猫とそれを鎮める金の猫。

ルーシイも微妙な表情をする中、キャンサーが口を開いた。

「ルーシイ:今日はどんな髪型にするエビ?」

「空気読んでくれるかしら!!?」

「エビーー!!?」

まさかの語尾にフリーシャも叫ばずにはいられなかった。
ちなみにこの語尾、取ってつけた訳ではなく素でこれなので仰天も
のである。

余りにも間の抜けたキャンサーの発言にルーシイもぐもおつと反
応したが、すぐに目付きを変えては目の前のエバルー公爵を睨んだ。

「戦闘よ！ あのヒゲオヤジやつつけちやつて！」

「OKエビ」

ルーシイの指示に、キャンサーもしつかりと敵を見据える。

思わぬ衝撃を受けたハッピーはルーシイの肩に乗った。

「まさにストレートかと思ったらフックをくらった感じだね。 うん！
もう帰らせていいよ」

「あんたが帰れば」

カニと思ったらまさかのエビのショックは中々大きかったようで、
ハッピーは未だにプルプルしている。

ちなみに同じ衝撃を受けたフリーシャだが、流星にもう立て直し、
キャンサーの隣に並んでいる。

一方エバルー公爵はというと……。

「(ひ……秘密じゃと!? まだ何か……)。

ま……まさか、我輩の事業の数々の裏側でも書きおったか!!? マズイ
ぞ!! 評議員の検証魔導士にそれが渡ったら……我輩は終わりじゃ
ないかつ!!)」

何やら焦っていた。

焦りからか、エバルー公爵は金の鍵を取り出した。

「開け!! 処女宮の扉!!!」

「え!?!」

「ルーシィと同じ魔法!?!」

「しかも黄道十二門かしら!?!」

「バルゴ!!!」

エバルー公爵がそう唱えると、目の前に白い煙がばふっと現れる。煙が晴れ、姿を見せたのは、乙女座らしい美しい女性……ではなく、

「お呼びでしょうか? 御主人様」

「バルゴ!! その本を奪えっ!!!」

幾度となく登場したあのゴリラメイドだった。

「こいつ…星霊だったの!?!」

「エビ」

ルーシィもたった今発覚した衝撃の事実にも、口をあんぐりさせる。キャンサーは知っていたからか元々その場に居なかつたせいかな反応は薄い。

だが、バルゴが召喚された事でこの場に現れたイレギュラーが、二人いた。

「あっ!!!」

「あ!!!」

「あ!!!?」

「お!?!」

「ん?」

「ナツ、レア!!!」

彼らの視線に入ったのはバルゴの上にいる手を繋いだナツとレアだった。

「なぜ貴様らがバルゴと!!?」
「あんたら…どうやって!!?」

エバルー公爵とルーシイの疑問は至極真つ当だ。時系列的にいえばナツとレアは今しがたバニツシユブラザーズとの戦闘を終え、この場に居るはずが無いのだ。

距離的にも考えて、この場にいることはありえない状況だったのだ。

だがナツが戸惑いながらも答えた。

「どう…って、コイツが動き出したから後つけてきたらいきなり…」
「訳わかんねー!!」

ルーシイも他の誰も理解出来ていない。
というか、当事者のナツとレアでさえ理解出来ていなかった。
が、ルーシイはある部分が目に入る。

「つけて」って言うか…。「つかんで」でしょ!!」

それはバルゴの服をガツチリ掴んでいるナツの手だった。
と、これでルーシイがナツとレアがここに突然現れたメカニズムを理解するも、常識的にありえないと目を白黒させる。

「まさか…人間が星霊界を通過してきたって言うの!!? ありえな
いって!!」

細かい説明は後日として、簡単に言えば星霊の住む星霊界に人間が入れば、平たく言えば死ぬ筈だというのに、ナツとレアはその常識を根本から翻してこの場に現れたのだ。

その余りにも常識外れな現象に頭が完全に混乱しているルーシイ

だが、鶴ナツの一声で現実に戻される。

「ルーシィ!! オレ達は何すりゃいい!？」

「バルゴ!! 早く邪魔者を一掃しろ!!」

「そいつをどかして!!」

ルーシィは腰に下げていた鞭を手に取り、エバルー公爵よりも大きな声でナツとレアに言った。

「おう!!」

「ん!!」

ルーシィの声が大きく、エバルー公爵の指示が聞きずらかったバルゴは反応が遅れ……。

「どりゃあっ!!!」

「んのおっ!!!」

それぞれ、炎と水流を纏った蹴りがバルゴの顔面と腹に決まり、その勢いのまま地面にめり込んだ。

一瞬でバルゴがやられたことに完全に想定外だったエバルー公爵はその場でただ佇む。

その大きな隙をルーシィは捉え、首に鞭を巻き付けた。

「もう地面には逃げられないわよ!!」

ビーンと鞭を張ったルーシィはそのまま思いつき振りかぶる。

するとエバルー公爵の体はいとも簡単に宙へ浮き上がり、飛び上がったキャンサーに向かって一直線に飛ぶ。

そして……。

「アンタなんか…ワキ役で十分なのよっ!!!」
「ボギョオー!」

エバルー公爵を派手に吹き飛ばした。

倒れたエバルー公爵はつるるん、と頭の毛と髭が綺麗に削がれ、服を着た脂ぎったジャガイモが出来上がった。

「お客様……こんな感じでいかがでしょう? エビ」

「ははっ、ハデにやったなあルーシイ」

「あい」

「さすが妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士なの」

「ホント、これは大物になるかしら」

一悶着終え、ルーシイはフウとため息を吐いた。

そして、今度は安堵した笑みを見せ、手に持っていた本をぎゅつと胸に抱いたのだった。

親愛なるカービイへ

「この本はね……エバルー公爵がケム・ザレオンに無理矢理書かせた、自分が主人公の冒険小説なのね」

ルーシイは日の出を片手にそう4人に説明した。

ルーシイが言うには、構成も文体もひどく、ケム・ザレオンほどの文豪が書いたとは思えなかったという。

「だから秘密があると思ったの。この本はね！」

しかしその秘密の部分は依頼主の前で話すと言う。

4人は結局ちんぷんかんぷんなまま、依頼主の屋敷に戻ったのだった。

くくく

屋敷に戻ったルーシイはカービイの目の前に、依頼の本を突き出した。

それを見たカービイとその妻は揃って顔を歪めた。

「ご……これは一体……どういう事ですか？ 私は確か破棄してほしいと依頼したハズです」

「破棄するのは簡単です。カービイさんにだつてできる」

そう言われれば、カービイはあからさまに顔に怒りを浮かべ、ルーシイから本をぶんどった。

「だ……だったら私が焼却します。こんな本……見たくもない!!」

「あなたがなぜ、この本の存在が許せないのかわかりました」

しかしルーシイの放った言葉にカービイを手を止めた。

「父の誇りを守る為です。あなたは、ケム・ザレオンの息子ですね」

「うおっ!!」

「パパー!!?」

「…驚きなの」

「まさか自分の父の本の破棄の依頼とは…」

「な…なぜ…それを…」

ルーシイの確信めいたその言葉に場は驚愕に包まれる。

カービイも凶星のようで、小刻みに震えている。

「この本を読んだ事は？」

「いえ…父から聞いただけで読んだ事は…。しかし読むまでもありません。駄作だ。父がそう言っていた……………」

ルーシイの問いにカービイは気まずそうに答えた。

しかし、直後に手に持つ本を恨めしそうに見つめ、駄作だとハッキリ言った。

しかし、いくら駄作だからって燃やすことに疑問と怒りを浮かべる者が二人いた。

「つまんねえから燃やすってそりゃああんまりじゃねーのか!? お?

父ちゃんが書いた本だろ!!」

「ナツ…………言ったでしょ! 誇りを守る為だつて!!」

ナツは身を乗り出してカービイに詰めようとし、ルーシイに抑えられる。

その後ろでレアはカービイを睨んでいた。

二人とも、親に置いていかれてしまった身。

親には人一倍深い思い入れがあった。

自身の親の誇りを守る為とはいえ、その行動は理解出来ないものだった。

だがカービイは臆することなく、ルーシイの言葉に肯定した。

「ええ…父は^{デイ・ブレイク} 日の出”を書いた事を恥じていました」

その言葉にナツも一旦は落ち着きを取り戻した。

そこからカービイはポツポツと語り出した。

31年前、エバルーから釈放されたケム・ザレオンは3年ぶりに帰宅した。

しかし帰ったその男は衰弱しきっており、ふらつとよろめきながら家の中に歩を進めた。

そして次に彼のとった行動は、右腕を縄で縛り、斧を振りかぶった。作家をやめる、二度と本は書かんと告げ、彼は息子の前でその腕を撥ねた。

右腕を無くした彼は病院に入院する事になった。

やって来た息子を、父は笑って見た。

息子はそんな父を、事情を知らなかったとはいえ、あろう事が言葉で責め立てた。

「アンタは作家の誇りと一緒に、家族を捨てたんだ!!!」

そのすぐ後、彼は自殺したのだという。

しかし息子は、そんな父の事を死んだ後も憎んでいた。

「しかし、年月が経つにつれ、憎しみは後悔へと変わっていった………。私があんな事を言わなければ、父は死ななかつたかもしれない……と」

ナツとレアは黙って聞いた。

ある意味納得したのかもしれない。

カービイは話しながら、ポケットからマッチを取り出した。

「だからね……せめてもの償いに、父の遺作となったこの駄作を……父の名誉の為、この世から消し去りたいと思っただんです」

ジツとマッチを擦り、火を灯す。

ゆつくりと火を本に近づけ、カービイも安堵の表情を浮かべている。

「これで、きつと父も……」

「待つて!!」

しかしルーシイが叫んだ。

それに呼応するように、カービイの持つ本がカッと光り出した。

「え?」

「な……何だこれは……!」

またもや場は驚愕に包まれる。

この事態を予想出来たのはただ一人、ルーシイだった。

「ケム・ザレオン……いいえ、本名はゼクア・メロン。彼は、この本に魔法をかけました」

すると、本の表紙にあった文字が浮かびだした。

浮かび上がったDAY BREAKの文字は1文字ずつ表紙に戻っていく。

ただし、綴りを変えながら。

現れた文章、この本の真のタイトルは……。

「DEAR KABY!!?」

「そう……彼のかけた魔法は文字が入れ替わる魔法です。中身も……全てです」

本は独りでに開き中から無数の文字が浮かび上がった。
その様子はまるで文字が踊っているかのよう。

「きれー」

誰かが呟いたそれに、その場にいた全員が共感した。

空中に並ぶ無数の文字は円を描きながら、今までとは全く違う内容を本に綴っていく。

「彼が作家をやめた理由は……最低な本を書いてしまった事の他に……最高の本を書いてしまった事かもしれません……。カービイさんへの手紙という最高の本を」

ルーシイの言葉に、カービイは父の、ゼクア・メロンの残した最期の言葉を思い出していた。

『いつもおまえの事を想っていたよ』
納得した。

あれはその場で取り繕ったその場しのぎの言葉等ではなく、本気で自分自身の事を想っていたということ。

やがて無数の文字は再び本に戻っていき、日の出改め、
DEAR KABYが彼の手に戻った。

「これがケム・ザレオンが本当に残したかった本です」

ルーシイは最後にそう締めくくった。

カービイは震える手で本を開き、乱雑に中を読んだ。

間もなくして、彼の瞳からは大粒の涙がポロポロ零れていた。

「私は……父を……理解できてなかったようだ……」
「当然です。作家の頭の中が理解できたら、本を読む楽しみがなくなっちゃう」

カービイの言葉に、ルーシイはニコツと微笑んで答えた。

「ありがとう。この本は燃やせんね……」

「じゃあ、オレたちも報酬いらねーな」

「ん」

「だね」

「当然かしら」

「え？」

「はい？」

カービイが本を抱えながら呟いた言葉にナツが答え、他3人もこうしての意を示すと、カービイとルーシイは揃って素っ頓狂な呟きを零した。

「依頼は「本の破棄」だ」

「達成してないのに報酬は貰えないの」

「い……いや……しかし……そういう訳には……」

「ええ……」

ナツとレアは当然だと言うように答えたが、メロン夫婦は揃ってバツの悪そうな表情を見せる。

それに乗じたのがルーシイだった。

「そ……そうよ……せっかくの好意なんだし……いただいとおきましょう」

「あー！ルーシイがめつー！さっきまでけっこういい事言ってたのに全部チャラだ」

「それはそれ!!」

「今のでリーシャのルーシィへの好感度は地に着いたかしら」

何とかして報酬の二百万が欲しいルーシィはそう言うもハッピーに正論をぶつけられ逆ギレ。

逆ギレによってフリーシャはあからさまに引いていた。

「いらねえモンはいらねえよ」

ナツはかっかっかっかと笑いながら扉へ歩を進める。

その後ろであたしほしいうと泣きながらついて行くルーシィだが、全員見事なまでに無視している。

「かーえろっ」

「メロンも、早く帰ってあげるの。自分の家」

ナツが手を振りそのまま背を向け、レアはそう一言言っただけで隣の並んだ。

メロン夫妻は揃って鳩が豆鉄砲を喰らったような表情を見せ、ルーシィは一瞬レアが何を言ったのかわからず、え?と零したのだった。

~~~~~

「信じらんない!! 普通二百万チャラにするかしらー!!」

帰り道、五人は行きとは違い、歩きでマグノリアに帰っていた。

「依頼達成してねーのに金もらったら妖精フェアリーテイルの尻尾の名折れだろ」

「あい」

「全部うまくいったんだからいいじゃないのよおっ!!!」

ルーシイは目の前にぶら下げられた大金をみすみす逃すことに憤慨していたが、ナツが当たり前だというように素っ気なく返した。もう何を言っても無駄だと理解したルーシイはガクツと肩を落とした。

「はあー……あの人たちお金持ちじゃなかったのかあ……」

と、ルーシイはため息を吐く。

作家の息子のくせにとブツブツ文句を言っていたが、余り詮索はしないでおこう。

彼女の言ったように、彼らメロン夫妻は別に特段お金を持っている訳でもなく、あの屋敷は見栄をはる為に友人から借りたものだったという。

実際の彼らの家はツタが壁や屋根にはったボロボロの一軒家であり、家庭もどちらかといえば貧しい部類に入る家だった。

「そんな事しなくても依頼引き受けたてあげたのにね」

「どうかな？」

「引き受けたわよっ!! ……………たぶんね」

頬を膨らませ不貞腐れるルーシイにハッピーは疑いの視線を向け、ルーシイは強烈なツツコミを返す。

……が、自信が無くなって最後にボソツと零した言葉は恐らく誰にも聞こえていない。

「てゆうか、アンタら何で家……気づいたの？ 多分ナツも気づいたんでしょ？」

ルーシイはふと思った疑問をナツとレアにぶつけてみた。

ルーシイの見た限り、屋敷にはカービイたちが見栄をはるうえでボロが出るような場所は無かったように見えた。

二人は何食わぬ顔でサラツと答えてみせる。

「メロン達のおいと家のおいが違ったの」

「普通気づくだろ」

「あたしは獣じゃないからっ!!」

真面目な回答を期待した私がバカだったと言わんばかりにルーシーはツツコミを返した。

滅竜魔導士の鼻は効く。

フェアリーテイル  
ある意味妖精の尻尾内では常識だった。

「あの小説家…実はスゲエ魔導士だよな」

突然そんな事を言ったナツだったが、レアが真っ先に反応した。

「ん。30年も昔の魔法が消えてないなんて相当の魔力なの」

「若い頃は魔道士ギルドにいたみたいだからね。そしてそこでの冒険の数々を小説にしたの」

レアの言葉にルーシーが便乗した。

ルーシーは今頃父の最後の小説を夫婦で読んで腹の底から笑っている光景を思い浮かべる。

「憧れちゃうなあ〜」

ふとルーシーが零したその言葉に、ナツとレアが顔を合わせる。

かと思えばナツがにやあと笑みを浮かべてルーシーを見た。

「やっぱりなの」

唐突にレアがそう言うが、いきなりでなんの事か分からないルー

シイはん?と零す。

「前……ルーシイが隠したアレ……」

ナツが途中までそう言えば、ルーシイは嫌でも理解し、ハツとなる。ナツは未だ揶揄うような笑みでルーシイに核心ついたように言った。

「自分で書いた小説だろ」

「なるほど、だから本の事に詳しい訳かしら」

ナツの発言にハッピーもハツとなり、フリーシャも納得したようにそう呟いた。

一方当事者のルーシイはどうかあーっと顔を赤く染め、次の瞬間には声を荒らげていた。

「ぜ……絶対他の人には言わないでよ!!」

「何で?」

「ま……まだヘタクソなの! 読まれたら恥ずかしいでしょ!!」

「大丈夫なの。がめついルーシイの小説は誰も読まないの」

「それはそれでちよっぴり悲しいわっ!!」

レアの辛辣な言葉にルーシイは心に矢でも撃たれたかのように胸を痛め、その後の道中は驚く程静かなのだった。

「って、がめついのと小説は今関係ないでしょー!!」

……

前言撤回、一度だけレアの言葉に納得出来ず空に向かって叫んだルーシイ。

だが見事なまでのスルーを決め込まれ、今度こそ意気消沈してとぼとぼと二人の後ろを歩くのだった。

余談だが、その後シロツメの街からマグノリアまでの道のりはルーシイに長すぎたらしい。

魔力もエバルー邸にてキャンサーを召喚して魔力量が足らずホロロギウムに頼ることも出来なかった為にその場で座り込んだ。

その結果、途中からレアにおぶられて帰り、また赤っ恥をかいたのは別の話であったりする。

## 鉄の森編 鎧の魔導士

「う〜ん…」

多くの人で賑わう妖精の尻尾の酒場。  
そこに立っている依頼板を前にルーシイは唸っていた。

「へえー……依頼っているいろいろあるんですね」

シロツメの街から帰ってきた次の日、ルーシイはその仕事の多さに感嘆していた。

簡単なものは腕輪探しから難しいものでは火山の悪魔退治と、ホントに様々だ。

「気に入った仕事あったら私に言ってね。今は総長マスターいないから」  
「あれ？本当だ」

ルーシイがいつものマスターの定位置に目をやると、確かにそこには誰も居らず、代わりにミラがその傍で立っていた。

「定例会があるからしばらくいないのよ」

とミラは説明したが、ルーシイは耳慣れない言葉に眉を顰めた。

「定例会？」

「地方のギルドマスターたちが集って定期報告をする会よ。評議会とは違うんだけど……。う〜ん……。ちよつとわかりづらいかなあ？」

と、ミラはジョッキを持ったまん丸い男、リーダーヒカリペンに光筆を拝借し、空中に文字を書き出した。

「魔法界で一番偉いのは政府とのつながりもある評議員の10人。魔法界におけるすべての秩序を守る為に存在するの。犯罪を犯した魔導士をこの機関で裁く事もできるのよ。」

その下にいるのがギルドマスター評議会での決定事項などを通達したり、各地方ギルド同士の意思伝達を円滑コミュニケーションにしたり、私たちをまとめたり……。まあ……。大変な仕事よねえ」

魔法界の構図を空中に書き記したミラは一通りの説明を終える。初めて知ることにルーシイもほへえとなった。

「ギルド同士の連携は大切なのよ。これをおそまつにしていると……。ね」

そこで意味深に区切るミラ。

疑問に思ったルーシイはミラに顔を向けると……。

「黒い奴等が来るぞオオオ」

「ひいひいっ!!!」

後ろからナツがドスの効いた声で耳元で囁いた。

驚きの余りルーシイは全身の毛が逆立ち、冷や汗をかきながらその場を飛び跳ねた。

「うひゃひゃひゃっ!!」「ひいひい」だってよ、なーにビビってんだよ」「もオ!! おどかさないでよオ!!!」

本気でビビったルーシイは涙目になって若干過呼吸になっている。そこへレアとフリーシヤも合流した。

「あら、何この程度で過呼吸になってるのかしら？」  
「ゼエゼエ言ってるルーシイ、略してゼルシイだね！」  
「変な略称つけんなっ!!」

猫2匹とルーシイの漫才にミラはクスクスと笑う。

「ん。でも、黒い奴等は本当にいるの」  
「え？」

しかしレアの言葉にルーシイは目を見開く。

「連盟に属さないギルドの事でね、闇ギルドって呼んでるの」  
「あいつ等法律無視だからおっかねーんだ」

レアの説明にミラが補足し、ナツはケラケラ笑いながらそう言った。  
た。

そんなナツにルーシイはいつかスカウトが来そうと冗談交じりに言ったが、表情を見るにさっきビビらされた事を根に持ってそうように、少しトゲトゲした感じで言ったようにも見える。

「つーか早く仕事選べよ」

「ん。前はレアたちが勝手に決めちゃったから、今度はルーシイの番なの」

ナツとレアはそう催促するが、ルーシイはぶいっとそっぽをむいた。

「冗談！ チームなんて解消に決まってるでしょ」

「何で？」

「なの？」



明らかに怒っているルーシイだが、二人は心当たりが無くそう聞き返す。

しかしルーシイはキツと（主にナツを）睨んだ。

「だいたい金髪の女だったら誰でもよかつたんでしょ!!」

ルーシイは鋭くそう言い放つ。

ナツとレアはポカーンとした表情で数刻黙り……。

「何言ってるんだ…その通りだ」

「ホラー!!」

当たり前だろと言わんばかりにそう返す。

だが直後にナツはニカツと笑い、レアは微かな笑みを浮かべる。

「でもルーシイを選んだんだ」

「いい人だからなの」

こんな事を言われたルーシイは何とも言えない表情になる。

いい人と言われて悪い気はしていないようだった。

「なーに、無理にチームなんか決める事アねえ」

そんな声が耳に入った。ルーシイは声の方向に顔を向ける。

「聞いたぜ、大活躍だったな。きつとイヤってほど誘いがくる」

「ルーシイ……僕と愛のチームを結成しないかい？ 今夜二人で」

「イヤ……」

「な？」

パンツ一丁でタバコを吹かすグレイとだんだんルーシイに近づいてくるロキがいた。

「傭兵ギルド南の狼の二人とゴリラみてーな女やつつけたんだろ？  
すげーや実際」

「そ…それ全部ナツとレア」

どうやら何か間違った情報がギルドに流れているらしく、ルーシイがそれを修正すれば……。

「てめエかこのヤロオ！」

「文句あつかおお!？」

グレイがナツの胸ぐらを掴みかかっていた。

「グレイ……服」

「あゝあゝあゝ つまた忘れたあつ！」

「うぜエ」

グレイのお約束にミラがツツコミを入れればナツがそう反応する。  
こうなれば後は火を見るよりも明らかだ。

「今うぜエつつたか!? クソ炎!!!」

「超うぜエよ変態野郎!!!」

ナツとグレイはゴロゴロと転がりながら殴り合いの喧嘩になる。  
そんな茶番をやっている間に、ロキはルーシイの肩をガシツと掴んで真っ直ぐルーシイの目を見つめる。

「君って本当キレイだね。サングラスを通してもその美しさだ……  
肉眼で見ればきつと眼が潰れちゃうな……ははっ」

「潰せば」

ロキの女子への殺し文句をルーシイはかなりストレートな言葉ではらう。

と、さらにそこへレアが加わった。

「ロキ、それ似たような言葉で別の女の子に言ってなかったの？ 確か、君のその美しさを直視したら最後、僕は石になってしまおうよ、だったの」

猛烈にきまづい。

ロキは自身のキラキラを抑えることなくいまだにルーシイの肩を掴んで離さない。

しかしレアの悪気のない天然発言が炸裂して猛烈に微妙な空気が3人の間に流れる。

と、ロキはルーシイのベルトについている鍵の束が目に入った。

「うおおっ!! きき…君!!星霊魔導士!」

ロキは星霊の鍵が目に入ると、直ぐに手を離した。

「ウシとかカニとかいるよ」

「な…なんたる運命のいたずらだ…!! ゴメン！ 僕たちはここまでにしよう!!」

「何か始まってたのかしら……」

答えないルーシイに代わってハッピーが答えれば、ロキはスタコラサッサとルーシイから離れてギルドを出ていった。

「何あれえ」

「ロキは星霊魔導士が苦手なの」

「はア？」

「どうせ昔女の子がらみで何かあったのよ」

ルーシイの内心は穏やかでは無かった。

星霊魔導士というだけで距離を取られることが理解出来なかった。  
しかし。

「なんか戻ってきた」

ロキはたつたつたと再びギルドに戻ってきた。  
しかしその表情はかなり険しいものだった。

「ナツ！グレイ！マズイぞっ!!」

「あ？」

と、ロキが開口一番にナツとグレイを呼んだ。

喧嘩を中断させられて不機嫌そうにロキに当たる。

だが、次の言葉で二人は滝のような汗を流すことになる。

「エルザが帰ってきた!!!」

「あゝ!!!」

そしてその言葉に反応したのはナツとグレイだけでは無かった。

ギルド内が騒然とする中、ズシンと大きな足音がギルドの中まで響いてきた。

その足音はなる度に大きくなっていく。

そうしてギルドの扉が開き中に入ってきたのは、  
鎧を身にまとい、キリツとした切れ目、真っ赤な髪が印象的な第一印象はカツコイイと言える美しい女性だった。

だが彼女が肩に担いでいたのは彼女の2倍ほどの角のようなものだった。

「今戻った。総長マスターはおられるか？」

「お帰り！ 総長マスターは定例会よ」

「そうか……」

肩に担いでいた角を下ろせば彼女はミラと普通に会話しだす。気になったギルドメンバーの1人が恐る恐る口を開いた。

「エ……エルザさん……。そ……その……バカでかいの何ですかい？」

「ん？これか。討伐した魔物の角に地元の方が飾りをほどこしてくれてな……綺麗だったのでここへの土産にしようと思ってな……。迷惑か？」

「い……いえ、滅相もない!!」

落ち着いた雰囲気ですすエルザだが、周りは絶句していた。

あんなバカでかい角を持つ魔物と戦って、あまつさえ角を取ってそれを飾り付けして持って帰ってくるという偉業のような事を平然と行う。

これだけでもエルザの規格外さが滲み出ている。

「それよりおまえたち」

エルザはその鋭い目をさらに鋭くさせると、ギルド内の空気が変わる。

「また問題ばかり起こしているようだな。総長マスターが許しても、私は許さ  
んぞ」

「な……なに、この人……」

「エルザ！ とっても強いんだ」

突然そんな事を言ったエルザにルーシイは顔を顰めた。

ハッピーが説明とは言えない説明をすれば、エルザが再び口を開いた。

「カナ……なんという格好で飲んでいる。ビジター、踊りなら外でやれ。ワカバ、吸いながら落ちていそ。ナブ……相変わらずリクエストボード依頼板の前をウロウロしているのか？仕事をしろ。

まったく……世話がやけるな。今日のところは何も言わずにおいてやろう」

「(ずいぶんいろいろ言つてたような……)」

エルザの風紀委員たるその姿勢に、ルーシイは目をまん丸くさせる。

彼女にとってお小言を一つ二つ言う程度では注意したうちには入らないらしい。

しかしギルド内はズーンと暗くなっていた。

「ところで、ナツとグレイ、レアはいるか？」

「あい」

「ここにかしら」

エルザがそう尋ねると、ハッピーが視線を誘導させ、フリーシャも声をあげた。

そこには……。

「や……やあ、エルザ……。オ……オレたち、今日も仲よし……よく……や……や……やってるぜい」

「あ……い」

「こ……こ……なの」ガタガタ

「ナツがハッピーみたいになってレアが見たことないくらい震えてる!!!」

汗をダラダラかきながらお互いの肩に腕を組み、互いに手を固く握りしめているナツとグレイ。

フリーシャに首根っこを掴まれて、表情こそ変わらないがガタガタと震えてナツの横に並ばされているレアがいた。

ルーシイは普段の様子から絶対見ることが無かったであろう二人の姿に信じられないと目を見開いていた。

「そうか…。ナツ、グレイ。親友なら時にはケンカもするだろう……。しかし私は二人がそうやって仲良くしてるところを見るのが好きだぞ」

「あ…いや…いつも言ってるけど……親友って訳じゃ……」

「あい」

「レア、いつも言ってることだが、もう少し感情を表情に出したほうがいいぞ？ 私やナツは兎も角、他の人からすればどう思われているか不審がられるからな」

「なの……」

「こんなナツとレア見た事ないわっ!!!」

思いがけないところで垣間見えることになったナツとレアの別の一面。

ミラはそんな4人の関係図をリーダーラスから拝借しっぱなしの光筆<sup>ヒカリペン</sup>で表した。

絵はとてつもなくへたくソだが……。

「ナツもレアもグレイもエルザが怖いだよ。」

ナツは昔、ケンカを挑んでボコボコにされちゃったの」

「まさかあ!!あのナツが!!」

「レアはエルザの荷物と妖精<sup>フェアリーテイル</sup>の尻尾へのお土産を使い物にならないくらい水浸しにしてボコボコに……」

「レアまで!!!?」

ルーシイにとって衝撃的すぎるカミングアウトに、ルーシイの中の世界観が天変地異を起こした。

衝撃の余り声が裏返っていた。

「グレイは裸で歩いてるところを見つかつてボコボコ……」

「あらら……」

「ロキはエルザを口説こうとして半殺し」

「……」

もはや何も言えなかった。

「実は、三人に頼みたい事がある」

エルザそう切り出すと、場は緊迫に包まれる。

空気が重い。

「仕事先で、少々やつかない話を耳にしてしまった。本来はマスター総長の判断をおおぐトコなんだが、早期解決がのぞましいと私は判断した。

三人の力を貸してほしい。ついてきてくれるな」

「え!?!」

「はい!?!」

「なの!?!」

エルザが他人をチームに誘った。

たったそれだけだが、エルザの強さを知っているギルドはざわざわと騒ぎ出した。

いや、その内面を知らないルーシイでさえ、その異常さに心臓が跳ねた。

ナツやレアをボコれるほどの実力者が力を借りたいほどの仕事とは……と。



「出発は明日だ。準備しておけ」

「あ……いや……ちよつ……」

「詳しくは移動中に話す」

「行くなんて言っただかよ!!」

「ん、ちよつと待ってなの……」

エルザは三人の有無を聞かないままさっさとその場を離れていった。

ざわつくギルド内。

その中で、ミラはポツポツと呟いて戦慄した。

「エルザ……ナツに……レアと……グレイ……」。

今まで想像した事もなかったけど……これって、妖精の尻尾最強チームかも……」

「!!」

彼女は今……なんと言った?

妖精の尻尾の最強チーム?

このギルドのトップ4が組むほどの仕事だというのか!?!とルーシイはミラ以上に戦慄した。

エルザが居なくなつて数刻、未だにギルド内はざわざわとさっきの話で持ち切りだ。

「む……無理だ……」

と、グレイがポツリと零した。

「レアは兎も角、こいつと一緒にただでうぜエのにエルザと一緒にだなんて……!!」

「こんなチームありえねえっ!! つーか行きたくねえーっ!!!」

どうやらグレイの無理とはナツとエルザとチームを組むことに対してだった。

ナツもそれに関してでは同意見のようで、お互いに指を指しながらぐもおつと唸っていた。

ナツはくわつと傍にいたルーシイに必死な表情で向けば……。

「おおおお!!!」

「きやあつ！ な…なにすんによオオオ!!」

「おまえ、今からナツだ」

「無理だつて」

「あい」

自分の衣服をルーシイに着せ、前髪も上げてセットを整え、ふうと一息吐いた。

それを見たレアはというと。

「ならレアも…」

「きやああ!! レア、アンタ何人前で平然と脱ぎ出してるの、止めなさい!!!」

「レア、天然なうえに羞恥心も欠けてるかしら」

ナツと同じことをしようとして全力でルーシイに止められるのだった。

くくく

一方その頃……

夏季だというのに葉っぱはすっかりと枯れ落ちた森。

その奥に佇む城のような場所。

魔導士ギルド『アイゼンヴァルト鉄の森』である。

「あの鎧女、どこのギルドの者モンよ」

「知らね」

「いい女だったなア……。クソツ！ 声かけときやよかつたぜ」

「オメーじゃ無理だ」

「何だどっ」

ひと仕事終えたギルドメンバーは長い廊下を渡りながらそうだべっている。

すると、彼らの進行方向にいる男が声をかけた。

「カゲヤマはまだ戻らねえのか？」

それにメンバーの一人が答えた。

「あれの封印を解くのはそう簡単じゃねえハズだ。仕方ねエよ」

「モタモタしてんじやねエよ……。今が好機なんだぜえ。ジジイどもが定例会をしてる今がな」

帰ってきた返答に、大鎌を持った死神、エリゴールは……。不敵に笑ったのだった。

その列車は竜を乗せて行く

ファイオーレ王国の中でも最大級の大きさを誇る駅、マグノリア駅。  
ここで二人の男が互いを睨み合っていた。

「何でエルザみてーなバケモンがオレたちの力借りてえんだよ」  
「知らねえよ。っーか」助け」ならオレ一人で十分なんだよ」

みんなご存知、ナツとグレイである。

「じゃあオマエ一人で行けよっ!! オレは行きたくねえ!!」  
「じゃあ来んなよ!! 後でエルザに殺されちまえ!!」  
「迷惑だからやめなさいっ!!」

犬猿の仲である二人。

人が多く行き交う駅内であろうとお構い無しにケンカを始め、近くの店の商品をそこら中にぶちまけ、看板を破壊する。  
見かねたルーシイも声を荒らげた。

「もおっ!! アンタたち何でそんなに仲悪いのよお」

ルーシイが声をあげた事でとりあえず二人のケンカはなりを潜めた。

「何しに来たんだよ」

「頼まれたのよっ!! ミラさんに!!」

ナツにそう問われ、ルーシイはかなり不機嫌な様子でムキになりながら答えた。

昨日、ナツやグレイも帰った後のこと。

ルーシイはしばらくギルド内に残っていた。  
その時もミラと話していた訳だが、ミラ曰く……。

「確かにあの四人が組めば素敵だけど、仲がギクシヤクしてるトコが不安なのよねえ〜」

という風に心配していた。

ミラはそう思っただけでルーシイに仲をとりもつよう頼んでおいたのだ。

「ミラさんの頼みだから仕方なくついてあげるのはよ」

「本当は一緒に行きたいんですけど」

「まさか！」

「素直になればいいかしら」

「本当はやダって言うてるでしょ!？」

仁王立ちしながら答えるルーシイ。

猫二匹がそんなルーシイを揶揄い、いつもと変わらないツツコミを返した。

しかしルーシイは猫二匹に哀れみの目を向けた。

「てか四人の仲とりもつならアンタたちがいたじゃない!! うわーかわいそっ! ミラさんに存在忘れられてるしー」

「あい」

「ま、リーシヤたちにはあの二人を諫めるなんて不可能かしら。現にホラ……」

ルーシイにそんな事を言われたハッピーとフリーシヤだが、特に気にすることも無く答える。

フリーシヤが指を指した方向にルーシイが視線を向けると……。

「てめエ、何でいつも布団なんか持ち歩いてんだよ」

「寝る為に決まってるんだろ。アホかおまえ」

「あ〜あ…めんどくさいなあ…」

殴り合いにはなあって無いものの、睨み合って今にもぶつかりそうな  
雰囲気醸し出していた。

ルーシイも良く悪くも変わらない二人にゲンナリする。

と、彼女の中で一つ提案を思いつく。

彼女は嬉々とした様子でその名前を大声で呼んだ。

「あ！ エルザさん!!」

瞬間、二人の心臓が跳ねた。

そこからは早かった。

「今日も仲良くいってみよー」

「あいさー」

「あはははっ！ これ面白いかも」

ナツとグレイは肩を組んで汗をかきながらもニコニコしながら  
ピョンピョン跳ねている。

あまりの変わりように、ルーシイも我慢できず大声で笑う。

騙されたと気づいた二人は仲良くルーシイに詰め寄った。

「騙したなテメェ!!」

「あんたら、本当は仲良いんじゃないの?」

思いつきり声をあげた二人だが、ルーシイはクスツと笑ってそんな  
二人を揶揄う。

完全に毒気の抜けたグレイはズウンと暗くなる。

「冗談じゃねえ！ 何でこんな面子で出かけなきゃならねえ!! 胃が

痛くなってきた……」

「魚食べる？」

「いるかつ!!」

相変わらずマイペースなハッピーにグレイはさらに胃を痛める。

「ルーシイ、何でおまえがいるんだ？」

「何も聞いてなかったんですかつ!!!」

「直ぐにグレイとケンカしてからルーシヤたちは完全に蚊帳の外だったかしら」

ナツのデジャブ発言にルーシイはぐもおっと唸った。

と、ルーシイはようやくイツメンのうちの一人が居ないことに気づいた。

「あれ？ フリーシヤ。そういえばレアとエルザさんは？」

「レアはここに来る途中ではぐれたのよ。多分、どこかのシェイク屋でジュースでも買うのに寄り道しているんじゃないかしら？ エルザは…多分荷物が多いからそれを纏めるのに少し時間が掛かっているのよ」

ルーシイの何気ない質問にフリーシヤは普通に返す。

その後フリーシヤがボソツと「後でどうなっても知らないかしら」と呟いたのが聞こえたが、何やらゴトゴトと木のタイヤのようなものが転がる音が耳に入る。

音の方向を首を傾けると……。

「すまない…待たせたか？」

「荷物多っ!!!」

思わずツツコまずにはいられなかった。

彼女の目に入ったのは巨大な荷台に大量の荷物を乗せ、それを片手で引つ張っているエルザだった。

フリーシャから荷物が多いとは聞いていたが、ここまで多いのは予想外だった。

そんなルーシイのツツコミで、エルザの目もルーシイを捉えた。

「ん？ 君は昨日妖精の尻尾フェアリーテイルにいたな……」

「新人のルーシイといっています。ミラさんに頼まれて同行する事になりました。よろしくお願いします」

声をかけられてルーシイは丁寧にペコリと一礼した。

その名前を聞いたエルザもニコリとなる。

「私はエルザだ。よろしくな。そうか……ギルドの連中が騒いでいた娘とは君の事か。傭兵ゴリラを倒したとかなんとか……頼もしいな」  
「それナツとレアだし、事実と少し違ってる……」

どうやらエルザにもルーシイの噂は耳に入っていたが、どうやら少々……いや、かなりねじ曲がって彼女に届いているらしい。

間違った噂でルーシイにかなり高い評価を与えるもルーシイは否定する。

しかしそんな訂正はエルザの耳に入っておらず言葉を続ける。

「今回は少々危険な橋を渡るかもしれないが、その活躍ぶりなら平気そうだな」

「危険!?!」

エルザの発言にルーシイはあからさまに身を引いた。

と、フリーシャが翼を出してエルザの隣に並んだ。

「エルザ。ここに来る途中レアは見てないかしら？ リーシャも途中でか



らはぐれたのよ……」

おずおずとフリーシャが聞いてみると、エルザは自身の荷台の後ろに目を向けた。

フリーシャに限らず、他の全員もその方向を見ると……。

「……」チーン

「ぎゃああああ!!」

何故か巨大な氷の立方体の側面に縛り付けられたレアがいた。

氷は杭を刺され、荷台に引つ張られる形になっている。

白目は向いているが意識はあるらしく、今なお小刻みに震えている。

「近くのシェイク屋の行列に並んでいたんだ。時間が無いからやむ無く強引な形で連れてきた。……ふむ……この氷も後でシェイク屋に返しておかないとな……」

エルザの対応にルーシィは悲鳴をあげ、男性陣はガタガタと震えていた。

ちなみにこの巨大な氷、エルザがシェイク屋に返さなきゃと言ったように、元々シェイク屋の裏の冷凍庫にあった巨大氷を ” 勝手に ”

拝借してきたのだ。

フリーシャは無言でレアの拘束を魔法を使って解いた。

自由になったレア。

だがその体は力なく地面に倒れそうになる。

直前でフリーシャがレアの首根っこを掴み、回収していった。

「ありがとうなの、フリーシャ」

「だから出発前にあれだけ言ったのよ。エルザとのパーティを組んだ以上、寄り道は避けるべきかしらって」

「ん……ごめんなさいなの」

フリーシャの説教にレアはシユンと小さくなった。  
完全に冷めきった空気の中誰も口を開かない中、一人、エルザに詰め寄った。

「エルザ。何の用事か知らねエが今回はついてってやる。条件つきでな」

「条件？」

ナツだった。

ナツの言葉に、エルザは眉を潜めた。

「バ……バカ……！ オ……オレはエルザの為なら無償で働くぜっ!!」

「下僕なの？」

「んなわけっ……ねエ……だろ……」

「そこで自信無くすんじゃないかしら」

突然ナツが口走った内容にグレイは冷や汗を流す。

その後の下僕発言をレアに拾われ、グレイはさらに自信を無くしていた。

「言ってみろ」

エルザが短くそう言う。

短い間を置き、ナツがその条件を口にする。

「帰ってきたら、オレと勝負しろ。あの時とは違うんだ」

「オ……オイ！ はやまるなっ!!死にてえのか!?!」

まさかの条件にエルザ以外の者は目を白黒させる。

グレイに至ってはナツの命を案ずる事態だ。  
エルザはほんの少し考え……。

「確かにおまえは成長した。私はいささか自信がないが……いいだろう。受けて立つ」

承諾した。

ナツはエルザの自信がないという発言に舐められているのかと憤慨したが、エルザはナツの力を認め、そう発言したのだという。曲がりなりにも彼の實力は認め、ナツとエルザの本気の勝負がここで結託された。

「グレイ、レア……おまえたちも勝負したいのか？ 私と」

そのままエルザはグレイとレアの方に首を傾ける。

しかし二人揃って首をぶるんぶるんと激しく横に振っている。余程嫌なのだという。

そんな中、ナツは文字通り燃え上がっていた。

「おしっ!!燃えてきたア!!! やってやろうじゃねーかつ!!!」

その勢いのまま、一同は列車に乗り込んだ。

くくく

列車は煙をあげ、ガタンゴトンと特有の音を立てて走り出した。そのとある席では……。

「はあ……はあ……はあ……」

「ビュー……ビュー……」

二匹の竜がグロッキーになっていた。  
出発して僅か数秒、完全に酔っていた。

「なっさけねえなあ、ナツはよオ……………。うっとおしいから別の席行  
けよ……。つーか列車乗るな！走れ!!」

「まいどの事だけど……………つらそうね…」

そんな様子のナツを、隣に座っていたグレイは煙たがっていた。

ちなみに席は対面式の三人席を確保しており、窓側からエルザ、  
ルーシイ、フリーシヤ、レア。もう反対はナツ、ハッピー、グレイと  
並んで座っている。

普通乗り物酔いをする人は窓側に座らせたほうがいいと言うが、二  
人の場合、それは意味を成さない為に座り順は割と適当だ。

「まったく……………しょうがないな。ナツ、私の隣に來い」

エルザは乗り物に苦しむ二人を慈しむ目で見つめ、そう促す。

ナツは一言「あい」と返事して立ち上がり、ルーシイと席を入れ替  
える。

入れ替わって席に座るナツを、エルザはふうとため息をついて変わ  
らぬ視線を彼に向ける。

と……………。

ボスツ!!!

「!!!?」  
「!!!」

エルザはナツの腹に拳を叩き込んだ。

突然襲いかかってきた衝撃にナツは白目を向き、悲鳴も出せずにど  
さっとエルザの膝に頭を落とした。

「さて、次はレアの番だ。來い」

「…いや…レアは…」

「来い」

「……………なの」

エルザは次にレアに視線を合わせそう言う。

だが腹さっきのパンを見てレアは完全に萎縮して断る。

だがエルザの有無を言わせぬドスの効いた声にレアは反抗できずナツを退かしてエルザに隣に座った。

そして……。

ドスツ!!!

同様に拳を打ち込まれ、レアはキューンと唸ってエルザの膝に倒れた。

一連の流れを見せられた四人は、しばらくの何も言えなかったのだった。

くくく

「そういや…あたし……妖精フェアリーテイルの尻尾でナツとレア以外の魔法見た事ないかも」

数刻の後、ようやく口を開いたのはルーシイだった。

確かに彼女は今まで行動を共にしたのは滅竜魔導士コンビの双竜だけだった為に、他の者の魔法に触れる機会がとんと無かった。

「エルザさんはどんな魔法使うんですか？」

「エルザでいい」

「エルザの魔法はキレイだよ」

ルーシイは同じ女性であるエルザに興味を持った。

エルザも堅苦しいのは無しにルーシイと接し、ハッピーが割って入った。

「血がいっぱいであるんだ。相手の」

「キレイなの？それ…」

「確かにエルザの魔法で飛び散る鮮血は赤く光ってキレイかしら」

「ナニソレ怖い……」

ハッピーのぶっ飛んだ説明にフリーシャも同意して詳細を聞くのが怖くなってきたルーシイであった。

「たいした事はない……。私はグレイの魔法のほうが綺麗だと思うぞ」

「そうか？」

突然エルザはグレイに話を振った。

そんな事を言われたグレイは実際にルーシイの前で魔法を披露して見せる。

彼は「ふん！」と気合いを入れる声をあげ、右の拳を左の手のひらに叩きつけた。

するとそこに魔力が集結すると、辺りに冷気が流れる。

グレイはゆつくりと右の拳を解き中を開くと、妖精の尻尾フェアリーテイルの紋章の形をした氷が現れた。

「わあっ!!」

「氷の魔法さ」

「氷ってアンタ似合わないわね♡」

「ほっとけっての」

キラキラと輝く氷の小さなオブジェにルーシイは笑顔を浮かべる。ふと、ルーシイは思考を巡らせた。

「氷！ 火！ あ!!」

と、ポンポンと口に出せばピコーンとルーシイの中で点が線で結ばれる。

そのままニヤニヤしながらグレイを見た。

「だからアンタたち仲悪いのね!! 単純でかわいいー」

「そうだったのか?」

ルーシイは確信をついたかのように笑い、エルザは不思議そうに聞いた。

当の本人であるグレイはバツが悪そうにそっぽを向いた。

「どうでもいいだろ!? そんな事ア」

「けどルーシイの原理だと、火のナツと水のレアは説明つかないかしら」

と、フリーシャが割って入る。

フリーシャの言葉にルーシイは「あ……」となって頭を捻らせる。

「……滅竜魔導士同士気があったとか……?」

「ルーシイそれ思考放棄だよ」

悩んだ故に出した結論はそれだった。

ハッピーにそう言われるも、エルザが思い出したかのように呟いた。

「そういえば、確かに昔の……妖精の尻尾フェアリーテイルに入ったばかりの頃のナツとレアの仲はすごく悪かったな……」

何気なく呟いたエルザの言葉にルーシイはギョツと目を見開かせ

る。

今の関係を見ていると全く想像出来ない仲が悪いナツとレア。非常に気になる話題だったが、グレイがそれをバツサリと切り捨てた。

「つーかそろそろ本題に入ろうぜエルザ。一体何事なんだ。おまえほどの奴が人の力を借りたいなんてよほどだぜ」

「そうだな……話しておこう」

グレイを恨めしく見るルーシィ。

だがそれらを一切無視して、グレイに話を振られたエルザは膝枕をしているレアを軽く撫でて話し始めた。

くくく

先の魔物の討伐の帰りの事。

エルザはオニバスにある魔導士が集まる酒場にて休憩していた時だという。

一人の男が酒はまだかと声を荒らげていた。

そちらに視線を向ければ、四人の男がテーブル席を囲んでいた。

ビードと呼ばれたクレームをつけていた男はララバイという何かの隠し場所を見つけたが、封印があつて解けずにイライラしているのだと言った。

そんな中、四人の中の一人がみんなには先に帰るように言った。

「エリゴールさんに伝えといて。必ず三日以内に、ララバイを持って帰るって」

そう言って会話は打ち切られたとのことだった。

くくく



「ララバイ?」

「子守歌……眠りの魔法かしら」

グレイとルーシイはララバイなる謎の単語に眉を潜ませた。  
しかしエルザは俯いて答える。

「わからない……。しかし封印されているという話を聞くと、かなり強力な魔法だと思われる」

「話が見えてこねえなア……。得体の知れねえ魔法の封印を解こうとしている奴等がいる……。だがそれだけだ。仕事かもしれねえし何て事アねえ」

しかしグレイはさらに疑問符を浮かべて説明を要求する。

それと同時に、列車は遂に目的地であるオニバス駅に到着し、プシューと気の抜ける音が駅内に響く。

「そうだ……。私も初めはそう気にはかけてなかった。エリゴールという名を思い出すまではな」

エリゴール。

聞いたことの無い名前にルーシイは首を捻った。

「魔導士ギルド。アイゼンヴァルト鉄の森のエース。死神エリゴール」

「し……死神!!?」

「暗殺系の依頼ばかりを遂行し続けつあざないた字だ。本来暗殺依頼は評議会の意向で禁止されているのだが、アイゼンヴァルト鉄の森は金を選んだ。結果……6年前に魔導士ギルド連盟を追放……。現在は闇ギルドとちうカテゴリーに分類されている」

エルザは大量の荷物を片手に列車を降りながらアイゼンヴァルト鉄の森とエリゴールについて簡単な説明をする。

「闇ギルドお!!？」

「ルーシィ。汗いっぱい出てるよー！」

「汗よ!!」

つい先日、闇ギルドについて説明されたばかりのルーシィは冷や汗をダラダラと流す。

そこをハッピーに弄られるも平常運転でツツコミを返す。

そんな中グレイはなるほどと納得した。

「ちよつと待つて!! 追放……って、処罰はされなかったの!？」

「されたさ。当時鉄アイゼンヴァルトの森の総長は逮捕され、ギルドは解散命令を出された。しかし闇ギルドと呼ばれているギルドの大半が解散命令を無視して活動し続けてるギルドの事なのさ」

一人納得出来なかったルーシィは声をあげるもエルザにそうタンタンと返され絶句して身を震わせる。

終いには帰ろっかなと呟いた。

「不覚だった…。あの時エリゴールの名に気づいていれば……」

エルザはそう区切る。

気になったルーシィはエルザの顔を覗き込めば……。

「全員血祭りにしてやったものを………」

「ひいっ!!」

とてつもない殺気を身に纏わせそう呟いた。

たまらずルーシィは悲鳴をあげる。

この人ならやりかねないと。

「だな……。その場にいた連中だけなら、エルザ一人で何とかなつたかもしれねえ。だがギルド一つまるまる相手となると……」

意図を掴んだグレイはそう区切り、エルザに返事を求める。

エルザもコクツと頷いて続けた。

「奴等はララバイなる魔法を入手し、何かを企んでいる。私はこの事実を看過する事はできないと判断した。アイゼンヴァルト鉄の森に乗り込むぞ」

「面白そうだな」

エルザの言葉に、グレイはニヒリと笑った。

それについていけない者が一人。

「来るんじやなかった」

「汗出すぎかしら」

「汗って言うな」

ルーシイである。

ミラに頼まれた事とはいえ、快く引き受けたことをここに来て後悔しだした。

「で……アイゼンヴァルト鉄の森の場所は知ってるのか？」

「それをこの町で調べるんだ」

そう。

ここはエルザがその鉄の森と遭遇した酒場のあるオニバス地道ではあるがここから鉄の森の足取りを掴むという。

しかし、一人乗り気じやなかったルーシイはある異変に気がついた。

「やだ…嘘でしょ!!? ナツとレアがいないんだけどっ!!!」

全く気づいていなかった。

その場にいた全員が目をパチクリさせていた。

くくく

一方、置いていかれたナツとレアはというと……。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「ヒュー……ヒュー……」

気絶から復活したはいいものの、再び乗り物酔いで苦しめられていた。

ナツは腕を組んで座席に深く座り込み、レアはナツの膝を枕に横になっっている。

そんな時だった。

「仲の良さそうなお二人さん、ここ空いてる？」

一人の黒髪の男が二人に寄ってきた。

彼は確認も取らないまま二人の前の席に腰を掛けた。

しかし二人とも酔いでそれどころではなく、ただただ息を切らしているだけだった。

つらそうだねと心配する男だったが、彼はナツの右肩に刻まれている紋章が目に入った。

「フェアリーテイル妖精の尻尾。正規ギルドかあ……。うらやましいなあ」

その男。アイゼンヴァルト鉄の森のカゲヤマは静かに口角を上げた。

## 呪歌

「何という事だっ!!!」

オニバス駅の正面にて、エルザは自分の失敗を嘆いていた。

「話に夢中になるあまり、ナツとレアを列車に置いてきたっ!! あいつらは乗り物に弱いというのにつ!! 私の過失だっ!! とりあえず私を殴ってくれないかっ!!!」

「まあまあまあ」

脇目も振らずそう言うエルザをルーシイはとりあえず落ち着かせようとする。

しかしエルザは駅員に距離を詰めた。

「そういう訳だっ!! 列車を止める!!!」

「ど…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:…:」

しかし事情を知らない駅員はそう戸惑った。そこからエルザの事情説明をするが、当たり前のように断られてしまふ。

そんな様子を、ルーシイは遠い目をしながら見ていた。

「妖精の尻尾の人はやっぱこーゆー感じなんだあ…:…:…」

「オイ! オレはまともだぞ」

「露出魔のどこが!?!」

露出魔の発言に常識人のツツコミが炸裂。

「仲間の為だ。わかってほしい」

「無茶言わんでくださいよっ!! 降りそこなった客二人の為に列車を止めるなんて!!」

エルザはなんとか説得を試みようとするも、当たり前前である。駅員の発言は至極真つ当だ。しかしそんな時だった。

ジリリリリリリリリリリ  
!!!!!!

けたたましくベルの音が駅中に鳴り響く。

それと同時に周辺の人も事故か?と騒ぎ立てる。

何事かと思い、駅員と妖精達は駅員の後ろにあつた緊急停止信号のレバーを見た。

「これで満足かしら?」

そこには下ろされたレバーに座ったフリーシャがいた。

「よくやったフリーシャ! 二人を追うぞ!! すまない、荷物を「ホテル チリ」まで頼む」

「誰……アンタ……」

エルザはフリーシャに短く賛辞の言葉を送れば荷物を ” 見知らぬ通行人 ” に託して駅の傍にあつた魔動四輪の賃借手続きをテキパキと済ませた。

もうなんでもありなエルザにルーシイはゲンナリしてため息を吐いた。

「もう……めちやくちや……」

「だな……」

「服!!!なんで!?!」

いつまでたつてもルーシイの気苦労は絶えない。

〜

フリーシヤが緊急停止信号のレバーを下ろす数刻前のこと。

「妖精の尻尾フェアリーテイルって言えばさあ、ミラジエーン有名だよ。たまに雑誌とか載ってるし、綺麗だよ」

ナツとレアの前の席に座った男、カゲヤマが一方的に話しかけていた。

「何で現役やめちゃったのかなあ？ まだ若いのにね」

しかし二人は酔いの影響でまともに返事を返せていなかった。

「あとさあ、名前知らないんだけど、新しく入った女の子がかわいいんだって？ 君たち知ってる？」

尚も話しかけるカゲヤマだが、二人にそんな余裕は無い。そんな二人を見て、カゲヤマはくすくと笑った。

「ほらあと、水竜リヴァイアサン…だっけ？ 火竜サラマンダーとのコンビで有名って聞いたんだけど、顔はよく知らないんだよ。火竜女の子とコンビ組んでるんでしょ？ 勝ち組だね、その人」

水竜リヴァイアサンと火竜サラマンダー、この言葉で二人はピクリと反応を示す。

しかしやはり酔いの影響でカゲヤマの言葉を上手く聞き取れず、返事は出来なかった。

「正規ギルドはかわいい子も多いのかあ…うらやましいなあ。うちのギルド、まったく女っ気がなくてさあ」

と、カゲヤマはナツの膝枕で横になっているレアを厭らしく見た。

「少しわけてよ。ま、答えは聞いてないけど…」

と、カゲヤマはレアの手首を鷲掴みにしてナツから引き剥がす。

その次の瞬間……。

「キーツク!! ヒヤハ」

カゲヤマは右の足をナツの顔面にめり込ませた。

その表情はさつきまでの穏やかなものではなく、黒い笑みを貼り付けた不気味なものだった。

「シカトはやだなあ。闇ギルド差別だよ」

「あ?」

「何…を……」

「お! やつとしゃべってくれた。ヒヤハハ」

ようやく口を開いたナツとレアにカゲヤマはおちやらけて返した。

ナツは息切れを起こしながら顔面に張りつく足を手で退けた。

「妖精の尻尾ついていやあ、随分目立ってるじゃない? 正規ギルドだからってハバきかせてる奴ってムカツクんだよね」

ニヒリと口角を上げるカゲヤマは右手に掴んだレアの手を離さないまま続ける。

そのレアは何とか振りほどこうと力を込めるも酔いのせいで上手



く力が入らず、掴まれた左手を置いて膝をついた。

「うちら妖精フェアリーテイルの尻尾の事何て呼んでるか知ってる？ 妖精ハエだよ妖精ハエ……ぷぷつ。と、お姉さん、君はこんな妖精ハエとは吊り合わないよ」

そうやってカゲヤマはレアを引っ張ってナツからさらに引き剥がす。

レアはそれを拒むように藻掻くが力の入らない彼女ではそれは完全に無駄な抵抗だった。

「てめ…レアから……手を…離せ……！」

「ナ…ツ」

我慢の限界のナツも立ち上がってカゲヤマを睨む。

手に火を灯して迎撃しようとする。が……。

「うぷ」フシュー

「ヒヤハハッ!!何だよその魔法」

酔いの影響で上手く魔力を制御できず、火は無様に燃え尽きる。

「魔法ってのは……」

と、カゲヤマが呟くとカゲヤマの足元の影がぐいーんと伸び……。

「こう使わなきや!!」

「うづっ！」

伸びた影からナツに向かって拳が飛び出した。

まともに受け身も取れなかったナツは大きく吹っ飛ばされた。

そんな様子がよほど可笑しいのか、カゲヤマは腹を抱えて笑って

た。

「く……くそ……。ふうー…はあー」

「うっぷ……ナツう…」

ここまで煽られているのに、“たかが乗り物酔い”のせいで何もできない二人は悔しきでいっぱいだった。

しかしその時……。

列車の警鐘がけたたましく鳴れば、ブレーキがかかり、車輪と線路の間に火花が散る。

その衝撃で車内はガタアン！と揺れ、全員もれなくバランスを崩す。

さらに加えカゲヤマが席に置いていた手荷物も床に転がった。

「止まった…ん？」

ナツが見たのは、三つ目のドクロがついた木の根のデザインのような笛だった。

「み……見たな!!」

カゲヤマはそう言う。

しかし……。

「うるせエ……さつきはよくもやってくれたな」

「ん……」

目の前の男を見ると、右手にはさつきとは比べ物にならない燃え盛る炎を灯しており、とてつもない覇気を纏わせていた。

カゲヤマはえ？と素っ頓狂な声を零す。

その時、バキツ！と鈍い音が背中から響いた。

痛みで視界がぼやける中、カゲヤマは後ろに視線を向けると、いつの間にか拘束を振りほどいたレアが足に水流を纏ってカゲヤマを背中から蹴り抜いていた。

その勢いのままカゲヤマはナツの方向へ飛ばされ……。

「お返しだ（なの）ッ!!!」

ナツの拳がカゲヤマの顔面を捉えた。

ガコツガツバガツとボールのように跳ねていくカゲヤマ。

その勢いも衰えないまま、ズザアア!と車両を繋ぐ扉をぶち破って前の車両の席に激突してようやく止まった。

「ハエパンチ」

「と、ハエキック。なの」

「て……てめえら……」

殴られた怒りでカゲヤマは顔を顰める。

『先ほどの急停車は誤報によるものと確認できました。間もなく発車します。大変御迷惑をおかけしました』

と、車内アナウンスが三人の耳に入る。

ナツは「マズ」と零せば、レアは「逃げるの」と言っつて席の上の荷物棚からそれぞれの荷物を取った。

「逃がすかあつ!! アイゼンツァルト 鉄の森に手エ出したんだ! ただで済むと思うなよっ! 妖精があつ!!!」

カゲヤマは元の車両に駆け込めば、負け惜しみと取れる台詞を吐き捨てる。

ナツも負けじとカゲヤマを睨み返し、レアは冷たい目でカゲヤマを

見た。

「こつちもてめエの顔ツラ覚えたぞっ！」

「妖精フェアリーテイルの尻尾をバカにしたこと、絶対に許さないの」

二人がそう言うのと、列車のパドルが再び動き出す。

「今度は外で勝負してやボル…うぷ」

「うえ…ナツ、早く…」

ほんのちよつと動き出した程度でこの酔い様。

もう救いようがない。

レアに催促され、ナツは列車の窓ガラスを破って外に飛び出した。

それに続くようにレアはナツがガラスを破った窓と同じ窓から飛び出した。

すると、ちょうどそこに魔動四輪車が一台やって来た。

「ナツにレア!？」

エルザ達が借りた魔動四輪車であった。

「何で列車から飛んでくるんだよオ!!」

「どーなってるのよ!!」

車の屋根に乗っているグレイが目をひん剥かせ、中に乗っていたルーシイが顔を外に出した。

ナツとレアは抵抗も出来ないまま車に吸い込まれるように飛んでいき…。

ゴチーン

「ぎゃあああかあああ!!!」

「うわっぶ」

「と、レア。見た目よりも軽いな」

ナツとグレイは互いの額をぶつけ合って派手に地面に転がった。対してレアは綺麗にエルザの腕の中に収まった。

今レアはエルザにお姫様抱っこされている状態だ。

一方吹き飛んだ二人は既に復活していた。

「痛ーーーーっ!! 何しやがるっ! ナツてめえっ!!」

「今のショックで記憶喪失になっちまった! 誰だオメエ。くせえ」  
「何イ!!?」

コントを繰り広げていた。

と、車から降りた一行がナツ達に近づいてきた。

「ナツ、レア。ごめんねー」

「ハッピー! フリーシャ! エルザ! ルーシィ! ひでえぞ!! オレたちをおいてくなよっ!!」

「ん! 酷い目にあつたの!!」

「おいナツ……随分都合のいい記憶喪失だな…」

ナツとレアは置いてかれたことに憤慨し、各々謝罪した。

そんな中のグレイの眩きは誰の耳にも入らなかったのだった。

「無事でなによりだ。よかった」ガシヤツ

「硬っ!」

と、エルザが二人を抱き寄せて抱擁を与える。

が、ナツとレアからすればエルザの鎧に頭を打ち付けられるという痛い思いをしただけだった。

「無事なモンかつ！ 列車で変な奴にからまれたんだ!!」  
「ん！ 動けないナツを魔法も使って虐めて、妖精フェアリーテイルの尻尾のことバカにしてきたの」

ナツとレアはエルザに離してもらい列車であった事を話した。

「あいつ、名前なんて言ってたっけ？」

「確か……アイゼン……バルト？ だったと思うの」

ナツとレアが目を見合わせてそう確認しあう。

「バカモノおっ!!」

「ん？ ごあつ!？」

と、エルザの平手打ちが ” ナツだけに ” 見事に炸裂し、地面を数メートル滑った。

アイゼンヴァルト「鉄の森は私たちの追っている者だ!!」

「そんな話初めて聞いたぞ……」

「なぜ私の話をちゃんと聞いていないっ!!」

あんたが気絶させたからだとなツとレア以外の全員がそう思った。  
しかし口に出せば飛び火の可能性があった為に全員心の中にその言葉をしまうのだった。

エルザは運転席に戻ると、手首にSEプラグという運転手の魔力を吸い取る装置を付けた。

「さっきの列車に乗っているのだな。今すぐ追うぞ!! どんな特徴をしていた？」

「あんまり特徴なかったなあ」

「地味な顔、地味な服、黒髪を後ろに束ねてたの」

エルザに問われた二人はポンポンと答える。  
そこでナツが思い出したかのようにポンツと手を叩いた。

「そーいや、なんかドクロっぽい笛持ってた。三つ目のドクロだ」

「何だそりゃ。趣味悪い奴だな」

「三つ目のドクロの笛……」

「ルーシィ、どうしたのかしら?」

ナツが言った三つ目のドクロの笛。

それに他の者と全く違う反応を見せるルーシィ。

ブツブツと呟く彼女は小刻みに震えていた。

「もしもその笛が呪歌だとしたら……。子守唄……眠り……死……。  
!!!!」

やがてルーシィの中で一つの結論が導き出された。

「その笛がララバイだ!! 呪歌…… ” 死 ” の魔法!!!」

「何!?!」

「呪歌?」

ルーシィの言葉にエルザは目を見開いた。

グレイは聞き慣れない魔法に復唱する。

ナツとレアは事情を全く知らない為に頭の中で渦を巻いていた。

「あたしも本で読んだ事しかないんだけど……。禁止されてる魔法  
の一つに呪殺ってあるでしょ?」

「ああ……。その名の通り、対象者を呪い、 ” 死 ” を与える黒魔法  
だ」

「呪歌はもつと恐ろしいの」

ルーシイが続けるには……。

くくく

その頃、オニバス駅のもう一つ先の駅、クヌギ駅では此度の列車が到着していた。

しかし乗客は悲鳴をあげながら次々と列車から降りていった。

その理由は単純明快。

『死神』とその仲間の襲来である。

「客も運転手も全部降ろせく〜い。この列車は鉄アイゼンヴァルトの森が頂く」

『死神』エリゴールの気の抜けるような掛け声に鉄アイゼンヴァルトの森の面々は乱暴して乗客を追い出す。

中には窓から放り投げている者もいた。

「この列車で戻ると聞いて待ちわびていたぞ。カゲヤマ」

「へへっ。何とか封印は解きましたよ」

中に歩を進めたエリゴールはナツ達に絡んでいた影を操る男、カゲヤマに話しかけた。

カゲヤマは人の良さそうな笑みを浮かべながら自身の鞆から例の物を取り出した。

「これです」

「ホウ……。これが……。これがあの禁断の魔法。呪歌ララバイか……」

三つ目のドクロの笛。

エリゴールがそれを手に取れば、鉄アイゼンヴァルトの森が湧いた。

「さすがカゲちゃん!!」



「これで計画は完璧になった訳だな！」

そんな中、計画を把握出来ない鉄アイゼンヴァルトの森のメンバーの一人が小声で呪歌ララバイについて聞いていた。

話によれば、元々この笛は ” 呪殺 ” の為の道具にすぎなかったという。

しかし、魔法界の歴史上最悪の黒魔導士、ゼレフはこの笛を魔笛へと進化させたのだ。

「まったく……恐ろしい物を作ったまものだ。この笛の音を聴いた者全てを呪殺する……」 集団呪殺魔法 ” 呪歌ララバイ!! 始めよう!! 作戦開始だ!!」

笛を持ったエリゴールは雄叫びをあげ、列車は煙を吹いて再び動き出した。

くくく

場所は戻って妖精たちの魔動四輪車。

エルザが運転し、常軌を逸したスピードでその道を進んでいた。  
呪歌ララバイの説明をルーシィから受けたエルザは焦りの表情を浮かべていた。

「集団呪殺魔法だ!!? そんなものがエリゴールの手に渡ったら……。おのれ!! 奴等の目的は何なんだ!!?」

車が通っていった道には大量の砂煙が舞い、タイヤ痕がくつきりと残っていた。

死神は二度笑う

「いきなり大鎌を持った男たちが乗り込んで来たんです!!」

「ワシは知つとるぞ!! あいつ等はこの辺にいる闇ギルドの者だ」

列車が出発して数刻経ったクヌギ駅。

魔動四輪車にて遅れて到着した妖精たちは離れた丘から追い出された乗客の喧騒が目に入った。

「あいつら…列車を乗っ取ったの!!?」

「みたいだね」

現状を確認したルーシイだったが、アイゼンヴァルト鉄の森のその行動に理解しかねていた。

「馬車や船とかならわかるけど列車って…」

「確かに…。レールの上しか走れないから奪ってもそれほどのメリットは感じられないかしら」

ルーシイの疑問にフリーシャも重ねて返した。

「ただしスピードはある」

そう言ったのは羽織っていた上着を何故か脱いだグレイだった。

「何かをしでかす為に奴等は急がざるをえないという事か?」

「なぜ脱ぐ」

上着だけでは事足らず、グレイは着ている服を次々と脱ぎ、半裸になろうとしながらそう言った。

「もう軍隊も動いてるし、捕まるのは時間の問題なんじゃない？」

グレイにツツコミを入れたルーシイはこれ以上厄介事に首を突っ込みたくないが故の希望的発言を零した。

しかし誰もそれには答えなかった。

ここまで話を聞いていただけだったエルザは「だといいがな」と小さく零して、再び車に魔力を注ぎ始めた。

くくく

「妖精だあ？」

場所は現在進行形で移動中の鉄アイゼンヴァルトの森が奪った列車内。

カゲヤマが座っていた場所へ入れ替わるようにエリゴールが笛を片手にどつかりと座っていた。

「さっきまでこの列車に乗ってましてね。まったく…ふざけた奴らっスよ」

そうカゲヤマは先ほどのことを思い出しながらそう苦言を零す。

その頬にはナツに殴られた証である黒い血の跡がほんのり残っていた。

エリゴールはギリツと歯ぎしりを一度行う。

と、スパアン！とカゲヤマの横をつむじ風が通り過ぎる。

そのつむじ風はカゲヤマの耳を掠るように通り過ぎており、小さくも浅くない傷をピツと作った。

「いぎいぎいっ！」

突然のことにカゲヤマは両耳を抑えながら膝をついた。

傷を作った張本人であるエリゴールは気にもとめず続けた。

「まさか感づかれたんじゃねエだろうな」

痛みに耐えながらカゲヤマはエリゴールを見ながら必死に答えた。

「妖精ハエなんか感づかれたところで、この計画は止められりやしないでしょうがっ!!」

「当たり前だ」

カゲヤマの若干怒気を混ぜたような叫びはエリゴールの冷静な声に一瞬で掻き消える。

「しかし邪魔はされたくねえ。わかるな？」

短い言葉だが、一つ一つにエリゴールの覇気が纏われてあり、アイゼンヴァルト鉄の森のギルドメンバーもごくりと喉を鳴らす。

くるくると笛を回すエリゴール。

しかしすぐさまピタツと止めた。

「妖精ハエか……。飛び回っちゃいけねえ森もあるんだぜえ」

そう言ったエリゴールは『死神』と呼ぶに相応しい影を纏っていた。

くくく

場所は戻って妖精たちの魔動四輪車。

ギヤギヤギヤ!!!

猛スピードで街に突っ込んだ車は直角の曲がり角をドリフトを決

めながらスピードを落とさずに曲がりきる。

しかし周辺への被害は考えておらず、テーブルやら椅子やら、挙句の果てには店の商品もぶっ飛ばしながら街の中を進んでいた。

「エルザ！とばしすぎだぞっ!! SEプラグが膨張してんじゃねーか」

天井にしがみついているグレイはそうエルザに忠告した。

グレイの言う通り、エルザと車を繋ぐプラグは幾つかコブが出来ている。

魔動四輪車は運転手の魔力を吸い取ることで動き、吸い取る量に比例してスピードも増す。

しかしセルフエナジー<sup>S</sup>の名の通り、消費し過ぎは運転手の魔力問題にも影響してくる。

だというのにも関わらず、エルザはスピードを落とさず、寧ろ最初よりもスピードは増している。

「あの笛が吹かれれば大勢の人が死ぬ……。音色を聴いただけで人の命が消えてしまうんだぞ」

グレイもそこは理解していた。

しかし鉄<sup>アイゼンヴァルト</sup>の森の目的もハッキリしてない状態で無理に魔力を消費する事は得策では無いこともグレイの頭の中にはあった。

「一戦交える可能性もある。そんなにスピード出したら、いざって時におまえの魔力が枯渇しちまうぞ」

続けて忠告を投げかけるグレイ。

しかしエルザは「構わん」と忠告を一蹴した。

「いよいよとなれば棒切れでも持って戦うさ」

そこで一度切ったエルザはそれにと続ける。

「おまえたちがいるしな」

「む…」

グレイももう何も言えなくなった。

グレイたちを信用した上での車への全力魔力投下。

それを理解したグレイは気恥しい表情を浮かべ、何も言わなくなつた。

一方、車の中では五人。

酔いつぶれているナツとレア。

レアの背中をさすってそれを和らげようとするフリーシヤ。

何か言う事があつたけど忘れたとルーシイに話しかけるハッピー。

「気になるじゃない。思い出しなさいよ」

「う〜ん…。フリーシヤ知らない?」

「私に聞くんじやないかしら! アンタの事でしょ!？」

「キモチ…悪…」

どうしても思い出せないハッピーはフリーシヤに振るも第三者が当事者の事を知るはずも無く、レアの介護に一生懸命なフリーシヤは強めに返した。

一方介護の無いナツは窓から身を乗り出した。

「キモ…チ…ワ…ル……。ハッ!」

「それかいっ!!!」

ナツの言葉を復唱したこの猫は思い出したかのようにルーシイに指を指した。

が、わざわざ気持ち悪いと言われるとは思わずルーシイはツツコミ

を返す。

と、ふとナツの方を見ると余りにも身を乗り出しすぎており、今にも落ちそうになっていた。

「ナツ!!落ちるわよ!!!」

「うゝおゝおゝ……落として……くれ……」

「レアも……落として……なの……。うえっぷ」

「しつかりするかしらレア!」

相変わらず双竜組は乗り物では大変なご様子だった。

しかし、ナツを戻す為に窓から身を乗り出したルーシイと運転手のエルザがふとあるものに目が入った。

「何だあれは……」

遠目で分かりにくいのが、何やら煙が上がっていた。

確認の為、エルザはさらにスピードを上げ、その場を駆けていった。

くくく

オシバナ駅。

城と言われても違和感がないその巨大の駅の中からはモクモクと煙が上がっていた。

現状を確認すべくと、街の住人は駅の前に大量に集まっており、人だかりが出来ていた。

『みなさん! お下がりにください。ここは危険です。ただ今列車の脱線事故により、駅へは入れません!! 内部の安全が確保されるまで駅は封鎖します』

駅員がスピーカーカーで即興のアナウンスを流す。

脱線事故と言っていたが、喧騒に耳を澄ませばテロだという事がバレているらしい。

「駅内の様子は？」

人だかりをくぐり抜け、エルザは駅員に聞き込みを開始する。

「な…何だね君!!」

しかし突然そんな事を聞かれれば聞き返して警戒するのがオチ。しかしエルザはそんな事で止まる女では無い。

駅員の肩をガツチリと掴むと……。

ゴツ！

「うほっ!？」

頭突きを食らわせて気絶させた。

それでも止まらず、エルザは次の駅員を捕まえて同じ質問をする。

これまた聞き返したり、即座に答えられなければ、ゴツ！と鈍い音を立てて駅員を気絶させていく。

その様子を見た他の駅員はビビり散らかし、仲間のルーシイやグレイでさえ戦慄していた。

「即答できる人しかいらないうって事なのね」

「だんだんわかってきたろ？」

グレイの言葉にルーシイは否が応でも頷いた。

「てかこナツを運ぶのれってあたしの役!!？」

ルーシイがそう叫ぶも、全員見事にシカトして駅内に突入した。



ちなみにレアはフリーシャが運んでいる。

駅員から聞いた話では、軍の小隊が突入したが、まだ戻っていないとの事だった。

テロリストこと鉄の森アイゼンヴァルトの面々もまだ出てきていないとの事だったので、まだ中で戦闘が行われている。

そう思っていたが……。

「ひいっ!!」

「全滅!!」

目に入ったのはボロボロになってそこら中に倒れている軍の人間だった。

「相手は一つのギルド。すなわち全員魔導士」

「ん。軍の小隊では話にならないの」

「レア！ 復活したのね!!」

フリーシャに掴まれて飛んでいるレアがエルザの言葉に続けるように発した。

ただ今レアが復活した事は小さな事だ。

グレイは手を振って急げと急かす。

レアも地面に降りて走り出す。

階段を登り終え、改札の前で彼らは足を止める。

「やはり来たな。妖精の尻尾。フェアリーテイル 待ってたぜえ」

そこには物凄い数の魔導士鉄の森アイゼンヴァルトが集合していた。

ざっと見ても百は超えていた。

「貴様がエリゴールだな」

エルザは列車の上に乗る大鎌を持った男、エリゴールを睨みつけ

た。

ルーシイは背負っていたナツを降ろすも、未だに酔いから回復しておらず、ルーシイに揺すられる。

「ナツ起きてっ!! 仕事よ!!!」

「無理だよっ!!」

列車↓魔動四輪車↓ルーシイ 3コンボだ」

「あたしは乗り物なのっ!?!」

揺するルーシイだがハッピーの発言に割かしショックを受ける。

ルーシイで酔うのにハッピーでは酔わないナツを不思議に思いながらも、ルーシイは目の前の敵と対峙する。

「妖精があくく。おまえ等のせいで……」

「おちつけよカゲちゃあん」

「ん? この声……」

そうやって他のメンバーよりも一際強めに睨んで言葉を発したカゲヤマ。

その声にナツはピクリと反応するが、まだ本調子では無く再び静かになった。

「貴様等の目的は何だ? 返答次第ではただでは済まんぞ」

「遊びてえんだよ。仕事も無エしヒマなモンだよオ」

エルザの問いかけにエリゴールは自虐混ざりに答える。

しかしふざけていると分かっているからか、アイゼンヴァルト鉄の森の内の一人が吹き出せば、ぎやはははと爆笑に包まれる。

と、エリゴールの体がフワリと浮かび上がった。

「まだわかんねえのか? 駅には何がある」

「飛んだ！」

「風の魔法だっ！」

フワフワと風に乗って宙を漂うエリゴール。

それを見たレアは手に水を纏い……。

シュバツ！

水刃をエリゴールに向けて飛ばした。

しかし見え透いた攻撃はエリゴールには通用せず、フワリと避ける。

だがレアの狙いは最初からエリゴールなどでは無かった。

水刃はそのまま真っ直ぐ飛んでいき、ドゴーン！と何かぶつかって煙を上げる。

煙が晴れるとそこには、ボロボロになったスピーカーが電線などを剥き出してバチバチと音を立てていた。

「つまり、こういう事？」

レアの意図を妖精の中でただ一人理解したエルザは目を見開かせる。

「呪歌ララバイを放送するつもりか!!？」

「ええ!？」

「何だと!？」

「ふははははっ!!! やるじゃねえか女！ 妖精ハエといえど少しは見直したぜ！」

エルザの答え合わせにエリゴールは高らかに笑うことで花丸を与えた。

「この駅の周辺には何百・何千ものヤジ馬どもが集まっている。いや……音量を上げれば町中に響くかな……。死のメロディが」  
「大量無差別殺人だど?!」

エリゴールが嬉々として語る目的にエルザのみならず、妖精の尻尾フエアリーテイルの（ナツを除く）全員が顔を顰める。

「これは肅清なのだ。権利を奪われた者の存在を知らずに、権利を掲げ生活を保全している愚か者へのな。この不公平な世界を知らずに生きるのは罪だ。よって死神が罰を与えに来た。 ”死” という名の罰をな!!!」

「そんな事したって、権利は戻ってこないのよっ!! てゆるか元々自分たちが悪いのに……あきれた人たちね」

子供の癩癩とも取れるその理不尽な物言いにルーシイは抗議の声を上げる。

しかしエリゴールは笑って返す。

「ここまで来たらほしいのは ”権利” じゃない。 ”権力” だ。権力があれば全ての過去を流し、未来を支配する事だってできる」

「アンタ、バツカじゃないのっ!!」

本当に理不尽なそれに言葉も発せない。

しかし先に動き出したのは鉄アイゼンヴァルトの森の方だった。

「残念だな。妖精ハエども」

カゲヤマは地に手を付き、自身の影をぐいーんと伸ばす。

伸ばされた影はグレイとエルザの横を通り過ぎ、二つに別れては地面を飛び出して手の形となり、片方をルーシイ、もう片方を猫二匹を

襲う。

「闇の時代を見る事なく死んじまうとは!!」

「しまった!!」

突然の奇襲にエルザも反応出来ずに遅れを取る。

しかし……。

「やっぱりオマエかああああつ!!」

攻撃を許さなかったのは双竜だ。

ナツは右手に、レアは左足に水流を纏って襲いかかる影を引き裂いた。

奇襲を防がれたカゲヤマは渋い顔をする。

「今度は地上戦だな!!」

フェアリーテイル妖精の尻尾の面々は復活が遅いがよくやったとばかりにため息を吐いては笑みを見せる。

守られたルーシィ、ハッピー、フリーシャもニツコリだ。

しかし鉄アイゼンヴァルトの森の方はいい顔をしていない。

エリゴールもその一人で、散々笑っていた顔は消沈していた。

「お！ なんかいっぱいいる」

「敵よ敵!! ゼーんぶ敵!!」

突然の流れ込む情報にナツは混乱しながらも構えた。

そんなナツの背にルーシィは身を隠す。

戦う気が無いのか……。

しかし、そんな中不敵に笑う者がいる。

エリゴールだ。

「(かかったな……妖精の尻尾<sup>フェアリーテイル</sup>。多少の修正はあつたが……これで当初の予定通り。笛の音を聴かさなきゃならねえ奴がいる。必ず殺さねばならねえ奴がいるんだ!!!)」

二度目の笑みを浮かべたエリゴールは、より一層不気味なものだった。

## 妖精女王と水竜

「こっちは妖精の尻尾最強チームよ。覚悟しなさい!!」

指を指して得意げに叫んだルーシィ。

相對するのは悪い顔をした者がほとんどの闇ギルド、アイゼンヴァルト鉄の森。

「後はまかせたぞ。オレは笛を吹きに行く」

そう言っていてまだに不敵な笑みを浮かべているエリゴールは自身が乗る風を巧みに操って身を翻す。

「身のほど知らずの妖精どもに……アイゼンヴァルト鉄の森の……闇の力を思い知らせてやれい」

空中を踊るように舞うエリゴールはそのまま後ろの窓に一直線に飛び、ガシャアン!とガラスをぶち破ってその場から姿を消した。

「逃げるのか! エリゴール!!」

エルザが叫ぶも返事は無く、残ったのは降り注ぐガラスの破片と残り風だけだった。

「ナツ・グレイ! 二人で奴を追うんだ!!」

すぐさまエルザは二人にそう言っただけ視線を送る。

呼ばれた二人は揃って「む」と答えた。

「おまえたち二人が力を合わせれば、エリゴールにだって負けるはずがない。ここは私とレア、ルーシィでなんとかする」

「なんとか…って、あの数を女子三人で？」

エルザはそう言うが、ルーシイは目の前の鉄アイゼンヴァルトの森の軍勢を信じられないものを見るかの様な目で見た。

一方ナツとグレイはというと、「なんでコイツと…」というかの如く互いに互いを睨み合っていた。

「エリゴールは呪歌フラバイをこの駅で使うつもりだ。それだけはなんとしても阻止せねばならない。

聞いているのかっ!!!」

「も…もちろん!!!」

エルザの言葉が炸裂した。

こうかはばつぐんだ!

「行け!!」

「あいさー!!」

エルザの号令。

ナツとグレイは肩を組んだままさつさとその場を離れていった。

そんな中、ルーシイは一人「最強チーム解散」とボヤいていた。

「オレが仕留めてくる!!」

「こつちも!! あの桜頭だけは許せねえ!!! アイツを仕留めたら今度  
はてめえだからな青髪女!!!」

そう言う鉄アイゼンヴァルトの森のレイユールは指に巻きついてるリボンを伸ばして立体機動に移り、カゲヤマはレアに向かって一度吠えると自身の影の中に潜って行った。

「…オマエじゃあナツに勝てないの」



吠えられたレアは返す相手の居なくなった鉄アイゼンヴァルトの森に静かにそう答えた。

「あらあら。レイユールとカゲは好戦的だのう。あんなの放つといってお姉ちゃんと遊んだほうが楽しいだろうに」

「作戦の為だよ。オマエよりずうーっとエライ」

残されたレイユールとカゲヤマのチームメンバーであるビアードとカラツカはそれぞれそう言った。

「こいつ等片づけたら、私たちもすぐに追うぞ」  
「うん」

エルザがそう言うも、ビアードアイゼンヴァルトを含め鉄の森数人が鼻で笑い、厭らしい視線を三人に向ける。

「女三人で何ができるやら……。それにしても三人ともいい女だなア」

「殺すにはおしいぜ」

「とっつかまえて売っちゃまおう」

「待て待て、妖精の脱衣ショー見てからだ！」

ルーシイはそれらの言葉に酔い、トリップしていた。

そこからなんとか呼び戻そうとする猫2匹。

レアは何も言わず、足に水流を纏った。

そしてエルザは卑猥な発言の数々に眉を顰めた。

拳を前に突き出せば、彼女の手の中に魔力が集まっていく。

「下劣な。これ以上妖精フェアリーテイの尻尾を侮辱してみる。貴様等の明日は約束できんぞ」

すると集まった魔力は形となり、エルザの手元には一本の剣が現れた。

「剣が出てきた！ 魔法剣!!」

「めずらしくもねえ!!」

「こっちにも魔法剣士はぞろぞろいるぜえ」

「その鎧ひんむいてやるわあ!!」

ルーシイが驚く中、アイゼンヴァルト鉄の森も戦闘態勢に入る。

エルザ同様魔法剣を手に取った大量の魔導士が襲いかかる。

エルザは一度彼らを一瞥すると、真正面から飛び込んだ。

そのまま彼女は有象無象の間に滑り込み、彼らを縫うように通り抜け、通り抜けると同時に斬りつけて次々と戦闘不能にしていく。

斬りつけられた者からは血が吹き出し、バツタバツタと倒れていく。

そんな様子に味方であるルーシイも目を見開き、その場で硬直していた。

「チイツ、とびどらえい遠距離魔法でもくらえ!!」

近接戦闘では分が悪いと判断したアイゼンヴァルト鉄の森の面々は手に魔力を収束

させて魔力弾を放とうとする。  
が……。

「なっ…おごっ!?」バキィツ

「槍!!!」

気づいた時にはエルザが手に持っていたのはさっきの魔法剣ではなく、槍であった。

槍の長距離射程によって空中から遠距離攻撃持ちを一蹴し、地面に

着地する。

と……。

「今度は双剣!!?」

エルザが着地していた時にはさつきまでの槍は無く、双剣を手に周りを斬り刻み着地の隙を見せない。

かと思えば……。

「斧!!?」

再び彼女の手元からは先の武器は消え、新たな武器を持って鉄アイゼンヴァルトの森を蹂躪していた。

「こ……この女……なんて速さで ” 換装 ” するんだ!!?」

「換装?」

聞き慣れない言葉に、ルーシイがキョトンとする。

エルザが戦闘で用いる魔法剣の理屈はルーシイの星霊とよく似たものである。

別空間にストックされている武器を呼び出すというメカニズムであり、その武器を持ち換えることを換装という。

「エルザのすごいトコはここからだよ」

ルーシイに換装の一通りの説明を終えたハッピーが、不敵に笑った。

鉄アイゼンヴァルトの森陣営はただ一人、丸い体のたらこ唇、カラツカのみがエルザの名前にピクリと反応した。

「まだこんなにいるのか…。面倒だ。一掃する」

エルザがそう言うと、彼女の鎧はみるみる剥がれていく。

その様子に鉄アイゼンヴァルトの森は目を釘付けにされ手が止まり、ルーシイも思わずエロいと零した。

煙が立つ。

しかしその煙はゆっくりと晴れ、完全に別の姿になったエルザが彼らの目に映った。

「魔法剣士は普通、”武器”を換装しながら戦うのよ。けどエルザは、自分の能力を高める”魔法の鎧”にも換装しながら戦う事ができるかしら」

ハッピーに続いてフリーシャが説明に入った。

そのフリーシャも笑みを顔に貼り付けている。

「それがエルザの魔法…『騎士』!!!」

煙が完全に晴れ全員の目に入ったのは、四枚の翼が特徴の銀色のドレスのような鎧。

名を天輪の鎧。

この鎧を着用すると、同時にいくつもの武器を使用することが可能となり、背後には何本もの剣が宙を舞っている。

「エルザ…!? こいつまさか…」

「舞え、剣たちよ」

「ま…間違いねえっ!! コイツあ妖精フェアリーテイルの尻尾最強の女、妖精女王ティターニアのエルザだっ!!!」

カラツカが思い出したかのように叫ぶが、そんなもの鉄アイゼンヴァルトの森に届いていなかった。

円を描いた剣はエルザの周囲の者共に向き……。

「<sup>サークルソード</sup>循環の剣!!」

一斉に放たれた。

勢いよく飛ばされた剣は有象無象を一瞬で戦闘不能にした。

しかし……。

スウツ……

「「……はっ…」」

エルザは自身の天輪の鎧を通常の鎧に戻した。

しかし彼女の周りにはまだ数十人の鉄アイゼンヴァルトの森メンバーがいた。

突然解除された魔法に、鉄アイゼンヴァルトの森の面々は素っ頓狂な声を漏らす。

「く……やはり魔動四輪をとばしすぎたか」

とうとう彼女は膝をついた。

そう、彼女の現在の魔力量はカラツカラな状態であり、立って、ましてや戦闘をしているのも不思議なくらいだった。

「なんだか知らねえが今だー!!」

「ひやははははっ!!! もう一度その素肌アイゼンヴァルトを開帳してやらア!!」

一斉に飛びかかる鉄アイゼンヴァルトの森。

だがその魔の手は彼女には届かない。

なぜなら……。

「うっお!!」

「ぐあっ!」

「ぎゃあ!!」

荒ぶる水流がエルザの周囲を包み、襲いかかる者を派手に吹き飛ばしたからだ。

こんな事ができるのはただ一人。

「水竜の抱擁……おまえたちのような下っ端では、女王様の首には届かないの」

「レアーツ!!」

「レ……レア?」

ルーシイの叫びに、またもやカラツカが反応したのだった。

くくく

「二人で力を合わせればだあ? 冗談じゃねえ」

「レアはともかく、火と水じゃ力は一つになんねーしな。無理」

レアがエルザからバトンタッチされた頃、エリゴールを追うように言われたナツとグレイは通路を走りながらいがみ合っていた。

「『だいたいエルザは勝手すぎるんだよっ!! なんでもかんでも自分一人で決めやがって!!』

エリゴールなんかオレ一人で十分だつての!!!

マネすんなっ!!!」

見事なシンクロ率である。

どこかでリハーサルでもしたのでは無いだろうか。

走りながら器用に喧嘩していると、二人は別れ道に差し掛かった。

「どっちだ?」

「二手に分かれりゃいいだろうが。……いいかナツ」

互いに背を向けた所で、グレイが声を掛けた。

「相手は危ねえ魔法ぶっ放そうとしてるバカヤロウだ。見つけたら叩き潰せ」

「それだけじゃねえだろ？」  
フェアリーテイル 妖精の尻尾にケンカ売ってきた大バカヤロウだ。黒コゲにしてやるよ」

グレイの言葉にナツは当然だと返した。

思いは同じという事を確認した二人はにいつと笑ってみた。

しかしそんな事をするのが恥ずかしかったのかバカらしかったのか、二人仲良く頬を膨らませて「ふん！」とそっぽを向いた。

「……死ぬんじゃねーぞ」

「ん？」

「なんでもねえよ!!! さっさと行きやがれつ!!!」

ボソツと言ったグレイの言葉はナツに聞こえてない事をいい事に胸の奥へ仕舞い込み、さっさとその場を離れていった。

「チィ。呪殺の音色をあんなモンで流されたらたまったモンじゃねえぞ!!」

ナツと離れてしばらくして、グレイは通路のスピーカーを見ながらそう悪態着く。

だが、自分の言葉に動きがピタツと止まった。

「流す!？」

そう呟いた時には、グレイは踵を返していた。

「そうかつ!!<sup>ララバイ</sup>呪歌を放送するつもりなら、エリゴールは拡声装置のある部屋にいるハズじゃねえかつ!!」

気づいたグレイは、急いで放送室に向かっていった。

くくく

「今度は嬢ちゃんが相手してくれんのかあ?」

<sup>アイゼンヴァルト</sup>鉄の森視点、今まで無双していた女が急にリタイアした事により、完全に調子づいて相対するもう一人の女、レアにジリジリと距離を詰める。

そんな中、レアは静かに足に水流を纏う。

「さつき吹き飛ばしたばかりなのに……学習能力無いの?」

かなり辛辣な言葉を投げかけ、戦闘が始まった。

いや、戦闘というには、余りにレアが一方的すぎた。

「水竜の鉤爪!」

「二うぎやああああああ!!」

蹂躪。

レアの放つ水流は荒れ狂う海が如し。

人間が大自然の力に適うはずもなく、ただただ押し流される。

「こんのヤロオ! 俺様が相手じゃあ!!」

ここまで傍観を決め込んでいたビードも両手に光を纏いながらレアに襲いかかる。

しかしレアは慌てる様子も無く、深く息を吸い込む。



そのちよつとした動作に、ビードの隣にいたカラツカがハツと気づいてエルザの時と同様……いや、それ以上に声を荒らげた。

「こ、コイツ……絶対そうだ!! コイツは双竜の片割れ……水竜リヴァイアサンのレアだあ!!!」

「水竜の咆哮!!!」

答え合わせかのように解き放たれた水流のブレス。轟々と駅のホームに渦巻く水の音が反響する。ブレスは一直線にビードの方向へと向かい……。

ズギヤアアアアアン!!!

カラツカを残した他の鉄アイゼンヴァルトの森の面々をも巻き込み、後方にあった列車に叩きつける。

バキバキバキと鉄の軋む音や木材が剥がれる音が鉄アイゼンヴァルトの森の者たちの耳を劈き、その意識を刈り取った。

文字通りの瞬殺。

ブレスが止む頃には水浸しになったボロボロのメンバーの姿がカラツカの目に映り、ひいつ!!と声を上げて逃走しだした。

「エリゴールの所に向かうかもしれん! ルーシイ、追うんだ!!」

「えーっ!? あたしがっ!!?」

「頼む!!」

「はいいつ!!」

エルザからの唐突な頼みに混乱、動揺するルーシイだったが、エルザの有無を言わせない形相で睨み、二つ返事でルーシイは駆け出した。

同時に、ひと仕事終えたレアはエルザの元に寄り、エルザを纏っていた水流のバリアを解除した。

「済まない、レア。助かった」

「ん、別に大丈夫なの。じゃ、レアはナツを追いかけるの」

レアの頭の中では、ナツを追いかければエリゴールを追いかけることになる。

エリゴールを追いかければ、あの男カラツカをも追いかける事になる。

さらに長年チームを組んでいた事で連携も取りやすいナツと合流出来るという事で、一石三鳥の得があると考えていた。

ナツの居場所なら、レアであればおいですぐに探知、合流できるという点もエルザは考え、二つ返事で了承した。

一人残されたエルザは、何とかその重い体を持ち上げ、駅の前に集まっている群衆を離れさせるため、外へ向かった。

~~~~~

タツタツタツ……

バギイツ!!

レアがナツのにおいを追って駆け出した頃、グレイは放送室の扉を蹴破った。

入って辺りを見渡すグレイだが、すぐさま疑問符を浮かべた。

理由は単純明快、そこがもぬけの殻だったからだ。

「なぜ居ねえ？ 放送するならココからしかできねえだろ？」

その天井に怪しく笑みを浮かべる男が一人。

十本の指に巻きついていているリボンを天井裏に突き刺しながら逆さまになってグレイを観察している。

「待てよ……ココに居ねえのはおかしい……。放送が目的じゃないのか？」

次の瞬間、男……レイユールは片方のリボンを天井から剥がし、グレイの方に向ける。

頭を狙ったりリボンは真っ直ぐ飛んでゆき……。

ズババババツ!!

先程までグレイが立っていた場所を激しく斬り裂いた。

その当の本人は間一髪で避けており、攻撃を仕掛けたレイユールと対面する。

そしてレイユール本人も天井に刺したままのリボンを伸ばしながらゆっくりと地面に降り立つ。

「オマエ……勘が良すぎるよ。この計画には邪魔だな」

「やっぱり何か裏があるって事か？ まったく……仕事もしねーでなーにしてんだか……」

土煙が舞う放送室の中、徐々に……感知できない程だが、気温が下がりはじめた。

その直後……オシバナ駅を渦巻くように風が巻き起こり、妖精たちを捕らえる事になることを……彼らはまだ気づいていない……。

妖精達は風の中

ここは、地方ギルドマスター連盟の定例会会場。

「マカロフちゃん、あんたんトコの魔導士ちゃんは元気があつていいわあ〜♡ 聞いたわよ。どっかの権力者コテンパンにしちやつたとかあ!」

「おー! 新入りのルーシイじゃあ! あいつはいいぞおっ!! モチモチ、ボヨヨンじゃあ!!」

マカロフに話しかけるこの男(女性のような話し方だが男)ボブはファイオーレ王国の大きな魔導士ギルドの一つ、青い天馬の総長である。

そんな二人の話に乗つかる総長がまた一人。

「元気があるのはいいが、てめえんトコはちいとやりすぎなんじゃないかい?」

四つ首の獵犬の総長であるゴールドマインである。

「評議員の中じゃいつか妖精の尻尾が町一コ潰すんじゃねえかって懸念する奴もいるらしいぞ」

厳格で渋い声でそう言うゴールドマインだが、マカロフはマトモに受け止める気は無いらしく、ルーシイに対するセクハラ発言をかましながらヒヨロヒヨロ踊っている始末。

蛙の子は蛙というように、妖精の尻尾の魔導士がこう破天荒になつたのはこの爺さんが一番の原因では無かろうか……。

そんな時、両足で手紙を掴んでいる小鳥がマカロフの元に寄つてきた。

「マカロフ様。ミラージェーン様からお手紙が届いています」
「ん？」

酔いがまだ覚めていないマカロフは軽い気持ちでその場で手紙を開く。

中から、ホログラムのようにミラの上半身が現れた。

『^{マスター}総長、定例会^ご苦勞様です』

「どうじゃ!!こやつがウチの看板娘じゃ!!めんこいじゃろお!？」

完全に鼻の下を伸ばしきったマカロフが他のギルドマスターにミラを紹介して自慢する。

彼女が小さい頃、面識のあったボブ、ゴールドマインも何処か嬉しそうにその様子を見ていた。

『^{マスター}実は、総長が留守の間、とても素敵な事がありました!』
「ほう」

『エルザがあのだツ、レア、グレイの三人とチームを組んだんです!もちろんルーシィ、ハッピー、フリーシャも一緒に』

『!!』
『ね、素敵でしょ?』
「……」

手紙では続けて最強チームと思うというような事を言っていたが、マカロフの内心はそれどころでは無かった。

ピクピクと小刻みに震えているマカロフからは尋常ではない量の汗が吹き出しており、手紙のミラが内容を伝え終え消えても尚汗は止まらない。

ミラが姿を消したと同時に、マカロフはパタツと倒れた。

「あらあら……」

「心配が現実になりそうだな……」

「(な…なんて事じゃあ。本当に町一つ潰しかねん!! 定例会は今日終わるし、明日には帰れるか……。それまで何事も起こらずいてくれええ頼むつ!!!)」

事情が分からない他のギルドマスターはワーワーとマカロフが倒れた事に騒ぎ立てるが、事情を知るものたちはマカロフの心配よりも、彼らが訪れる町の心配が先に浮かんでいたのだった。

〃〃〃

「知らねえんだよ……魔風壁の解除なんて……オレたちができる訳ねえだろ……」

あの後、エルザは何とか一人で歩ける程まで魔力が回復し、駅の外に群がる人々を荒い方法でありながらも逃がした。

しかし、突如として出現した駅を覆う程の風の渦……魔風壁により、エルザを除いた妖精の尻尾の者たちは閉じ込められてしまう。

そのエルザもエリゴールに不意を付かれるという形で魔風壁の内側に押し込まれ、他の者同様出られなくなってしまったのだ。

現在、エルザはレアによって瞬殺された鉄アイゼンヴァルトの森の実力者の一人であるビアードに、鉄アイゼンヴァルトの森の本当の目的と、魔風壁の解除方法を尋問する。

しかし、本当の目的……オシバナ駅の先にある終点、クローバーの町にいる定例会を行っているギルドマスターである事を聞き出せたはいいものの、魔風壁に関してはどうする事もできないようだった。

「エルザー!!」

そんな時、グレイの声がエルザとビアードの耳に入る。

彼も傷つきながらも無事レイユールとの戦闘に勝利した。

今頃彼は放送室でグレイの怒りに触れたことによつて顔面を凍らされて放つていかれているところだろう。

グレイもレイユールから鉄アイゼンヴァルトの森の本当の目的を聞き、内心穏やかでは無かつた。

魔風壁についてもここに来るまでに確認済みであり、無理に出れば体がズタズタになる事も理解できた。

八つ当たり気味に倒れている鉄アイゼンヴァルトの森に当たるグレイだが、実力者であるビアードが無理だと言っているのだ。

彼らでは到底無理だろう。

すると、エルザがハッ！と何かを思い出した。

「そういうえば、鉄アイゼンヴァルトの森の中にカゲと呼ばれてた奴がいたハズだ!!

奴は確かたつた一人ララバイで呪歌の封印を解除した!!」

「解除魔導士か!? それなら魔風壁も!!」

グレイも理解したようで、目を見開きながら額から流れた血を拭く。

彼らの言葉が正解と言わんばかりに、ビアードは舌打ちを一つ打つた。

であればやることは一つ。

「探すぞ！ カゲを捕らえるんだ!!」

そう言つて二人は駆け出した。

彼らの姿が見えなくなると、ビアードは柱の方に顔を向けた。

「カラツカ……いつまでそこに隠れてる……居るんだろ？」

突然そんなことを柱に向かって言うビアード。

だが、そこには確かに人がいた。

何の変哲もない柱から、いつぞやのたらこ唇にまん丸男、レアの蹂躪によって逃げ出したカラツカがぬうつと姿を現した。エバルの土潜ダイバーとは違い、完全に柱と同化していた様で、柱には傷一つ無い。

「ス……スマね……」

「聞いてただろ？ カゲが狙われている。行けよ」

力の無いビアードの言葉にカラツカは冷や汗をかきながら答える。

「か…勘弁してくれ!! オレには助太刀なんて無理だ!!」

カラツカの言う通り、彼の魔法では真正面から妖精フェアリーテイルの尻尾に挑んでもビアードや他の者同様返り討ちに逢うのが目に見えている。

しかし、彼の魔法であれば、他の者よりも簡単にできる事があり、それは同じチームメンバーであるビアードが一番よく分かっていた。

「もつと簡単な仕事だよ……」

「…え？」

怪しく笑うビアードに、カラツカの冷や汗は湧き出るのが止まらなかった。

~~~~~

「あーあ……完全に見失っちゃったよ」

「あい」

一方、エルザから半ば脅される形で逃げ出した男……カラツカを探していたルーシィとそれに着いてきていたハッピーとフリーシャ。

カラツカの無機物に潜る魔法のせいもあって、三人は完全に彼を見失った。



「ねえ……一旦エルザのここ戻らない?」

見失ってしまったのだから、情報を共有しようとしてそう提案するルーシイ。

だが、ルーシイの言葉を聞いたハッピーとフリーシャは揃ってガクガクブルブルと体を震わせ、あまつさえ身を寄せ合っている。

「な…何よ」

突然揃って体を震わせる猫二匹をルーシイは訝しげに見る。

体どころか声も震わせながら先に口を開いたのはハッピーだった。

「エルザは「追え」って言ったんだよ」

「ルーシイはすごいかしら……あのエルザの頼みを無視するのよ」

「ホント、あのエルザの頼みをねえく……。エルザにあんな事されるルーシイは見たくないなあ」

「フリーシャも見たくないかしら……あんな事されるルーシイは……」

「あ…あたし何されちゃう訳?!」

全容は掴めないが、どうやらエルザの頼みを無視すれば大変な目に会うかもしれないという共通認識を持つハッピーとフリーシャの言葉に、ルーシイまでもが体を震わせる。

そこからの態度の豹変具合は面白いものであった。

「わ…わかったわよ!!探します!!! 見つかるまで探しますツ!!!」

「ルーシイってコロコロ態度変わるよね」

「手のひらに付いてるドリルが恐ろしい勢いで回転してるかしら」

「もおおっ!!うるさいなあっ!!! てか、何でアタシになついでんの!?

このネコ達イ!!!」

ルーシイの百面相。  
ハッピーとフリーシャには効果が無いようだ！

〃〃〃

ドゴオオオオオン!!!

また場所が変わってナツの元。

彼は今エリゴールを追って、部屋の壁という壁を破壊していた最中、喧嘩を売られたカゲヤマを伸した所だった。

カゲヤマの切り札である八つ影オロチシャドウを使うも正面から突破され、火竜の咆哮にてトドメを刺したのだ。

しかし戦闘を始める前にカゲヤマ自身が倒されたらエリゴールの場所を教えると安易に言った為、ナツに手加減され意識までは刈り取られなかった。

「ナツー!!」

「おう！ レア、遅かったな！もう終わったトコだぞ!!」

すると、丁度やって来たのはナツのにおいを辿ってきたレアだった。

地面に伏したカゲヤマはレアを見て自分がボロボロであるのも忘れてギョツと目を見開いた。

「バカな……！ 何でお前がここに……他の奴らはどうした……!?!」

「ん？ 倒したの」

「なっ!!?!」

あっけらかんと答えるレアにカゲヤマは絶句する。

あれだけの数を女三人（実質二人）で倒し切るなぞ思いもよらなかった。

目の前ではさつき自分を打ちのめした桜頭とあの数の魔導士を全滅させた青髪がここにいる目的も忘れていたのかのように和気あいあいと話している。

「ていうかナツ。アイツからエリゴールの居場所聞くんじやないの？」

「あ、そうだった。てことでお前！俺が勝ったんだから、約束通りエリゴールの場所言えよ!!」

ようやく現実に戻ってきた二人は揃ってカゲヤマに向く。

だが、その言葉でカゲヤマは自身の…自身らの勝利は確定しているかのようにほくそ笑んだ。

「くくく…バカどもめ。エリゴールさんはこの駅にはいない…」

「は?」

「どういう事なの?」

ナツとレアは揃って理解出来なかった。

エリゴールの目的はここで笛の音を流すことによる無差別殺人であると思っている二人は、ここにその笛の音を流すエリゴールがいないことに頭に?が浮かぶ。

そんな時、聞き知った声が二人の耳に飛び込む。

「ナツー!それ以上はいい!! 彼が必要なんだ!!」

「うお!?なんだなんだ!!?」

魔風壁の解除を唯一行えるであろうカゲヤマを探していたエルザとグレイが合流したのだ。

先程のナツのトドメの一撃が駅全体に響いており、彼らもこの場所を特定できたという事だ。

ルーシイたちが音の原因を探って合流するのも時間の問題だろう。

「でかしたクソ炎!! レアも合流できてるのは丁度いい! 説明してるヒマはねえがそいつを探してたんだ」  
「私にまかせろ」

揃って状況がちんぷんかんぷんな双竜は同様に首を傾げる。  
だがグレイの言った通り時間が無い故に、エルザは駆けてきた勢いのままカゲヤマの胸ぐらを掴んでは壁に叩きつけ、さらに剣を構えた。

「四の五の言わずに魔風壁を解いてもらおう。一回NOと言う度に切創が一つ増えるぞ」

「う…」

「オイ…そんなボロボロなんだ。いくらなんでもヒデエぞ」

「ん……。やつぱりエルザは危ないの……」

「黙ってる!!」

鋭い目をさらに鋭くさせ脅しかけるエルザに、カゲヤマも冷や汗をダラダラと垂らしながら狼狽える。

それに加え事情を全く知らないナツとレアもエルザの鬼畜の所業を見てワナワナと震えている。

「いいな?」

「わ…わかつ……」

カゲヤマが恐怖のあまり縦に首を振ろうとしたその直後。

「ばっ…!!? ぐふっ……」

「カゲ!!?」

突然、口から血を吐き出し、エルザに倒れかかったのだ。

カゲヤマの背中には短剣が深く刺さっており、カゲヤマの意識を完壁に刈り取った。

その背後には、カゲヤマを刺したと思われる男の姿が。

「(簡単な仕事だよ……。カゲを…殺せ!)」

駅の広場にて、ビードにそう言われたカラツカの姿がそこにあった。

暗殺という面では、カラツカの魔法は恐るべき力を発揮する。

壁に入り込めるといふのは簡単に言えば奇襲し放題であり、確かにカラツカ向きの仕事ではあった。

「カゲ!! しっかりしろ!! お前の力が必要なんだ!!!」

「マジかよクソっ!! 唯一の突破口が…」

「あ…うあ…ああ……」

場が混乱に包まれる。

それは刺した本人も例外では無かった。

そんな中、黒い感情が渦巻く者が二人。

「…仲間……じゃねえのかよ……」

「なんで? ……なんで…刺す……の……?」

「ひ、ヒイイイ!!」

強く握られた拳と高ぶる怒りはナツとレアの魔力に顕著に現れ、二人の拳には迸る炎の荒れ狂う水が燈る。

ナツもレアも、同じタイミングで親竜が消え去り、同じタイミングで妖精の尻尾に入り、二人とも同様に仲間は家族であると教えられた。

喧嘩することはあれど、ギルドの仲間は家族なのだ。

だが目の前の彼らはどうだ?

目的の為であれば平然と仲間を見捨てる、切り捨てる。それをいとも簡単にやってのける。

目の前の男、カラツカの動揺の様子から、本人としてはやりたくないのだらうが、結果的にはカゲヤマを……仲間を切り捨てるほうを選んだ。

そもそもそのような思考になる事すらも、双竜には理解が出来なかった。

カラツカは二人の怒りをビリビリと肌で感じ、怯んで再び壁の中に潜り込む。

「同じギルドの仲間じゃねえのかよオ!!」

しかし取り逃がすナツでは無い。

炎を纏った拳を構え、カラツカが潜り込んだ壁に一直線に向かい、殴り壊す。

破壊された壁の中からカラツカの姿を捉えたナツはすぐさま左手でカラツカの襟元を掴み、床に叩きつけた。

しかしまだ終わらない。

冷たい魔力を水に変換させ、足に纏ったレアが倒れているカラツカの上に飛び上がり、そのまま腹に向かって垂直落下する。

その丸い腹が大きく凹み、カラツカは中の物を全て口から吐き出しそうになるも、何とか飲み込んだ。

だが今の一撃で、カラツカの意識は完全に無くなった。

「それがお前たちのギルドなのかっ!!!」

「認めない!! レアはこんなギルド絶対に認めないのっ!!!」

しかし、未だに二人の怒りは収まる気配が無い。

その声はカラツカには聞こえないが、言わずにはいられなかった。

「カゲ!! しつかりしないか!!!」

「エルザ……ダメだ……意識がねえ」

「死なすわけにはいかん!! やってもらう!!」

一方倒れたカゲヤマの方は、簡易的な止血はしたものの、応急処置も済んでおらず、今の状態での意識の回復は絶望的である中、ひっきりなしにエルザが声をかけ続けている。

「やってもらおうたって、こんな状態じゃ魔法は使えねえぞ!!!」

「やってもらわねばならないんだ!!!」

しかし現実には残酷なり。

例えカゲヤマが今ここで目覚めようと、この怪我ではグレイの言う通り怪我で上手く魔法は使えないだろう。

しかし彼の力が無ければ魔風壁の解除は不可能。

まさに八方塞がりであった。

「……お……お邪魔だったかしら……」

「あい……」

遅れて合流を果たしたルーシイ、ハッピー、フリーシヤはあまりに緊迫した状況に、顔を引き攣らせることしか出来なかった。

死神が死のメロデーを奏でるまで……もう時間が無い。

## 乙女の魔法

「エリゴールの狙いは定例会なの!!?」

「じつちゃん!?!」

「おじいちゃんを…!?!」

一旦駅の広場に戻ってきた一行。

グレイから鉄アイゼンザルトの森の真の目的の説明を受け、ルーシイ、ナツ、レアは驚愕の表情を浮かべる。

その説明をしたグレイは目の前にある魔風壁を苦々しく見つめる。

「ああ……。だけどここの魔風壁をどうにかしねえと、駅の外には出れねえ」

「出来ない」というグレイの言葉に歯噛みしたナツは力任せに魔風壁に突っ込む。が……。

「ぎゃあああつ!!」

「な?」

虚しくも弾き飛ばされ、床をゴロゴロと転がされた。

ナツに加え、レアも魔風壁を突き破ろうと魔法を発動する。

しかし何度やってもバチイン!と音を立てて弾かれるだけであり、ナツとレアが傷つく一方だった。

「急がなきゃマズイよ! アンタの魔法で凍らせたりできないの?」

「できたらとつくにやってるよ」

一抹の希望を頼ってグレイに尋ねるルーシイだが、答えはNO。

ヤケクソからか、ナツは魔法も捨てて無理やり魔風壁を突破しよう



と突進する。

だが結果は体に無数の切り傷を作るに過ぎず、最終的にルーシイに引き離される。

「くそっ！ どうすればいいんだ!!」

魔法は通らない。

かといって素で行こうものならミンチ。

頼みの綱であるカゲヤマは応急処置によつて一命は取り留めたものの未だに意識は戻らない。

万事休すかと思われた時、ナツは自分を魔風壁から引き離す為に背中にくつついているルーシイに目をやる。

その次の瞬間、ナツは閃いたというかのようにルーシイの肩をガツ！と掴んだ。

「そうだ!! 星霊!!」

「え?」

いきなりそんな事を言われてピンと来ないルーシイだったが、今の一言で全てを理解したレアが口を挟んだ。

「ルーシイ！ エバルーの屋敷で星霊界を通じて瞬間移動したアレ、今やるの!!」

興奮した様子でお願いするレアだが、ルーシイは無理だと言う。

普通星霊界に人間が入ると息が出来なくて死んでしまうという。

もう一つ言えば、星霊を召喚する為の門は星霊魔導士が<sup>ゲート</sup>いる場所では開かない。

つまり、レアやナツの考える方法で魔風壁の外に出るには、最低でもルーシイの星霊を魔風壁の中に留め、ルーシイが魔風壁の外に出る必要があるのだ。

「ややこしいな！ いいから早くやれよ!!」  
「できないって言ってるでしょ!!」

しかし難しい話が苦手なナツでは今の話を理解できずやれの一点張り。

隣でレアも頷いていることからナツと同様なのだろう。  
理解しようとしているのかも疑問だが。

「そもそも、人間が星霊界に入る事自体が重大な契約違反!! あの時はエバルーの鍵だからよかったけどね」

星霊魔導士の決まり事をあーだこーだ説明するも二人は首を傾げるばかり。

ナツに至っては「意味わかんねえ」と零す始末。

「エバルーの…鍵……」

あーーーっ!!!」

すると、突然声を上げたのはここまであまり会話に参加して来なかったハッピーであった。

小さい体を跳ね上げてその声帯から想像もつかない大声を上げ注目を集めた。

「ルーシィー! 思い出したよ!!」

「な…何が?」

「来る時に言ってた事だよお!!!」

ナツの気持ち悪いという言葉にハッ!と反応したあれである。

その後も、「ルーシイ変、魚おいしい、ルーシイ変、変、変……」と復唱していた中々失礼な極まりない内容だったが、ようやく本当に伝えたい事を思い出したようだ。

ハッピーは背中に背負っていた風呂敷を下ろし、ごそごそとある物を取り出した。

「これ」

「それは…バルゴの鍵!!?」

それは、エバルーが持っていたバルゴを呼び出す金の鍵…黄道十二門の鍵の一つ、処女宮の扉を開く為の鍵であった。

「ダメじゃない!!勝手に持ってきちゃー!」

「違うよ。バルゴ本人がルーシイへって」

「ええ!!?」

「その後エバルーが逮捕されたから契約が解除になったんだって。それで今度はルーシイと契約したいって、オイラン家訪ねてきたんだ」

「あれが……来たのね……」

ルーシイはいつか見たあのメイドゴリラが家の前まで来たということ想像して少し震える。

何故召喚もされていない星霊が現実世界で行動出来たのか……そもそも何故ハッピー（ナツ）の家の場所を知って訪問できたのか謎ではあるが、この際それは些細な問題だろう。

「嬉しい申し出だけど、今はそれどころじゃないでしょ!? 脱出方法を考えないと!!」

「でも…」

「うるさいっ! ネコは黙ってニャーニャー言っとなさい!!!」

今は魔風壁をくぐり抜けることが最優先。

それでも尚バルゴの件を引つ張ってくるハッピーをいい加減煩わしく思ったのか、ルーシィはハッピーの口を両サイドからつねって黙らせる。

ドスの効いた瞳で睨みつけ、今度こそハッピーは静かになった。

その様子に、グレイは「こいつも時々怖えな…」と零し、エルザに対する恐怖と似たような物を感じて戦慄した。

しかし、膝をガクツとついて涙を流しながら垂れたハッピーの言葉に、事態は急変する。

「だって、バルゴは地面に潜れるし…魔風壁の下を通って出られるかなって思ったんだ」

「何!!?」

「本当か!!」

「えつと…?」

「……なの?」

「そつか!!」

ハッピーの言葉に(双竜以外の)全員が驚愕をあらわにし、ルーシィはハッピーを抱き上げた。

「やるじゃないハッピー!! もう、何でそれを早く言わないのよお!!」

「ルーシィがつねったから」

「ごめんごめん!後で何かお詫びするから、しますから、させていただきますから!! とにかく鍵を貸して!!」

「あい! お詫びよろしくね」

かと思えばさつき態度と一変して今度は綺麗な土下座をハッピーにするルーシィ。

以前フリーシャが言っていた手のひらドリルはあながち間違っておらず、見ていて惨めになる。

あまりの豹変具合にナツ、レア、グレイは軽く引いていた。

気を取り直して鍵を受け取ったルーシイはさっそく鍵を空中にかざす。

「我、星霊界との道を繋ぐ者：汝、その呼びかけに応え、門を潜れ！」

契約前の星霊を呼び出す口上を唱え、辺りは光に包まれる。

ルーシイの家でプルーとの契約を見たナツたちだったが、あの時の輝きとは比べ物にならない程の光を放っている。

「開け！処女宮の扉！バルゴ!!」

鍵の先端から魔法陣が現れ、バフン！と白い煙が辺りを包む。

煙が晴れ、姿を現したのはルーシイの脳裏に浮かぶゴリラメイド……。

「お呼びでしょうか？ 御主人様」

ではなく、乙女座に相応しい美しい女性だった。

背丈はナツやルーシイとほぼ変わらず、手首に着いている枷が目を引く。

メイド服に身を包み、丁寧にルーシイにお辞儀をする姿はまさに主に従える従者。

短髪の薄桃色の髪に色白の肌、パツチリと開かれた青い瞳。

ハイライトは無いが、レアと同様に儂げな美しさがあって、見る者を惹きつける何かがあった。

「……誰？……」

自分の記憶とは全く違う美少女が呼び出された事により、ルーシイの頭の中は混沌の渦を巻いていた。

そんな中、ナツとレアは久しぶりに会った友達に話しかけるかのよ

うに普通に接する。

「よおマルコ、激痩せしたなおめエ」

「ん、前よりずっと可愛い。パルコ」

「バルゴです。あの時はご迷惑をお掛けしました」

「いや痩せたっていうか別人!!!」

我慢出来なくなったルーシイがそうツツコム。

確かに軽く背丈も変わっているのに、これは痩せたと言える次元の話では無いだろう。

というのもバルゴ自身、主人に対しては群を抜いて忠実な星霊であり、主人の望む姿にて仕事をするという。

あのゴリラメイドの姿はねじ曲がったエバルーの美的センスにより生まれた姿であった。

「時間がないの！ 契約、後回しでいい!？」

「かしこまりました、御主人様」

「てか御主人様はやめてよ!!!」

御主人様呼びはむず痒いのか却下されたバルゴは、ルーシイの腰に下げられている鞭を一瞥する。

「では女王様と…」

「却下!!!」

「では姫と…」

「そんなトコかしらね」

鞭を見て女王様とは、このメイドは一体何を期待していたのか…。そして姫と言われて納得したこの女も、一体何を期待しているのか。

グレイもルーシイに一言ツツコミをいれてから急かしの言葉を掛

ける。

バルゴもそれに了承し、まるでプールに飛び込むかのように地面に飛び込む。

するとエバルーの時同様その地面が抜け、ガガガつと掘り進める音が彼らの耳に響いた。

「おお！ 潜った!!」

「いぞルーシィー！」 ガシヤツ

「硬っ！」

抜け道ができ、その能力に関心を示すグレイの後ろで、エルザがルーシィに抱擁を与える。

が、ナツとレアの時同様鎧に頭を打ち付けるだけで、ルーシィからすれば痛い思いをするだけで終わる。

皆が脱出しようと穴へ歩を進めると、何故かナツは倒れていたカゲヤマに肩を貸して持ち上げた。

「何してんだナツ」

「オレと戦った後に死なれちゃ後味悪イんだよ」

その言葉に周囲もヤレヤレといった眼差しを見せ、カゲヤマも僅かながら意識を回復させた。

負けた相手に敵が手を差し伸べるといふ行為は、その者の自尊心を傷つけかねない行動であったが、この場にナツの行動を咎める者は誰一人と居なかった。

「出れたぞー!!!」

ようやく穴をくぐり抜け出た先は期待通り魔風壁の外であった。

しかし魔風壁の影響がその周囲にも及んでおり、物凄い勢いの風が辺りを吹き飛ばそうとしている。

「姫！下着が見えそうです!!」

「自分の隠せば?」

それは女性陣のスカートにも影響しており、自分の身を呈してルーシイの下着姿を隠そうとしているバルゴの下着がグレイの眼前で顕になる。

「無理だ……い……今からじゃ、追いつけるハズがねえ……。オ……オレたちの、勝ちだ……な」

ふと、そんな声が聞こえた。

声の方を見ると、相も変わらずボロボロのカゲヤマが地面に倒れ伏した状態で引き攣った笑みを浮かべていた。

だが、エルザがそれを見てある異変に気づいた。

「ナツはどうした?」

そう呟いたエルザに、他の者達も異変に気づく。

「あれ?レアもない……」

「ハッピーにフリーシャもいねえぞ」

~~~~~

一方、クローバーの町付近大溪谷上空。

「あの町だ。見えてきた」

^{ララバイ}呪歌を持ったエリゴールが、ギルドマスターが集まる定例会会上へゆつくりながらも着実に近づいていた。

あと少しでたどり着く。
そう思っていた時だった。

キイイイン!!!

何かが空を切る音がエリゴールの耳に入る。
何かと思ひ振り向くと…。

「これがハッピーの……MAXスピードだあ!!!」

ドカツ!!

「おあつ!?!」

ハッピーに掴まったナツが足に炎を纏ってエリゴールの顔面に飛び込んできたのだ。

見事蹴りが顔面に命中したエリゴールは空中で爆発、運良く線路上に落下した。

続いてナツも線路に着地し、翼の無くなったハッピーを受け止める。

「もう…飛べない……です…」

「ありがとな、ハッピー！ おかげで追いついた!!」

「キサマ…なぜこんな所に……」

ギロリと睨みつけるエリゴール。

それに対しナツはニヒルな笑みを浮かべながら両手に炎を宿して答えた。

「お前を倒す為だそよ風野郎!!」

炎と水と風

「来い！ 物騒な笛」と燃やしてやる」

両手に炎を宿したナツがニヒリと笑う。

相対するは片膝をつき大鎌で体重を支えているエリゴール。

内心怒りで悪態をついていた。

「(魔風壁は……カゲヤマどもはどうしたんだ!!?あと少しでじじいどもがいる場所に着くというのに……!!)」

のそつと立ち上がり、フリーな状態の左手をナツの方に向ける。
と……。

キイイイイン!!!

再び何かが空を切る音が二人の耳に入った。

まさか！と言う様子で音の方向に目を向けると…。

「んなのおおおお!!!」

ドゴオン!!!

「グボア!!?」

ナツと同様MAXスピードで追い上げてきたフリーシャに掴まったレアが水流を纏った蹴りをエリゴールの腹目掛けて打ち込んだ。

体が大きく曲がったエリゴールはそのまま溪谷の大岩目掛けて吹き飛ばされる。

モクモクと土煙が舞う中、レアは蹴った反動からエリゴールの吹き飛んだ方向とは反対に大きく飛び、ナツの隣に着地した。

「レア!? 何でここにいんだよ!!」

「ん? 何でって、あの団扇男倒す為なの」

あっけらかんと答えるレアに、ナツは不満そうに地団駄を鳴らす。

「俺一人で十分だったの!!」

「レアだって暴れ足りないの!」

敵が現在岩にめり込んでいるとは言え、無防備に口喧嘩を始めるナツとレア。

しかし、それはすぐに終わる事となる。

「それに……『一人で双竜 揃えば最強』なの」

「……ああ、そうだよな! ハッピーとフリーシャの前なんだ、カツコ悪いトコは見せれねえな!!」

「ん。ということ、フリーシャはゆっくり休んでいてなの」

「面目ないかしら……後は任せたのよ……」

ニカツと笑うナツを背後に、レアはゆっくり降下してきたフリーシャを腕に抱え、ハッピーの隣に寝かしつける。

そうしている間に、ようやく回復したエリゴールが戻ってくる。

「本当に邪魔な妖精どもだぜ……。まさか二人も取り逃がすとはな……。消えろ」

吹き飛ばされて彼らから離れたお陰か幾分冷静になったエリゴールは、静かに突風を巻き起こし、二人に仕向ける。

が、この程度でやられる『双竜』ではない。

突風によって舞った土煙が晴れる前に空へ上がる影が二つ。

「ウオオオオオ!! レア!!」

「ん！ んなのおおお!!」

「オラア!!」

「何!? グッ!」

影の正体はもちろんナツとレア。

レアはナツの背中に乗っており、そのナツは足から炎を吹き出し高々と跳躍している。

そしてナツが声を上げると同時にレアが飛び出す。

水流を足に纏ったレアがエリゴールに向けて急速降下する。

間一髪それを避けるエリゴールだが逃がさない。

空で待機していたナツが再び足から炎を吹き出し、空へと逃れたエリゴールに向けて炎を纏った拳を振るう。

しかしこれもエリゴールにあと一步届かず、持っていた大鎌で防がれ、さらに空中へと距離をとる。

「(炎で跳躍し炎で殴る……小娘も水を使って蹴ってくるあたり、あの小僧と同じことが出来るのか……! それに受け止めてわかった拳の重さ……とても魔導士の拳とは思えねえ……!!)」

空中から悠々と二人を見下ろすエリゴールだが、内心は驚きで少々戸惑っていた。

一方地上の二人はフラフラ飛び回るエリゴールにだんだん怒りが増していく。

「クソっ! フラフラ飛びやがって!!」

「ん! ズルいのズルいの早く降りてくるのー!!」

ほとんど子供の癩癩とも取れるような挑発。

当然このような物に乗るエリゴールでも無い。

「調子に乗るなよ……妖精が!!」
「ストームプリンガー 暴風波!!!」

「おわああ!!？」

「お…おお!!？」

荒れ狂う竜巻。

それは数える間もなく二人を飲み込んだ。

天まで高く昇る竜巻の口からやがて二人が吐き出される。

そのまま二人は吸い込まれるかのように谷底へと落ちていってしまった。

「ハハッ。これで飛び上がることも出来まい…」

「ナツー!!」

「レアー!!」

勝ちを確信するエリゴール。

だが先にも言ったように、これでやられる『双竜』ではない。

方向転換をし、今度こそクローバーへ向かおうとするが、彼が次に目にしたのは…。

ズゴオオオオオン!!!

燃え盛る火柱がやがて手の形へ変え、線路を掴んで這い上がってくるナツと、谷底から線路の上を通り、再び谷底へと続く水流の中を、まるで水中トンネルを通るかのように駆け上がってくるレアの姿だった。

「危ねえ危ねえ…火の質を変えるね…」

「水流の応用…以外とやってみる物なの…」

「な、なんだ今のは…!」

エリゴールが驚くのも無理は無い。

ナツが行ったのは彼の口にした通り、火の質を変えたのだ。

この世界、炎というのは何も燃やすだけが全てでは無い。
先日ナツとレアがハコベ山で助けた魔導士、マカオだつて火の魔導士だ。

だが彼の扱う火はナツの火とは本質が違う。
パープルフレア
紫の炎と呼ばれるユニークな性質を持つ炎であり、物を掴んだりも出来るのだ。

その際、熱によつて燃えたり、形が変形することも無く、非常に便利なものだ。

この炎の違いには先にも言ったように炎の質に関係があり、ナツは一時的に自身のなんでも燃やす炎の質を変える事で、利便性の高い炎へと変換させたのだ。

レアが行つたのは口にした水流とは少し違う。

サイフォンの原理と呼ばれる化学知識を用いたものだ。

まず出発点となるレアの居場所に小池程の水溜まりを作る。

そこから水の通り道を上へ伸ばし、今度はその通り道の出口を先程作つた水溜まりより低い位置に作る。

こうする事によつて、水は一時的に高い場所に登つていくという原理が出来上がる。

レアはこれを利用し、上へと昇つてきたのだ。

本来この原理は隙間の無い管を利用した原理ではあるのだが、レアの場合、魔力の管を用いる事でこれをなし得た。

俗に言う荒業である（それはナツにも言える話ではあるが…）。

「お前、裸じゃ寒いだろ。温めてやろうか？」

「お前も似たようなモンじゃねえか!!」

ナツのちよつとしたジョークにルーシィ並のツツコミを返すエリゴール。

その直後、ナツは口をいっぱい膨らませ…。

「火竜の咆哮!!」

エリゴールに向けて炎のブレスを発射する。
それをさらに高度を上昇して躲すが、まだ終わらない。

「熱した体を冷やすから、後は自分の風で整ってくださいなの、水竜の咆哮!!!」

「!? ストームウォール 暴風壁!!!」

突然後ろから声が聞こえたかと思えば次に目に入ったのは渦巻く水流のブレス。

エリゴールは間一髪ので風のバリアを張ってそれを防いだ。

「(口から魔法を……やること全部デタラメじゃねえか……! それに息つかぬ連携攻撃……これが、妖精の尻尾の魔導士か……)」

そこから、エリゴールの二人を見る目が変わる。

今までは道端のアリを見るのも同然の目だったが、今では完全に獲物を狩る為本気になった狼の目をしている。

「貴様らの力……少々悔っていたようだ。ここからは本気で行こうか。

……お互いにな」

「……燃えてきたぞー!」

「ん!」

そして変わったのはエリゴールだけでは無い。

ナツはより一層目を鋭くさせ、レアも気合いを入れ直す。

「ストームメイ 暴風衣!!!」

そう唱えたエリゴールは持っていた大鎌を手放し、自身の体に風を纏わせる。

その瞬間、周囲も暴風に包まれ、ナツとレアは揃って顔を覆う。風がある程度止み、二人が目にしたのは……目を光らせた人型の風だった。

「いくぞ」

短くそう言ったエリゴールはナツとレアの丁度中間点の位置にに着地する。

これを隙と見た双竜は合図無しに同時に襲いかかる。

「火竜の鉄拳!!!」

「水竜の凍拳!!!」

互いの属性を拳に纏わせたパンチ。

エリゴールがその場所に降りてきてくれた事もあって完全に挟み撃ちに狙った攻撃。

どちらかを防ごうが、確実に防がれなかった拳は命中すると確信していた二人。

しかし、エリゴールの取った行動は両手のひらを二人の前に突き出し、その拳をどちらにも真正面から受け止めるだった。

普通なら確実に受け止めるなど不可能。それが普通であれば……。

バシユウウウ……

二人の拳を纏っていた炎と水は、エリゴールの拳で受け止められる前に何故か打ち消され、結果として残ったのはエリゴールの手のひらに自身の拳を打ち付ける結果だけだった。

「やはり魔法を纏ってなければあの破壊力は出せんか……。まるで効かん」

「どうなってんだ!? 炎が消えちまう!!」

「水が着く前に消えちやうの!!」

そのカラクリはさっきの二人のメチャクチャと比べれば単純な物だ。

先程エリゴールが自身の体に纏わせたストームメイ暴風衣。

これは風の鎧であり、常に外に向かって風が吹いているのだ。通常炎は向かい風には逆らえないし、水も流されるしか無い。

そこまで語り、エリゴールは高らかに宣言する。

「炎と水は、風には勝てねえんだ!」

ビュオオオ!と再び旋風が巻き起こり、双竜を遠ざける。

「すごい風なの…!」

「ああ…:まるで台風みてーだ…!」

「もはや炎も水も、オレには届かん!!」

そう言つてエリゴールは双竜目掛けて無数の風の刃を放つ。

次々と飛んでくる刃に、ナツもレアも全てギリギリの所で躲し、それぞれ炎、水をブースターにエリゴールとの接触を図る。

が、やはりそれは一步届かず、再び二人は吹き飛ばされる。

「炎どころかオレたちが近づけねえ!!」

ナツの漏らした苦言通りであり、今エリゴールの周りにあるのは自身で纏った風の鎧以外無く、ナツとレアが近づこうにも虚しく飛ばされるだけ。

17歳の男女二人を軽々と吹き飛ばすあたり、風速は40m/秒を軽々と超えているだろう。

「どうした貴様ら…その程度か？　もう少し骨のある奴らだと思っただけが…まあいい。これで終わらせる！　全てを切り刻む風翔魔法、
翠緑迅!!!」
エメラ・バラム
翠緑迅。
エメラ・バラム

それを聞いてピンと来たのは魔力がある程度回復してきたハッピーとフリーシャだった。

「翠緑迅だっって!!？」
エメラ・バラム

「そんなのくらったらバラバラになるのよ!!!」

エリゴールの操る風の魔法の中でも高い威力を持つ上級魔法。

上級魔法というだけあり、その威力は軽々とその命を刈り取る物である。

そして、それが今…

「死ね!!!　クソガキ共お!!!」

風によって宙を舞い、無防備になった双竜を襲う。

濃密度に重なった風が鎌鼬となり、ズギヤギヤギヤ!!!と周辺の線路をも切り刻む。

煙が晴れ、恐るべき鎌鼬から難を逃れていたハッピーとフリーシャが目にしたのは…。

「ナツター!!　レアー!!」

ボロボロになった線路と橋、そしてその線路の中央で力なく横たわっているナツとレアの姿だった。

「ほう…その肉体が残っただけでも大したモノだ。若エ魔導士にしては、小僧も小娘も中々だったぞ。安心しろ。ジジイ共もすぐにそつちに送ってやる。呪歌の音色でな」
フラバイ

エリゴールが魔法を放つ前にフリーシャが言っていた通り、普通の魔法をくれば体がミンチになることまっしぐらであったハズなのだが、ナツもレアも服はボロボロ、頭から少し血を流す程度で済ませたので、思わずそう声かける。

そうして、ようやく再びクロバーに迎えると踵を返したその時。

「何が…呪歌だ！」
ララバイ

ナツが声を上げる。

上半身の服は先程の鎌鼬によつてもうほとんど残っておらず、ビリビリとちぎって投げ捨てる。

鍛えられた肉体が頭になり、その体はもう傷だらけだった。

「じっちゃんの首がほしいなら正々堂々戦え!!」

「バカな! まだ生きてるのか!?!」

「戦う勇気がねえなら手エ出すんじゃねえ!!!」

竜の鱗のようなマフラーを風にたなびかせ、ナツは再び炎を拳に纏つてエリゴールに殴り掛かる。

だが同じ手が効くはずも無い。

「なんてしぶてえガキだ!!」

ぶあつ!と再び風がナツを吹き飛ばす。

今度はしつかり着地してダメージを抑えるナツだが、彼の中の怒りはどんどん蓄積されていき、八つ当たり気味に線路を掴んではメキメキと橋から剥がしている。

「ちくしよオオオオ!!! 何で近づけねエんだ!!! 納得いかねー!!!」

言葉を重ねる毎に熱量を上げていくナツの炎。

それは谷底から這い上がってくる時に見た炎とは格段に違う、寧ろで荒々しい炎だった。

「それにしても不気味な魔法だな。感情がそのまま炎へと具現化されてるようだ。

……感情の炎：!? た、確か古代の魔法にそんな魔法が……いや、こんな若造が古代の魔法など……」

エリゴールがそのような考察をする中、突然肌寒さを感じる。不思議に思い、特に肌寒く感じる背後に目を向けると……。

「……おじいちゃんには……手は出させないの!!!」

ボロボロになっているレアが周囲にとてつもない冷気を纏ってコチラを睨みつけていた。

普段着ているセーラー服は既に無く、下に着ていたスポーツブラとホットパンツが顕になっている。

白い肌には傷一つ無く、その華奢な体つきからはあのパワーが生み出されているとは到底思えない。

中々表情筋を動かさないレアが眉間に皺を寄せる程睨むその表情に、エリゴールも思わず後ずさる。

と同時に、異変を感じた。

「ん？ 何だ……風が小僧の方向へ……!?!」

そう。

エリゴールが纏っていた風……もつと言えば、周囲の気の流れがレアからナツの方向へと流れているのだ。

「そうか！ フリーシャ!!」

の空気はさらに冷え、周囲が凍っていく。
それによつて、エリゴールの身にも変化が起こる。

「バ…バカな!! 暴風衣ストームメイクルが流されていく!!?」

纏っていた風はどんどんナツの方へと流されていき、遂にその身が再び頭になった。

「(ナツの超高音で温められた周りの空気が、急激な上昇気流になつて低気圧が発生したんだ!)」

これこそがハッピーの考えた作戦。

ハッピーの考えの通り、ナツの周囲には低気圧、反対にレアの周囲には高気圧が発生している。

風……つまり気の流れは気圧が高い所から低い所へと流れる。
しかし、これでまだ終わらない。

同勢力の高気圧、低気圧がすぐ近くで発生した事により、その中間地点……つまり、エリゴールの位置には停滞前線が発生する。

梅雨の時期に発生する前線である。

梅雨といえば、そう。

天高く上つていく気は次第に再び冷やされ、雲を形成する。
そして……。

「やった! 雨が降り始めたかしら!!」

激しい雨を降らせる事となる。

「天候を変えてしまう程の超熱、絶対零度の魔法だと!!? ……まさか!!?」

「オレたちが倒してやるよオオオ!!!」

目を吊り上げさせそう叫ぶナツは纏っていた炎をそのまま武器としエリゴールに突貫する。

「火竜の劍角!!!」

「ごはあ!!?」

レアの初撃以上に体がくの字に曲がったエリゴールに抵抗できる力は残っておらず、そのままナツによって上空へと投げ飛ばされる。

その先でエリゴールを出迎えるのはレアだ。

なんと、現在進行形で降っている雨粒を……いや、その元となる雨雲までも、レアの手のひらへと集束されている。

「地の果てまで……流れ去るといいの！ 水竜の豪海!!!」

まさしく海そのものがエリゴールを襲う。

一点に集中した水の圧力は想像を絶する物であり、叩きつけられたエリゴールはいとも容易くその意識を刈り取られる。

「(いたのか……滅竜魔導士が……!!?)」
ドラゴンスレイヤー

一瞬脳裏に浮かんだのは、存在しないと思われていた古来の魔法……滅竜魔法の存在であったが、何を思っても今となっては後の祭り。

魔力を絞り出す力も無いエリゴールは、橋の上に呪いの笛呪歌をフラバイ残して谷底へと姿を消したのだった。

「どうだハッピー！」

「フリーシャ！ ちゃんと見たの!?!」

「あい！ さすが『双竜』の二人だね」

「やっぱりナツとレアが負けるはず無かったかしら」

戦闘を終えたナツとレアは揃って相棒の猫の元へと一目散に向かう。

その猫二匹はというと手のひらを返したかのように二人を褒め上げる。

しかしその言葉に動じず、双竜の二人は揃ってジト目で猫たちを見つめる。

「お前さつきなんだった？」

「聞き捨てならないの」

「猫の記憶力はしょぼいモノなので（よ）」

中々悲しい事を自分たちで言う猫たちだが、二人は気にせず目をカッと開いて叫んだ。

「俺とレアじゃ勝てないからエルザがどうかかって言っただろ!？」

「レアじゃナツの足引っ張るからグレイに任せよって言ったの!!」

「うわあ…猫よりもしょぼい記憶力……」

「エルザじゃなくてグレイだし、足引っ張るとかそういう理由じゃ無かったかしら……」

だが何処か微妙にズレている二人の発言に、ハッピーとフリーシャは揃って微妙な表情をする。

だが、最後には二匹揃って笑みを浮かべた。

「でも、二人は勝ったよ」

「ええ。さすが、『双竜』の二人なのよ」

「……まいつか」

「ん、終わり良ければ全て良しなの」

そう言っただけで笑い合う。

しかしそんな中、線路に取り残された三つ目のドクロの笛は怪しく

目を光らせ、ケタケタと笑っている事に……誰も気づかなかつた。

最強チーム

「コレが呪歌ララバイなの？」

「ホントに気味の悪い笛かしら」

エリゴールとの一戦を終え、当初の目的であった呪歌ララバイの回収に成功した『双竜』御一行。

レアが落ちていた呪歌ララバイを拾い上げたその時だった。

「ナツー!! レアー!!」

聞き覚えのある声が耳に入る。

そちらに目を向けると、エルザの運転する魔動四輪が見えてきた。

「お！ 遅かったじゃねえか」

「ん、もう終わったの」

そう言つてレアは持っていた呪歌ララバイを高々と上げて振る事で、エリゴールを倒し、笛は回収した事を伝える。

それを運転していたエルザは今も尚魔力を車に供給し続けている事もあり、苦しそうながらも「さすがだ」と零し笑みを浮かべる。

一方、グレイはエリゴールはもう既に倒され、出番が無いことに不満なのかと「けっ」と呟いて二人を見ていた。

その後ろで、ナツがオシバナ駅から連れ出したカゲヤマが、レアの手に握られている笛を信じられないという形相で見ている。

「そ……そんな！ エリゴールさんが負けたのか!？」

そんなカゲヤマに答える者はおらず、グレイに続いて車を降りたルーシイは、運転席から降りたエルザに肩を貸す。

「つたく、あんなの相手に苦戦しやがって」

「苦戦？ 圧勝だよ！」

「ん！ オーバーキルで完全勝利なの」

「微妙なトコだね」

「オーバーキルはそうだけど結果論かしら」

やはり不満が拭いきれないグレイはボロボロの二人を見てそう言う。

確かに二対一で服をボロボロにされての勝利では苦戦していたと言われても仕方ないだろう。

ナツは上半身裸にマフラー、下半身は無事といえどボロボロになっているのには変わりなく、レアに至っては上はスポーツブラ一枚、下はホットパンツ一枚と、ギルドでいつも酒を飲んでいるカナよりも危ない格好だ。

水着と露出度はそう変わらない。

「何はともあれ見事だ。これで総長たちは守られた」

話を切り替えたエルザの言葉に、みんな等しく笑い合う。

そのままクローバーに向かい、笛の処分についての指示を仰ごうと提案し、レアがエルザに笛を渡そうとしたその時…。

ブルウウウン！ドゴオオン！！

「油断したな妖精ども！ 呪歌はここだ！！ざまあみろー！！」

なんとカゲヤマが誰も乗っていない魔動四輪を乗っ取り、得意の影の魔法で笛を横取る。

そしてそのまま車を走らせ、高笑いを上げながらクローバーへと向かっていつてしまった。

突然のカゲヤマの行動に、妖精の尻尾はしばらく動くことができなかった。

「あんのヤロオオオ!!!」

「何なのよ!! 助けてあげたのにー!!」

「追うぞ!!!」

エルザの掛け声で走り出す五人と二匹だが、車と人の足ではただただ離される一方であった。

~~~~~

空はすっかり暗くなり、町に明かりが着きだす頃、ギルドマスターの集まる定例会会場を見下ろせる峠の上から見下ろす影が一つ。

「(よし…定例会はまだ終わってないみたいだな)」

妖精の尻尾から呪歌を取り戻したカゲヤマである。

「(この距離なら十分呪歌の音色が届く。ついに…ついにこの時が…)」

ようやく自分たちの苦しみは終わる。

そう思つて笑みを浮かべるカゲヤマだったが、突然その肩にポンと手を置かれる。

ビクツと心臓が跳ね上がり、ゆっくりと後ろを振り向くと…。

むぎゆう

「ふひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!!! ゲホツゲホツ!!!」

人差し指がカゲヤマの頬に当たる。  
手を置いた男の正体は妖精フェアリーテイルの尻尾マスターの総長であるマカロフであった。  
古典的なイタズラに引っかけた事が余程面白かったのか腹を抱えて笑う。

が、直後に噎せてしまった。

「いかんいかんこんな事してる場合じゃなかった。急いであの四人の行き先を調べねば…町一つ二つ消えかねん……！」

と、噎せた事が原因か本来の目的を思い出し、足早にそこを去ろうとする。

マカロフは包帯姿のカゲヤマを病院の患者と勘違いしたのか、病院に早く帰るよう催促した。

そこでカゲヤマも、この老人の正体が妖精フェアリーテイルの尻尾マスターの総長であるマカロフだと言うことに気づき、慌てて引き止める。

「一曲…聴いていきませんか？ 病院は楽器が禁止されているもので……」

マカロフに病人であるという誤解を利用し、そう近づく。  
しかし緊張からか冷や汗は隠せておらず、マカロフは訝しげに見つめる。

「誰かに聴いてほしいんです」

「気持ち悪い笛じゃのう」

「見た目はともかく、いい音が出るんですよ」

マカロフは一度うーんと唸ってから、目を細めて口を開く。

「急いどるんじゃ。一曲だけじゃぞ」

「ええ。(勝った!)」

その言葉を待っていたと言わんばかりに笑うカゲヤマ。  
よおく聴くように一言入れ、笛を口に近づける。  
これで吹けば全てが変わる。

カゲヤマの脳裏に浮かぶのは、仲間たちの正規ギルドに対する侮  
辱。

『正規ギルドはどこもくだらねエな!!』

『能力が低いくせに、イキがるんじゃねえつての!!』

『これはオレたちを暗い闇へと閉じ込め…生活を奪いやがった魔法界  
への復讐なのだ!!』

『そんな事したって、権利は戻ってこないのよっ!!』

ふと浮かんだのは、自分たちが見下し、散々バカにしてきた妖精<sup>ハエ</sup>  
うちの一人の言葉。

自分の心臓の鼓動が早くなるのに気づく。

『もう少し前を向いて生きろよ、オマエ等全員さ』

『カゲ!! お前の力が必要なんだ!!』

ドクン、ドクン……

『同じギルドの仲間じゃねえのかよ!!!』

『レアはこんなギルド絶対に認めないのっ!!!』

ドクンドクンドクン!

自分の心臓の鼓動がうるさい。

しかし、妙に胸につつかえる何かが、笛を吹くことを拒んでいる。  
そうこうしているうちに、カゲヤマを追いかけていた妖精<sup>フェアリー</sup>の尻尾<sup>テイル</sup>  
一行が、ようやく追いついた。

「いた!!」

「じつちゃん!!」

「おじいちゃん!!」

「総長!!」

カゲヤマを止めようと、茂みから飛び出そうとする。

しかし、それを止めたのはマカロフの同期である青い天馬ブルーベガサスの総長マスターであるボブだった。

「今イトコなんだから見てなさい♡」

と、直ぐにナツとグレイへ標的変更ロツクオンするボブに、ルーシイは少し引いた態度を取る。

「総長ボブ!」

「あらエルザちゃん大きくなったわね」

思わぬカミングアウトに、ルーシイも思わず「この人が!？」と声を上げる。

と、そんな茶番を繰り広げている間にも、事態は進展していた。

「どうした? 早くせんか」

「……」

一刻も早く問題児四人の行方を追いたいマカロフはそう催促する。カゲヤマ自身、胸のつかかりは取れておらず、モヤモヤする気持ちが残るまま笛を握る力を加える。

いよいよかと思ったエルザが再び飛び出そうとするも、今度はボブとは別の者に止められる。

「だから黙ってなって。面白エトコなんだから」

クワトロケルベロス  
四つ首の獵犬の総長であるゴールドマインであった。

ニヤニヤした表情でマカロフ達のことの成り行きを見守る。

そしてマカロフも、細めていた目を開き、下からカゲヤマを睨み上げた。

「さあ」

「…!!! (吹けば…吹けばいいだけだ。それで全てが変わる!!!)」

圧に耐えきれず、笛を口に付けるも、やはり吹けない。

心でそう叱責するが、次のマカロフの言葉に、全身が凍る感覚を覚える。

「何も変わらんよ」

「!?!」

全身の鳥肌が逆立つ。

確実にさっきの心の声は自身の内に秘めていたはずなのに、マカロフは心が読めるかのようにそう言い放った。

「弱い人間はいつまで経っても弱いまま。しかし弱さの全てが悪ではない。もともと人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安だからギルドがある。仲間がいる」

自分の心の内を見透かしているかのように、的確に言葉を連ねるマカロフ。

カゲヤマは動くことも出来ず、ただただその言葉に耳を傾ける。

「強く生きる為に寄り添いあって歩いていく。不器用な者は人より多くの壁にぶつかるし、遠回りをするかもしれん。しかし明日を信じて踏み出せば、おのずと力は湧いてくる。強く生きようと笑っていけ



る。

そんな笛に頼らなくてもな」

そう最後に締めくくり、ニカツと笑った。

「(さすがだ……。全てお見通しだったか……)」

感服。

それに尽きた。

力なく笛を落とし、カゲヤマは地面に膝を着いてマカロフに頭を垂れた。

「参りました」

六文字の降伏の言葉によって、アイゼンヴァルト鉄の森との戦いに決着が着いた。  
近くで隠れていた妖精の尻尾の面々もマカロフに向けて飛び出した。  
フェアリーテイル

マスター「総長!!」

「じっちゃん!!」

「おじいちゃん!!」

「jeeさん!!」

それぞれの呼び方で飛び出し、笑顔でマカロフを囲った。

一方マカロフはというと理解不能というばかりに目を見開かせていた。

「ぬおおおっ!!なぜお主らがここに!!?」

「さすがです!今の言葉、目頭が熱くなりました!!」ガシヤツ

「固ーっ!!!」

真っ先にエルザがマカロフに近づき、抱擁を与える。

しかし本日三回目、被害者四人目ともなればもう良いだろう。  
鎧に頭を打ち付けて痛い思いをするだけに終わった。  
エルザから解放されたマカロフは、今度はナツとレアから交互に頭  
をペシペシと叩かれる。

「じつちゃんスゲエなア!!!」

「ん！ 言葉だけで止めちゃったの!!」

「そう思うならペシペシせんでくれい……」

「ホラー ……アンタ医者行くわよ」

「よくわからないけどアンタもかわいいわく〜♡」

一方力なく項垂れているカゲヤマにはルーシイが近づき、マスター総長ボブ  
も彼をロックオンする。

一件落着。

そう思われた時だった。

『全く……どいつもこいつも根性のねエ魔導士どもだ』

なんと、笛であるはずの呪歌ララバイが突然目を光らせ、言葉を発した。  
その頭上には巨大な魔法陣が現れ、笛からは煙が出てくる。

『もうガマンできん。ワシが自ら喰らってやろう』

そして煙はだんだんと形になっていく。

頭上の魔法陣が消え、代わりに現れたのは…。

『貴様らの魂をな……』

巨大な木のバケモノだった。

大きさは定例会会場を悠々と超えており、腹には巨大な穴がポッコ  
リと空いている。

所々に樹木を思わせるような木の枝が生えており、顔は笛の時と変わらない三つ目がコチラを睨みつけている。

「な…何だ!? こんなのは知らないぞ!!」

「あらら大変…」

「こいつアゼレフ書の悪魔だ!!!」

誰しもが突然現れたバケモノに目を奪われ、定例会会場は大パニック状態だ。

助太刀しようにも、その半数以上が年老いた老人。体の不調を訴える者も出ており混乱を極めている。

「一体…どうなってるの? 何で笛から怪物が…」

誰もが抱えた疑問を口に代弁したルーシィ。

それに対し、正体を知っているであろうゴールドマインが解答した。

「あの怪物が呪歌ラッバイそのものなのさ。つまり、生きた魔法。それがゼレフの悪魔だ」

「黒魔導士ゼレフ。魔法界の歴史上最も凶悪だった魔導士…。何百年も前の負の遺産がこんな時代に姿を現すなんてね…」

ゴールドマインに続いてボブも口を開く。

テンションは変わらないようだが、その額には冷や汗が流れており、現状のヤバさをヒシヒシと感じていた。

「さあて…どいつの魂から頂こうかな」

「なんだと…!!」

「…魂って食べれるの?」

「そこじゃないでしょ!!!」

呪歌<sup>ララバイ</sup>の實質の死刑宣告に、レアがいつもの天然をカマしてルーシイにツッコまれる。

良くも悪くも緊張感が無い。

その間に国の軍隊が現れたが、呪歌<sup>ララバイ</sup>の放った魔法が山一つを消し飛ばし、さっさと退却してしまった。

「決めたぞ。全員まとめだ」

「おもしれエ!! やってみやがれ!!」

再び呪歌<sup>ララバイ</sup>がコチラへと振り向き、そう告げる。

山一つ破壊する怪物と相對するは妖精<sup>フェアリーテイル</sup>の尻尾であるナツ、レア、グレイ、エルザの四人である。

「たった四人で、何するつもりなの…?」

「ルーシイは?」

しかし同じチームであるハズのルーシイは戦闘には参加しないらしく、四人よりかは一歩引いた、しかし守るべきギルドマスター達よりは前にといい微妙な場所に立っていた。

ハッピーの言葉に、ルーシイはそっぽを向く。

「今日<sup>ララバイ</sup>は使える星霊<sup>スタースピリット</sup>いないし、みんなの足引<sup>アシタビ</sup>張るかもしれないし…」

「言い訳かしら」

「うるさい猫っ!!」

のほほんと嬉しそうに撤退するルーシイにそう言葉を挟んだフリーシャ。

しかし、戦闘開始はすぐだ。

呪歌<sup>ララバイ</sup>は再び魔法陣を展開し、周囲に不協和音を発する。

思わず耳を塞ぎたくなるような不快感の中、妖精<sup>フェアリーテイル</sup>の尻尾の総長<sup>マスター</sup>であ

るマカロフだけは、ニヒリと笑ってみせる。

「行くぞ！」

「おう!!」

「ん！」

エルザが声を上げて先陣を切り、続けて三人も呪歌ララバイにかかる。

いの一番に飛び出したエルザはすぐさま自身の鎧を”天輪の鎧

”へと換装し、二本の剣を用いて呪歌ララバイの胸を切りつける。

それに続いたのはグレイだ。

「アイスメイク ”槍騎兵ランス”!!!」

無数の氷の槍が飛び出し、その全てが呪歌ララバイの巨大な体に命中する。

あまりの破壊力に大きく怯んだ呪歌ララバイ。

だがまだまだ。

「これでも食らえ！ 火竜の鉄拳!!!」

「木は木らしく埋まっているの!!! 水竜の鉤爪!!!」

ナツが炎を纏った拳を呪歌ララバイの顔面に叩き込み、レアがその頭上から水流を纏った足でかかと落としを決めた。

「小癩な！ 鬱陶しいわア!!!」

呪歌ララバイも負けじとその巨体を振るうが、四人には当たる気配は無く、再び斬られ、氷の槍を撃ち込まれ、炎と水の打撃を叩き込まれる。

呪歌ララバイに対して一切隙を見せず、一切休息も与えないその連携ぶりに、その場にいる全員が目を見開かせる。

だが、ようやく呪歌ララバイのターンである。

頭上に展開されていた魔法陣が口に取り込まれ、周囲が地響きで揺

れる。

「なんかヤバそう!!」

「呪歌来るよ!!!」

そう。

音色を聴いた全ての魂を喰らう集団呪殺魔法の本領発揮だ。  
周囲の緑は枯れていき、呪歌ララバイに取り込まれていく。

「貴様らの魂頂くぞ!」

聴かせれば勝ちの魔法が今…!

プス〜……

「何コレ!!?」

「すかしっぺ!!!」

発動しなかった……。

「な、なんじゃこの音は!!! ワシの自慢の音色は一体どこへ!!!」

あまりにも情けない気の抜けるような音に、ルーシィ達だけで無く  
呪歌ララバイ自身も唾然とする。

それもそのハズである。

魔法といえど所詮は笛だ。

さつきまで剣やら氷やらで傷つけられまくればそりやいずれ破損  
する場所が現れる。

破損すれば笛なのだから欠陥品となりちゃんと音は出ない。

「散々引っ張るだけ引っ張っておいてこのオチ!」

「オイラお腹空いちやった」

完全に勝った雰囲気が出るが、まだ呪歌ララバイという名の怪物が残っている。

やはり緊張感が足りなさすぎる。

「ぎけんなア!!!」

呆然としてしまった呪歌ララバイだが既に立ち直るが、自身の自慢の魔法が不発に終わった事に逆ギレし、その辺の地面を蹴り飛ばす。

だがやはり大きさは武器であり、その巨体から繰り出される八つ当たりキックは凄まじい破壊力をもたらす。

そして次に、ギルドマスターたち目掛けて炎の魔法を放った。

「アイスメイク ” 盾シールド”!!!」

食らってしまったと思い目を瞑るがいつこうに痛みがこない。

不思議に思い目を開けると、グレイが巨大な氷の盾をギルドマスター達の前に張っており、全ての攻撃を防いだのだ。

そのあまりの早業に、ギルドマスター達も目を見開かせる。

「あの一瞬でこれほどの造形魔法を!!!」

「造形魔法?」

聞きなれない単語、ルーシイが復唱する。

「魔力に形を与える魔法かしら」

「そして、形を奪う魔法でもある」

フリーシャがルーシイに説明し、ハッピーがそれに続く形で付け加える。

一方で呪歌フラバイはというと、寸前だ攻撃を防がれた事でさらに苛立ちを覚える。

しかし、突然自分が放った炎がひとりでに別の場所へと流れていく。

疑問を覚える呪歌フラバイはその終着点に目を向けると、ナツがその炎を口の中へ吸収し食べていたのだ。

「食ったら力が湧いてきた!」

「ば、化け物か貴様ア!!」

「んだとコラア!!?」

相手の力を自分の力に変えたナツは殴りかかってきた拳を難なく避け、その拳を伝って登っていく。

その間に、レアはさつき出来たグレイの盾を温度変化の魔法で水に溶かしてナツと同様それを食べ出す。

エルザは鎧を換装し、黒を基調とした鎧を身に纏う。

『黒羽くれはの鎧』と呼ばれるその鎧は、その対称に生えた二対の翼から名づけられ、一撃の破壊力を増加させる効果がある。

「アイスメイク” 円盤ソーサー”!!!」

「ん! 食べたたら力が湧いてきたの!」

さらにグレイは氷の刃の付いた円盤を作り出し、回転させながら呪歌フラバイに投げつける。

レアはグレイの盾を完食し、呪歌フラバイの体を伝ってナツと同じ場所まで登る。

一足先に円盤が体を切り刻み、エルザもその一撃を顔面に叩き込む。

「ナツ!レア!」

「今だ!!」



エルザとグレイのバトンを受け取り、二人は拳に魔力を込める。

「これでも食ってる!!」

「吹っ飛ぶの!!」

二人の魔力はさらに昂り、共鳴し、融合していく。  
魔力融合。

本当に息の合った魔導士どうしでしか実現出来ず、それを行える者は少ない。

しかし、成功すれば魔法の威力は大幅に高まり、唯一無二の合体技となる。

『双竜』として行動を共にしてきたからこそ為せる、二人の究極奥義だ。

「炎海紅蒼爆氷撃!!」

息つかぬ連撃、連撃、連撃。

二人の拳が触れる毎に爆散し、凍てつき、塵にしていく。

呪歌は堪らず悲鳴を上げながら倒れ、その巨大な姿を消滅させていく。

閃光が瞬き、煙が立つ。

「見事!」

史上最悪の黒魔導士ゼレフが作り出した悪魔をこうもあっさり倒してしまったのは、たった四人の妖精の尻尾の魔導士だった。

「これが…妖精の尻尾の魔導士か…!」

「さっすが最強チーム!! チョーカツコイ!!」

「どうじゃー!すごいじゃろおおっ!!!」

カゲヤマは自身らを圧倒した妖精の尻尾フェアリーテイルに驚愕し、感服した。  
ルーシイも感激の声を上げ、マカロフも自分の事のように声を上げ、高笑いしていた。

「経緯いきざつはよくわからんが、妖精の尻尾フェアリーテイルには借りができちまったなア」  
「なんのなんのー!!!」

ゴールドマインからそう言われ、マカロフはさらに高々と笑い声を上げる。

だが、それはすぐに途切れる事となった。  
それは、マカロフの視線の先を見ればすぐに分かった。

「二「やり過ぎだアー」」

それは粉々になってしまった定例会の会場の有様であった。  
しかもそれどころか町に加えて向こうに見える山も一つか二つ消えていたのだ。

「なっはっはっはっは!! また見事にぶっ壊れちまったなア!」  
「ん、もう見る影もないの」

妖精の尻尾フェアリーテイル全員が呆然とする中、ナツは呑気に笑っており、レアは何処か他人事のような一言を呟く。

「捕まえろー!!!」

「おしー任せとけ!!」

「鬼ごっこは得意なの!」

「オマエらは捕まる側だー!!!」

これにて、鉄アイゼンヴァルトの森の引き起こした呪歌事件フラバイは閉幕した。  
しかし、ある意味別の意味でも、妖精の尻尾フェアリーテイルはまた一つ、伝説の一

ページを歴史に刻んだのだった。

## 悪魔の島編

ナツ vs. エルザ

「ふう……」

ここはマグノリアのとあるアパート。  
ルーシイの家である。

その後、マグノリアまでの道で迷うというアクシデントはあったものの無事帰ってきたのだ。

クローバーにいたカゲヤマや、オシバナ駅で伸びていた鉄アイゼンヴァルトの森の面々は逮捕された。

しかし、ナツとレアが谷の底へ落としてしまったエリゴールだけは行方不明であり、逮捕には至っていないのだとか。

ルーシイはそのような旨を手紙に書き留め、封に入れてスタンプを押した。

一息ついたルーシイは大きく伸びをする。

「今日は買い物しよーつと。ハラハラドキドキの大冒険もいいけど、やっぱり自分の家は落ち着くなア」

「これで家賃7万Jは確かに安いなあ」

ふとそんな声がルーシイの耳に入る。

不思議に思っ声の聞こえた方向へ視線を向けると…。

「いいトコ見つかったな、ルーシイ」

「やっぱりココ過ぎしやすいの」

「不法侵入ーっ!!! しかも人ん家で服脱ぐなー!!!」

「ぐほお!?!」

いつかの時のナツと同様、我が物顔でソファにどっかり座るグレイ、そのソファの横の地べたに座ってジュースを飲んでいるレアが視界に映った。

ルーシイは見事な曲線を描きながら足を振り上げてグレイの顎にクリーンヒットさせる。

その際に前回同様一緒にレアを狙ったものの、やはり首をクイツと動かして避け、グレイだけに命中する形となった。

「ちよつと待てエ誤解だ!! ……脱いでから来たんだが」  
「帰れ!!」

一体何が誤解なのか理解不能である。  
どっちみちアウトだ。

ルーシイはビシツと扉を指さして二人に帰るよう促すが、座っていたレアが立ち上がる。

「例のアレ今日なの。ルーシイいつまで経っても来ないからレアたちが呼びに来たの」

「アレ？」  
「やっぱ忘れてたか」

そう言うレアだが心当たりの無いルーシイは頭の上に疑問符を浮かべる。

その様子にグレイはヤレヤレと言った様子で口を開いた。

「出発前にナツが言ってただろ？ ナツとエルザが戦うんだ！」

くくく

場所は変わって妖精の尻尾ギルド前。

そこではとある二人の人物を囲むように人が群がっていた。

その人物こそ、グレイが言っていた本日の主役、決闘をするナツとエルザである。

「ちよ…ちよつと本気なの!?二人とも!!」

「あらルーシイ」

ここで、遅れてやって来たルーシイが人混みを無理やりかき分けてナツとエルザが見える位置まで出てきた。

その表情は焦りで満たされている。

「本気も本気。本気でやらねば漢では無い!!」

「エルザは女の子よ?」

「怪物のメスさ」

だがルーシイとは対照的に、他のメンバーたちは止める気は全く無いらしく、決闘が始まるのを今か今かと待ちわびていた。

そんな様子を見て、ルーシイはさらに不安が募る。

「だって…最強チームの二人が激突したら…」

「最強チーム? 何だそりゃ」

「あんたとナツとレアとエルザじゃないっ!!  
フェアリーテイル  
妖精の尻尾のトップ4でしょ!」

「はあ?」

グレイはルーシイの発した『最強チーム』に疑問を浮かべ聞き返す。それに対しルーシイはなぜ理解できないんだと言わんばかりに語気を強くして返す。

「くだんねエー! 誰がそんな事言っただよ」

しかしグレイにとってそれは不満だったようで、鼻で笑いながらそ

う言った。

しかし、そのトゲのある言葉はしっかりと言った張本人であるミラの耳にも届いていた。

笑顔を浮かべていたミラだったが、その顔はすぐに曇り、両手で覆ってしくしく泣き出した。

それを見たグレイも分からないほど鈍い訳でもなく、このタイムミン  
グで泣き出すミラにグレイは気まずそうな表情を浮かべる。

「あ……ミラちゃんだったんだ………」

「グレイがミラ泣かせたの」

「確かにナツやグレイの漢気は認めるが……」 最強 ” と言われると  
黙っておけねえな。妖精の尻尾にはまだまだ強者が大勢いるんだ。  
オレとか!」

「最強の女はエルザで間違いないと思うけどね」

「最強の男となると、ミストガンやラクサスもいるし」

「それに『グラン』に、あのオヤジも外す訳にはいかねえな」

話はいつの間にか妖精の尻尾の最強魔導士談義になっていった。

エルフマンを筆頭に、チームシャドウギアのレビイ、ジエツト、ド  
ロイの三人も口を開く。

最強女魔導士はエルザで間違いないようだが、男となると次々と名  
前があがる。

そんな中、未だに涙を流しているミラが言う。

「私はただ、ナツとレアとグレイとエルザが一番相性がいいと思った  
のよ」

「あれ……? ナツとグレイはエルザがいなくて喧嘩するからつ  
て心配してませんでした……?」

しかし、ミラの言う理由と自分が最強チームに付き合うことになっ  
てしまった理由との矛盾にルーシイは疑問符を浮かべる。

「なににせよ、面白エ戦いになりそうだな」

「そうか？ オレの予想じゃエルザの圧勝だが」

「圧勝は無いの……。対面からなら、接戦した上でナツが負けるに一票なの」

「結局エルザの勝ちは確定!？」

対照的な予想をするエルフマンとグレイにレアが口を挟む。

長い間コンビを組んでいたが故に、レアはナツの実力を一番よくわかっている。

だがそこから分析した結果はあまりに無慈悲すぎるが故にルーシイにツツコまれる。

一方対面しているナツとエルザはお互いに声を掛け合っている。

「こうしてお前と魔法をぶつけ合うのは何年ぶりかな」

「あの時はガキだった。今は違うぞ……。今日こそお前に勝つ!!」

「私も本気でいかせてもらうぞ。久しぶりに自分の力を試したい……」

そう言うと、光がエルザの全身を包む。

お馴染みの換装である。

光が消え、赤と橙が目立つ鎧を纏ったエルザが相見える。

髪はロングストレートからツインテールに纏めてあり、片手には魔法剣。

鎧は肩から二の腕、太もも以外に炎を模した鎧を纏っている。

鎧の名は『炎帝の鎧』

火に対しての耐性が高く、火の魔導士として高いレベルに行くナツの炎も、この鎧を前には半減されてしまう。

そのエルザのあまりの本気具合にやり過ぎだという野次が飛んでくる。

そしてその現状を見たナツの相棒であるハッピーはというと。



「やっぱりエルザにかけていい?」

「何て愛のないネコなの!!!」

非公式に賭けを行っているカナに、ハッピーが今から賭けの対象を変更できるか聞いていた。

友情より現実を見るネコの行動にルーシイもすかさずツツコミを入れた。

「あたしこーゆーのダメ! どっちも負けてほしくないもん!!」

「意外と純情なのな」

ルーシイはそう言うが、その発言とは反対に場のボルテージはどんどん高ぶる。

ナツはエルザの炎帝の鎧を見て臨むところだと言わんばかりにニツと口角を上げた。

「炎帝の鎧かあ……そうこなくちや。これで心置き無く全力が出せるぞ!!」

そう言うて炎を手に纏わせるナツは姿勢を低くさせて、真っ直ぐエルザを見据える。

数秒の沈黙が場を支配する。

が、ついに戦いの火蓋は切つて落とされる。

「始めいっ!!」

「だりやっ!!」

いつの間にか審判としてその場にいたマカロフが声を上げると同時にナツが炎を纏った拳をエルザに振るう。

しかしそれをエルザは苦もなく後ろに少し下がるといふ最小限の

動きで躲し、すぐさま横薙ぎの一閃。

だがナツもこれを頭を下げることで躲し、今度は頭目掛けて炎を纏った蹴りを打ち込む。

しかしこれも間一髪のところ躲される。

エルザは再び剣を薙ぎ払うも、ナツは振り上げた足の勢いをそのまま利用してバク転でそれを避ける。

「ぐっ！」

しかしその地面についた手を隙と見たエルザは足払いをしてナツのバランスを崩させる。

だがタダでは転ばないナツ。

転倒状態のままナツは口から炎のブレスを発射しエルザを寄せ付けない。

横へ横へと逃げるように避けるエルザを、ナツは転んだ状態から四つん這いになって体制を立て直しブレスをエルザの方向へと向ける。

その途中でブレスがギャラリーの足元に着弾して火柱を上げる。

ギャラリーから悲鳴が上がるが、戦っている二人にはそんなものは耳に入らない。

「すごい!!」

「な? いい勝負してるだろ」

「どこが」

「ん。前と比べたら、明らかに動きの質が違うの。ワンチャン、ナツの可能性も出てきたの」

一進一退の攻防を繰り返すナツとエルザにルーシイは感嘆の声を上げる。

エルフマンが予想通りと言わんばかりに声を上げ、それを反対するグレイ。

しかし、今の今まで瞬殺されていたナツと比べれば今回は明らかに

違う。

決定的な攻撃は通っていないもののナツ自身もエルザから決定的な攻撃を受けていない。

本来なら二撃目でやられていたであろうナツが、最強の女魔導士であるエルザに食らいついている。

レアの言う通り、極わずかな可能性ではあるが、ナツの勝つ可能性も見えてきた。

エルザが剣を振り下ろし、ナツが拳を振りかぶる。

互いにぶつかり合おうとするその瞬間。

パン!!!

突然そんな甲高い音が響き、その場にいた者たち全員の動きを止めた。

それは戦っていたナツとエルザも例外では無い。

「そこまでだ。全員その場を動くな。私は評議院の使者である」

そう言つて人混みの間を抜けてきたのは、二足歩行のカエルであった。

もう一度言おう、人語を普通に喋る評議院の正装を身にまとった人と大して背丈の変わらない、いやなんなら常人より頭一つ大きい二足歩行のカエルである。

「評議院!!!」

「使者だつて!!!」

「何でこんな所に!!!」

「あのビジュアルについてはスルーなのね……」

その『評議院の使者』という存在に全員が驚く。

しかしただ一人『二足歩行のカエル』という存在が気になったルーシイはそう呟いた。

二足歩行の羽の生えた喋るネコが二匹飛び交うギルド内ではビジュアルがカエルというだけでは驚かないのだろうか…。

「先日の鉄アイゼンヴァルトの森テロ事件において、器物損壊罪他11件の罪の容疑で……

エルザ・スカーレットを逮捕する」

「……え？」

「何だとおおおっ!!!?」

淡々と告げられた宣告に、ナツだけがそう叫んだ。

くくく

妖精の尻尾フェアリーテイルのギルド内の酒場。

いつものバカ騒ぎが嘘かのように、今はしんと静まっていた。

数時間前までこの面でナツとエルザが決闘をしていたはずだったのに、そのエルザは突然来訪した評議院の使者によって連れていかれてしまった。

そして対戦相手が居なくなったナツはというと…。

「出せっ!!オレをここから出せえっ!!」

「ナツ……うるさいわよ」

「出せーっ!!」

小さなトカゲに変身させられ、逆さまのコップに閉じ込められていた。

「出したら暴れるでしょ?」

「暴れねえよ!! つーか元に戻せよっ!!!」

「出したら『エルザを助けに行く!』って言うでしょ?」

「言わねーよ!誰がエルザなんか」

そう言ってそっぽを向くナツだが所詮口だけだ。

彼はこの妖精の尻尾フェアリーテイルの中で群を抜いて『仲間』というものに重きを置く男だ。

そんな彼に並ぶほど仲間に対して情に厚いのがレアだ。

実際問題、エルザが評議院の使者に連行されそうになった時、この二人はエルザを連れて行かせまいと派手に暴れたのだ。

ギルド総出で二人を抑えかかるも、『双竜』を抑え込める魔導士は、今このギルドにはエルザ以外に居なかった。

結果二人はエルザを追いかける。

しかしナツだけはマカオが捕まえることに成功し、今はレアを追いかけているのだとか。

「今回ばかりは相手が評議院じゃ、手の打ちようがねえ…」

「出せーっ！ オレは一言言つてやるんだ！ 評議員だかなんだか知らねえが、間違ってるのはアイツらだろ!!」

「白いモンでも評議員が黒つて言えば黒になるんだ。ウチらの言い分なんか聞くモンか」

以前にミラがルーシィへ説明した通り、評議院とは魔法界における全ての秩序を守る為に存在する。

文字通り全てであり、罪人への刑罰もここで決定される。

決定権も評議院にあり、それ以上の権力は存在しない為ここで判決が下されば覆すことは不可能だろう。

しかし、それだけがここにいる皆をここに縛り付けている訳では無い。

一番の原因は『何故今更なのか』だ。

これまでも数々の問題行動を取ってきた妖精の尻尾フェアリーテイルだが、何故今回に限って評議院が動く事になったのか。

確実に何か裏があるということも、妖精の尻尾フェアリーテイルの何人かも理解はしていたが、その裏が何かを読める者はただ一人を除いて居なかった。

「やっぱり放っておけないっ！ 証言をしに行きましょう!!」

「まあ待て」

そう声を上げたのはルーシイだった。

机を叩いて立ち上がり、評議会へと向かおうとするも、それはマスターであるマカロフによって止められる。

「何言ってるの!!これは不当逮捕よ!判決が出てからじゃ間に合わない!!」

「今からではどれだけ急いでも間に合わない」

「でも…!」

「出せーっ!」

弁護に向かいたいルーシイとここに留まるよう促すマカロフ。

完全に平行線を行く二人の口論はナツの声によって終止符を打つ。

マカロフはナツの方を見ずに静かに口を開く。

「本当に出しても良いのか?」

するとナツはあつと声を漏らすと、急に静まり返り、目を細めて気まずそうに顎をポリポリと掻き出した。

その様子に周りの者は訝しげに見つめ、マカロフはニヤリと笑う。

「どうしたナツ? 急に二気が無くなったな」

そう言いながら笑みを浮かべるマカロフは、右手をナツを閉じ込めているコップへ向ける。

すぐさま魔力弾が発射され、閉じ込められていたナツごとコップを吹き飛ばす。

トカゲになる変身魔法が解除され、中から現れたのは…。

「マカロフ!!?」

「何で!!?」

「すまねえな……ナツとレアには借りがあつてよオ…」

紫の髪をオールバックにした中年男性、マカオ・コンボルトであった。

思わぬ人物の登場にギルド内が騒然とする中、マカオはバツの悪そうな笑みを浮かべる。

以前ハコベ山にて二人に助けられてから返そうと思っていた借りを今ここで返すことに決めたマカオはトカゲに変身してナツの振りをし、エルザを追ったレアを追いかけたという名目で自身の姿をも誤魔化すことで時間を稼いだと説明する。

その説明を受け、じゃあ本物のナツとフリーな状態のレアはと問われ、そのままエルザを追っただろうとマカオは申し訳なさそうに答える。

「シヤレになんねえぞ!! アイツらなら評議員すら殴り蹴り飛ばしそ  
うだ!!」

双竜が引き起こすであろう最悪の事態に、何人かは顔を青ざめ、すぐに止めようとその場から動き出すも、マカロフは「全員黙っておれ」と声を上げる。

「静かに結果を待てばよい…」

たったそれだけの言葉に、一体どれだけの意味があるのか、全て把握できる者はこの場には居なかった。

しかし、そのたった一言で評議会に向かおうとした者は一人も居なくなつた。

くくく

場所は変わって、評議院ファイオーレ支部の裁判所。

「被告人、エルザ・スカーレットよ。先日の鉄アイゼンヴァルトの森によるテロ事件において……」

手錠を掛けられ、証言台に立つエルザ。

その眼前には、書記官と見られる二名。

そして、裁判官にあたる評議員十名の魔導士が見下ろす形で座っている。

「……これら破壊行為の容疑にかけられている。目撃証言によると……犯人は鎧を着た女魔導士であり……」

淡々と裁判が進む。

しかしそんな時だった。

ドゴオン!!!

「何事!?!」

突然法廷の扉が勢いよく破壊される。

荒々しく破壊される扉に、誰もが敵襲かと身構えた。

そして大穴をくぐって現れたのは……

「鎧の女魔導士なら、ここにいるぞっ!!……なの」

「そうだー!! 捕まえられるモンなら捕まえてみやがれええっ!!!」

妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士であるナツとレアであった。

しかし、何故かレアは赤いウィッグにエルザと似たような鎧姿とエルザに変装している癖に口癖は直っておらず、結局レアだとバレてい

る。



声のトーンからして明らかに違うのだが…。

「それあギルドマスターのいのちよりも重てえ罪なんだろうなア!!  
あ!?!」

暴れるだけ暴れ回ったナツとレア。

最後にナツがそう叫んで評議員へ指差し、場は沈黙に包まれる。  
数秒の間を置き……。

「……三人を牢へ」

「も……申し訳ありません……」

「エルザ! こんな奴に謝る事なんかねえ!!」

「ナツ、違うの……それエルザの偽物なの」

「あ……そうだ……エルザはコツチだーっ!!」

二人してそんな茶番を繰り広げながら、結局三人は仲良く牢へと入る事となるのだった。

くくく

日はすっかり沈み、夜が更ける頃。

ナツとレアは膝を組んで座るエルザの前で正座していた。

「おまえ達には呆れて言葉もない。これはただの ” 儀式 ” だったんだ」

「ぎ……儀式?」

「な……なの?」

こめかみをピクピクとひくつかせながら睨むエルザに、ナツとレアはビクビクしながら反応する。

「形だけの逮捕だ。魔法界全体の秩序を守る為、評議会としても取り締まる姿勢を見せておかねばならないのだ」

「なんだよそりゃ…意味わかんねー」

「ん、どういう事なの……」

そうして今回の逮捕の真相について語ったエルザだったが、おつむが少々足りない双竜二人は揃って頭を傾げる。

そこまでできてエルザもわかりやすく額に怒りマークを浮かべながら二人に言葉を掻い摘んで言った。

「つまり有罪にはされるが、罰は受けない。今日中にでも帰れただ。おまえ達が暴れなければな！」

「えーっ！っ!!?」

「な…の!?!」

そこまで言われてようやく理解した二人は揃って驚愕を表情に浮かべ、すぐさまわかりやすく意気消沈した。

エルザの呆れの眩きに、それぞれ「スマネエ」「ごめんなさいなの」と零した。

だが、エルザは既に怒ってなどおらず、慈愛の眼差しで二人を見る。

「だが、嬉しかったぞ」

その一言に、ナツは気まずそうにそっぽを向き、レアはポカンとして頬をかいた。

その直後、ガシャン！と何かが鎧に打ち付ける音が響き、二人分の短い悲鳴が響いた。

それを遠くから見ている者が一人いた。

「なるほど……妖精の尻尾フェアリーテイルにいたのか……ナツ・ドラグニル。そしてレア・ギルティ……」

評議員のうちの一人である青髪の青年……ジークレインであった。

## 2階

「やっぱりシャバの空気はうめえ!! 最高にうめえっ!!」

翌日、なんだかんだあつたものの三人は無事釈放され、ギルドに戻ってきていた。

そしてその三人のうちの一人であるナツはナツ専用のファイアグルメの一つであるファイアドリンクの入ったジョッキを片手に炎を吐きまくりながら「フリーダアアム!!」と叫び自由を満喫している。牢屋に入って一日も経っていない癖に。

そのやかましさに周囲は顔を顰め「もうちよつと牢屋に入っておけばいいのに」と内心呟くのがあった。

一方そのパートナーであるレアはというと。

「やっぱり広い空間って最高なの…」

テーブルに頭を突っ伏して幸せそうな表情を浮かべていた。

どうやらレアにとって、あの牢屋の狭い空間というのはどうも落ち着かないらしく、ずっとソワソワしていたのだという。

こちらはこちらで自由を満喫していたのだった。

「結局形式だけの逮捕だったなんてね…。心配して損しちゃった」

「そうか! 蛙カエルの使いだけにすぐ帰カエルる!!」

「さ…さすが氷の魔導士…ハンパなく寒イ…」

「…グレイ、溺れるのと流されるのどっちがいいの?」

「そんなに気に障ったか!!」

ルーシイもレアと同様に頭をテーブルに突っ伏す。

だがその表情はレアとは対照的にゲンナリした様子であった。

先日のエルザ逮捕の一件の詳細は既に彼らにも説明済みであり、結

果としては評議院に振り回されただけというスッキリしない終わり方がルーシイにとつては不満なのだろう。

その隣で手をポンと叩いて呟いたグレイの言葉に、エルフマンは白目を向いて鳥肌立たせ、レアはグレイに睨みきかせている。

レアのガチトーンの脅しに、今度はグレイがブルリと体を震わせる。

そんな茶番を繰り広げる中、エルフマンが今だに走り回っているナツへ声をかける。

「で、エルザとの漢の勝負はどうなったんだよナツ」

「漢!?!」

「そうだ忘れてたっ!! エルザー!!この前の続きだーっ!!」

エルフマンに言われて思い出したナツは荒々しくジョツキをテーブルに置いてはエルザの方へ向き直る。

しかしそのエルザはというと「疲れてる」とナツの言葉を一蹴して食事をしているテーブルから動こうとしない。

だがそんなもの意に返さないナツは拳に炎を纏ってはエルザに突撃する。

「行くぞーっ!!!」

「やれやれ」

そう零したエルザは小さくため息を吐く。

そしてその重い腰を上げて再び決闘が再開する。

かと思えば…。

ドゴオン!!!

「!!!」

「仕方ない………始めようか」

「終ー了ー!!!」

エルザの換装によって取り出されたハンマーが向かってきたナツの顎にクリーンヒット。

大きく吹き飛ばされたナツは周囲のテーブルを巻き込み、最終的に壁に激突してノックアウトした。

呆気ない。

あまりにも呆気ない一連の流れに、ギルドは一斉にナツの醜態を笑う。

そんな中、ギルドの笑いに釣られるように笑みを浮かべていたミラが、隣にいるマスターマカロフの目がとろんとしていることに気づく。

「どうしました、マスター？」

「…いや…：眠い…：奴じゃ」

ミラはその言葉に言葉を続けることが出来なかった。  
なぜならミラは、力無くその場に倒れてしまったからだ。  
そしてそれはミラだけではなかった。

「！」

「これは！」

「くっ」

「眠っ」

次から次へと、ギルドメンバーはその場に倒れていく。

しかし危険は無いようだった。

根拠は、倒れた者たちは多少の差異はあれど、全員共通して小さく寝息を立てていたのだから。

マカロフ以外の全員が寝静まった頃、人影が現れる。

「ミストガン……」

全身を黒いローブで包み込み、背中には大量の杖を背負っており、外見では男か女かも分からない。

ミストガンはまっすぐリクエストボード依頼板に向かう。

一通り目を通すと、ミストガンは一番依頼料の高いクエストの紙を手にとってマカロフの前に置く。

「行ってくる」

「これっ！ 眠りの魔法を解かんかっ!!」

ミストガンから低い男の声飛び出し、さっさとその場を後にしようとする。

マカロフが身を翻したミストガンにそう言うも返事は無い。

そのまま彼はまっすぐギルドの出口へと向かっていく。

伍……四……参……弐……壹……

瞬間、ギルドで眠っていた面々は一齐に目を覚ました。

しかし、さつきまでそこにいたミストガンは既に外の霧の中へと消えていた。

そんな中、ナツとレアは未だに眠りから覚めず目を閉じたまま寝息を立てていた。

「この感じは…ミストガンか…!?!」

「あんにやろオ…!!」

「相変わらず強力な眠りの魔法だね…」

「ミストガン…?」

覚醒すると同時に心当たりのあるギルドメンバーは口々にその名前を発するが、事情の知らないルーシーは眠そうな目を擦りながら聞き返す。

それに対してエルフマンが答えた。

「妖精の尻尾最強の男候補の一人だよ」  
フェアリーテイル

「どういう訳か誰にも姿を見られたくないらしくて、仕事をとる時はいつもこうやって全員を眠らせちゃうのさ」

「何それ！ 怪しすぎ!!」

「だからマスター以外、誰もミストガンの顔を知らねえんだ」

エルフマンの言葉を継ぐように 그레이が説明をすると、ルーシィは露骨に目を見開いてミストガンという謎の男を怪しむ。

「いんや…オレは知ってっぞ」

그레이の締め言葉に、突然そんな言葉が飛び込んでくる。

ミストガンの顔はマスター以外は謎というギルド内の常識をぶち壊したその男は二階に居るらしく、メンバーは揃って上を見上げた。

「ラクサス!!」

「いたのか!」

「珍しいな…!」

「もう一人の最強候補だ」

疑問に感じるよりも早く、 그레이がそう口を挟む。

そして『ラクサス』の名前を聞き取ったナツも、ようやく目を覚ました。

「ミストガンはシャイなんだ。あんまり詮索してやるな」

逆立った金髪に側面から棘の生えたヘッドホンを付け、右目には稲妻のような傷跡。

黄土色のジャケットを着、上から黒のファークートを羽織っている。



そしてその顔面には、これでもかという程の傲慢な笑みが張り付けられており、わかりやすく見下している。

「ラクサスー!! オレと勝負しろー!!」

「さつきエルザにやられたばっかじゃねえか」

先程目覚めたナツは数分前のことも忘れているのか、ラクサスにその声を上げる。

呆れた様子のギルドメンバー全員を代表してグレイがそう呟くもナツには届かない。

「そうそう、エルザごときに勝てねえようじゃ、オレには勝てねえよ」  
「どういう意味だ…!」

「お、おい…落ち着けよエルザ…」

ラクサスは嘲笑うかのようにそう返答し、場が凍りつく。  
あからさまに下に見られる発言に不機嫌になりながらエルザはラクサスを睨み上げるも、ラクサスは揺らぐ様子が無い。  
力を誇示するように両腕を広げた。

「オレが最強ってことさー!」

「降りてこいコノヤロウ!!」

「おまえが上がってこい」

「上等だ!!」

挑発を吹っ掛けるナツだが、逆にラクサスが挑発し返す。

それにいと容易く乗ったナツはカウンター奥にある2階に通じる階段へと走り出す。

カウンターを乗り越え、階段を目の前にしたその時…。

「ぬえいっ!!」

「ぎゃつ!？」

マカロフがその小さな腕を伸ばした。

それと同時に伸ばされた腕はどんどん巨大化し、ナツまで到達すると何時ぞやの時と同様ナツを叩き潰した。

突っ伏された本人は潰された蛙のような声をあげながらもなんとか抜け出そうとじたばたしている。

「2階に上がってはならん。まだな」

「ハハッ。怒られてやんの」

「ラクサスもよさんか」

静かに言い放つマカロフにラクサスがバカにするように笑う。

それに対してマカロフも小言を入れるが言われた本人は聞こえないのかのように身を翻す。

しかし姿が見えなくなる前に、ラクサスはもう一度下の者たちに睨みつけ、口角を上げた。

「妖精の尻尾最強の座は誰にも渡さねえよ。エルザにもミストガンにもグランにも…あのオヤジにもな。オレが最強だ!!!」  
「それは無いの」

高らかに宣言したラクサスだったが、たった一人、口を挟む者がいた。

さつきまでナツと同様ミストガンの眠りの魔法から目覚めていなかったレアであった。

「……何が言いてえ」

そう小さく零したラクサスは既に、その表情から笑みが消えていた。

まだ眠いのか、レアは目を擦りながらも二階にいるラクサスを見上げる。

「だって、ラクサスの魔法じゃグランに通る技は少ないし、ギルダーツの前じゃそもそも通じるかどうか怪しいの」

淡々と言葉を連ねるレアに対し、ラクサスは額に青筋を立てている。

一部を除いた他のギルドメンバーはラクサスの怒りがいつ爆発するかをビクビクしながらも、誰も止められずただただ成り行きを見る。

「 ”最強” って、 ”最も強い” って書いて ”最強” なの。ギルド内最強なら、ギルドメンバーに苦戦してちやダメなの。それじゃ、ただ背伸びしてる男の子な…」

ドゴオン!!!

刹那、雷が落ちた。

比喩でも何でもなく、ラクサスの元に雷が落ちており、彼の周囲は黄色い稲妻がバチバチと迸っている。

「黙って聞いてりゃ随分な物言いじゃねえか？レア…」

「？ 事実を言っただけなの」

しかしレアは相も変わらず無表情であり、一体何に対してラクサスが怒ったのかピンと来ておらずキョトンと首を傾げている。

そんなレアの様子に、ラクサスはどういう訳か溢れる魔力を収め、踵を返した。

「興が醒めた。だが、これだけは明言しておく。このオレが！

妖精の尻尾最強だつてな!!!  
「フェアリーテイル」

言うだけ言ったラクサスは、そのまま2階の奥へと姿を消して行ったのだった。

くくく

「ミストガンもラクサスも、聞いた事ある名前だつたなあ」

その夜、ルーシイは帰路についていた。

川沿いを歩きながら、ルーシイは今日垣間見た妖精の尻尾最強候補の者たちを思い出し、自分の所属しているギルドは凄いいギルドなのだと改めて感心した。

さらにラクサスのあのちよつとした騒動の後の事。

ルーシイはミラから2階にあるS級冒険クエストの存在を教えてもらった。

一瞬の判断ミスが死に直結する危険な仕事の存在に冷や汗をかいたのは記憶に新しい。

妖精の尻尾でも、S級の仕事を受けられる資格を持った魔導士はマカロフに認められた6人のみであり、命がいくつあつても足りないから目指すものじゃないと釘をさされた。

「明日から仕事がんばろー!!」

ルーシイにとつても命あつての物種と考えている為、S級の仕事については興味が無い。

というより考えたくもないため、自分のできる範囲で仕事を頑張ろうとそう声を上げる。

その仕事のためにも今晚はゆっくり休もうと自分の家の扉を開けると…。

「おかえり」

「おかー」

「きやあああああ!!汗くさーい!!!」

ドスッ!

「ふんごっ!?!」

何故かルーシイの家の玄関で腹筋トレーニングをしている上半身半裸のナツと人間の片手用ダンベルを両手で持ち、上下にリフトしているハッピーが汗を撒き散らしながら歓迎したのだ。

もちろんそんな歓迎は真っ平御免なルーシイは悲鳴を上げながら腹筋で寝転がっているナツの腹にドロップキックをお見舞いした。

「筋トレなんか自分家でやりなさいよ!!」

「何言ってるんだ、オレたちはチームだろ!　ホラ、おまえの分」

「ルーシイピンク好きでしょ」

「それ以前に鉄アレイに興味ないですからっ!!!」

「ご最もなことを叫んで出口を指差すルーシイだが、笑って流すナツ。

その流れでピンク色の鉄アレイを取り出した。

しかし筋トレとは無縁のルーシイは目を剥き出しながらキレのいいツツコミを返す。

筋トレに参加しないことを理解したナツは鉄アレイを懐にしまい、今度はハッピーと揃って腕立て伏せの体勢に入った。

「エルザやラクサスを倒すには、もっと力をつけねえとな!」

「あいさー!」

「あたし関係ないし:帰ってよ!」

「今日は修行でオールだ!!」

「誰か助けてええっ!!!」

そのまま腕立て伏せを始めるナツとハッピーに変わらず説得を繰

り返すも結局無視。

終いには泣き出しながら来ることも叶うことの無い助けを呼ぶ始末。

しかし、ナツはピタリとその動きを止めた。

「オレ、決めたんだ」

突然改まってそんな事を言うナツに、ルーシイは疑問符を浮かべる。

顔を上げたナツはいつものように不敵な笑みを浮かべていた。

「S級クエスト行くぞ!!ルーシイ!!!」

「S・級!!!」

「どーしたのよそれええええええッ!!!!」

ナツの宣言と共にハッピーが大々的に見せたS級のハンコが押されたチラシを見て、ルーシイは今日一番の大声を上げながら冷や汗をダラダラとかいた。

## 呪いの島

「ちよつとどういう事!? 2階には上がつちやいけないハズでしょ!!?」

「勝手に取ってきたんだ、オイラが」

「ドロボー猫ー!!!」

未だほとぼりが冷めないままルーシイがそう尋ねると、ハッピーは何でもないようにそう答え口をあんぐりさせた。

「とりあえず初めてだからな。2階で一番安い仕事にしたんだ。それでも700万Jだぞー!」

「ダメよ!あたしたちにはS級に行く資格はないのよ!!」

脱いでいた上の服を着て、マフラーを巻くナツは無邪気な笑みを浮かべた。

「これが成功したら、じつちゃんも認めてくれるだろ!」

「本当にもう、いつもいつもメチャクチャなんだからなあ…。自分のギルドのルールくらい守りなさいよね」

しかしそんなナツに対してルーシイはドカツと椅子に座っては頬杖をつく。

正論を返すルーシイに、ナツは眉を顰める。

「そしたら、いつまで経っても2階に行けねえんだよ」

しかしルーシイは依然として行かないと突っぱねる。

行くなら二人でどうぞと口にしようにとした時、ルーシイは彼女らの存在を思い出した。

「そういえばアンタたち、レアとフリーシャはどうしたのよ」

ルーシイがナツたちにそう聞いたその時。

突然ルーシイの背後でカーテンの開く音が耳に入った。

何事かと音の方向へ視線を向けると…。

「ナツ、ハッピー、汗流してきたかしらー」

「あ、ルーシイ。おかえりなの」

「きやあああああ!! 人の私物で何一風呂浴びてるのよ!!!」

「ふぎゅ!?!」

「びぎゃっ!?!」

いつも通りの赤いワンピースを着ているフリーシャと、なんとタオル一枚しか巻いていないレアが脱衣所から現れたのだ。

悲鳴をあげたルーシイだが、すぐに私物を勝手に使われたことに憤慨し、レアに向かってドロップキックをお見舞いした。

キックはレアの腹に見事命中し、くの字になりながらフリーシャを巻き込み、壁に叩きつけられた。

何気にルーシイが初めてレアとフリーシャに攻撃を命中させた瞬間である。

「だ、だって…ナツとトレーニングしてたら汗かいたから、シャワーしなきゃルーシイの家に臭いがついちゃうと思ったの…」

「まずあたしん家でトレーニングしないでよ!!」

ご最もである。

勝手に私物を使われてご立腹のルーシイは歯を剥き出しにしてグルルルと犬のような唸り声を上げている。

しかし相変わらず天然なレアはルーシイの唸り声など何処吹く風。そのまま暖炉前にあった自分の服を手に取りその場で着ようとし



でした。

大事なことなのでもう一度。

ナツやハッピーといった男性陣がいる中、その場で着ようとしたのだ。

「ってちよつとレア!! ナツが目の前にいるでしょ!!」

「? 何でルーシイは怒ってるの? 別にナツは今関係ないの」

「お願いだから羞恥心を覚えてツ!!!」

結局、ルーシイは無理やりレアを脱衣所へと押し込んだのだった。

因みに、ナツはレアがタオル一枚で現れた時からずつと顔を赤くしながら明後日の方向を向いていた。

意外とうぶなようだ。

後からルーシイが聞いた余談だが、筋トレ中のレアは何時ぞやのホットブラ&ホットパンツスタイルであり、それらも汗を吸収する素材の為そのまま使えるのだとか。

ホットブラ&ホットパンツスタイルは平気なのにそれ以上の露出は耐性が無いナツが少し不思議に思うルーシイだった。

~~~~~

レアが服を着て、改めてハッピーはルーシイにS級のチラシを見せた。

「”島を救ってほしい” って仕事だよ」

「ルーシイも行ってみないかしら?」

猫二匹の言葉にルーシイはオウム返しに「島?」と一言。

彼女の頭に思い浮かんだのは、青い海に白い砂浜といった綺麗な島だったが、それはナツとハッピーによって否定される。

「呪いの島 ガルナ島」

「呪…!! 絶対行かないっ!!」

目を点のようにさせたナツとハッピーは不気味な笑みを浮かべながら、低い唸り声をあげるような声で囁いた。

空耳かルーシイにはひゅうどろどろとありもしない不気味な音が聞こえたような気がした。

ハッピーが魚を半分分けると言ってもルーシイには効果が無い。

「ちえーっ! じゃあ帰ろ」

「ん、拍子抜けなの」

「少しは頭冷やしなさいよねっ! てゆーかドアから出てっ!!」

そうしてあからさまにムスツとした表情をしたナツら四人は窓から見える景色から姿を消した。

毎回この方法で侵入されているのであれば、ルーシイの防犯セキユリテイにも問題あるんじゃないだろうか…。

ようやく追い出せたとため息をついたルーシイだったが、床に落ちていたあるチラシが目に入った。

「あれーっ?! 紙おきっぱなし!!?」

ハッピーが盗んだというS級クエストのチラシがルーシイの家に置き去りにされていたのだ。

ルーシイは自分が盗んだように見えるのではと頭を抱えた。

しかし、彼女の視線はチラシの端にある報酬の所へ吸い込まれた。

「ウツソオ!? 黄道十二門の鍵がもらえるの!!?」

報酬欄に書かれていたのは700万Jに加え、金の鍵がついてくるというものだった。

魔導士の報酬として与えられる金の鍵となると、それは星霊魔導士の扱う黄道十二門の鍵に絞られるだろう。

そして、星霊魔導士であるルーシイからすれば、それは喉から手が出るほどの得物である。

ルーシイがナツたちを呼び戻すまで残り3秒。

くくく

「うわーなつかしいっ！」

翌日。

結局金の鍵という報酬に釣られ、ルーシイたちはガルナ島に一番近い港町、ハルジオンに来ていた。

「ここってあたしとナツたちが出会った町よねー」

「なつかしい…って、そんな昔の事でもねえだろ」

「ルーシイばーちゃんみたい…プツ」

ルーシイが言った通り、ここはルーシイとナツたちが初会合を果たした町である。

しかしなつかしいと言うにはそれほど日は経っていないので、ナツにはマジレスされ、ハッピーには笑われる始末。

ムカついたルーシイはハッピーを一度睨んだ。

「いい？　まずはガルナ島へ行く船を探すの」

「船だと!？」

「無理無理！　ここからは泳いでいくの!!」

一度睨みきかせたルーシイはすぐに気持ちを切り替えてそう提案するも、酔いのせいで船に乗りたくないナツとレアは全力でルーシイを止めようとする。

しかし「そっちの方が無理」とルーシイに願いは届かず、ガルナ島へ行く船を探す事となった。

「ガルナ島？ 冗談じゃねえ、近寄りたくもねーよ」

「勘弁してくれ、名前も聞きたくねえ」

「この辺の船乗りは、あの島の話はしねえ」

「呪いだ何だって縁起が悪イったらありやしねえ」

「何しに行くか知らねえが、あそこに行きたがる船乗りはいねえよ」

しかし、結果は散々だった。

尋ねる船乗りにはガルナ島の名前を出すだけでこの有様だ。

話では海賊ですらガルナ島周辺の海域は避けて通るのだ。

「決定だな、泳いで行くぞ」

「泳ぐ？ それこそ自殺行為だ。巨大ザメが怖くねえなら別だがな」

「ん！ 近づいてきたら流し去ってやるの！」

「そうしたら私たちまで流されちゃうでしょうが!!」

ナツが嬉しそうにそう言うも、最後に尋ねた船乗りがそう忠告をした。

だがそんな忠告では止まる様子は無く、レアが力強く言い放った。
本気でやりかねないレアを、ルーシイは腕を掴んで止めたが…。

泳ぐことがほぼ決定となっている双竜の二人を置いてどうしようかと悩んでいるその時。

「みーつけた」

「グレイ!!」

「何でここに!!」

なんとここにいるはずの無いグレイが、彼らの背後から話しかけていた。

その答え合わせはすぐに行われた。

「連れ戻してこいっていうじーさんの命令だよ」

「どわーっ！ もうバレたのかあっ!？」

というのも今朝、ギルド内ではS級の依頼書が一枚消えたとは大騒ぎになっていたのだ。

二人組の羽の生えた猫がちぎっていったというラクサスの証言から、犯人は双竜とルーシイだとすぐにバレ、最初はラクサス以外適任はいないと、マカロフから連れ戻すよう言われていた。

しかしラクサスはこれから仕事だと、マカロフの依頼を却下。

そこで手を上げたのがグレイなのだ。

双竜の二人組だとグレイ一人では役不足感も否めないが、ラクサスが行かないのであれば双竜と勝負になる魔導士も、その時点では居なかったのも事実。

「今ならまだ破門も免れるかもしれねえ。戻るぞ」

「破門!!？」

「やなこった!! オレたちはs級クエストやるんだ!!」

「オメーらの実力じゃ無理な仕事だからs級って言うんだよ!!」

グレイの脅しの言葉に反応したルーシイだったが、ナツとレアは止まる様子が無かった。

だがグレイも二人の情熱を認めてこのまま「はいそうですか」と送り出す人間でもない。

グレイは次の脅しに入る。

「この事がエルザに知られたらオメエ……」

「グレイ〜助けて〜」

「リーシャたち、三人に無理矢理連れてこられたのよ……」

「裏切り者共オ!!」

釣れたのは猫二匹。あまりにも早すぎる手のひら返しにルーシイはグレイの背後へと隠れたハッピーとフリーシヤに怒鳴りつけた。だが、やはりナツとレアは下がる様子が無い。

「オレはエルザを見返してやるんだ!! こんな所で引き下がれねえ!!!」

「レアたちの実力なら、レアたちが一番よく分かってるの!! 引き際も絶対に見誤らないの!!!」

「マスター直命だ!! 引きずってでも連れ戻してやらアツ!!!」

ナツとグレイに加えてレアも睨み合いに参加しており、一触即発の空気が流れる。

と思いきや、それはすぐに訪れる。

「ケガしても文句言うなよ!!」

「やんのかコラア!!!」

「レアたちは行くの!」

「魔法? あんたら……魔導士だったのか……?」

手にそれぞれの属性の魔法を宿らせた三人に声をかけて喧嘩を止めたのは、意外にもルーシイたちが最後に声をかけた船乗りの男だった。

「ま……まさか、島の呪いを解く為に……」

「オウ!!」

「その通りなの」

「い……一応……ジシンナクナツテキタケド」

「行かせねーよ!!!」

何故か小刻みに体を震わせている船乗りの男はそう問いかける。

二人は力強く返し、ルーシイも自信なさげに返すと、グレイは目をクワツと吊り上げながら口を挟む。

だが、グレイの否定の言葉は、船乗りの男には届かなかったようだ。

「乗りなさい」

「マジで!!」

「ん!」

「おおっ!!」

「何!?!」

男の思わぬ言葉に、四人はそれぞれ声を上げた。

その瞬間、ナツとレアはキュピーンと目を光らせ……。

「おりゃ!」

「ふん!」

「ふんごおっ!!?!」

ナツがグレイの顔面を踏みつけるように蹴り、レアはグレイの腹に掌底打ちを叩き込んだ。

結果、グレイの意識は簡単に吹き飛んだ。

力なく横たわるグレイを、ナツが肩に担ぎあげ船に乗ろうとする。

「ちよつと、グレイも連れてくの!?!」

突然のナツとレアの奇行に、ルーシイは声を上げるも、次のナツの言葉に首を縦に頷かざるを得なくなる。

「コイツがギルドに戻ったら、次はエルザが来るぞ!!」

「ひいっ!!」

そのまま一行は気絶したグレイと共に、S級の島へ船で向かうの

だった。

くくく

「…おぷ」

「うえく…」

時刻はすっかり夜。

上弦の月がすっかり天高く昇ってる頃のこと。

船でガルナ島を目指すナツとレアは、すっかり船酔いでグロッキーとなっていた。

「今更なんだけど…ちょっと怖くなってきた」

「てめ…人を巻き込んだって何言ってやがる…!」

膝を抱えて小刻みに震えているルーシイは、ダクトテープでぐるぐる巻きにされて拘束されたグレイにそう呟いた。

彼の魔法を発動する際、手のひらに拳を叩くという工程が必要になる。

そのため両腕を拘束さえすれば彼を封じ込めるのだ。

グギギギとルーシイを恨みから睨みつけ、その流れで船乗りの男に視線を移した。

「っーかオツサン！ 何で急に船を出したんだ」

「……オレの名はボボ」

グレイの言葉に答えなのか否なのか、船乗りの男……ボボは少しの間を置いてから口を開いた。

「かつては、あの島の人間だった…」

「え？」

「逃げ出したんだ……あの忌まわしき呪いの島を」
「ねえ……その呪いつて?」

ガルナ島の出身という驚くべき情報にルーシイが小さく反応した。しかしボボはそのまま話を続け、ハッピーが核心をつく発言に再び口をつぐむ。

押し黙るボボを、ルーシイは訝しげに見つめる。

「……禍は君たちの身にも降りかかる。あの島へ行くとはそういう事だ。」

本当に君たちに、この呪いが解けるのかね?」

重々しげな雰囲気のまま口を開いたボボ。

すると、島が近くなってきたからか、海風が吹き荒れ、彼が纏っていたローブがバサツと舞い上がり、今までずっと隠れていた彼の左腕が顔になった。

「悪魔の呪いを」

肩から紫の異形の形の腕が伸び、肘から先はさらに黒ずみ、爪も鋭く伸びている。

まさに悪魔の腕であった。

その腕を見せられて、グレイ、ルーシイ、ハッピー、フリーシヤはあんぐり開けた口が塞がらなかった。

くくく

ガルナ島……。

月明かりが妖しく照らす……呪いの島。

今夜も島の頂上が……紫色に光る……。

月は出ているか

「見えてきた……ガルナ島だ」

ボボが異形の左腕を踵にして数分も経っていないが、彼ら彼女らにとつて数時間にも及ぶような時間が過ぎていた。

それほどの衝撃の中で告げられた到着の一声。

一行はボボの視線の先に吸い寄せられるように、ガルナ島へと視線を向けた。

「ねえ……オジさん」

島の全容が見えてきた中、ルーシイがボボに対して口を開くも、返事は無かった。

なぜなら…。

「あ……あれ？　いない？」

そう、ここまで船を動かしてくれたボボの姿が何処にも居ないのだ。

海に落ちたかと疑ったグレイだったが、既にハッピーが潜つての偵察を完了し、海の中にはいないことが確定した。

その時だった。

ゴゴゴゴゴ……

突然そんな体の奥に響くような音が聞こえ始めた。

音の存在だけを感じできた双竜は「何の音？」と危機感ゼロな眩きをしていたが、他の者達はしっかりと音の正体を目にした。

「きゃあああ!!!　大波イ!!!」

自身の目先を覆い尽くすほどの大波が、ルーシイたちの乗る船を強襲しようとしていたのだ。

「のまれるぞ!!!」

「ハッピーフリーシャ!!船を持ち上げて飛ぶのよ!!」

「無理だよオ!!!」

「常識的に考えるかしらア!!!」

そうして六人は為す術なく波にのまれてしまった。

~~~~~

「!.....ここは...。 ! みんな無事!」

青い海、白い砂浜.....そして四人と二匹の漂流者と大破した船。完全に無人島に流れ着いてしまった光景である。

一番最初に意識を取り戻したルーシイは皆の安否を確認しながら立ち上がった。

「おおっ!! 着いたのか!?ガルナ島!!!」

「ん.....酷い目にあった」

「どうやら、昨日の大波で海辺に押し寄せられたみたいね」

ルーシイの声に応えてか、ナツ、レア、グレイと、続々と目を覚ました。

「それにしても何だったんだろ? あの腕.....悪魔の呪い? それに消えたオジさん」

「気にすんなっ!!探検行こーぜ探検!!」

「あいさー!」

「依頼内容からして最も気にするべき事じゃないかしら...」

全員の安否を確認したところで、ルーシイは昨晩会ったボボの事について顎に手を当てて考察する。

しかし頭を使うことが嫌いなナツは島の奥地へ向かおうとする。

だがあくまで依頼をこなしに来たので、まずは依頼主である村長のいる村まで行こうとルーシイは提案した。

そんな中、一人待ったをかける男がいた。

「待ちな」

「ん？ グレイ、ここまで来たら船も無いし戻れないの」

グレイである。

突然の声掛けにレアが対応したが、グレイはすぐさま「いや」と否定の言葉を返した。

「オレも行く」

思いがけない言葉に、全員揃ってポカンとなった。

だが当の本人であるグレイは続けてあっけらかんと答えた。

「やっぱりお前らだけ先に2階行くのもシヤクだし、破門になったらそれはそれでつまらん」

まさかのお許しの言葉に、五人は揃って笑みを浮かべた。

グレイが引き締めるように声をあげ、六人は村に向かって歩を進めたのだった。

くくく

歩くこと数時間、目覚めた時の時間が既に昼過ぎだったからなのか、村の正面の門に着く頃には日は傾いていた。

しかし門には「KEEP OUT」と書かれた札が張り付けられている。

「立ち入り禁止って……一体どんな村だよ……」

「すみませーん!! 開けてくださーい!!!」

グレイが得体の知れない不安感から身を震わせる中、ルーシイが声を上げる。

しかし返事はない。

ナツが小さく「まいったな」と零すと、口をニツとさせた。

「壊すか」

「ダメ!!!」

当たり前だ。

依頼主の住む村を破壊しては信頼もへったくれも無い。その時だった。

「何者だ!」

門の上から村民とみられる二人組の男が顔を見せた。

十中八九門番であろう。

「魔導士ギルドフエアーリーテイル妖精の尻尾の者です。依頼を見て来たんですけど……」

「妖精の尻尾? 依頼が受理されたとの報告は入っていない」

「いや……あの……」

「何かの手違いで遅れてんだろ」

顔を出した門番に、ルーシイが代表してそう言う。

しかし当たり前ながら正式に受理されず、勝手に来た故にその一報は村に届いていない為門番からはそう訝しまれ、ルーシイはしどろも

どろになってしまう。

そこにグレイがフォローを入れた。

「全員紋章を見せろ」

門番の一人がそう言う。

それくらいならばお易い御用なので、各々紋章を門番に見せる。

ナツは右肩、ハッピーとフリーシャは背中、レアは左肩、ルーシイは右手の甲、グレイは右胸板という具合に。

「本物のようだぞ」

「うーむ…」

当然紋章は本物なので、門番の一人は信用したようだ。

だが、もう一人の門番は何やら難色を示していた。

そうしてとんでもない爆弾を落とした。

「女共の服を脱がせ」

「何で!!? 関係ないでしょ……ってだからレア!! 羞恥心を覚えてつて言ったじゃない!!」

門番の爆弾発言に勿論反発したルーシイだったが、その隣では涼しい顔をしたレアがセーラー服を脱ぎ始めていた。

天然で羞恥心の欠けらも無いレアにそんな命令をすれば実行するのは必然だった。

すぐさま門番は発言を撤回し、門を開けた。

その間もう一人の門番に白い目で見られていたのはここだけの話である。

「よくぞ来てくださった。魔導士の方々……ホガホガ」

魔物の口のような門を潜り、奥から現れたのは全身を布で覆った集団だった。

村長のモカと名乗った先端に三日月の装飾を施した杖を持った人物以外は顔から足まで完全に布で覆われており、そのモカでさえ杖を持った左手、ヨボヨボの足、そして目元しか見えない。

「さっそくですが、これを見て頂きたい。皆の者オ！」

モカの号令に、後ろの布集団もモカに合わせて自身を纏っていた布を取払った。

そうしてルーシイたちが目にしたのは……。

異形の腕や足、そして角。

その色や形は千差万別。

しかし全員に揃って、人間には無い何かしらの不純物が混じった体をしていた。

「やはり……」

「……」

「スゲエもみあげ!!!」

「いや……見てほしいのはこっちじゃ……ホガ」

再び垣間見ることになった異形の手足に、グレイが零し、ルーシイも固唾を呑みながら頷いた。

約一名……いや二名着眼点が違ったが……。

確かにモカの左右のもみあげは驚愕に値するが今は置いておいても良いだろう。

「この島にいる者全て……犬や鳥まで例外なく、このような呪いにかかっております……ホガ」

「言葉を返すようだが、何を根拠に「呪い」だと？ 流行病とは考えねえのか？」

モカの言葉にグレイが遮った。

しかしグレイの質問に対し、モカは何十人という医者に見てもらったがこのような病気は無いと淡々と答えた。

モカはそれにと言葉を連ねる。

「こんな姿になってしまったのは ”月の魔力” が関係しているのです」

「月の魔力？」

聞きなれない言葉にルーシイが反応する。

元々この島は古代から月の光を蓄積し、島全体が月のように輝く美しい島なのだったという。

だが、異変は突然だった。

「何年か前に突然月の光が紫色に変わり始めたのです」

「紫？ そんな月見たことねーぞ」

ナツの反応は至極当然だ。

レアやルーシイも同じ反応であるし、モカ自身も外から来た者はそう言うのだと笑って流した。

だが現に、この島で見る月は紫なのだ。

「そして紫の月が現れてから、ワシらの姿が変わりだした」

「月が出てきたのよ」

モカが話しているうちに、傾いていた日はすっかり沈みきっており、雲にかかった月が姿を現した。

その月の色は、確かに紫だった。

異様な光景に、一行は啞然としてしまった。



「これが、月の魔力の呪いなのです」

モカがそう口にした時だった。

「うっ！」

「うう…!!!」

「オオオオオ…!!!」

村民たちが突然苦しみ出したのだ。

それは村長であるモカも例外では無い。

そこへさらに異変が加わった。

肌の色が変色し、牙が生えだし、ある者は体に斑点や縞模様が現れ、ある者は角が生えた。

その姿……まさに悪魔であった。

「驚かせて申し訳ない……。紫の月が出ている間、ワシらはこのような醜い悪魔の姿へと変わってしまう。これを呪いと言わず……。何と言えよいのでしょうか」

悪魔の姿へと変貌した彼らの表情に喜色の笑みを浮かべている者は一人として居らず、モカの言葉に耐えきれずか、数名は涙を流している。

「朝になれば皆、元の姿に戻ります……。しかし……。中には元に戻れず、心まで失ってしまう者が出てきたのです。心を失い魔物と化してしまった者は……。殺すことに決めたのです」

「元に戻るかもしれないのか!?!」

「放っておけば、皆がその魔物に殺される。幽閉しても、牢など壊してしまうのです……。」

ナツは村民たちの決断に声を荒らげたが、モカの言葉に押し黙って

しまった。

その話の続きだろう。

モカは懐から一枚の写真を取り出し、涙が溢れてきた。

「だから……ワシも息子を殺しました。心まで悪魔になってしまった息子を……」

そう言つてモカは故人となつてしまった息子の写真をナツたちに見せ、彼らは言葉を失つた。

そこに映つていたのは、昨日ハルジオンで船を出してくれたあの船乗りの男ボボであつたのだ。

「その人……え!? でも……あたしたち昨日……」  
「しっ!!」

ルーシイがその事を伝えようと口が先走るが、 그레이が人差し指を立ててルーシイの言葉を止めた。

「ようやく消えちまつた理由がわかつた。そりゃあ……浮かばれねえわな」

그레이のその言葉だけで、全員察した。

幽霊……心が悪魔となり仲間の為殺され、やり切れないその魂は、地縛霊として一行をこの島へと招いたのだろう。

「さぞ高名な魔導土方とお見受けします。どうか、この島を救つてく  
ださい……。このままでは全員……心が奪われ……悪魔に……」

「そんな事にはさせないのっ!!」  
「俺たちが、その呪いを解いてやる!!」

モカの言葉をそれ以上続けさせぬよう、レアが断ち切り、ナツが宣

言した。

モカはその言葉に安心したかのように目を細め、改めて依頼した。

「ワシらの呪いを解く方法は一つ……。」

月を破壊してください」

くくく

「見るから見るほど不気味な月かしら」

「なんで紫なんだろうねー」

その後、戸惑いながらも了承した一行は、今は誰も住んでいない家を貸してもらおう形で寛いでいた。

「ハッピー、フリーシャ。早く窓閉めなさいよ。月の光を浴びすぎる  
とあたしたちまで悪魔になっちゃうのよ」

何処か能天気な猫二匹は窓から身を乗り出して空に浮かぶ紫の月を眺めていた。

その様子を見てルーシイは窓から離れたところから声を掛けた。  
一方でナツ、レア、グレイは椅子に座りながら当惑の眉をひそめていた。

「それにしてもまいったな」

「流石に月を壊せってのはな……」

「うん……」

グレイの呟きにルーシイは深刻な表情をして頷く。だが約二名論点がズレていた。

「何発殴れば壊れるか見当もつかねえ！」

「何回蹴ればいいか想像もつかないの！」  
「壊す気かよ!!!」

どうやら本気で月を壊す気でいたらしく、グレイがグモオツ！と唸った。

「無理なんだよ、月を壊すなんてよ」

「そうね……どんな魔導士でもそれはできないと思う」

「でも月を壊せつてのが依頼だぞ」

「ここで折れたら、妖精フェアリーテイルの尻尾の名前が折れるの」

正論を並べるグレイとルーシィと、感情論で月の破壊を目論むナツとレア。

だが今回はメロン一家の件とは訳が違う。

人間どうしても出来ることと出来ないことがある。

今回は出来ない部類に入る。

「第一どうやって月まで行く気だよ！」

「ハッピー、フリーシャ」

「流石にむり」

「行つたが最後、途中で魔力が切れてリーシャたちは潰れたトマトみたいになるかしら」

ナツの無茶ぶりにハッピーとフリーシャはそれぞれそう返し、フリーシャの表現方法にルーシィが少し身を震わせた。

「きつと「月を壊せ」っていうのは、被害者の観点から出てくる発想じゃないかしら。きつと何か他に呪いを解く方法はあるハズよ」  
「だといいいんだがな」

ルーシィの考察にグレイは大口開けて欠伸をしながら返事した。

「よし!! だったら明日は島を探検だ!!」

「ん、明日に備えて今日はもう寝るの」

そう言いながらナツとレアは床に敷いてある布に飛び込む。

「恐らくだが敷布団だろう。」

それからグレイとルーシイも二人に続くように横になった。

そうして六人は仲良く眠りについた。

「……って!! こんな獣と変態の間でどーやって寝ろと!? レアはなんでこんな状況下で寝れるわけ!!?」

否、ルーシイだけ獣のいびきとパンイチの変態の間寝る……物理的にも精神的にも寝れる状態では無く、ほぼ一晩中目を覚ましているのだった。

尚、ルーシイ同様隣でナツのいびきを聞きながら寝ているレアは今夜快眠だったそうなの。

くくく

翌朝、まだ日が昇りだして間もない頃。

六人は既に身支度を終えて家を出ていた。

しかしルーシイ以外の五人はまだ眠そうであり、ルーシイの後ろをとぼとぼと歩いていた。

「早エよ……」

「めっちゃ朝じゃねえか……」

「まだ眠足りないの……」

「誰のせいで眠れなかったと思ってるのよ! アンタたちはもう十分

寝た!! 出発よ出発!! 猫ども!! 起きろ!!!」

「あい」

「かしら」

そのまま一行は覇気も無いまま気だるそうに島の探索に出たの  
だった。

## デリオラ

「本当に月を壊さずに済む方法なんて見つかるのかよ」  
「見つけなきやしょーがねーだろ」

島の搜索のため村を出て数十分。

ナツがそんな愚痴を零す。

それに対しグレイはやれやれといった様子で答えた。

すると、何故かわなわな震えた様子のレアがナツとグレイの間に  
入った。

「ナツ、大変なの！ 月を壊しちゃったら、期間限定妖精フェアリーテイルの尻尾特製月  
見バニラシェイクが無くなっちゃうの!!」

「そっか！ 妖精の尻尾特製月見ステーキも無くなるって事か!!」

「おいら、月見塩魚無くなるの困るよ…」

「そ、それはリーシャも困るかしら…」

「ちよつとアンタたち、何がいるかわからないんだから大声出さない  
でくれる？ ……と申しております」

どこかズレている四人の会話。

そこへホロロギウムに身をかがめて鎮座するルーシイが口を挟む。

しかし、やはり声は外には聞こえないのでホロロギウムがそれを代  
弁した。

ナツは呆れた様子で「自分で歩けよ」とツツコミを入れた。

「おまえ、星霊の使い方……それあつてるのか？」

「だ…だって、相手は呪いなものよ。実体がないものって怖いじゃない  
!! ……と申しております」

グレイの言葉にルーシイは顔を顰めながら返答し、ホロロギウムが

再びそれを代弁した。

しかしそれを聞いたナツ、レア、グレイの三人は軽快な足取りで森の中へとズンズン進んでいく。

「さすがS級クエスト!! 燃えてきたぞ!!!」

「何が来ても流しきってやるの!!」

「呪いなんか凍らせてやる。ビビる事アねえ」

「…ホンツト、アンタらバカね…と申しております」

今度はルーシイが呆れた。

何処か楽観的な考えの三人をホロロギウムの中からジト目で見つめていた時だった。

ズシン…! ズシン…!

突然森の中に、そんな重く鈍い音が響き渡った。

そしてそれに加え

ガサガサと何か草をかき分ける音も耳に飛び込んでくる。

ナツ、レア、グレイの三人は音の聞こえる方向へと振り向いた。

「チュー」

「ネズミ!!」

「でかーっ!!」

現れたのはナツらの身長の3倍はあろう巨大なネズミだった。

ネイビーのキャミソールを身にまとい、頭にはホワイトブリムを付けている。

鋭い眼光はしっかりとナツらを射抜いており、野太い声で鳴いた。

するとネズミはナツやレアがブレスを吐く時のように空気を吸い込んで頬を膨らませた。

「んにやるオ!! アイスメイク ”<sup>シールド</sup>盾” !!!」



グレイの氷の盾とネズミが何かを吐き出したのはほぼ同時だった。氷の盾は完璧に一行の前方を守った。

しかし、ネズミが吐き出した何かは息だったようで、盾の横へ流れ、最終的にナツらに到達した。

瞬間…。

「んがっ!？」

「うぎゅっ!？」

「もげっ!？」

何やら外にいた三人からそんな一瞬の悲鳴が漏れた。

しかしルーシイから見ても、周囲はネズミの吐き出した息のせいで視界が曇っていて状況が掴めない。

「ちよつと、どうしたの!？ …つかいつの間にアンタら入ってるのよ!! あいー! ついさつきなのよ…と申し…んがっ!？」

ホロロギウムの中からルーシイといつの間にか入っていたハッピーとフリーシャがそう言った時、ホロロギウムも突然悲鳴をあげバタンと倒れた。

そしてそのままハコベ山の時と同様ホロロギウムは姿を消し、中にいた三人は揃って外へ放り出された。

「くきゅっ!？」

ネズミの息の正体はただの口臭だった。

しかしその臭いは想像を絶するものだった。

例えるなら、その臭いはくさやと比べても勝るとも劣らないだろう。

ネズミは一行の反応を見てキヤツキヤツキヤツとたいそう可笑しそうに笑っている。

「ナツ！レア！へばってんじゃねえ!!」

「二人とも鼻がいいからね」

どうやらナツとレアへの被害は人一倍大きく、二人とも鼻を抑えて地面に倒れ伏している。

しかし、ネズミは目をギラリと光らせて歩み寄ってくる。

そうならば、休む暇は無い。

「逃げろーっ!!」

六人は脇目も振らず走り出し、ネズミも四つん這いになってそれを追いかける。

逃げてる合間にも、ネズミは口臭をばら撒いたり、丸太のような腕を振り回したりと一行を一方的に攻撃する。

痺れを切らしたグレイは舌打ちを一つ打って右手に魔力を集中させた。

「アイスメイク ” 床”<sup>フロア</sup> !!」

右手の平に左の拳を叩きつけ、それを地面に叩きつける。

瞬間、地面は瞬く間に凍りついていった。

瞬きの瞬間に、ネズミの目の前には氷のフィールドが完成しており、止まろうにも止まることが出来ない。

そのままネズミは氷に足を取られ、つるんと盛大に転んだ。

「最初からそれやれよ!」

「逃げ損なの」

「文句言うな!!」

ネズミが転んだことで軽口を叩き合う三人。

ふと、ルーシイは目の前に石造りの建物を見つけた。

「見て！ 何か建物がある!! 今のうちにあそこに…」

「二今のうちにボコるんだ(の)!!!」

しかし三人は転んだネズミをお返しと言わんばかりにタコ殴りにしており、ルーシイの声は耳に入っていないかった。

三人が落ち着くまでかなりの時間を要したのだった。

くくく

「うわー、広いね」

「ボロボロじゃねえか」

「これ、文字なの？ 読めないの」

「いつの時代のモンダコリヤ…」

ネズミを袋叩きにしてようやく満足した三人はルーシイが見つけた石造りの建物に入っていた。

どうやら遺跡のようらしく、各々感じた感想を述べていく。

そんな中、ナツが壁上に何やら紋章を見つけた。

「見ろよ、何か月みてえな紋章があるぞ」

「この島 は元々、月の島って呼ばれてたって言ってたしな」

「月の島に月の呪い…月の紋章。この遺跡はなんか怪しいわね…」

顎に手を当て、ルーシイはキーワードを並べながら考察する。

その横では猫二匹が何処からか拾った骨で投げあつて遊んでおり、傍目でチラチラ映って集中が途切れたルーシイが「アンタらは犬か!!」とツツコミを入れた。

「にしてもボロいな…。これ床とか大丈夫なのか？」

「ん、なんだかいつ崩れてもおかしくなさそうなの」

そう言つてナツは遺跡の床を片足でガンガンと強く足踏みを、レアはその場でしゃがんでドアをノックするかのようには床をコンコンと叩く。

その様子を見たルーシイは慌てた様子で二人を止めようとしたが、時すでに遅し。

ベコン!!

「!?」

ナツが足踏みをした場所を中心に床へ亀裂が走り、一行のいた体重のかかっていた床全体の底が抜けたのだ。

すぐさまハッピーとフリーシャに助けを求めたルーシイだったが、それは叶わないものだとすぐ知ることとなる。

「……!」

「無理かしら! ハッピーが死にそうなのよ!!」

「どうやったらそうなるのよ!!?」

そこには先程遊んでいた骨を喉に詰まらせているハッピーと、必死に背中をぶつ叩いているフリーシャの姿があった。

キャッチボールならぬキャッチボーンをしていたのに一体どうしたらそうなるのか理解出来ないルーシイはそう叫びながら崩れる瓦礫と共に遺跡にポツカリ空いた穴へ落ちていった。

~~~~~

「オイ……みんな大丈夫か?」

「大丈夫なの」

「なら良かった!」

「大丈夫じゃないわよ!! アンタたちのせいで!!」

「てめーら何でいっつも後先考えねえで行動しやがる!!」

床がすっぽ抜けて落ちてきた六人のうち、ナツがすぐさま復活して点呼をとった。

それに一番に反応したレアを見てナツはカッカカツと笑ったが、ルーシイとグレイはこうなることになった張本人である二人を恨めしそうに見て怒鳴り散らかす。

「誰か手伝うかしら! ハッピーが別の要因で死にそうなのよ!!」

「あが…ふが…」

「まだやってたの!!?」

一方フリーシャは羽を使ってゆっくり降下してきたため他の四人ほどのダメージは無く、未だにハッピーの喉に引っかかっている骨を取り除こうと必死だ。

「ねえ……ここ、ドコなの?」

ルーシイはハッピーの口を手を突っ込みながら確認のためそう尋ねる。

それに答えるためか辺りを見渡すグレイ。

どうやら洞窟のどん詰まりのようらしく、見渡しても道という道は一本しか発見出来なかった。

やがて落ちてきたであろう上の穴の部分を見ながら口を開く。

「さっきの遺跡の地下みてーだな」

「秘密の洞窟だーっ!!」

「おお! ワクワクもんなの!」

グレイの解答にナツとレアが面白いくらいに反応を見せる。

ナツもレアの言葉に同意らしく、表情がワクワクと語っていた。

表情筋の硬いレアも眉がアーチ状に上がっており、瞳孔が少し開いている。

「せっかくだから、ちよつと探検しよーぜ！」

「ん、賛成なの！」

「オイ!! これ以上暴れ回るんじゃないぞ!!」

ルーシイがハッピーの喉から骨を取り除く荒手術に成功した中、溢れ出るワクワクを抑えられない双竜は駆け足で唯一の道に駆けて行った。

そしてこれ以上面倒事を引き起こされたくないグレイもそれを追いかけたのだった。

くくく

しばらく一本道が続く中、ナツとレアはようやく開けた場所に出てきた。

「この辺…少し冷えてるの？」

「言われてみりや確かに……お？」

開けた場所で物理的にヒヤリと感じた二人はそう反応する。

しかし、周りを見ていたレアは気づかなかった。

その謎の冷気の正体を。

そして、正面をしつかり見ていたナツはその冷気の正体が視界いっぱいに映り、戸惑いの声を漏らした。

「? .!?!」

そして、レアも目に入った。

その異質さに言葉も失い、見開いた目だけがその衝撃を語ってい

た。

「どうした？ ……な!!!」

「え？」

後から来たグレイ、ルーシイ、ハッピー、フリーシャもその異形に目が釘付けになった。

グレイに至っては額からダラダラと汗を垂れ流している。

「でけえ怪物が凍りついてる!!!?」

そう、ナツらの背丈の5倍……いや10倍はあろう異形の怪物が巨大な氷塊の中に閉じ込められているのだ。

その存在感、異質さ……そして恐怖の権化のような姿に口を開ける者はいなかった。

ただ一人を除いて…。

「デリオラ!!! バカな!!! デリオラが何でここに!!!」

「知ってんのか？ コイツ」

「あり得ねえ!!! こんな所にある訳がねえんだ!!!」

グレイである。

しかし、その様子は普通では無い。

やたらめったらに喚くその表情は驚愕、恐怖……そして怒りと、様々な感情がごちゃごちゃになったものであった。

その整理がついてないからか、ナツの呼びかけにも反応している様子が無い。

「あれは……！ あれはっ!!」

「ちよつと……！ 落ち着いて、グレイ!!」

パニックになって錯乱状態に堕ちかけるグレイ。
ルーシイが彼の体に手を当てて声をかける事で落ち着かせた。
ようやく彼も声が届いたようで大人しくなる。
しかし体の震えは未だに止まっておらず、重苦しそうに俯いていた
首を上げてデリオラと呼んだ怪物を見上げた。

「ねえ……何なのコイツは？」

「……デリオラ……厄災の悪魔」

改めてルーシイが氷漬けの怪物について問うとグレイは苦々しげ
に表情を曇らせ、ゆっくり口を開いた。

それに対してナツが「厄災の悪魔？」と復唱した。

「あの時のままだ……どうなってやがる」

再びグレイが一人苦悶した様子で言葉を紡いでいたときだった。

カツ カツ カツ……

洞窟内に何者かの足音が木霊する音が聞こえてきたのだ。

すぐさまルーシイが近くの岩場に隠れることを提案し、約二名ほど
理解しない者がいたがすぐに身を隠す。

足音が聞こえて数秒……

「人の声したの、この辺り」

「おおうん」

現れたのは逆立った青髪に極太の眉が印象的な青年と、上半身半裸
で犬っぽい顔立ちの男だ。

後者は首輪のようなチョーカーに、本物か偽物か犬耳が頭から髪を
かき分けて覗いているため余計に犬っぽい。

「昼……眠い……」

「おおーん」

「トビー。オマエ月のムーンドロップ雫浴びてね？耳とかあるし」

「浴びてねえよっ!!! 飾りだよわかれよ!!!」

「からかったただけだ、バカ」

「おおーん。ユウカのいけず」

コントのような二人のやり取りでも、ルーシイは「月の雫」ムーンドロップなる聞きなれない言葉に反応した。

呪いの事だろうかと考えていた時、足音が一つ増えた。

「ユウカさん、トビーさん。悲しい事ですわ」

「シエリー」

「おおーん」

現れたのはけばけばしい化粧をしたピンク色髪の少女だった。歳は見たところルーシイと大して変わらない。

「アンジェリカが、何者かの手によっていたぶられました……」

「あれネズミだろ!!! デラックスな名前つけんなっ!!!」

「ネズミじゃありません…。アンジェリカは、闇の中を駆ける狩人……そして、愛」

またしてもキャラの濃いメンツだ。

犬と眉毛と愛を語るケバい女。

特に最後の者に対してはルーシイもドン引きだった。

「強烈にイタイ奴が出てきたわね…」

「あいつら、この島のモンじゃねえ…」

「ん、ニオイが島の人たちと違うの」

鼻が敏感な双竜が、すぐに彼らが依頼主とは無関係の勢力である事

を見抜く。

それは傍から見ても、村民に共通してあつた悪魔の部位が現れていないことからわかった。

「侵入者か…」

「もうすぐお月様の光が集まるといふのに…何て悲しい事でしょう…」。零帝様のお耳に入る前に駆逐いたしましょう」

ユウカと呼ばれた眉毛の青年の言葉に揃ってドキツとなる一行。

そしてシエリーと呼ばれた少女もそう言つて、ユウカ、トビーと呼ばれた犬の男も同意の返事をした。

「デリオラを見られたからには生かして帰せません。侵入者に永遠の眠り…つまり、”愛”を」

”死”だろ？」

三人はコントを終え、再び来た道を行つたのだった。

三人がいなくなつてからしばらくして、六人は岩陰から身を乗り出す。

「何だよ、とつ捕まえて色々聞き出せばよかつたんだ」

「まだよ、もう少し様子を見ましょ」

隠密行動が苦手なナツ、レアは不満そうな様子が態度に表れるが、ルーシイがそれは待つようにといい聞かす。

その隣で、グレイは相も変わらず難しい顔をしていた。

「くそ…アイツら、デリオラを何のためにこんな所に持つて来やがった。つーかどうやってデリオラの封印場所を見つけたんだ…」

「封印場所…？」

「またもやグレイが悶々として呟くと、今度はレアがオウム返しをする。」

「こいつは、北の大陸の氷山に封印されていた。…10年前…イスバン地方を荒らしまわった不死身の悪魔。オレに魔法を教えてください師匠ウルが命をかけて封じた悪魔だ」

絶句。

想像をはるかに超える怪物の正体に、全員押し黙った。

そしてグレイがやけにこの怪物に対して感情を剥き出しにしているのも理解した。

「この島の呪いとどう関係しているのかわからねえが…これはこんな所にあっちゃならねえモノだ。零帝…何者だ…。ウルの名を汚す気なら、ただじゃおかねえぞ!!!」

デリオラを見上げ、拳を強く握りしめる。

その表情は怒りに満ちている。

デリオラか、或いは「零帝」と名乗っている何者かに向けたものか、または両方か。

いずれにせよその怒りは形となり、周囲の気温はさらに低くなっていた。

月の雫

「グレイの師匠が封じた悪魔……なの？」

重苦しい雰囲気の中、一番最初に口を開いたのはレアだった。改めての確認に、グレイは「間違いねえ」と肯定する。

「元々北の大陸にあったものがここに運ばれた？」

「もしかして、島の呪いはこの悪魔が原因ってことは無いかしら？」

「考えられなくもねえ。この悪魔はまだ生きてるんだしな」

フリーシャの感じた疑問に、グレイが新たな事実を述べながら納得の表情を見せた。

デリオラはまだ生きてる。

それを聞いたナツはニツと頬を吊り上げ「おし！」と気合いを入れる声を上げる。

「そーゆー事なら、この悪魔ぶっ倒してみつか」

「アンタはなんで力でしか解決策を思いつかないのよ」

腕をぐりんぐりと回して準備運動を始めるナツ。

それに対して呆れた声色のルーシイがやれやれといった様子でため息を吐いた。

その瞬間…。

ドゴツ!!!

「どうおっ!!?」

キツとナツを睨んだグレイがその顔面に拳を振り抜いたのだ。

突然すぎる故にナツはグレイの拳をモ口に食らい、ドガア!と派手

に地面を転がされた。

「グレイ!! てめえ…何しやがる!!!」

「火の魔導士がこれに近づくんじゃねえ。氷が溶けてデリオラが動き出したら、誰にも止められねえんだぞ」

「そんなに簡単に溶けちまうものなのかよ!!!」

いきなり攻撃された事に憤りを感じたナツは殴られた頬を抑えながら叫ぶ。

しかしグレイは未だナツに睨みきかせる。

ナツは納得いかない様子でそう問い質すと、グレイはハツとなり

「いや…」と短く零した。

「大丈夫?」

「オイ!!殴られ損じゃねえか!!! 凶暴な奴だな…」

「ナツ。ここは場のノリとして抑えるの」

「の…ノリか…」

「ん、ノリなの」

やはり情緒が不安定な様子のグレイを、ルーシイは慰める様に肩に手を置いた。

一方言った通り殴られ損のナツは恨めしそうにグレイを睨む。

その後のレアの言葉でナツの怒りが引っ込んだのはナツの単純さに感謝すべきかレアの天然度に感謝すべきか…。

「ウルはこの悪魔に絶対氷結アイストシエルつー魔法をかけた」

アイストシエル
絶対氷結。

氷の魔導士が使う奥義にして禁忌。

絶対氷結の名の通り、それは溶けることの無い氷。

いかなる爆炎の魔法をもつてしても、この魔法によって生み出され

た氷は溶かすことができない。

「溶かせないと知ってて、何故これを持ち出した…?」

「知らないのかもね。何とかして溶かそうとしてるのかも」

「何の為にだよっ!!!」

「し…知りませんけど…」

グレイの疑問にルーシイが考察まじりの回答をする。

しかし、グレイにとつてこの氷が溶ける…この悪魔が解放されると
いうワードは禁句なのだろう。

唐突の怒鳴り声。

予想外の般若顔。

特に理由のない怒りがルーシイを襲う——!

ドスの効いた声に影がかった般若顔に、ルーシイは涙目になりながら
声を震わせ後ずさった。

「グレイ。八つ当たりはめっ!なの」

「…! 悪い…くそっ…!調子でねえな。誰が何の為にデリオラをこ
こに…」

レアが可愛らしいお叱りの言葉を与え、グレイはわかりやすく熱が
冷めていく。

小さく謝罪の言葉を零し、再び頭を抱えては思考の渦に落ちた。

そんな中、これからの行動に提案をしたのは以外にもナツだった。

「簡単だ。さっきの奴らを追えばいい」

「そうね」

「いや…ここで待つんだ」

謎の勢力…零帝一派の消えていった方向を指差すナツに、レアは
頷き、ルーシイは返事をする事で同意を示したが、待ったをかけたの

はこれも以外な事に思考の渦に落ちていたハズのグレイだった。

「ここで待つという提案に、全員が首を傾げた。」

「月が出るまで待つ」

「月……ってまだ昼なの!!」

「そうだそうだ！無理!!ヒマ!!死ぬ!!」

グレイがそう言うと、即座に反論したのはレアとナツ。

一方でルーシイはどういう事なのかと理由をまず聞いた。

グレイ曰く、島の呪いもデリオラも、全て”月”が関係していると思っただけなのだという。

それが思考の末に出したグレイの結論だった。

「奴らも「もうすぐ月の光が集まる」とか言ってたしな」

「そっか…確かに何が起こるか、アイツらが何をするか……気にはなるわね」

「オレたちは無理だ!!」

「ん!!追いかけることに一票なの!!」

グレイが理由を述べた事で、追いかける事に同意だったルーシイはグレイの意見に賛成した。

しかし、やはり待つという行為自体に苦痛を感じるのか、ナツとレアは頑なに追いかけるという主張を続ける。

その数分後の事。

「ぐがー!」

「スピー…!」

地面に大の字で寝転がって眠るナツと、そのナツの腹を枕に眠るレアの姿がそこにあった。

「やっぱりナツもレアも、本能のままに生きる獣かしら」

「あい、それがナツとレアです」

「こうして見ると、ナツとレアってちよつと兄妹っぽいわね」

長年の相棒にそんな感想を零すフリーシャとそれに同意するハツピー。

それに対してルーシイは無防備な状態で眠る二人を少し微笑ましそうに眺めていた。

その傍ら、グレイは師匠ウッルの封じた悪魔を見ながら物思いにふけていた。

その様子はやはり表情が冴えない。

「はアー……待つとは言ったもののヒマネ」

「あい」

「ま、それは割り切るしかないかしら」

ナツとレアを観察し終えたルーシイは近くの手頃な岩に座つてため息をつき、ハツピーとフリーシャが相槌を打つ。

すると、ルーシイは何か閃いたかのようにポンと手を叩いて銀の鍵を取り出した。

「開け！琴座の扉……リラ!!」

銀の鍵をいつものように空中に掲げると、煙が現れた。

やがて晴れ、姿を現したのは青いワンピースにフリルのついた白い頭巾を被り、背中には天使のような羽が生え、何より極めつけは琴座の星霊らしくハープを持っていた。

「キヤー!! 超久しぶりイルーシイー!!!」

「はあい、リラ」

「もおっ!!たまにしか呼んでくれないんだもーん!!ルーシイのいけ

ずー!!!」

どうやらかなりのハイテンションキャラクターらしく、あまりのテンションの高さにハッピーは「また変なの来た」と軽く引いている。

「いけずって…だってアンタ、呼べる日って月に三日くらいじゃない」「ええっ!? そうだっけ!!?」

「何かしらこのズボラな性格は…」

オマケにフリーシャの言った通り相当ズボラなようで、ルーシイとの契約内容が頭からすっぽ抜けている様子にフリーシャのイライラゲージが溜まっていた。

「でえ? 今日は何の歌歌ってほしい?」

「何でもいいわ。任せる」

「オイラ、魚の歌がいい!!」

「却下かしら」

「うええ!!? 何でだよおフリーシャ」

話を切り替えて歌のリクエストに入る。

ルーシイ曰く名実ともに音楽関連の星霊らしく、歌が上手いのだとか。

ハッピーがリクエストするもフリーシャの光の速さの却下にハッピーが泣く。

「だってあの歌、聴いてたらお腹空いてくるかしら。何よりガキ臭いのよ!!」

「じゃあテキトーに歌うわね!! イエーイ!!!」

フリーシャがイライラの爆発寸前でそう言い切ると、ハッピーが膝をついて頂垂れた。

それを聞いてか否か、リラはグーサインを出しながらハープに手をかけた。

ハイテンションズボラに加えマイペース属性も加わってはもはや怖いもの無しである。

「――♪」

しかし、歌い出すと完全に別人だった。

ポロンポロンと、ハープの優しい音が響き渡り、それに負けないリラの優しく温かい歌声が胸に染みる。

場所が洞窟という事もあり、その音は反響して心地いくらい耳に残った。

「――♪」

予想外の優しい歌声に、ハッピーは感嘆の声を上げる。

その隣でフリーシャはルーシィと共に目を閉じてリラの歌声に聞き入っていた。

心做しか先程よりその表情も柔らかい。

「――♪」

ピトン……

歌の終わりに差し掛かった時、そんな音が洞窟内に響き渡った。

音の発信源に目を向けたルーシィ、ハッピー、フリーシャは自分の目を疑った。

「え？　ちよ……グレイ？」

「あ？　なんだよ」

「……泣いた」

なぜなら凍りついたデリオラの方を向いていた 그레이が、俯いた状態で下唇を噛み締め、涙を流したのだから。

「確かにリラは人の心情を読む歌が得意だけど……」

「 그레이が泣くなんてよっほどかしら……」

「泣いてねえよ……!!」

昔は弱かったのに、今ではこんなにも強くなったんだ……それがリラの歌った歌の大雑把な意識だ。

その歌詞が 그레이の琴線に触れたのか、感情が溢れてしまったのだろう。

「もつと明るい歌にしてよリラ!!」

「えー!? だったら最初からそう言っただけ!!」

「つーかよく考えたら、誰か来たらどーすんだよ! 黙ってる」

よく考えなくてもその通りだ。

敵に隠れて様子を伺おうとしているのに自分から音を立てて存在をアピールしては隠密もクソも無い。

その後は 그레이の言う通り、全員黙って夜を待つのがあった。

~~~~~

あれから数時間。

洞窟内には何やら地響きのような音がなっていた。

ゴゴゴゴ!と文字通り揺れる音に全員強制的に叩き起された。

「何の音なの?」

「夜か!!」

その時だった。

カアツ！と突然天井に紫色の魔法陣が現れたのだ。

やがて魔法陣から紫の光が降り注がれ、一筋の極太い紫の光の道が現れた。

そしてその光の道は、デリオラが閉じ込められている氷に当たった。

「月の光がデリオラに当たってる!!」

「偶然なんかじゃねえぞコリャ!!」

そうして一行は光の元を探す為に駆け出した。

謎の三人組が消えた道へと走るとすぐに階段が現れた。

それを登ると、すぐに元の遺跡に戻ってきた。

さらに見つけたのは…。

「遺跡の真ん中に魔法陣が…」

「もつと上だ!!」

洞窟で見たのと同様、紫の魔法陣から光の道が真っ直ぐに下に降り注がれている様子だった。

ナツの声で再び駆け出す。

何層にも渡って魔法陣と光の道が伸びている中、遂に遺跡の最上階…山の山頂まで上がってきた。

分かっていた通り外はすっかり暗くなっており、相も変わらず紫の月が怪しく光りながら地上を照らしている。

しかし、山頂で見る紫の月は、麓で見たものとは少し違った。

「何なのアレ?」

「しっ!」

それは謎装束の集団が謎の言語を唱え、その結果からなのか月の光が一本の道となって謎装束の囲んだ円を中心に降り注がれている。

「本当に月の光を集めてんのかコイツら!!」

「それをデリオラに当てて……どうする気?」

「ベリア語の呪文……月の雫ね」

誰も状況が分からない中、ルーシイが召喚しっぱなしだったリラがその正体を見抜いた。

一人そういう事かと納得し、訳を話した。

「コイツらは月の雫ムインドリツプを使って、あの地下の悪魔を復活させる気なのよ!!」

「何!?!」

しかし 그레이 が散々言ったように、ウルが放った魔法絶対氷結アイスドシエルはいかなる爆炎を持ってしても溶かせない氷なのだ。

しかし、封印魔法というのは完璧にはなり得ない。

「その氷を溶かす魔法が月の雫ムインドリツプなのよ。一つに集束された月の魔力は、いかなる魔法をも解除する力を持っているの」

「アイツら……デリオラの恐ろしさを知らねえんだ!!」

強力な解除魔法の実態を知り、 그레이 は歯を噛み締めた。

だが、それだけではない。

「この島の人々が呪いだと思ってる現象は月の雫ムインドリツプの影響だと思うわ」

リラがそう言う。

それもそうだ。

月という一つの星に関する魔法を何のデメリットも無しに発動出来はしない。

一つに集まった月の魔力は人体をも汚染する。

「アイツらア……!!!」

「待って!!誰か来たわ!!」

ますます怒りを募らせていくナツだが、飛び出す前にルーシイがナツの顎へ肘を強打させて止めた。

そして彼女の言う通り、また新たに誰か来た。

白いコートを羽織り、顔は悪魔を催した仮面で隠れている。

何処かデリオラにその雰囲気似てなくもない。

そしてその後ろには昼に見かけた極太眉毛のユウカと、犬姿のトビー、ケバメイクの少女シエリーの姿もあった。

「くそ…:昼起きたせいで眠い」

「おおーん」

「結局、侵入者も見つからなかったし」

「本当にいたのかよっ!!!」

相変わらずのコントのようなやり取りの中、シエリーは仮面の者に声をかけた。

「悲しい事ですわ、零帝様。昼に侵入者がいたようなのですが…:取り逃してしまいました。こんな私には、愛は語れませんね」

「…:侵入者」

どうやら仮面の者が零帝のようだ。

シエリーの報告にボソツと呟いたが、何やらグレイが気づいた様子を見せる。

しかし仲間は誰もそれに気づいていない。

「デリオラの復活はまだなのか」

「この調子だと、今日か明日には…:と」

「どっちだよ!!!」

「いよいよなのだな…」

シエリーの報告を聞いて、零帝はほくそ笑んだ。

一方、零帝の言葉を一言一句耳に入れる度に、グレイの動きが固く  
なっていた。

「侵入者の件だが、ここに来て邪魔はされたくないな」

「ええ」

「この島は外れにある村にしか人はいないハズ」

そう淡々と言葉を紡ぎ、零帝は手のひらを村の方向へ掲げた。

「村を消してこい」

「はっ!」

「了解!」

「おおーん!!フガツ!」

「何!?!」

零帝の命令に、一斉に焦り出す。

今この状況において、村の人間たちは全く関係無い。  
にも関わらず、今まさにそのトバッチリを受けようとしている。

「血は好まんのだな…」

そう言う零帝だが、浮かべた笑みは変わっていない。

「この声…オイ…ウソだろ…」

そうして、ようやく言葉を発したかと思ったグレイは、デリオラを  
見た時以上に汗をかいて、動揺した表情を浮かべていた。

## グレイとリオン

「もうコソコソするのはゴメンだ!!!」

零帝が村の抹消命令を出してどうしようかとアタフタする中、ナツが瓦礫の上に立って叫んだ。

ナツは上を向いたまま頬をぷくーと膨らませる。

「邪魔しに来たのは、オレたちだア!!!」

直後、デカデカと声を上げながらナツは空中にブレスを吹いた。

闇夜の中轟々と燃え盛る炎はこれでもかと言うほど目立ち、その場  
にいた全員の視線を集めた。

「あの紋章！フェアリーテイル妖精の尻尾ですわ!!」

「なるほど…村の奴等がギルドに助けを求めたか」

自ら大々的に姿を見せたナツの右肩の紋章を見て、シエリーとユウ  
カが反応した。

迎撃しようと戦闘態勢に入るが、それは他でもない零帝によって遮  
られる。

「何をしている。とつとつと村を消してこい」

「お?」

「…え?」

「何で…?」

瞬間、空気が凍った。

ナツやルーシイだけで無く、ユウカから零帝一派の者たちも思わぬ言  
葉に目を丸くさせた。



ナツの問いかけに答えてか零帝が再び口を開く。

「邪魔をする者…それを企てた者…：…全て敵だ」

「何でえっ!!?」

理由を聞いて尚理解不能。

玩具を取り上げられた子どもの癩癩のような自己中心的な理由に、ナツの怒りのボルテージが上がる。

困っているから助けを求めるのは人としての当たり前の権利だ。

それを真っ向から全否定する零帝にナツとレアが駆け出すが、それよりも早くグレイが駆け出した。

「てめえええっ!!! その下らねえ儀式とやらをやめやがれええ!!!」

鬼の形相を浮かべたグレイが左手に魔力を集中させて右の拳を叩きつける。

直後にそれを地面に叩きつけ、ズギヤギヤギヤ!と鋭い氷柱を連ねさせる。

「氷!?!」

グレイの魔法を見て、シエリーが驚愕の表情を見せた。

それもそのハズである。

零帝はグレイの攻撃を躲すのに大きく後ろに飛び、左手に魔力を集中させ、グレイ同様地面に叩きつけた。

するとどうだろう、彼が地面を叩きつけた部分からグレイ同様氷柱が連なり出したのだ。

「こいつも氷!?!」

今度はハッピーが代表して声を上げた。

グレイの蒼い氷柱と零帝の白い氷柱が互いに攻め合い、ちょうど中間点でバキイ!と音を上げながら交わる。

お互いの氷柱はギリギリと押し合い、最終的にパキインと音を立て崩れ去った。

「リオン…てめえ自分が何やってるかわかってんのか？」

唐突、グレイが零帝に向かってそう語りかけた。

思わずナツは「え？」と言葉を漏らす。

対して零帝はグレイの言葉に応えるように微笑を浮かべた。

「ふふ…：…久しいな、グレイ」

答えは是であった。

零帝…：…リオンとグレイがまさかの知り合いであることに、妖精の尻尾側も零帝一派も驚きを隠せないでいる。

だがすぐにそれは切り替えられる事となった。

「早く行け。ここはオレ一人で十分だ」

「はっ！」

「行かせるかっての!!」

「止めるの!」

リオンがそう声掛けをすると、シエリーたちはすぐに答えて山を降りて行った。

このまま行かせては村に被害が及ぶ。

すぐに動き出すナツとレアだったが、それは悪手だった。

「よせーナツ!!レア!!動くなっ!!!」

異変に気づいたグレイだったが忠告が遅すぎた。

「うおっ！」

「おおお!？」

駆け出したナツとレアの周りを突然冷気が包み込んだ。  
冷気はすぐさま形となつていき、着実に二人を凍りつかせていった。

「ハッピー！フリーシャ！ルーシイを頼む!!」

「あいさー！」

「わかつてるかしら!!」

すぐさまグレイは後ろにいた猫に指示を出し、それにすぐに応じるハッピーとフリーシャ。

リオンはただその様子を眺めているだけだったが、ハッピーとフリーシャがルーシイを連れて空へ逃げる中グレイの氷の結晶の弾を数発撃ってくるのに気づく。

それを片手で展開した氷のバリアで防ぎ、何ともなかったかのようにグレイと再び対面した。

「ハッピー！フリーシャ！ ナツとレアを見捨てるの!!？」

一方空へ逃れたルーシイは納得いかないと自分を持ち上げているハッピーを見上げながらそう声を上げた。

しかし、それには答えられないと言うかの如く、村へ向かうスピードを上げた。

「あいつは、空間を冷気の魔法で包んでた!!」

「あのままじっとしてたら、次はリーシャたちが氷漬けになってるかしら!!」

ハッピーとフリーシャはそう言ってまっすぐ村の方を向いて飛ぶ。二人の言ってることは理解できるが、感情が納得しないルーシイは「でも…」と続けようとするも、その言葉は喉の奥へ引っ込む事になる。

「全員やられたら、誰が村を守るんだよお!!!」

「今一番優先すべきは村の守護かしら!! わかったら後ろばっか見ないで前を見るのよ!!!」

そこには涙をグツと堪え、しかし目尻には溢れ出た涙が溜まっているハッピーとフリーシャの姿があったのだ。

今までに無い迫真な様子の二人に、ルーシイはすっかり熱が冷めた。

「ごめん……二人を助けたいの、ガマンしてたんだね……。きっと二人なら大丈夫よ!!」  
サラマンダーリヴァイアサン  
火竜と水竜の双竜コンビに、氷なんて効くもんですか!!!」

「あいつ!!」

「当然かしら!!」

ルーシイはそう発破を掛けて、今度こそ前を見る。

そしてハッピーとフリーシャも、それに応えるようにさらにスピードを上げたのだった。

一方場所は戻って山頂の遺跡。

未だに微笑を浮かべて余裕そうなりオンは、取り逃したルーシイたちに見向きもしない。

「スキを作って女と猫二匹を逃がしたか……。まあいい…奴等ごときじゃ、シエリーたちは止められんだろう」

フェアリーテイル  
「妖精の尻尾の魔導士を甘く見んじやねえぞコラア!!」

仲間を侮辱されて怒り心頭のナツがリオンを睨みながら声を上げた。

しかし次の瞬間、彼の視界はガコツという音と共に斜めにぐらついた。

そのままさらに斜めになっていくも、ナツ自身はそれを正常に戻せない。

それもそのはず、彼の体は先のリオンの攻撃によって氷漬けの球体になっており、それを追い討ちをかけるかの如くグレイが小突き、山の斜面を転がり出していったのだ。

そしてそれは、レアも同様だった。

彼女の場合はナツよりも重症で、顔や手足も含んだ全てが氷漬けとなっている。

レアは転がるナツにぶつかり、ナツ同様山の斜面を転がり出した。

「どうおわあああああつ!!!? 何しやがるグレイーイ!!!」

ナツは転がりながらそんな悲鳴を上げ、やがて姿は見えなくなっていくた。

そんな様子を見て、やはりリオンは微笑を浮かべている。

「相変わらずムチャをする。仲間じゃないのか?」

「アレはその気になれば氷ごと中身を破壊できる魔法だろ」

「なるほど。それでオレの魔力の届かない所へやった訳か。やればできんじゃないか」

「いい加減先輩ツラすんのやめてくんねえかな」

冷やついたピリピリした会話に、儀式を行っていた謎装束の者たちは揃ってオロオロしている。

そんな中、グレイが鋭い視線でリオンを射抜きながら言葉を投げかける。

「リオン。お前はもう、ウルの弟子じゃねえ」  
「お前もさ、グレイ」

グレイの言葉に何の狼狽えを見せる事無く、リオンはそう言いながら自身の仮面に手をかける。

カポツと音を立てながら、彼は淡々と言葉を紡ぐ。

「ウルはもう、この世にはいないのだからな」

「デリオラを封印する為に命を落としたんだ!! ウルの残したものを、テメエは壊そうとしてんだぞツ!!」

一切感情の起伏が読み取れないリオンの様子に、グレイはとうとう激昂し声を荒らげた。

しかし、やはりリオンの様子は変わらない。

仮面を外し、頭になった逆立った銀髪が夜風に揺らされ、鋭い目がグレイを射抜く。

「記憶をすり替えるな…。ウルはお前が殺したんだ、グレイ」

「ツ!!」

「よくおめおめお生きていられたものだな」

返ってきたリオンの言葉に、グレイは思わず口籠ってしまふ。

続けてリオンがそう言い、彼は眉を顰め、鋭い目をさらに吊り上げさせた。

くくく

場所が再び変わって山から転げ落ちたナツとレア。  
あまりの勢いでナツは頭から地面に埋まっていた。  
そしてレアはというと…。

「オエエ……」

酔っていた……。

レアの魔法とはいえ冷気は食べることは出来ない。

しかし、形作られた氷ならば水温変化を用いて氷を溶かし食べる事ができる。

その結果、レアは自身の動きを封じる部分の氷を食べ、氷の球体内で自由に動けるようにはなった。

だが、山を転がる球体に酔いが酷い者を放り込めばどうなるか、それは火を見るより明らかだった。

「ウガアアアアアアッ!!! グレイ……あのやろオ……おぼえてやがれえ!!!」

埋まっていたナツはブレスを吹き出しながら飛び上がる事で地面に足を着ける事に成功し、未だに紫色に光る山頂を見上げながらそう悪態ついた。

その傍らで左手に火を宿して自分を凍らせている氷に当てる。

しかし、ジュウウウウウと音を立てるも氷は溶ける様子を見せない。

「しっかし、火で溶けねえってのはどうなってんだ？この氷……」

ある程度火を当てても溶けない様子を見て一度諦めたナツは手に宿した火を引っ込め、レアの方に向き直る。

「んな事やってる場合じゃねえ!! レア!早く村に行かねーと!!」  
「ナツ、待ってなの」

手をバタバタさせて急ぎをアピールするナツだったが、酔いがある程度収まったレアが静止の声をかける。

「何言ってるんだ！ 早く行かねーと、村が消えちまうかもしれねえぞ！！」  
「ん。だから、ナツは先に行ってほしいの。レアはこの氷を食べべ切ってから向かうの」

そう言いながらレアは転がっていた時と同様、水温変化の魔法を用いて氷を溶かし、溶けた水を食べていた。

ならオレのも！とナツは懇願するがレアはすぐさま却下した。  
単純な話だが時間が掛かるのだ。

レア曰く、内側の氷は自身の体温などもあつてか溶けやすいのだが、外側になっていくに連れて氷の温度が低くなっており、溶かすのに時間が掛かる。

であれば、ナツが先に行った方がまだ効率がいいとの事だった。

「レアの氷が溶けたらすぐに向かうの。だから、フリーシャとハツピー、ルーシィに村のみんなをよろしくなの」

「……任せろ！！ なんなら、レアが来る前にオレが全員倒してやるう！！ ってクソ！！走りづれえっ！！」

レアの思いに応えたナツが勢いよくその場から駆け出した。

が、膝下まで凍っていることもあり、フラフラと随分不安定な走りを見せた。

一抹の不安を抱えたレアだったが、自分の今できることをと、氷を溶かす作業に戻ったのだった。

くくく

再び場所は飛び、ハルジオンの沖。

一隻の船がガルナ島に向かっていた。

ただの船では無い。



大型の帆船で、てっぺんの旗には舌を出したドクロがデザインされている。

海賊船だ。

しかし、海賊船の割には活気が無かった。

それもそのハズ、クルーたちは軒並み意識を失っており、甲板で倒れていたのだから。

唯一意識のある船長らしき人物は舵をとっていた。

「あ…あんな島に何しに行くつもりでえ…!!」

「いいから舵をとれ」

「ひっ…」

舵をとっていた船長は忌々しげに後ろの人物にそう悪態つくも、低い声で命令されて小さく悲鳴を上げた。

命令したのは紅い髪が海風になびく鎧の魔導士、エルザであった。

「勘弁してくれよ…! ガルナ島は呪いの島だ…! 噂じゃ、人間が悪魔になっちまうって…!!」

「興味が無い」

完全に萎縮しながらも何とかならないかとガルナ島の悪い噂を並べるも全て一蹴されてしまう。

ハルジオンの港でもエルザは、こき使おうと民間人に困る者が居ない海賊にガルナ島まで連れて行くよう言ったが海賊はこれを拒否、襲いかかるも返り討ちにあって今に至る。

その強さを知っている船長は仲間もない状況では勝ち目が無いとただただ従うしか無かった。

「掟を破った者どもへ仕置きに行く。ただそれだけだ」

そう言ったエルザは目視で見えてきたガルナ島を睨みつけ、拳を固

く握りしめた。

くくく

「一という訳でね、これから攻めてくる奴らはみんなをそんな姿にした犯人なのよ。捕まえて元に戻す方法を聞くチャンスだわ」

ハッピーとフリーシャの二人が全力を出したことで、ルーシイたちはシエリーらが村に着くよりも前に到着し、村民にここまであった事、これから起こる事全てを話した。

思いもよらなかつた事に村民は顔を見合わせてざわめく。

「捕まえるって言っても、あの三人たぶん魔導士かしら。簡単にはいかないのよ」

そんな中、真剣な面持ちでフリーシャが言う。

それに同意するようにルーシイも顎に手を当てて思考を巡らせる。

「そうね…。こつちの方が人数が多いとはいえ…魔導士はゼロ」

「ルーシイは戦わない設定なんだ」

「ホントこういう所で凶太いかしら」

まさかの発言にハッピーはあんぐりとなり、フリーシャは眉間を揉む。

すると、何か思いついたのかルーシイはパンと手を叩いてニヒリと笑みを浮かべた。

「いー作戦思いついちゃった♡」

そう言ったルーシイだったが、猫二匹は揃って悪い予感がすると思っただのはここだけの話である。

## レアVS毒爪のトビー

ざわざわと、これから襲ってくる敵に不安を抱える村民たちの騒ぎはすぐさま村中に広がった。

当然、それは村長のモカの耳にも入っていた。

「この騒ぎは何事かねっ!!」

駆け足でやって来たモカにルーシイが駆け寄って村民に行った説明をもう一度行つた。

「聞いてください。もうすぐ敵がここに攻めてきます」

「敵!!?」

「それつらは森の遺跡に住みついて、みんなの体をそんな姿にした犯人なんです」

「そんな事は聞いとらん!!! 月はまだ壊せんのかあ!!!」

しかし、モカはというと完全に聞く耳持たずであつた。

目をクワツと見開かせて叫ぶモカにルーシイは思わずたじろぐ。

改めて月を壊す必要は無いと言うも、モカはじたばたと暴れながら月を壊してくれと喚く。

見かねた村民がモカを抑える事でとりあえずその場は収束した。

「気にしないでやってください。やっぱりボボ……息子の事がありますから」

未だに「月さえ無ければ……!」と喚くモカを見て何とも言えない表情になるルーシイを見た村民の一人がそう耳に囁く。

それを聞いたルーシイも「ええ」と短く答えて神妙な面持ちに変わった。

「任せて。きっと上手くいくから」

そう言って、金の鍵を懐から取り出した。

くくく

「姫、準備が整いました」

ルーシイが作戦の為に呼び出したのはバルゴだった。  
ひと仕事終えたバルゴに、ルーシイは微笑みながら歩み寄る。

「ありがとうバルゴ。さすがに速いわね」

「お置きですか？」

「褒めてんのよ!!」

「あのさー」

謎のコントを行うルーシイとバルゴに、真剣な面持ちのハッピーが話しかけた。

「オイラやつぱりルーシイってバカかもって本気で思うんだ」

「淡々とそんな事言われても…」

いきなり面と向かってかなり失礼な事を言うハッピーにルーシイは微妙な表情を浮かべる。

しかしそれに同意するかのようフリーシャが頷きながら口を開く。

「こんな子供騙しな罠にかかるなんて、それこそ子供くらいかしら。大の大人の魔導士が引つ掛かるとは到底思えないのよ」

「何言ってるのよ。完璧な落とし穴じゃない」

「その発想自体がバカって言ってるかしら」

フリーシャの言葉に、何故かドヤ顔しながら言葉を返すルーシィ。その後ろには不自然に盛り上がった草があった。

一層フリーシャは呆れた様子を見せ、額を抑えながらため息を吐いた。

確かにこの村の入り口は一つしか無い。

だからと言って馬鹿正直に村の入り口から攻めてくる敵が何処にいるだろうか。

ましてや相手は魔導士、見え見えの落とし穴を飛び越えるくらい訳ないだろう。

「こんなモノに引つ掛かる人はいないと思うな」

「同感かしら」

「わ、私も……」

「恐れながら、自分も……」

「姫、私もです！」

「アンタもかッ!!」

ハッピーとフリーシャのみならず村民からも不評の落とし穴作戦。

トドメにバルゴが堂々と言い放った事によりルーシィも我慢ならずグモオ!と唸った。

「見てなさいよアンタたち……」

「ルーシィさん! 何か近づいてきます!!」

本気でこの作戦が上手くいくと思っっているらしいルーシィは作戦をバカにされての悔しさからか拳を握りしめた。

その時、外を見張っていた門番が声を上げた。

敵だと確信したルーシィは門番に門を開けるよう声を上げる。

ゴゴゴゴと音を上げながら開く門の向こうに見えたのは……。

「みんなー!! 無事かー!!」  
「ナツー!!?」

体が氷に閉じ込められ、その氷に乗せるようにグレイを担いだナツであった。

思いもよらない予想外の客に村中から声が上がった。

だが走ってきているのがナツと分かった瞬間、ルーシイは冷や汗をかきながら首を横に振った。

「ダメー! 来ちゃダメー!!」

「あ?」

「止まって!! ストップ!!!」

このままナツが突っ込んできては折角の落とし穴がお釈迦になってしまう。

だがナツはその事情を知らない。

ルーシイは必死の形相で手を前に突き出して止まるよう叫んだ。

思いが届いたのか、キキーツ!と音を立てながらナツは落とし穴の一手手前で止まった。

ホツと胸を撫で下ろすルーシイだったが、そうは問屋が卸さない。

「ん? 何だこれ?」

「ハッ…!」

目の前の盛り上がった草が気になったナツがツンツンと足でつき出した。慌てて止めようとしたルーシイだったが、時すでに遅し。

「えぼっ!」

ズボンッ!!!

草の部分に体重をかけてしまったナツはそのまま流れるように落とし穴に落ちてしまった。

一連の流れを見ていた村民は「落ちる奴いたんだ」と哀れな子を見るような優しい目になっていた。

一方作戦が身内に不本意とはいえ潰されたルーシイは「失敗…」とボヤきながら半ば放心状態になっていた。

「おいおいおい、こんな時にお茶目したやつは誰だコラ…！」

「ルーシイに決まってるじゃないか」

「やっぱりか!!!」

「違うのよー!!!」

一方嵌められたナツはそう言いながら上を見上げる。

ルーシイにとっては真面目だったとはいえ、ナツからすればイタズラを仕掛けられたのと大差ない故に遠回しに真面目にやれと怒っていた。

「ナツとグレイ無事だったんだね」

「レアはどうしたのかしら!？」

「無事じゃねえ、グレイはダウンだ。レアはまだ氷食べてるトコだ」

淡々とナツらの現状を報告し、ナツは自身に変化があったことに気づいた。

「ん？ あれ!？氷が割れてる！ 火でもダメだったのに?！」

そう、ナツの動きを阻害していた氷が割れ、落とし穴の至る所に散らばっていたのだ。

それを見たルーシイが「作戦通り」なんて言ってたが、完全にタマタマだ。

単純に、ナツと術者であるリオンの距離が離れたから魔法の効力

が弱まったのだ。

それが落とし穴に落ちた時の衝撃で霧散したのだ。身軽になったナツはさつさと穴から這い上がり、傷ついて気絶しているグレイを安静にさせた。

「グレイ……」

「そっぴやアイツら、まだ来てねえのか？」

「確かに遅いかしら……」

力なく倒れているグレイを、ルーシイは心配そうに見つめる。

その傍ら、ナツが疑問に思ったことを言い、フリーシヤが同感と示した。

ナツの疑問は最もだ。

ナツやルーシイたちよりも先に村へ向かったハズであるのに、一旦山に登りグレイを回収しても尚ナツの方が先に村に着いた。

なんなら氷のせいで動きが阻害されていた事もあつて普通に走るよりも時間は掛かったハズだ。

その不気味さに、一同はより一層不安を覚える。

迷ったという選択肢も有り得ないと言える。

山の頂上から村の位置は見えていたのだから、三人もいて全員迷うなんてことはまず無いだろう。

その時だった。

「な…なんだアレは!!？」

村民の誰かがそう叫んだ。

叫び声の方に向くと、村民の一人が空を指さして口をあんどりと開けている。

それに釣られるように他のみんなも空へと視線を移す。

紫の月の光が夜空を照らす中、一つ不自然なシルエツトが浮かんでいる。



シルエットは少し降下し、その全体像が頭になる。

「ネズミが飛んでる!!!」

「何だ、あのバケツは!!!?」

何と、昼間にナツ、グレイ、レアにボコボコにされたシェリーにアンジェリカと呼ばれていたネズミが尻尾をプロペラのように回転させて空を飛んでいたのだ。

背中には零帝一派の三人が乗っており、手には緑色のゼリーのようなジェル状の液体がたっぷり入ったバケツをぶら下げている。

「毒々ゼリーの準備に時間がかかってしまいましたわ」

「しかしちょうど良かった。一名足りないが、例の魔導士共も村に集まってる」

「おおーん」

空を飛ぶ零帝一派にルーシイが落とし穴作戦が効力を失ったことに悔しさからキーツと唸る中そんな事を話し合う三人。

「デリオラを滅ぼさない限り、私たちの望みは達せられないのです。邪魔する者には ” 死 ” あるのみですわ」

光の無い瞳で村を見下しながらそう放ったシェリーの言葉は、酷く抑揚が無い。

その時、バケツの端からゼリーがたぷんと一滴、一つの雫となつてこぼれ落ちた。

ゼリーは真っ直ぐとルーシイに向かって落下していき…。

「ルーシイ!!!」

「きゃああ!?!」

当たる直前でナツがルーシイに飛びつきゼリーを回避した。  
自由落下を続けるゼリーはそのまま地面に向かい、遂にルーシイの  
足元に生えていた雑草諸共地面に接触した。途端…。

ジュワアアア…!!!

「ひっ!？」

「なんだ…この危ねえ臭いは…!!！」

なんと、ゼリーが触れた傍から音を立てて溶け始めたのだ。

溶けだしたのは雑草のみならず、ゼリーが触れた地面をも溶かして  
おり、ゼリーが落ちた部分にはポツカリと穴が空いていた。

それを見た村民は一斉にパニックになった。

アンジェリカがぶら下げるバケツに、今見た地面をも溶かすゼリー  
が大量に入って空を飛んでいる。

しかもそんな危険なゼリーを持っている奴らはこの村を消せと言  
われそれを実行しようとしている。

最悪な結果が想像された。

「まさか、今のをばら撒くつもりか!？」

そう、あのゼリーがバケツから溢れるほど大量に入ってる状態でこ  
の村を消す方法。

空中からばら撒くだけの簡単なお仕事だ。

現状を嫌という程鮮明に理解した村民は揃って頭を抱え、あちこち  
へ走り回りながら慌てふためく。

「醜い」

「ツ!？」

唐突、そんな言葉をナツの耳はキャッチした。

発言元は空にいるユウカだった。

普通はるか上空にいるユウカの声など、地上にいる者に聞こえる訳が無いだろう。

だが生憎と、滅竜魔導士の五感は常人よりも遥かに優れている。

遠目にしか見えていないハズの者の声をバツチリ聞き取る程には。

「月の雫の影響がこうも人間を醜くするか」  
ムーンドリツプ

「まるで悪魔。デリオラの子のようで不愉快ですわ」

なんとも自己中心的な思考だろうか。

彼らの行った月の雫ムーンドリツプの儀式によってこの村の惨状が生まれたというのに、彼らは反省どころか自分たちの邪魔をする、それを促した者全てを敵と見なし排除しようとしている。

本当の悪魔とはこういう者どものことを言うのだろう。

一連のやり取りを全て聞いていたナツは眉間に皺を寄せ、ギリツと歯ぎしりをしながら上空にいるシエリーらを睨みつける。

しかし、彼らにとってそんな事は知らない。

「アンジェリカ、おやりになって」

「チューー！」

シエリーが声をかけた事によって、アンジェリカは手に持っていたバケツを放り投げた。

空中に舞うバケツから大量のゼリーが溢れ出し、まるで隕石でも降ってくるかのように、村の上空を緑で覆い尽くした。

「こんなのもう防げばいいのよおおお!!!」

絶望が降り注がれる。

対処法が浮かばず涙目になりながら頭を抱えるルーシイだったが、たった一人この状況で動き出した。

「みんな!! 村の真ん中に集まれ!!!」

ナツだ。

ハッピーに飛べるかを問い、彼も「あいさー!」と返事をして羽を出し空へ駆ける。

それと同時に、村民たちも、一人を除いてナツの言った通り村の真ん中へと集まる。

「ワシは…! ワシはボボの墓から離れんぞ!!」

「村長!! 気持ちは分かるが!!!」

動かない例外の一人は村長のモ力であった。

息子であったボボの墓に手を添え、その場に膝をつき全く動こうとしない。

しかし、もう助けに行く時間も無い。

ハッピーに掴まれたナツが降り注ぐゼリーの目の前まで来た。

「これで吹っ飛べ!!! 火竜の焔炎!!!」

ナツは右手に纏った炎と左手に纏った炎、二つの炎を合わせること  
で巨大な火球を作り出す。

人間を丸々飲み込みそうな大きさの火球を、ナツは思いっきり振り  
かぶってゼリーに投げつける。

火球がゼリーに触れた瞬間…。

ドゴオオオン!!!

カツ!と閃光が走り、火球が当たった部分を中心にゼリーを爆散させ空を晴らした。

「火の魔導士ですわ!!」

あまりの高威力の魔法に、シェリーらも驚愕を隠せずにはいられなかった。

しかし、一難去つてまた一難。

ナツが爆散させたことで村の中心部は晴れたとはいえ、ゼリーが消滅した訳では無い。

周りに散らされたゼリーはその後流星群のように降り注がれた。

ゼリーが降り注がれる端から村が消滅していく。

その時だった。

「村長!!」

ボボの墓から動こうとしないモカの元にゼリーが一直線に向かっていた。

誰かが叫んだがもう間に合わない。

このままでは村長が殺される…!

しかしそうはならなかった。

「水竜の抱擁」

突然、水流のバリアがモカを包み込み、モカの向かっていたゼリーを跳ね返したのだ。

何事かと村民もルーシイも目を見開いたが、フリーシャだけは嬉しそうに目を輝かせている。

状況の理解がまだ混雑している中、ボコツ!とルーシイらの足元が盛り上がった。

「あの村長お仕置きですね」

「ん、吊し上げた方がいいの」

「バルゴ! レア!」

穴から出てきたのは穴掘りが得意なバルゴと、ナツと一旦別れて自身を纏っていた氷を溶かしきったレアであった。

いつの間にかバルゴと合流したレアが、先の一瞬でモカの周りに水流のバリアを張り、ゼリーから守ったのだ。

結果、村は消滅したもののモカが張り付いていたボボの墓だけは守られた。

バキッ!!

「ニッ!!?」

「零帝様の敵は全て駆逐せねばなりません」

消滅してしまった村に心打ちひしがれる中、地上に降りてきた零帝一派。

村の残骸である木の破片を踏み荒らしながら距離を縮めてくる。

「せめてもの慈悲に一瞬の死を与えてやろうとしたのに……どうやら大量の血を見る事になりそうですわ」

「村人約50、魔導士3。15分つてどこか」

「おおう」

「オイラたちもいるぞ！ 魔導士5だ!!」

「戦力にも数えられないとは、舐められたものかしら」

シエリーの言葉に、ナツは「あ?」と眉を顰め拳をグツと握る。

そしてやはり自己中心的な言動が目立つ零帝一派に妖精フェアリーテイルの尻尾の内心は穏やかでは無い。

ルーシイは腰の鍵束に手をかけ、レアはトントンとつま先で地面を叩く。

そして共通して、鋭い目付きで目の前の三人の敵を見据えた。

「オレたちはこの場を離れよう!!」

「イヤじゃ!!ワシはボボの墓から離れんと決めておる!!」

「いい加減にしてください村長!!」

「誰か村長を黙らせてくれ!!」

「グレイさんはオレたちに任せろー!!!」

一方村民たちは動けないグレイと動こうとしないモカを連れて零帝一派から背を向けて全力で走り出した。

しかし、それをシエリーは逃そうとしない。

「零帝様の命令は皆殺し。アンジェリカ」

「チューー!」

一声かけると、アンジェリカはすぐさま行動に移した。

手にシエリーを乗せ、尻尾を回転させてその場から飛び立った。

ナツらとすれ違う際、あまりの勢いに顔を伏せた。

取り逃したと慌てて後ろを振り向いたが、次の瞬間にはポカンとなった。

「! あれえ!!?なんか勢いでしがみついちやったあ!!!」

「バカすぎる!!」

なんとルーシイがアンジェリカの足にすれ違いざまにしがみついていたのだ。

あまりにも無謀すぎる謎の行動力にナツらは揃ってバカだと口をあんぐりさせた。

しかしそんなバカでも村民を守りたい気持ちは本物である。

「てか止まりなさい!! 村の人に手出すんじゃないわよ!!!」

「何者ですの!?!」

ルーシイはしがみついているアンジェリカの足をガスツガスツと

殴りつける。

それによってようやくシェリーもしがみついたルーシイの存在に気がついた。

「これならどお？」

殴りつけることは効果が無いと区切りをつけたルーシイは、今度はこちよこちよとアンジェリカの足をくすぐり始めた。

普通こんな巨体にルーシイの手の大きさのくすぐりなど気にもとめないだろう。

実際シェリーもそんなのが効くわけと高を括っていたが、実際はそうはならなかった。

「チュアアアア!!? キヤツキヤツキヤツ!!」

「アンジェリカ!!? 何をしていますの!!尻尾を止めたら…」

その先の言葉は続くことは無かった。

「チュウー!!!」

アンジェリカがくすぐりで尻尾を止めたことにより、そのまま真つ逆さまになって落下し始めた。

アンジェリカの進撃が止まったことにより一瞬喜んだルーシイだったが、結果一緒に落ちることは脳内計算には無かったらしく、アンジェリカとシェリーと一緒に悲鳴を上げながら落下していく。

やがてボスウウン!!と大量の土煙と音を上げて、二人と一匹は森に落ちた。

「あくあ…ありやキレるぞ」

「キレてねえよ!!!」

「お前じゃねえよ」



「大丈夫かなあ。潰されてなきやいいけど」  
「潰されたら死んじゃうよ」

ユウカとトビーがコントを行う中、そんな心配をするナツ。  
しかし自分の体格基準での心配故にハッピーからツツコまれる。

「けど、ルーシイだけだと2対1で心配なの」

「それもそうかしらね。ハッピー、ついてくるのよ」

「あいさー」

「頼んだぞー!」

レアの真つ当な心配にフリーシャが答え、ハッピーと共に羽を出して森の方向へ飛んでいく。

「こっちはオレたちが片付けとく!!」

そしてナツとレアはバツと再びユウカらに向き直り勢いよく駆け出す。

まず狙うは間抜け面のトビー。

ゴンツ!!とナツは頭突きを食らわせ、トビーは「おおう!?!」と後ろへ吹き飛ばされる。

そこへさらにレアが追撃を食らわせる。

トビーの真上に飛んだレアはそのままトビーの腹目掛けて踵を落とすし込んだ。

「おふう!!?!」と苦しそうな声を上げたトビーはゴムボールのように地面を跳ねた。

空中でぐるりと体を回転させたナツと踵落としを決めた足を軸にターンを決めたレアはぶくうと頬を膨らませてユウカの方を向いた。  
嫌な予感がした次の瞬間、ゴアア!!と炎と水のブレスがユウカの上半身を包み込んだ。

不安定な姿勢だったにも関わらず、ナツはしっかり足から地面に着

地し、ズザアと地面を滑りながらユウカの方へと向き直る。

そしてブレスを食らったハズのユウカはというと、全くの無傷であり、周囲に青い膜のようなものを張っていた。

「なんて凶暴な炎と水流だ。まさか噂に聞く妖精の尻尾の双竜……  
サラマンダーリヴァアアサン  
火竜と水竜とは貴様らのことか」

そう言いながら青い膜を解いたユウカにナツは苦い顔をしながら後ろに一瞬視線を向け、レアは体ごとユウカから背を向けるように立つ。

視線を向けた先、レアが向いた方向には吹き飛ばされたハズのトビーが何食わぬ顔で既に立ち上がり、攻撃されたのか？と言外に語っているくらいケロッとしている。

「だが、オレたちもかつては名のあるギルドにいた魔導士。そう簡単にはいかんよ。魔導士ギルド『蛇姫の鱗』ラミアスケイルと言えばわかるかな？ そ  
うさ…あの ” 岩鉄のジユラ ” がいた……」  
ズゴオオオ!!!

なんと、ユウカらの正体はファイオーレ王国内でも高い実力を持つている有名ギルドの元魔導士だったのだ。

不敵な笑みを浮かべながらペラペラ喋るユウカ。

しかしそれは突然のナツはユウカに、レアはトビーへの攻撃によつて遮られた。

「き…貴様ら……！ 人の話を最後まで聞かんか!!」  
「知らん」

ユウカの言い分は最もだが、今それを律儀に守る必要は無い為、ナツはユウカの言葉を一蹴した。

「どこのギルドだとか、誰の仲間だとか関係ねえんだよ。お前らは依頼人を狙う。つまり仕事の邪魔。つまり妖精の尻尾の敵。戦う理由はそれで十分だ」

ユウカを見開いた目で睨みつけながらそう言うナツは眉間に皺が寄っている。

ナツの言葉に対し、ユウカは何か思うことがあったのか睨みつけながら舌打ちを打った。

「トビー、手を出すな。コイツはオレ一人で片付ける」

「おおーん」

「んじゃ、オレも一人で相手してやる。レアにはあの犬やるよ」

「ん、了解なの」

そうして、それぞれ配置についた。

レアはすぐさま足に水流を纏ってトビーに距離を詰める。

一瞬でさっきのようにトビーの上まで来たレアは蹴りを叩き込んだ。

しかし、トビーも似たような攻撃を食らうほどの学習能力の無いバカでは無い。

素早く後ろにステップを取ることによってレアの攻撃は空を切り、地面を抉りとった。

「おおーん：お前スゲーな、水の魔法で地面抉るのかよ」

「水を舐めてると痛い目みるの」

避けられたレアだったが特に気にすることなくトビーに再び向き直る。

しかしトビーは余裕綽々とした態度を崩さない。

すうっとトビーは両手を構えた。

「痛い目なんてみねーよ。オレはユウカより強いんだぞ」

すると、シャキーン!とトビーの爪が鋭く長いものに伸びた。

「毒爪メガクラゲ!!! この爪にはある秘密が隠されている」

「毒なの?」

「ガーン!なぜわかった...? とんでもねえ魔導士だぜ」

この犬が会話に入ると誰でもコントになってしまふのだろうか…。自分から毒と明言しているのに秘密もクソもあつたものではないだろう。

勝手に秘密を喋って勝手にバレたと思ひ込んで勝手にシヨツクを受けるトビーに、レアはとてつもなく微妙そうな表情を浮かべる。

「どうしよう……バカなの」

「バカって言うんじゃないよ!!!」

「ん」

どうやら「バカ」はトビーにとって禁句のようらしく、わかりやすく怒ってレアに襲いかかる。

シュバツ!と爪を振るうその姿はあの間抜け面からは想像もつかない程俊敏であり、並の魔導士であれば最初の一撃で爪の餌食になっていただろう。

「この爪に触れたら最後、ビリビリに痺れて死を待っただけだっ!!」

「犬さんちよつと待ってなの」

ごく丁寧に解説をしながら襲いかかってくるトビーだが、レアは軽い身のこなしで爪の攻撃はカスリもしない。

一旦爪の射程圏外へと跳んだレアはトビーに声をかけ、少し目を見開かせて額に左手を当てた。

「犬さんのココ、何かついてるの」

レアの言葉にポカンとなったトビーは「おおん？」と疑問の声を浮かべながらレアと同じように手を額に添えた。

プスツ……

「ビビビビビビ!!!? おおくん……」

「やっぱりバカなの」

レアが呆れたようにそう呟いたが無理もない。

レアと同じように手を額に添えたトビーは、自身の毒爪を引っ込めないまま添えたのだ。

その結果、毒爪はキレイにトビーの額に刺さり、自身の麻痺毒で痺れを起こし、ダウンしてしまったのだ。

ひと仕事終えたレアがユウカを相手取ったナツに視線を向けた時だった。

「火竜の……」

「素手の威力を上げる為に、魔法をブースターとして使うのか!!!」

「炎肘!!!」

「んぎィ!!!」

どうやらナツの方もたった今戦闘を終わらせたようであった。

ユウカは波動と呼ばれる特殊な振動を生み出す魔法であり、あらゆる魔法を中和するのだとか。

ユウカの前では魔法が通じない。

しかし素手であれば波動の前で止まる攻撃も貫通できると考えたナツはすぐさま実行、魔力の渦に素手を突っ込むことになったので想定外のダメージは食らったが、大した問題では無かった。

後は見ていた通りだ。

波動の中では魔法が使えない。

しかし外なら使えるということ。肘を波動の外に出しそこから炎を勢いよく噴出させ、ナツの腕はまるでロケットのように構えていた場所から発射され、ユウカの顔面を捉えたのだ。

「ナツ、お疲れ様なの」

「おう、レア。お前ももう終わってたんだな」

「ん、相手がバカでちよつと物足りないの」

落ち着いたところで二人が合流する。

ナツは相手の魔法の中に突っ込んだこともあつて顔や腕に多少傷はついていたが、この程度あつてない様なものだった。

レアに至つては無傷である。

二人は揃つて無事に立っているボボの墓の前に座り込んだ。

「ひでー事するよな、コイツら」

「ん、自己中に理不尽の塊みたいな奴らなの」

まるでクレーターのようになってしまった村があつた場所を見つめ、二人はボボの墓にそう語りかける。

しかし、二人は悲しそうな…憐れむような…そんな暗い声色は絶対に浴びせなかつた。

「でも、村も皆も絶対元通りになる」

「ん。悲しいまま終わらせなんて、絶対にしない…させないの」

しばらく二人はボボの墓の前から動かず、目を閉じて黙禱を捧げた。

くくく

「零帝様」

デリオラが封印されている洞窟。

グレイを叩きのめしても尚、苛立ちが収まらないリオンはこの場に来て師匠の仇であるデリオラを眺めていた。

命を賭してデリオラを封印したグレイとリオンの師匠ウルだが、相対したグレイとリオンの中で少し解釈違いが起こっていた。

真実はグレイが自身の村を滅ぼされた復讐にデリオラに挑んだのだ。

それを止める為にデリオラに挑んだウルが、最終的に倒しきれないと判断し、自身の体を氷へと変えてしまった。

デリオラを封じる為に命を賭したと解釈するグレイと、ウルがデリオラに挑む原因となったグレイがウルを殺したという解釈をするリオンの。

そこから二人の弟子関係は冷えきっていったとか。

そんなリオンに声をかけたのは謎装束を数人連れた仮面をつけた老人だった。

「あのグレイとかいう小僧をなぜ殺さなかったのです？」

「…別に意味は無い。オレが血を好まんのは知っているだろう」

老人……名をザルティが抱く疑問は当然の物だろう。

自身の目的の為に村の消滅を命令する人だというのに、グレイに対しては殺さず放置している。

「どうも弟弟子には情があるご様子ですな」

けたけたと笑うザルティはそのまま後ろを向いてその場を後にしようとしながらそう言う。

しかしリオンは「くだらん」とザルティの言葉を一蹴した。

「あれだけ打ち負かせば歯向かう気も起きんさ。それでも邪魔をするようなら、その時は躊躇なく殺してやろう」

「本当に？」

リオンの言葉にザルティは再び振り向いた。

仮面で表情は分かりにくいだが、頭になっている口元は不気味なほど歪な笑みを浮かべている。

くくく

時は少し進んでガルナ島の浜辺近くの森の中。

森の中へ敵と一緒に落ちていってしまったルーシイを心配して向かったハッピーとフリーシャ。

その心配は、ハッピーの方が色濃く現れていた。

「ルーシイ、大丈夫かなあ」

「彼女だって妖精の尻尾のフェアリーテイル一員かしら。森の破壊痕から戦闘は始まっているハズ…エバルー相手にも引けは取ってないし大丈夫なのよ」

フリーシャがそう言うも、ハッピーの顔は晴れない。

ハッピーとフリーシャが見た森の破壊痕…：大木は根こそぎ倒れており、何か大きなものが掘り起こされたのか、地面が一部盛り上がっている。

そしてあちこちにある切り裂かれた痕。

不安を抱えるのも仕方がないが、ハッピーが心配している部分はそのこでは無かった。

「だって、あのバカなルーシイだよ？ 変な作戦で自分の首を締めてないかが気がりだよ」

「……」



ハッピーの心配にフリーシャも何も言えなくなった。

確かに、ルーシイなら有り得ると思ってしまうたのだろう。

実際問題、ルーシイは自身の星霊ではシエリーの魔法で操る岩人形ロックドールを破壊できない、その上自身の星霊までシエリーの人間以外を操る魔法 ” 人形撃 ” によって操られてしまう為絶体絶命のピンチではあったが、海に出て、アクエリアスの味方をも巻き込む性格から自身ごとシエリーを大波に襲わせるというめっちゃくちゃな作戦を取ったのだが、それを二人が知ることは永遠にないだろう。

なぜなら二人は森を抜けて浜に出てすぐ、ルーシイを見つけたからだ。

しかし、そこに居たのはルーシイだけでは無かった。

「ルーシイ!!! よかったー！無事だったんだ…ね…?!」

「ホラ、リーシャの言った通…り…?!」

二人が目にしたのは、白目を向いて砂浜に力なく横たわるシエリーとアンジェリカ、後から積み上がったであろう岩の山、そして正座をさせられてブルブルと震えているルーシイとそれを見下ろすエルザの姿であった。

絶句。

からの大量の冷や汗。

一瞬で状況を理解したハッピーとフリーシャの次の行動へ移るまで時間はすぐだった。

ドピュー!!!と二人はすぐさま来た道を逆走し始める。

だが、エルザがそれを見逃すハズが無かった。

「ナツとレアはどこだ」

「ちよっと聞いて…!!」

一瞬の間…それこそ瞬きの瞬間にエルザはハッピーとフリーシャを捕まえ、気絶させてルーシイの前に戻ってきていた。

ハッピーは尻尾を掴まれ逆さに、フリーシヤは首根っこを掴まれ項垂れている。

右手に剣、左手に意識の無い猫……見た目は完全にひと狩り終えた後だ。

「勝手に来ちゃったのは謝るけど……今この島は大変な事になってるの!!!」

ルーシイは正座の状態から立ち上がり、エルザに島の現状を話して訴えかける。

今帰ってしまえば、村は絶対に助からない。

デリオラが復活するまでも時間が無い。

ルーシイは何とかして村を助けたいと言う。

しかし、エルザの口から出た言葉は無慈悲である。

「興味が無いな」

フリーズ。

ルーシイは一瞬何を言われたのか分からなかった。

「じゃ、じゃあ……せめて最後まで仕事を……」

その後の言葉は続かなかった。

ルーシイが言い切るよりも前に、エルザが彼女の首元に剣を突きつけたからだ。

思わず「ひっ!?!」と悲鳴を上げたのは無理のないことだろう。

「仕事? 違うぞルーシイ。貴様らはマスターを裏切った……ただで済むと思うなよ」

レアの言葉よりも抑揚の無いエルザの言葉はルーシイにとって、正

に死刑宣告に近しい恐怖があつた。

目に光が無いうえに目元に影も落ちた視線で睨みつけられ、ルーシイは「怖い…」と目元に涙を浮かべることしか出来なかつた。

## 勝手にしやがれ

ガルナ島で迎えた三日目の朝。

チウンチウンと小鳥の囀る声を聴きながらグレイは目を覚ました。瞬間、バツ！と上体を起こし辺りを見渡す。

どこかのテントのようらしく、樽や物が乱雑に入った箱などが周囲に置かれている。

「どこだ、ここは？」

テントを出ると、そこもテント内のように至る所に樽や箱、積み上がった丸太などが置かれていた。

辺りを見渡すグレイだが、今自分がいる場所に心当たりが無かった。

そんな時、声がかかった。

「よかった…目が覚めましたか？」

鱗のような肌質の腕に肘から鱗が出ているところから、村民のうちの一人だろう。

微笑みながらグレイに話しかける女性はとても温和そうである。

「驚くのも無理ないですね。ここは村から少し離れた資材置き場なんです。昨夜…ゆうべ村が無くなっちゃったから、村の人たちはみんなここに避難してるのよ」

「無くなった…？」

女性から語られた事実にはグレイは疑問を頭に浮かべたが、心当たりはありまくりだった。

脳裏を過ぎったのは、山の頂上でリオンが下した命令。

『村を消してっい』

「!! (リオンの奴…本当にやりやがったのか…:…)」

そう思っていると、ズキツ!と 그레이の胸が痛みを訴える。

それは単に昨夜の傷が痛むのか、それとも兄弟子の非行に胸が傷んだ故からなのか…。

「でも、ナツさんやレアさん、ルーシイさんのおかげで、ケガ人ができなかったのがせめてもの救いです」

「アイツらもここににいるのか?」

「ええ」

女性は続けて 그레이が目覚めたら先にあるテントに行くようにという伝言を終えその場を後にした。

그레이も言われるがままにそのテントへ向かった。

横断幕をかき分け中に入ると、 그레이は自身の目を疑った。

「エルザ!!? ルーシイ!!ハッピー!!フリーシャ!!」

目の前に足を組んでどっかりと座しているエルザと、その脇で縄で縛れしくしく泣きながら地べたに座らされているルーシイ、ハッピー、フリーシャの姿があったのだ。

「だいたいこの事情はルーシイから聞いた。お前はナツたちを止める側では無かったのか? 그레이…:…呆れてものも言えんぞ」

エルザの言葉に、 그레이は何も言えず押し黙る。

目を閉じ淡々と話すエルザに対し、 그레이はキョロキョロと話題を変える為か辺りを見渡す。

「な…ナツとレアは？」

「それは私が聞きたい」

そこでこの場に双竜の二人がいないことに気づいたグレイがそう尋ねるもエルザにオウム返しされる。

最後に二人と接触したルーシイ、ハッピーに聞いてみるも、行方は分からない。

零帝一派の一人であるユウカは消えてしまった村のクレーター部分に倒れていたが、肝心のナツとレアはいなかったのだ。

ハッピーとフリーシャがエルザに手網を握られたまま空からの捜索も行ったが、結局見つかることは叶わなかった。

「つまりナツとレアはこの場所がわからなくてフラフラしてる訳だな」

すくつと立ち上がり、エルザはテントの出口に歩を進める。

「グレイ、ナツとレアを探しに行くぞ。見つけ次第ギルドに戻る」

「な…何言ってるんだエルザ…事情を聞いたなら、今この島で何が起こってるか知ってるんだろ」

歩を進めながらそう言うエルザ。

しかしグレイは一瞬何を言っているのか分からず、そう問うた。

だが、エルザの答えはグレイにとってやはり理解できないものだった。

「それが何か？」

頭を殴られたかのような衝撃がグレイを襲う。

確認のためルーシイにも視線を向けた。

しかし、彼女も表情を曇らせてふるふると首を横に振るだけだっ

た。

くくく

一方、エルザらの話題の中心にいたナツとレアはというと、なんと遺跡の前まで来ていた。

「いっけね…折角いい事思いついたのに、寝過ごしちゃった……」

どうやらエルザの言っていたことはハズレらしく、彼らは迷ったのではなく意図してここまで来ていたのだ。

ナツは眠そうに目を擦り、レアは小さく口を開けてふわあと欠伸を一つ。

「むぐ…けど成功すれば、下の悪魔は復活できないの」「だな！」

何やらかなりの大掛かりな作戦のようらしく、成功はデリオラの復活の阻止という敵の目的の根本を叩き潰すもので、二人は気合いを入れた。

「さア…て…：…始めるか」

「ん…：作戦開始なの」

不敵に笑うナツと山の頂上を見据えるレアはそう言って遺跡の中へと足を踏み入れた。

くくく

「私はギルドの掟を破った者を連れ戻しに来た。それ以外に一切興味は無い」

「この島の人たちの姿を見たんじやねーのかよ」

淡々と告げるエルザにそう言うグレイだが、エルザはやはり興味無  
さそうに「見たさ」とたった一言。

グレイもどんどんヒートアップしていき、声を荒らげてそれを放つ  
ておけというのかと問うた。

「依頼書は各ギルドに発行されている。正式に受理されたギルドの魔  
導士に任せるのが筋ではないのか」

その言葉で、グレイの中で何かが切れた。

「見損なっただぞ…エルザ」

「何だと？」

どこまでいっても掟と口を紡ぐエルザに、ハッキリと、グレイはそ  
う言った。

外野で「エルザ様なんて事を！」「すぐにエルザ様に詫びるかしら  
！」と猫が騒ぐ中、エルザは手元に魔力を集中させた。

「お前までギルドの掟を破るつもりか。ただでは済まさんぞ」

魔力剣を顕現させ、それをグレイの首元に突きつけてそう脅す。

いつものグレイであれば、すぐさまこうべを垂れて許しを乞うた  
らう。

だが、今回ばかりは状況が違う。

なんとグレイは、自身に突きつけられた剣を驚掴みにしたのだ。  
思いもよらなかつたグレイの行動に、エルザは目を見開いた。

当然剣を掴んでは手を切ることになるも、グレイは力を込めてエル  
ザの剣を押しつけようとしている。

だが、グレイの言葉にエルザは動揺を現すことになる。



「勝手にしやがれ!! これはオレが選んだ道だ!! やらなきやならねえ事なんだ」

ドクドクと血が流れるも、握る手を緩めない。  
やがて押しよけるようにグレイは剣を離した。

剣を離して尚、怒気を纏った様子グレイはゆっくりとエルザの横を通り過ぎてテントの出口に歩む。

「最後までやらせてもらう。斬りたきや斬れよ」

その言葉を最後に、グレイはテントを出て行ってしまった。

グレイがテントを出ていっても、中は重苦しい空気で包み込まれていた。

途端、エルザの魔力によるものかファッと紅い髪が風に舞い、ギロツと身動きの取れないルーシイらの方へ睨みつける。

そしてあろう事か、グレイの血で濡れた剣をルーシイらに構えた。

「おおおお落ち着いてエルザ!!!」

「グレイは昔の友達に負けて気が立ってるんだよオ!!!」

「怒ってる理由はわかるけどその八つ当たりをリーシヤたちに向けるのは間違ってるかしらア!!!」

鬼の形相で睨まれた上に剣を構えられて完全にパニックに陥る三人。

しかし、三人分の血しぶきが舞い上がるなんて展開は起きなかった。

エルザは器用に三人の縄だけを斬り、三人を自由の身にさせたのだ。突然解放されたが故に、三人は揃ってキョトンとなった。

「これでは話にならん。まずは仕事を片付けてからだ」

「「エルザ!!」」

エルザの言葉に、三人はあからさまに喜びを顕にした。  
しかし、直後に再びギロツとエルザは三人を睨みつける。

「勘違いするなよ。罰は受けてもらうぞ」

「「あい……」」

再びしよんぼりする三人であった。

フリーシャにハツピーの返事が移っているくらいだから、よほどシヨックだったのだろう……。

くくく

「情けない……残ったのはお前だけか」

「おおーん……」

場所は変わって遺跡内の玉座の間。

自身で爪を刺した額部分に湿布を貼ったトビーが冷や汗ダラダラに石造りの玉座に腰を下ろしたりオンの前に立っていた。

「フェアリーテイル妖精の尻尾め、中々やるな」

「オレの自爆は、オウンゴールナイショの方向で頼みます」

「……」

やはりこの犬は隠し事ができないようだ。

黙っていればいいものをわざわざ言いふらし、リオンの眉間をピクピクと動かす。

そんな時、傍から二人の人影が現れた。

「これではデリオラの復活も危ういかもしれませんな」

「オマケに、妖精の尻尾フエアリーテイルに新戦力が加わってきた」  
「居たのか……ザルテイ、コユリ」

一人はデリオラの前でリオンに質問をしていた仮面をつけた老人ザルテイ。

もう一人は、白髪のボブカットに深い緑のカチューシャ、黒と赤のチャイナ風ワンピースを身にまとったコユリと呼ばれた少女だった。炎よりも紅い真紅の瞳を持ち、そしてその瞳は……どこか諦めの感情が見えるほど濁っていた。

「今宵……月の魔力は全て注がれ、デリオラが復活する。しかし、ムーンドリツプ月の雫の儀式を邪魔されてしまえば、デリオラは氷の中です」

静かにそう告げたザルテイ。

しかしリオンは焦る様子も無しに「くだらん」と吐き捨てた。

「最初からオレが手を下せば良かっただけの事」

「おおーん、面目ない」

ひそ完全に自分以外の者は下と見下すかのような発言に、コユリが眉を顰めさせた。

「リオン。相手はあの双竜に加えて、妖精女王テイターニアもいるのよ。いい加減その全てを見下した言い方止めない？」

そうコユリが咎めるように言う。

だがリオンはそのコユリの言葉に対し、その吊り上がった目を一層鋭くさせた。

「お前がそれを言うか……ウルの弟子の中で一番傲慢なクセに、一番の出来損ないだったお前が……」

「ッ！」

コユリは目を見開いて動揺を露わにするが、すぐにそれを押し込め、身を引いた。

すると、今度はザルティが一步前に身を乗り出した。

「それでは…私わたくしめも久しぶりに参戦しますかな」

「お前も戦えたのかよっ!!？」

ザルティの参戦宣言は仲間も予想外だったようで、トビーを代表に驚愕を表す。

それに答えるように、ザルティはニツと口角を上げた。

「はい……」 ロストマジック 失われた魔法” を少々」

ロストマジック 失われた魔法。

聞きなれない言葉を聞いた一同が首を傾げる中、コユリだけが驚いた様子で目を見開かせる。

「聞いたことあるわね…確か、強大な力を伴う代わりに術者への副作用が伴う魔法…だったかしら」

「流石はあのウルの一番弟子であるコユリ殿、博識なようで」

「…別にそんなのじゃないわよ。ただ小耳に挟んだだけ」

ザルティの言葉に再び表情を曇らせるコユリ。

それを傍目に、リオンは「フン」と鼻を鳴らした。

「不気味なやつだ」

そうリオンが零した時だった。

突然遺跡全体がズゴゴゴゴ…と音を立て始めた。

天井からパラパラの砂が垂れる。  
やがて地震かと思うほどの揺れが一同を襲う。  
ゴゴゴゴ!と揺れはドンドン激しくなる。  
やがて天井から砂に限らず崩れた石ころも落ち始めてくる。  
次の瞬間だった。

ズゴオオオオン!!!

「ハ……これは!？」

耳を劈くその音と共に、一同の視界は斜めに傾いた。  
文字通りそのままの意味である。

足場どころか部屋全体が斜めに傾いており、外から見れば山ごと遺跡が傾いたのだ。

「早速、やってくれましたな。ほれ……下にいますぞ」

比較的動揺が少なかったザルティが、部屋の真ん中の穴から下を覗いている。

そこにいたのは、桜色のツンツン頭と水色のサイドテールの見知った二人組であった。

「普段知らねえうちに壊れてる事はよくあつけど」

「ん、壊そうと思って壊していくと、結構大変なの」

ご存知、ナツとレアの双竜コンビであった。

ボコボコと崩れた瓦礫を背景に、ナツとレアは上にいるリオンを見上げる。

そしてそんな様子の二人を、リオンは目を鋭くさせ、睨みつけながら見下した。

「貴様ら……何のマネだ……」

ギリツと歯を噛み締めながらリオンは下二人にそう問う。  
そしてナツ、レアも上を見据えながら答える。

「建物、曲がったろ？　これで月の光は地下の悪魔に当たんねーぞ」  
「直すにしてもそう簡単にはいかないの。瓦礫も粉々に壊したから、  
時間でも戻せない限りは元には戻らないの」

二人の言葉を耳にし、リオンはより一層自身の顔を歪に歪ませたの  
だった。

ウル

「なんて事しやがる……妖精の尻尾め……」  
フェアリーテイル

顔を歪めながら苦々しくそう零したりオン。  
その横でトビーは頭を抱えていた。

「ダメだ…何がどうなったのか全然わかんね」

どうやら一人だけ未だ現状を理解出来ていないようだった。  
それに対しザルティが丁寧に説明を行う。

ナツとレアがやった事は至って簡単。

遺跡を支える支柱の半分を破壊し、遺跡を傾かせただけ。

しかしそうさせることで、頂上から降り注がれる月の光は傾いた遺跡自身が邪魔し、デリオラに当たらなくなったのだ。

めちやくちやな作戦を実行した二人を、ザルティはキレ者と評した。

「ごちやごちやうるせえよ!!!」

だがナツはそう言いながら足から火を吹き出させる。

その様子を見て、リオンは目を丸くさせた。

「足に炎!？」

「おおーん！ コイツもあの女も、体の至る所から魔法が出るんだ!!!」  
「ガアアアアアツ!!!」

トビーの言葉とナツが上へ突っ込んだのはほぼ同時だった。

勢いよく飛び込んできたナツは正に人間ミサイル。

飛び上がったナツは吸い込まれるようにリオンに飛んでいき、ゴ

キイ!!と腹に頭突きをかまし、鈍い音を立てた。

白目を剥き、くの字に折れ曲がったりオンだったが、次の瞬間、リオンの体はピキピキとひび割れていき、パライイン!と砕け散ったのだ。

感じる少なすぎる手応えと呆気なく砕け散る氷に啞然とするナツ。その時だった。

「こっちだ。空中じゃ避けれまい!」

いつの間にか穴から距離を取っていたリオンが右手に魔力を集束させていた。

それを翳すことで、ナツ目掛けて大量の氷の鷲が襲いかかる。

だがナツは、氷の鷲が直撃しようとするも、余裕の笑みを見せていた。

それもそのはずである。

今度は下からレアが足から水を噴射し、ナツと氷の鷲の間に割って入った。

そして…。

「避ける必要もないの」

そう言って大きく息を吸った。

すると、氷の鷲はレアの体に直撃すること無く、レアの周囲をグルグルと飛来し、最終的にレアの口の中へと吸い込まれていった。

コレには流石のリオンも目をギョツとさせ、な!?!と驚愕の声を漏らした。

「なっはっは! ナイスだレア!!」

笑いながら地面に敢えて不安定な姿勢で着地したナツは両足をりオンの方へと向ける。



そして、ナツは足から火炎放射器のようにゴアッ！と炎を噴出させた。

それを間一髪横に躲したりリオンだったが、ナツが逃がすはずも無い。そのままズガガガガ!!とリオンの後ろの壁を破壊しながら足を斜め下方向へ薙ぐ。

だがそれもリオンは身を屈ませることで間一髪躲した。

「こんなデタラメな魔法が……！」

苦悶をの表情を見せながら悪態着くりオンだが、まだまだナツのターンは終わっていない。

そのままナツは器用に両足を開脚させながら両手で地面に立ち、ブレイクダンスのようにクルクルと回転させた。

するとどうなるか、いまだ足から噴出しっぱなしの炎もその場を踊るようにクルクルと場を蹂躪する。

堪らずリオンもくっ！と苦しそうな声を上げながら跳び上がる。

だが、それは悪手であった。

「空中じゃ避けられないんじゃないや無かったの？」

突如、リオンの背後からそんな声が聞こえた。

慌てて視線を後ろに向けると、いつの間にかレアがリオンの背後を取って頬を口いっぱい膨らませていた。

マズイ！と表情を歪ませるリオン。

そう思うのはレアだけが原因では無い。

なんとナツも逆立ちの状態で頬を膨らませているのだ。

恐らく攻撃を仕掛けてくることはリオンでも分かった。

だが、空中という不安定な場所ではどちらかの攻撃を防げても、もう一方は食らってしまう。

これではデリオラに万全な状態で挑めない！

そう思うも、時間は待ってくれない。

「火竜の咆哮!!!」

「水竜の咆哮!!!」

二匹の竜がリオンへブレスを発射した。  
焦りからか盾すら展開出来ていないリオン。  
直撃するかと思われたその時だった。

「おおっ!!?」

「ん!？」

突然ナツの手元の床が崩れ落ち、ズボツと下の階へと抜け落ちてしまった。

その影響で、ナツのブレスはリオンの上へと逸れた。  
片やレアのブレスはリオンとの間に謎の炎の球体が割って入ってきたのだ。

ギョルンギョルンとその場で回転する炎の球体はレアのブレスをジューウウ!!!と音を立てながら食い止めた。  
結果、リオンは全くの無傷で着地した。

「おやおや……運が良かったですな、零帝様」

「昔から悪運だけは強いんだから」

「オレが食らったのはナイショの方向で……」

ケラケラ笑うザルティとため息をつきながら腰に手を当てて俯くコユリ。

そしてどこかのタイミングで黒焦げになったトビーがそれぞれ言う。  
う。

そんな一同に、怪訝そうな表情をしたリオンが口を開いた。

「何をした？ ザルティ、コユリ」

「はて？」

「とぼけるな……床が崩れ落ちた、炎の球体は貴様らのいずれかの魔法だろう」

そう問いかけると、やはりザルティがケラケラと笑った。

「さすが零帝様、お見通しでしたか……」

「リオン、言ったでしょ。舐めた態度を取るのを止めなさい。今アタシ達が手助けしなかったら、さっきの攻撃でアンタお陀仏だったわよ？」

続いてコユリが口を開いた。

だが、その発言がリオンの眉間に皺を刻み込むことになった。

「オレがあんな攻撃を食らったくらいで死ぬと？」

その途端、リオンの足元から周囲が凍りついていく。

そして瞬く間に、周囲に氷のドームを形成した。

「出ていけ。こいつはオレ一人で片付ける」

その言葉を背景に、ようやくナツが穴から這い上がってくる。

そして次にナツがみたのは、余裕が無さそうにナツとレアを睨むリオンの姿だった。

「オレはデリオラを倒せる唯一の魔導士、零帝リオンだ。こんなガキどもも消せんようでは名が廃る」

「おやおや……」

「デリオラを倒す？」

「……そういう事なの」

そんな姿に、各々反応は異なった。

ザルティは相も変わらずケタケタと笑い、ナツは頭に疑問符を浮かべ、レアはどこか納得したような表情を見せる。

だが、コユリだけは行動を起こしていた。

どういう訳か、彼女はリオンの隣に立ったのだ。

「……聞こえなかったのか？ 出ていけと言ったはずだ」

「アンタだけじゃあの二人……特に、女の方には絶対勝てないわよ」

「何だと……？」

どうやらコユリも参戦するようだが、リオンはあからさまに機嫌が悪くなる。

それはコユリの言葉でさらに熱を増すが、コユリも淡々と言葉を連ねた。

「あいつら、多分ザルティの言つてた失われたロスト魔法マジックの使い手よ。リオンも見たでしょ？ アンタの氷が無効化されたところを」

コユリの言葉を聞いているうちに、リオンも冷静になっていく。

確かに、レアの存在がある以上、魔力を大量に使われるのは想像に難くなく、それでは本命のデリオラを前に全力で戦えなくなってしまう。

リオンはそう思考を巡らせ、隣にコユリが立つことを許した。

「勝手にしろ」

「勝手にさせてもらおうわ」

その言葉を最後に二人は先頭体制に入った。

くくく

双竜とウルの元弟子が睨み合った時間はほんの数秒だった。

先にしかけたのは双竜であった。

拳に炎を纏ったナツと足に水流を纏ったレアは1コンマのズレも無く同時に襲いかかる。

「もうあの怪物、半分倒されてるようなモンなのに、わざわざ出して戦いたいのか？ 変わった奴だな！」

ふと、ナツは拳を振りかぶりながらそう言った。

最後の言葉と共に拳を地面に叩きつけるも、リオンとコユリは難なくそれを躲す。

だが、リオンにとってはそれで終わりでは無い。

ナツと同時に襲いかかってきたレアが、足の水流をブースターにしてリオンのほうへ方向転換し、リオンの頭を狙っての蹴りの姿勢を整えた。

ブオンと空を切り、まるでしなる鞭のようにレアの脚がリオンの前に迫る。

だがそれは、リオンが手を薙ぐことで出現した氷のバリアによって防がれてしまう。

一瞬レアの動きを止めたバリアだが、パリイン！と一瞬で碎け散った。

だが、その一瞬で距離とつたりリオンは再び掌に魔力を集中させた。

「全てはウルを超える為……夢の続きを見る為だ！」

叫び、リオンは掌を突き出す。

そして現れた無数の氷の鷲が双竜を襲う。

だがそれが何のその、ナツはバク転などを駆使しながらリオンから視線を外す事無く氷の鷲を躲していき、レアには言わずもがな氷は効かない。

再びその氷を腹の中へと納め、魔力を回復させる。

「だったら、そのウルと直接戦えばいいんじゃないか？」「ウルはもういない……グレイから聞いてないのかしら？」

最もなナツの反論に、今度はコユリが口を挟む。

そのままコユリは炎の弓を手を取った。

弦を引き絞ると、どこからとも無く炎の矢が一本……いや、弦の引く長さが増すごとに三本、五本と増えていく。

最終的に合計十本の矢を携えた弓を、コユリはナツでは無く視界の外にいたレアに向けた。

弦から手を離し、十本の炎の矢がレアを襲い、ナツと引き剥がした。

一方コユリの言葉に、ナツは洞窟でのグレイの言葉が頭を過ぎった。

『オレに魔法を覚えてくれた師匠ウルが命をかけて封じた悪魔だ』

そこでナツもハツとした表情となり、心の中にストーンと腑に落ちた感覚を覚えた。

「あれは死んだって事だったのか」

「グレイのせいになっ！」

瞬間、ナツの背筋に悪寒が走った。

慌てて振り向くと、そこには氷の鷲が一匹形成されていた。

そしてすぐさま氷の鷲は目の前のナツ一直線に飛来した。

今度は完璧に命中し、ナツを中心に白い水蒸気爆発を起こした。

モクモクと湯気と煙が辺りを舞う中、リオンは油断なくナツのいた方向を睨みつける。

ようやく煙が晴れると、腕で防御の体勢を整えていたナツが姿を現した。

「過去に何があったが知らねえが、今お前がやろうとしてる事で、迷惑

してる奴がたくさんいるんだ」

ナツがそう言うも、リオンはツンとした表情を崩さない。  
そんなリオンに痺れを切らしてか、ナツは怒気の含んだ声に加え、  
手に轟々と燃える炎を纏わせた。

「いい加減目覚ましてもらうぞ。熱くいお灸でな」

くくく

「……お前たち、結局何がやりたいのかよく分からないの」

ナツと引き離され、コユリに1対1を挑まれたレアはそんなことを  
言う。

そう言われたコユリはピクつと眉を動かし、引き絞った弓をそのま  
まに動きを止めた。

「……どういう事かしら」

「あの悪魔マスクは地下の悪魔を復活させてリベンジマッチ。それは  
理解したの。でも、復活の手助けをするあの変な装束の人たちとか、  
眉毛と犬たち、後お前も、結局なんでアイツに加担してるかがよく分  
からないの」

足に水流を纏わせたまま、レアはそう言葉を紡ぐ。

その言葉を聞いたコユリは一瞬安堵したような表情を浮かべ、再び  
真剣な面持ちになって口を開いた。

「単純よ。あの子たちはデリオラが減ぶことを望んでるの。封印では  
なく、完全な消滅という形でね」

「……あの悪魔に家族でも殺されたの?」

「アンタ、そういう所は鋭いのね」

それが、ガルナ島にてデリオラ復活の儀式を行っていた零帝一派の  
真実だった。

儀式を行っていた装束の者たち、そしてシエリーやユウカからも例外  
なく、デリオラに大切なものを奪われた者たちだったのだ。

リオンであれば、復活したデリオラをも倒せる。

そう信じ、彼らはこのような行為に及んだのだという。

「…お前もなの？」

「…無いと言えば嘘ね。私たちの師匠ウルもあの日、デリオラに奪  
われたようなものだしね」

俯いて答えるコユリに覇気は全く感じられない。

だがすぐさま顔を上げると、引き絞っていた弓に力を込めた。

「だから、私は取り戻す。新しく身につけたこの炎の造形魔法を使っ  
て、デリオラからウルを取り戻す！ ファイアメイク ” 追尾矢<sup>ホーミングアロー</sup>」

”  
”!!!」

コユリの魂の叫びとも言える叫びと共に放たれた十本の炎の矢。

それはレアに向かって一直線に飛んでいく…だけでは無かった。

レアに向かう炎の矢は空中で無数に分裂した。

数えるのも億劫になるほどの無数の炎の矢がレアを襲い、ついにレ  
アの懐に入り込むもレアは慌てる様子を見せなかった。

当たり前である。

なぜなら、彼女はもう既に迎撃体勢に入っていたのだから。

「水竜の翼撃!!」

突然、彼女の腕に水流が纏われた。

何の前動作も無く行われたそれにコユリは目を丸くさせた。



その一瞬の隙にレアはその場で腕を広げて回転しだす。そして腕に纏われた水流はその回転の勢いのまま巨大な渦を作り出した。

渦は周りから迫ってくる炎の矢を一つ残らず鎮火させ、跡形もなく消滅させた。

最後の一本が鎮火されると同時に、レアは回転を停止し、渦を消した。

それを見たコユリは……ニヤリと口角を上げる。

「詰めが甘いわね」

レアがその言葉を理解するには数秒かかった。

そしてコユリにとって数秒もあれば十分だった。

レアが鎮火させた炎はただの炎では無い。

コユリの魔力によって生み出された魔法である。

無論炎であるため大質量の水を被れば鎮火する事は変わらない。

だが、コユリは炎の魔法においては天才の域に立っている。

彼女は鎮火された炎の魔力を、決して無駄にはしない。

なんと、炎を鎮火された傍から自身の魔力を遠隔で操作し、レアの背後に何時ぞやの炎の球体を生み出していた。

そして……。

「ファイアメイク ” リレフスファイア 跳天球 ”」

人差し指と中指を立ててクイツと自分の方向へ曲げる。

すると炎の球体はギューン！と慣性の法則を無視した動きでレアを襲い、直撃した。

瞬間、ゴオオオ!!!とその球体を中心に火柱が上がった。

パチパチと飛び散る火花とメラメラと燃え盛る火柱を、コユリはただただ見つめている。

やがて炎の勢いが落ち着き、徐々に火柱は細くなっていく。

そしてレアは……腕を十字にして立っていた。  
身体には薄く水のベールが纏われており、その白い肌には火傷のひ  
とつも無い。

「……レアは、お前に何があつたかなんて知らないし、正直知る気も無  
いの。けど、親が居なくなる悲しみは、レアは知ってるの」

ベールを解いて再びコユリの目を見てそう言葉を紡ぐレア。

そのレアの言葉を聞いて、コユリは苦虫を噛み潰したような表情を  
見せた。

「その悲しみは……こんな事をして解けるような、生易しいものなん  
かでは絶対に無いの。レアが手伝ってあげるから、冷たくい水で頭を  
冷やすの」

ギョルンギョルンと畝る水流を再び足に纏わせ、レアは構える。

一方コユリはレアの言葉に対し、どんどん余裕が無くなっていく様  
子が目に見えてわかった。

くくく

「リオンは昔から、ウルを超える事だけを目標にしてきた。だからそ  
のウルがいなくなつた今、ウルも倒せなかつたデリオラを倒すこと  
で、ウルを越えようとしている」

遺跡へと駆ける中、グレイはリオンの目的をルーシイらにうち明か  
した。

それを聞いたルーシイは「そっか」と納得の反応を見せた。

「死んだ人を追い越すにはその方法しか……」

だが、グレイは「いや」と口を挟んだ。

「あいつは……リオンは知らないんだ」

突然の否定の言葉。

それに困惑の色を示すのは、ルーシイだけでは無い。  
ハッピーも、フリーシャも、エルザでさえも頭の上に疑問符を浮かべている。

そしてゆつくりと、グレイはその真実を告げた。

「確かにウルは、オレたちの前からいなくなつた。だけど……ウルはまだ生きている」

「え!？」

「うっそお!!？」

「でも……あの氷が……どういふことなのよ……」

「一体過去に何があつた?」

ウルは生きている。

信じられない真実に、驚愕、混乱、疑問、様々な感情が交差する。  
最後のエルザの言葉に、グレイは再び口を開いた。

くくく

10年前……とある街が、デリオラに襲われた。  
壊滅するまで一日と掛からなかった。

誰もいない荒れ果てた街に、一人の女魔導士が弟子を二人連れてやつて来た。

「デリオラ……噂には聞いていたが、ここまでとは」

この女魔導士こそ、後のグレイの師となるウルである。

街を見て回っていると、瓦礫の下敷きになっている少年を見つけた。

「リオン、コユリ！ 生存者を見つけた!!」

これが、全ての始まりだった。

怨嗟の声を垂れ流し、憎しみの表情を浮かべる少年の浄化の……瞳に希望を宿し、強さを渴望する少年の墮落の……焦りを抱き、自分に對して自身が無い少女の絶望の……物語の始まりであった。

## 永遠の魔法

雪がしんしんと降る山の中、グレイはリオン、コユリと共にウルの後について行っていた。

これから魔法の修行を行うのだとか。

「グレイ……着いてこれるか？ 私の修行は厳しいぞ」

挑発するように口角を上げて問うウルに、グレイは「おう！」と力強い返事をした。

「デリオラを倒せる力が手に入るなら、何だってやるさ」

その声を聞いたウルは「よし」と頷き、服を脱ぎ始めた。

もう一度言おう、服を脱ぎ始めたのだ。

「なッ!? 何してんだお前!?!」

突然の師匠の理解不能な奇行にグレイは思わず目をひん剥いた。

この山は年中雪が降り積もる極寒の地。

だというのにウルはなんの躊躇いもなく服を脱ぎ、あまつさえその服をポイツと放り投げる。

「お前も服を脱げ」

「ふざけんな!!!」

なんでもない事のようにケロツとそう言うウルにグレイが噛み付く。

こんな雪山で服なんぞ脱げるかということを描べ、同意を求める為にリオンとコユリの方向にも目を向けると……。

「お前らもかああ!!」

既に服を脱ぎスタンバイコンプリートのリオンとコユリがそこに居た。

あと服を脱いでいないのはグレイだけ。  
もう味方は居なかった。

「だあ！ 分かったよ!! 脱ぐよ、脱ぎやいいんだろ!？」

半ばヤケクソのようにそう怒鳴ったグレイは、その怒鳴る勢いとは正反対に渋々と服を脱いだ。

パンツ以外の服を脱いだ事を見届けたウルは微笑を浮かべて口を開く。

「それでいい。冷気を操りたくば冷気と一つになるんだ」

「すぐに慣れるさ……」

「どうって事ないわ……」

「テメエらだつて震えてんじゃねーか……!」

ウルという言葉に続いてリオン、コユリもそう言うが、その体は小刻みに震えており説得力に欠けた。

グレイの震え方と比べれば幾分マシに見えるが痩せ我慢の範疇だろう。

そうして修行は開始した。

まずは走り込みという事で、グレイは魔法教えろと文句垂れるが、上手く魔法を扱えないコユリもいるのだ。

基礎から叩き込むと言われ、グレイは不貞腐れながらも走って三人について行った。

くくく

造形魔法。

それは数多ある魔法の中でも、最も術者の個性が出る自由な魔法だ。

魔力に形を与える魔法。

その形は十人十色。

術者の有り様によって形は如何様にも変化する。

ウルは願う。

精進しろ……そして、己の ” 形 ” を見つけ出せ、と。

くくく

日数が幾分か経ち、グレイは姉弟子であるハズのコユリを差し置いて実力を伸ばしていた。

一方で、リオンだけでなく弟弟子であるハズのグレイに置いていかれ、未だに氷を上手く形に出来ないコユリは焦っていた。

グレイは基礎に重きを置いて、両手で安定した氷を生み出している、対照的にリオンは片手で自身の倍もある体積の動き回る氷を生み出している。

だがコユリの生み出す氷は三秒も経たないうちに溶けだしてしまい、冷気を操る以前の問題だった。

氷の魔導士としての死活問題であったが、コユリは焦りの様子を見せる事は決してなかった。

その行為が……より一層彼女の首を締めるとは知らずに。

くくく

「なあコユリ、グレイ。オレたちはあとどれくらいでウルを追い越せるかな？」

グレイらウルの弟子組の中で、この切り出しはリオンの決まり文句

となっていた。

聞き慣れてうんざりしてからか、グレイはリオンに目も合わせずしかめっ面で「興味ねえよ」と淡々と返した。

「何を今更なこと言ってるのよりオン。リオンは既に片手での造形魔法が出来るんでしょう？ それはもうウルのを超えてるって言っても過言じゃないわよ！ そう思うでしょ？グレイ」  
「だから興味ねえつつってんだろ」

そしてコユリがこうやってリオンを持ち上げること日常茶飯事だった。

リオンに続いて話を振られ、グレイは鬱陶しそうに額に青筋を立て、拳を握った。

「オレはデリオラを倒せばそれでいい。力さえ手に入れたら、あの氷女ともおさらばだ」

「師匠に対してなんて言い草だコラア!!!」

どうやらウル在地獄耳にグレイの呟きはしっかり入っていたようで、ウルはグレイの頭に拳骨を落としてコブを一つ作った。

グレイは「すみませんツス」と誠意の欠けらも無い謝罪をして帰路に着く。

「……いつになったら強い魔法教えてくれんだよ」

「もう教えてるじゃないか」

「造形魔法のどこが強エ魔法だよ!!! こんなモン、何の役にも立ちやしねえ!!!」

しばらく歩いて、グレイがそう切り込む。

だがウルは前を向いたままそう答えると、グレイは不満そうに噛み付いた。



するとウルは足を止め、どこか悲しそうな、悲壮感が漂う視線を後ろにいるグレイに向ける。

それを受け、グレイは気まずいからかそっぽを向いた。

「……私を見ろ」

そうウルは静かに言う。

しかしグレイは依然変わらずそっぽを向いたまま。

今度は「グレイ」と少し厳しめに名前を呼ぶと、グレイも観念したかのように再び視線をウルに戻す。

「言っただろう？ 造形魔法は自由の魔法。己の形を見つけた時、それはいくらでも強くなる」

「ケツ、同じような事ばっか言ってるじゃねえよ」

諭すようにそう言うウルだが、グレイには深く刺さらないようでもたしてもそっぽを向く。

だが、今回はそれだけでは無かった。

「って何でこんなところで脱いでんのよ!?!」

なんとグレイは先のセリフの一瞬の際に自分の服を無意識に脱いでいたのだ。

そう、無意識であるが故にグレイも指摘されて「うお!?!」と驚いている。

「お、お前のせいで変な癖付いちまったじゃねーか!!!」

「私のせいかッ!?!」

天才的な早業にグレイは羞恥心から頬を赤くしながら憤慨してウルに当たるも、ウルとて心外だと言わんばかりに拳骨をグレイの頭に

振り下ろしてもう2個コブを作った。

熟練の芸人のような鮮やかな流れのコントに、リオンとコユリは揃って腹からの大爆笑。

それに留まらず、周りはいつの間にか大所帯となっており、街の人は大なり小なりあれど顔に笑みを浮かべていた。

一方わかりやすく笑われたウルは恥ずかしそうに頬を赤くしながら伸びているグレイの首根っこを掴みあげ、小さく「帰るぞ」と促す。グレイもそれに返事し、4人は脱線しかけた帰路に再び着くのだった。

~~~~~

「まったく恥ずかしい……」

「笑える」

街から離れた一本道、先の一件を引きずっているウルがそうボヤク。

それにリオンが思い出したかのように笑うと、グレイが「うるせーツリ目」と軽口を叩く。

売り言葉に買い言葉でリオンも「黙れタレ目」と返していると、目の前から一台の馬車がやって来る。

「そういや、デリオラの話聞いたか？」

「ああ、北の大陸に移動したらしいな。ブラーゴ辺りにいるってよ」「マジか!! じゃあイスバンに平和が戻ったのかよ!?!」

帰宅中の猟師らの会話。

馬車の中から聞こえたそれは、グレイの動きを止めるのに十分すぎた。

自分の心臓の鼓動は嫌という程ハッキリ聞こえ、自分がウルに渡された買い物の袋を地面に落とした事も気づいていない。

周りの声も届かないほどのデリオラへの復讐心に取り憑かれたグレイの次の行動は、単純で愚かなものであった。

くくく

その夜、ウルの家の中は雪山に襲われていた。

だというのに、グレイは自身の荷物をまとめて外に飛び出していった。

「よせ！ デリオラに勝てる訳ないだろ！！ お前じゃ無理だグレイ！！」

しかしそれを止めようとウルは家の玄関口から声を荒らげた。

だがグレイはそんなウルの呼びかけを「うるせえよ」と一蹴してしまふ。

「お前なんかにはわかるかよ。俺は父ちゃんと母ちゃんの仇を取るんだ

！！何か文句あんのかよ！！」

「出ていけば破門にする！」

恨みつらみが宿った瞳を開いて声を荒らげるグレイにウルはそう宣言するも、それは彼の背中を押す行動に等しかった。

「ああ……！ せいせいするよ！！」

そう言って再び歩を進めたグレイは見てわかるくらい早くなる。

後ろから自分を呼び止める声が聞こえるが、止まる気は微塵もない。

「オレが死んだら、もっと強い魔法を教えなかったアンタを恨む……！」

最後の最後までそんな恨み言を口にしながら、グレイは北を指して走り出してしまったのだった。

くくく

時は戻って現在のガルナ島。

ルーシイ、ハツピー、フリーシャは目の前の光景に思わず目が点になりながら首を傾げた。

「遺跡が……傾いて……る？」

「どうなってんだー!!？」

「て……天変地異でも起きたのかしら……？」

それは昨日まで普通にまっすぐ建っていたハズの遺跡を見て故だった。

急な状況の変化にフリーズする中、グレイだけは平然を保っていた。

「ナツとレアだな。どうやったか知らねえが、こんなデタラメするのはあいつらしいねえ。狙ったのか偶然か……どちらにせよ、これで月の光はデリオラに当たらねえ」

確信めいて言うグレイに、エルザが「ああ」と同意を示した。

あちこち壊す癖がこんな所で役立つとはと零したルーシイだが、これこそがナツとレアの作戦だったとは夢にも思いうまい。

だがそんな時だった。

エルザは周りから突然気配を感じ、全方向に神経を集中させる。するとそれに呼応するように、周囲の木や茂みがガサガサと音を立て始める。

「な、何!？」

ルーシイが声を上げるもつかの間。

「見つけたぞ、妖精の尻尾！」
フェアリーテイル

現れたのは遺跡の頂上で見た謎装束の者ら……リオンの手下であった。

グレイらを囲むように現れた手下たちは武器を持って行く手を阻む。

「行け、ここは私に任せろ」

押しのけようと構えようとしたグレイだったが、それより先にエルザが剣を顕現させそう言う。

思わぬセリフにグレイは面食らう。

「リオンとの決着をつけてこい」

呆けてしまったが、面持ちを強く引き締めなおしたグレイはコクンと頷き、リオンの手下を無視して駆け出す。

それを止めようとグレイに向かって攻撃する手下がいるが、それはエルザの剣やフリーシャの爪ツメに防がれ、グレイの包囲網突破を許した。

走る 走る 走る

ウルは生きていることを伝え、兄弟子の暴走を止める為に……。

くくく

再び時は遡り、10年前のブラーゴ。

起こっていたのは、蹂躞だった。

「はあ……はあ……まいったな……ここまで強いとは……」

息を切らして片膝をつくウルの目の前では、擬人化された自然災害が街を闊歩している。

ふと、ウルは後ろに目をやると親愛なる弟子であるグレイとリオンが伸びている。

上手く戦えないコユリは街の人の避難に向かわせたのでそっちの心配は無いが、この二人を放置する訳にはいかない。

だがデリオラにそんな事情は関係ない。

魔力が渦巻き、デリオラの口の中が光で満たされていく。

「アイスメイク ”^{ローズガーデン}薔薇園”!!!」

負けじとウルは拳を手のひらに叩きつけ、デリオラをも飲み込みそうな程の巨大なバラの花園を造り上げる。

やがて首元までバラが覆い尽くすが、デリオラの口の中の光が一瞬カッと一際強く光る。

瞬間、デリオラの口から一筋の光が走った。

熱を帯びた光が走った跡には火柱がまるで壁となって建つ。

燃え盛る街を背景に立ちそびえるは厄災の象徴。

人はただ、その巨大すぎる背中を見ることしか許されない。

その傍らには巨大な、しかしデリオラから見れば一束程度の氷のバラの花束が転がっている。

だが氷の花束はすぐさまヒビが入り、パリーンと音を立てて砕け散った。

中からは、腕の中に動けないグレイを抱えるウルの姿が現れた。

「……! うあああああつ!!!」

「グレイ!!」

その時だった。

意識を失っていたグレイが、再びその気の糸を繋ぎ合わせた。

しかし自身の最後の記憶によるトラウマからか、その場で狂乱しだす。

ウルはそんなグレイをもう一つ強く抱き締め、「大丈夫だ」と声かける。

歯をガチガチと鳴らしながら震えるグレイは、藁にもすがる思いでその腕にしがみつく。

だが数秒して、グレイはその腕の正体と声の正体が結びつき、目を白黒させながら口を開いた。

「ウル……!?! え………なんで?」

「いいからリオンを連れて離れる。庇いながらじゃ、戦いづらくてしょうがない。コユリは街の人の避難誘導をしているから心配するな」

ウルにそう促されたグレイはその方向へと視線を向けると、確かにリオンはいた。

だがその目は閉じており、心配になって声をかけるも返事は無い。

だがウルから「ダウンしてるがな」と今の状態を聞き少し安心するも、ふと視界の端に映ったデリオラの姿を見てヒツと腰を抜かす。

「早く行け!! さっさとコイツ片付けてやるからっ!!!」

声を荒らげてそうウル。

だがグレイの動きはリオンに肩を貸して立ち上がったものの、その場から固まって動けない。

「………な………なんで………来たんだ……。オ……オレ………破門だろ……?」

長い沈黙の後、グレイの口から出たのはそれだった。

歯を食いしばって俯く様子は、何もできなかつた自分に対する悔しさ

をヒシヒシと感じる。

そんな弟子の姿を見て、師匠は呆れたように笑った。

「以前……友人に自分の幸せについて考えろと言われたんだ。そんな不幸そうなツラしてる覚えはないんだけどね」

それはつい先日的事だった。

自分ではそういう風に考えているからか、少し不満を覚えたのは記憶に新しい。

その不満は、ウルにとっては至極当然だった。

「だってそうだろ？　かわいい弟子が三人もいて、日に日に成長し、賑やかな毎日……十分幸せだ」

その言葉に、グレイは呆気にとられた。

自分のウルに対する態度は決しているものでは無いと、自分でも自覚はしていた。

だというのに、ウルはそんなことを想っていたのかと。

「その幸せを取り戻す為に来た」

そう言いながらスクツと立ち上がるが、グレイはそれを見て、言葉が出てこなくなる。

「いや……そ……その……足……」

グレイが見たのは、右足が無く、代わりに氷の義足を使って地面を踏みしめているウルの姿だった。

指摘を受けたウルはなんでもないようにケロツと笑って見せる。

「ああコレか？　もっていかれたが気にする事はない。素晴らしいだ

ろ？造形魔法は。あの怪物がお前こ闇ならば、私にも戦う理由があるという事だ。行け、アレは私が倒す」

そこまで言われて、グレイの感情はのダムは崩壊した。

涙はもう止まる事を忘れたかのようにボロボロと溢れ出てくる。

ウルに逃げろと言われたグレイだが、その場から動くことが出来ない。

「ダメだ…オレは…行けない…！ こんな事になったのはオレのせいだ…！！」

「誰のせいでもない」

自責の念に駆られるグレイだが、それを否定したのは他でもないウルだった。

「これは幸せを取り戻す為の試練だ」

「ウル…本気でやってるの…？」

微笑を浮かべながら背を向けたウルだったが、それを止めたのは意識を取り戻したりオンだった。

だが、その様子は明らかにおかしかった。

「幸せとか…何それ…。ウルは最強の魔導士…あんな怪物ごときに勝てないハズないだろ？」

バンツとグレイの肩を押し退けたりオンの足取りはフラフラとしている。

そして何より目は大きく開かれ、ただでさえ小さい黒目がさらに小さく見え、鋭い視線をウルへ突き刺す。

そんな様子のリオンを見て、ウルは呆れたようにため息をつく。

「リオン……前にも言っただろ？ 上には上がいる。西の国へいけば、私より強い魔導士は山ほどいる」

「そんなのいない……ウルが最強だ。じゃないとオレ……何のために修行したのか……」

「私を超えた時は、次の高みを目指せばいいだろう？」

厄災が行進を続ける背後で、ウルはリオンにそう説くも、リオンは納得出来ないと言わんばかりに涙が見開かれた目から溢れ出てくる。

「オレはアンタが最強と信じて弟子入りしたんだ……あんな怪物に負けるなよ……オレを裏切るなよお……！」

「リオン……」

裏切るな。

その言葉に、ウルは何も言えなくなる。

ただ呆然と立ち尽くす事しか出来ない師匠に痺れを切らしてか、弟子は駆け出す。

そして厄災の前に立った。

「アンタが本気を出さないなら、オレがやる……！」

そう言っつて、リオンは腕を目の前で交差させる構えを取った。

右は手の甲を、左は手のひらを上に向ける独特な構えをウルが見間違えるはずも無く、目を丸くさせた。

すると、リオンを中心に魔力が渦巻く。

「一体どこでその魔法を!!!」

「アンタがなかなか強い魔法を教えてくださいたくないから、倉庫の魔導書をアイストンネル読ませてもらった。こんなに強い魔法を隠してたんだ……」

絶対氷結!」

一人蚊帳の外のグレイは、リオンが最後に零した魔法名をオウム返しに呟く。

一方ウルはとてもじゃないが尋常ではない様子で焦っており、慌ててウルの首元の服を掴んだ。

「リオン!!その本、最後まで読んでないだろ!!! その魔法を使った者は……」

その先の言葉は続かなかった。

理由は単純、リオンの魔力がドツ!とドーム状に展開し、ウルを間接的に払い除けたからだ。

そしてそれと同時に、デリオラも凄まじい魔力の流れを感じ取り、ギロツと魔力の発生源であるリオンを睨んだ。

「デリオラにはどんな魔法も効かない……。ならば、この魔法で永久に氷の中に閉じ込めてやる」

「その魔法を使つてはならん!!!」

リオンの魔力が今か今かと解放されようとした時、それを止めたのはウルだった。

渦巻く魔力の外側からリオンを凍りつかせ、ウルはリオンの魔法の使用を阻止した。

「ウル!! 何を……」

「ダメなんだ……。絶対氷結は……使った者の身を滅ぼす」
アイスドシエル

何をしていると言おうとしたグレイの言葉は、ウルのまさかの言葉で喉の奥へと引っ込んだ。

だがウルの表情は何故か、誇らしいと言外に語った微笑を浮かべていた。

「しかし…あいつを倒すにはこれしか無いのも事実……。まさか…私がやろうとしていた事をリオンがやろうとするとはな…。さすがは弟子だ」

放心状態のグレイには、ウルが何を言っているのか理解が遅れる。その隙に顔を引き締めなおしたウルは「下がってる！」と声を上げて、凍らせたリオンよりも前へと飛び出し、リオンと同じく腕を交差する構えを取った。

「私の弟子たちには近づけさせないっ!! これで終わりだ!! バケモノオ!!!」

咆哮を上げながら進撃する厄災と同じくらい荒々しさを持った叫びは、錯覚か、デリオラの動きを一瞬止めたようにも見えた。

デリオラの拳がウルに降りかかる直前、ウルはその交差した手を振り払った。

「絶対氷結!!!」
アイストシエル

その刹那のこと、デリオラとウルを囲うようにいくつもの魔法陣が展開される。

身の危険を感じて拳を引っ込めるデリオラだが時すでに遅し、何とかならないかと熟考するも全ては後の祭り。

大質量の氷の塊がのしかかったと錯覚するほどの凄まじい冷気が辺りを包み込み、ウルの身体に変化が現れ始める。

なんと右の目の辺りから耳に掛けて、人の身体に現れるはずのない亀裂が入りはじめた。

「体が!？」

「言ったろ? この魔法は身を滅ぼす。自らの肉体を氷へと変える魔法なのだ。永久にな」

その禁忌とされる魔法を知らないグレイに語りかけるように、ウルはそう口を開き、絶句した。

だがウルはなんでもなしのように淡々と言葉を紡ぐ。

「グレイ…頼みがある。リオンとコユリには、私は死んだと伝えてくれ」

「え…？」

「あいつらの事だ。私が氷となった事を知れば、この魔法を解く為に人生を棒に振るだろう。それでは私が氷となる意味がない」

ウルが何を言ったのか一瞬思考が停止するグレイだったが、続いた言葉で嫌でも理解された。

やめろ、そう叫ぶがもう遅かった…何もかもが。手を伸ばすもあまりにも遠く届かない。

「二人にはもつと世界を見てもらいたい。グレイ…もちろんお前にもだ」

渦巻く魔力が突風を起こし、近づいてくるグレイを吹き飛ばした。空中で一回転して転び、うつ伏せの状態から顔を上げるグレイ。酷く顔を歪めているも、初めて会った頃の憎悪の感情は欠片も感じなかった。

その顔は悔恨がひしひしと表れ、目は潤み鼻はたれ情けなく開けられた大口から飛び出したのは、今までのグレイからは想像もつかない懺悔の言葉だった。

「頼む…もうやめてくれ…。これからは何でも言う事聞くからあ……」

心の何処かで、彼も理解していたのだろう。

デリオラを憎みながら修行してきた日々だったが、確かに感じる充

実感を。

出来ないことが出来るようになっていく達成感を。

そしてもう二度と与えられないと思っていた親愛の情を。

こんな状況でようやくこれ程の物を与えられたと分かったのに、彼女はその恩を返させる間もなく遠い場所に行こうとしている。

「悲しむ事はない」

だがウルの中から出たのは、小さな子を落ち着かせるかのような慈愛に満ちた言葉だった。

そして振り向いたウルは、魔法の効力で身体の半分が消えながらも、いつもと変わらない微笑を浮かべていた。

「私は生きています」

その言葉を最後に、ウルの様子はフワツと消えてしまった。

まるで最初からそこに居なかったかのように、たんぽぽの綿が風に吹かれ空へ舞うように。

——氷となって 永遠に生きています

そして氷はそのままデリオラを包み込んでいく。

包み込まれていた端からデリオラは動きを固定されていき、カチカチと固まっていく。

——歩き出せ 未来へ

——お前の闇は 私が封じよう

「ウル——————ッ
!!!!!!」

こうしてイスバン地方を荒らし回った厄災の悪魔は封じられ、グレ

イにこびりついていた闇は晴れた。

だが、彼らの物語にはまだほんの少しだけ続きがあった。

戦っていた時間が夜明け間近という事もあり、リオンが目覚めた時には日が昇り始めており、空を青く染めかけている。

眼前に広がる青い空を見て、リオンは即座に意識を覚醒させて上体を起こした。

「な……い……デリオラが!! ウルは!? ウルはどうした!!?」

それと同時に、リオンは目の前に氷漬けにされたデリオラを目にした。

目を輝かせながらこの偉業を行ったであろうウルを探すも、姿が見当たらずグレイに聞く。

だが、蹲るグレイから聞かされたウルの実情は、リオンの精神を破壊するには十分すぎた。

「…し…死んだ……」

「……うそ……だ……。うそだぁー……っ!!! オレの夢はどうなる!!? ウルを超えるオレの夢はどうなるんだ!! ええ!」

胸ぐらを掴みあげそう怒鳴るリオンに、グレイは謝罪の言葉を紡ぐ事しかできない。

だが謝ったところで、ウルはもう帰ってこない。

永久に閉ざされた夢への道。

誰よりもリオン本人が自覚しており、その絶望は計り知れない。

「くそっ……くそっ!! お前さえ……お前さえデリオラに挑まなければ……!! お前がウルを殺したんだ!!」

全ての怒りを、憎悪を、そして殺気をグレイにぶつける。

涙に濡れた顔は一向に濁く余地が見えず、自身の心がカチカチと冷

たく凍っていくのを感じる。

それは、何も二人に限った話では無い。

「どういう……こと……?」

「ッ!! ……コユリ……!」

騒ぎが収まり、デリオラが氷に閉じ込められたところを遠目でもしっかり確認できたコユリが、最悪のタイミングで合流してしまつた。

「 그레이가……ウルを殺したって……何? 戦いは終わったんでしょ……? ねえ、早くあの家に帰ろうよ……ウルから教わらないといけない事、私まだいっぱいあるんだよ?」

目からハイライトが消え、自分に語りかけるようにそう言葉を紡ぎ続けるコユリの姿は、酷く痛々しかった。

典型的な現実逃避に走るコユリを見て、リオンは力無く 그레이の胸ぐらを掴んでいた手を離し、 그레이に向けたものと同じ冷たい視線を向けた。

「どの顔^{ツラ}下げてそんな事言ってるんだよ……コユリ……」

「……へ?」

思いもよらなかつたりオンからの冷たい言葉に、コユリは思わず素っ頓狂な声を上げた。

だがリオンはそんな状態の彼女に気づいているのか否か、そのままさらに内に秘めていた思いを吐露し始めた。

「お前も、ウルの足を引っ張ってた要因の一つだろ……。いつまでたつても上達しねえお前に、ウルはどれだけの時間をお前だけに割いたと思ってる。その時間さえあれば、オレはもつと高みにも行けたハ

ズだったのに……ウルだって自分を見つめ直す時間を作れたハズなのに……！ お前が奪った時間が、ウルのを絞めて殺すことになったんだろ!! お前もグレイと同類だよ!!」

だんだんと激しさを増していくリオンの言葉を聞き、コユリは膝からその場で崩れ落ちた。

ウルが自分に必要以上に付き合ってくれていたという自覚もあり、リオンの言葉はグサグサと刺さってくる。

「だって……私……」

「言い訳なんか聞きたくねえッ!! オレを持ち上げる前に、まず自分をどうにかしたらどうなんだよ!!」 いつまでも出来損ないの癖して傲慢な奴が、ウルの名を語るんじゃねえよッ!!」

コユリとて、そう出来るのならそうしたかった。

だが、それを邪魔したのは他でもない彼女の消極的な考えと彼女自身のプライドだった。

幼なじみであるリオンの前でそんな事聞けば、内心バカにされるかもしれない。

自分は家事などはリオンよりも上手くできたのだから、魔法だってきっと上手くいくハズ。

そんな考えとプライドが彼女に意地を張らせ、ここまで来てしまったのだ。

その張った意地が水面下でリオンとコユリの間で少しずつ亀裂を作っていく、ウルが消滅をキツカケに断崖してしまったのだ。

「お前も！グレイも!!ウルを殺した原因だ!!! 二度とオレの前に姿を現すんじゃねえ!!」

こうしてリオンはブラーゴの街を去り、以来二人と顔を合わせることは無かったのだった。

真実は氷の刃

ピキッ……

時は今、遺跡内で戦闘を繰り広げていた双竜。

だがその最中、リオンが展開した氷のドームの一部に亀裂が走ったのだ。

徐々に大きくなっていく亀裂に、気づかない程全員鈍感でも無く、揃って手を止めてその方向へ視線を向ける。

ナツが「なんだ!？」と声を上げたのもつかの間、亀裂はやがてドームに風穴を開け、中から……いや、外から氷のドームに入ってくる人物に全員もれなく目を丸くさせた。

「…!? コユリ…テメエも居たのか……」

「…… 그레이」

リオンを止めるために村の資材置き場から走ってきた 그레이 だった。

双竜もリオンらも 그레이 についての最後の記憶は倒れて気絶していた事だった故に、共通して驚愕の表情を浮かべた。

그레이もまさかのコユリの存在に一瞬絶句するも、再び表情を締め直した。

「ナツ、レア……コイツらとのケジメはオレにつけさせてくれ」

「てめえ!! 一回負けてんじゃねーか!!」

「二人に対して一人で挑むなんて、正気とは思えないの」

「次はねえからよ。気も確かだ。これで決着にする」

突然のバトンタッチ宣言にナツとレアはそう声を上げるも、 그레이 はリオンとコユリの二人を見据えながら淡々と返した。

覚悟が決まったグレイに、双竜は何も言えなくなる。

「たいした自信だな」

「リオンに手酷くやられたんでしょ？ 止めた方がいいわよ、グレイ」

「……10年前…ウルが ” 死んだ ” のはオレのせいだ」

嘲笑うかのようにそう言うリオンと心配したかのように言うコユリ。

だが間を置いて語られるグレイの言葉に、二人はただ黙って聞いた。

「だが…仲間をキズつけ…村をキズつけ…あの氷を溶かそうとする
リオン、オマエだけは許さねえ。コユリもそっちに立つのであれば、
オマエも肅清対象だ……。共に罰をうけるんだ、リオン…コユリ」

そう言いながらグレイは静かに、いつか見た両手を前に交差する構えを取った。

それを見て、リオンとコユリはあからさまに表情に焦りが生まれた。

「そ…その構えはツ!! 血迷ったか!!」

「グレイ、まさか… 私たちに絶対氷結アイスドシエルを撃つつもり!!?」

「アイスドシエル?」

「なの?」

汗を頬に垂らし声を荒らげるリオンとコユリとは反対に、ナツとレアは聞き慣れない単語にポカンとなる。

だが、二人の脳裏に蘇ったのはこのガルナ島であった三つの場面だ。

『ウルはこの悪魔に絶対氷結アイスドシエルをつー魔法をかけた』

『オレに魔法を教えてくれた師匠ウルが命をかけて封じた悪魔だ』
『ウルはもういない……グレイから聞いてないのかしら?』

それは地下の洞窟でグレイが語ったデリオラに起こった事と、それを起こした者の末路を語ったコユリの言葉だ。

ここまで思い出して、ナツもレアも、グレイが何をしようとしているのか嫌でも理解した。

「今すぐ島のひとの姿を元に戻せ……そして仲間を連れて出ていけ。これはオマエらに与える最後のチャンスだ」

それを聞いたりオンは焦りの表情を引つ込め、微笑を浮かべた。

「なるほど、その魔法は脅しか……くだらん」

たかが脅しであれば怯む事はない。

そう高を括ったりオンだが、次の瞬間。

ドツ！とグレイを中心に魔力がドーム状に展開され、周囲のものを吹き飛ばす。

これはリオンも身をもつて経験した事があり、その意図を理解させられる。

「本気だ。この先何年経とうが……オレのせいでウルが死んだという事実は変わらねえ。どこかで責任とらなきゃいけなかったんだ」

魔力の渦の中心にいる故にその勢いに耐えられずか、グレイの腹や腕、肩にかかった包帯がベリベリと剥がれていく。

凄まじい冷気が辺りを支配する中リオンとコユリが見たのは、額の絆創膏がペリツと剥がれるも気にすることなく、覚悟の決まった顔でコチヲを見据えるグレイの姿だ。

「それをここにした。死ぬ覚悟はできている」

「本気…なのか…!?!」

「答えろ、リオン!! コユリ!! 共に死ぬか! 生きるかだ!!!」

そうして最後の返答を求めるグレイ。

魔力の渦の影響からか身体が二重三重にブレて見えるグレイが叫ぶ姿は今までのどんな姿よりも迫力があつた。

だがそんなグレイを見て尚、リオンは口角をニヤリと三日月のように吊り上げる。

「やれよ。お前に死ぬ勇氣はない」

なんの感情の起伏も感じられないそれを静かに胸の内に落とし込み、グレイは再び二人を見据え直す。

「残念だ。これで全て終わりだ!!!」

本当に残念そうに言葉を零し、グレイは交差した腕を広げようと力を込めた。

そして、氷の魔導士の奥義にして禁忌が今…。

「アイスド… 「ドアホオ!!!」!!!」

「バカア!!!」

「!?!」

発動しなかった。

魔法が発動する直前、なんとナツがグレイの起こした魔力の渦に飛び込んで殴り飛ばし、それに追い討ちをかけるようにレアがグレイの頭に踵を叩き込んだ。

思いがけない横槍に、リオンとコユリはポカーンとなった。

だが止める側も必死だったからか、ナツもレアも揃って息切れを起

こしている。

「ナツ…レア……」

「勝手に出てきて責任だ何だうるせえんだよ。人の獲物とるんじやねえよ」

「え…えもの？」

今度はグレイがポカーンとなる。

だがそれが何のその、ナツとレアはいつもの調子で言葉を紡ぐ。

「あいつはオレが倒すんだよ!!」

「レアはあいつを倒すの」

「な……!! オレにケジメつけさせてくれって言ったじゃねーか!!」

「はい了解しました」ってオレたちが言ったかよ」

「レアはそんな過去の事、興味なんてこれっぽっちも無いの」

「てめえら……!!」

「お? やんのか?」

いつものようなナツとグレイの軽口の掛け合いに加え、レアの天然発言も加わって、グレイの情緒を掻き乱す。

やがて彼は膝を着いていた状態から立ち上がり、ナツのマフラーを掴みあげる。

「あいつらとの決着はオレがつけなきゃならねえんだよ!!! 死ぬ覚悟だっただけでできたんだ!!!」

だが、グレイのその発言は二匹の竜の逆鱗に触れてしまった。

ナツは掴まれた腕を逆にガシツと掴んで力を込めた。

「死ぬ事が決着かよ、あ? 逃げてんじやねえぞコラ」

「恩返しのもりなの? 冒険もいいところなの」

静かに燃える炎のような怒りと滝のように勢いがあるも冷たい視線が、グレイの身を焦がし痛めつける。

二人の言葉にハツとなり、グレイは何も言えなくなってしまう。だがその時であった。

三者が相対する中、ゴゴゴゴ…と地鳴りが木霊する。

最初は小さかったそれも、数秒もすれば遺跡全体を震わせるものとなった。

そしてそれは、外で戦闘を行っていたエルザやルーシイにもバツチり聞こえていた。

エルザが「なんの音だ」と呟くが、ルーシイはたった数秒でその正体を目にし、絶句する。

「そんな…傾いてた遺跡が…元に戻ってる……」

そう、ルーシイの零した通り、傾いていた遺跡はズーンと音を立てて元通りに建て直してしまったのだ。

目の錯覚か現実か、遺跡がほんの少し浮いていたようだった。

「ど…どーなってんだ!!?」

「あれだけ苦労したのに、こんなあっさり……どういう事なの」

「こ…これじゃ、月の光がまたデリオラに……」

「お取り込み中失礼」

すっかり元通りになり、斜めになっていた地面が平らになったのを不満げにバンバンと踏みつけにするナツ。

その隣でレアはその場にしゃがみこみ、平らになった地面をコンコンと叩いている。

そしてグレイはまだ昇ってもいない上に建物のせいで見えないハズの月を恨めしそうに見るかのように天井を見上げた。

そんな中割り込んできたのは、何時ぞやの仮面の老人、ザルティ

だった。

「ほっほっほっ。そろそろ夕日が出ますので、元に戻させてもらいましたぞ」

ひよこつと現れてはとことと何でもないかのように話しながら歩み寄ってくるザルティに、グレイは不気味さを覚えた。

「オレたちがあれだけ苦労して傾けさせたのに……どうやって戻した!?!」

「ほっほっほっ」

「どうやって戻した!!!」

ナツが問うもザルティはそのニヤケ顔を見せるだけで答える気配が無い。

それが気に障ったからかクワツと表情を顰めてナツが叫ぶも、ザルティは踵を返す。

「さて……月の雫の儀式を始めに行きますかな」
ムーンドロップ

完全に無視を決め込むザルティの一連の行動は、ナツにとって許容できる範囲を余裕で超えていた。

カチンと来たナツは「シカト……」と短く零し、プルプルと身体を震わせる。

「上等じゃねえかナマハゲがあ!!!」

「ほっほっほっ」

「待てやコラー!!!」

「ナツ!!」

かと思えば鼻息を荒くさせて火を吹いて怒りを顕にし、ザルティの

後を追う。

追いかけられるザルティは無邪気に鬼ごっこを楽しむ子どものような軽い足取りで駆け、ムキになったナツがそれを追う光景に、先走りすぎだと不安を覚えたグレイがナツを呼び止める。

だがナツは怒りの表情を浮かべたまま振り向くも、足は止めない。

「オレはあのクソツタレを100万回ぶっ飛ばす!!! こっちはお前とレアに任せるぞ!!! 負けたままじゃ名折れだろ!?!」

それを聞いたグレイは案外冷静なナツに安心し、コクツと頷き、ナツは遺跡の奥へと姿を消した。

そんな中、グレイの肩をレアがポンポンと叩いた。

「グレイのじゃないの」

「わかってるよ」

レアの口から飛び出したそれはナツの最後の言葉に付け加えた言葉だった。

肩を叩かれてレアの方を向いていたグレイは返答しながらもう一度前にいるリオン、コユリを見た。

フェアリーテイル

「妖精の尻尾のだ」

フェアリーテイル

「妖精の尻尾のなの」

グレイとレアの言葉が揃ったのは完全に偶然だった。

だが、その偶然が妖精の尻尾フェアリーテイルが築いてきた絆の深さを実感させた。

それを見せられていたリオンはようやく口を開く。

「やれやれ……騒がしい奴等だ」

アイスドネル

「おまえ……さつきオレが絶対氷結アイスドネルを使おうとした時、ナツとレアが止めるのを計算に入れていたのか」

「いや……まさか奴がああ魔力に近づけるとは想像もしてなかった」

自分だってグレイの渦巻く魔力に吹き飛ばされたのに、ナツを言外に下に見る発言にグレイの隣にいたレアがムツと眉を顰める。

だがグレイはそのまま会話を続けた。

「じゃあ、本気でくろう気だったのか」

「そうだ。だがオレたち……いや、オレは助かる。そう気づいたから

”やれ” と言った。たとえばオレが氷に閉じ込められようと、オレには仲間がいる。そしてここは月の雫で絶対氷結を溶かせる島だ」
ムーンドリップ アイストシエル
「迂闊だった……。これで絶対氷結は無力だな」

微笑を浮かべながらあの時のセリフの概要を語り、グレイは自分の行いが如何に愚行だったかと気付かされ俯いた。

「それでもこのオレとの決着を望むと？ おまえはオレには勝てな……もう止めよう」……何？」

リオンが続けて言うも、それを遮ったのは他でもなくグレイだった。

突然の会話の切断に、リオンは不可思議気にグレイを見る。

「デリオラは諦めるんだ」

「何をバカな事を……。脅しの次は説得だと？ 貴様のギルドは牙を抜く優秀な歯医者でもいるのか？」

突然向けられた凶刃をしまいこんだグレイに、リオンは鼻で笑う。如何せん順序が逆なのでは無いかと思うこの場にいた女性陣だったが、その言葉は喉の奥へと引っ込ませた。

「リオン、コユリ……よく聞いてくれ」

相手を落ち着かせるような声色のグレイが告げる、グレイが二人に隠してきた真実。

「ウルは生きてるんだ」

たった九文字の言葉は、リオンの表情から笑みを引っ込ませるのに十分だった。

そして隣で聞いていたコユリも目を見開かせて動かなくなる。

「絶対氷結は、アイストシエル自らの体を氷に変える魔法だったんだ。あの時……デ
リオラを封じた氷……つまり、おまえ達が溶かそうとしてる氷はウルな
んだ。ウルは氷となって……今も生きてる……」

ウルとの約束を破ってまで告げた真実。

だがその約束は師匠ウルが弟子リオンとコユリたちの未来を案じて告げたもの。

であれば、その二人を救う為に約束を破るのであれば、彼女とて本望だろう。

「グレイ……」

リオンへ静かに歩み寄るグレイに、リオンは俯いてそう零す。

そしてグレイは、締め言葉を二人に告げる。

「リオン……コユリ……だからこんな事はや……」

……ハズだった。

「知ってるさ、そんなくだらん事」

「グレイツ!!」

「!? リオン!!!」

「あれはもはやウルでは無い。ただの氷クズだ」

グレイの口から吐き出されたのは、言葉ではなく血だった。

理由は単純、リオンがグレイの腹に氷の刃を突き刺したからだ。

口と腹から血を吹き出しながら倒れるグレイを見たりオンの顔は、

酷く…酷く歪な笑顔だった。

ガルナ島最終決戦

「カハツ……！」

「知ってるさ、そんなくだらん事」

「グレイツ!!」

「!? リオン!!!」

「あれはもはやウルでは無い。ただの氷クズだ」

腹に刺した氷の剣を引き抜きながら倒れるグレイを見るリオン。

酷く歪な笑みを浮かべながらグレイを見下した。

一方突然の事に反応が遅れてしまったレアとコユリは慌てて二人の元へと駆け寄る。

レアは崩れ落ちるグレイをすんでのところで受け止め、水を刺された部分にぶつ掛けては温度変化魔法で凍らせて応急処置を行う。

傷口に突然冷水を掛けられた故に悲鳴をあげるグレイだが、緊急事態の為レアは無視。

その傍らでコユリはリオンのコートに掴みかかっていた。

「リオン、どういう事?! あの魔法を調べてた時に教えた事よね!!」

アイストシエル絶対氷結は自らの身体を永久に氷へと変化させる魔法だって!あの

氷はウル自身……今も氷として生きてるって、私教えたわよね!!! それをただの氷クズだなんて……!!」

「ガア……ッ! ……お……おまえら……知って……た……のか……」

「グレイ、喋るななの。レアは水を氷にするのは下手くそだから下手に動くと処置した氷が割れるの」

コートを掴んでリオンの身体を前後に揺らしながら声を荒らげるコユリ。

それを聞いたグレイの中で二つの感情が浮かび上がる。

一つは驚愕。

当然だ。

自分しか知らないと思っていたはずだった、師匠と交わした秘密が既にバレていたのだ。

驚かない訳が無かった。

そしてもう一つは、激しい怒りだった。

知ってて尚、師匠を殺すに等しい行為を平然と行おうとする元弟子二人が信じられず、グツグツと腸が煮えくり返る思いがグレイの驚愕を覆い、その心を支配する。

「何だ、本気で信じていたのか？ 早く大人になれ。アレはどこまで行こうと物言わぬ氷だ」

「フーツ……！ フーツ……！ テメエら……知っててこんな事……!!」

痛みからか怒りからか、或いは両方か。

グレイは仰向けの状態でリオンとコユリを睨み上げる。

その次の瞬間の事。

ドゴツ!!!

「ッ!!!」

なんとグレイがリオンを殴り飛ばしたのだ。

口から血反吐を吐きながら動く姿は見ていて痛々しい。

可能であればすぐに止めたいという衝動が湧き上がる。

だが治療を行っていたレアには、今の彼を止める事など出来なかった。

「な……!! バカな!! その傷でなぜ動ける!?!」

「限界だ……」

「あ!?!」

口と鼻から血を垂らし顔を歪めるリオン。

「助けてやりたかったが、もう限界だ」

その言葉を皮切りに、グレイは氷の弓矢をその手に構えた。

それを放つと、生成された三本の矢は一斉にリオンへと飛来する。

その刹那、三本の矢は何時ぞやのコユリの炎の矢みたく空中で無数に分裂しリオンを襲った。

だが、長くは続かなかった。

リオンを襲っていた氷の矢は突如、ゴオツと燃え盛る炎の獅子が喰らい尽くしたのだ。

「何!？」と目を見開かせたグレイは、獅子の出処へと目を向けると、そこには距離を取ったコユリの姿があった。

「助けが必要なのは、果たして誰なのかしら…」

そう誰に対しても無く呟いたコユリの瞳の中には、消えかけの蠟燭の火のような細くも、しかし確かに燃え続けようとする意志の炎が揺らめいていた。

くくく

「……どうしようなの」

時を数秒遡って、グレイがリオンを殴り飛ばしたところまで戻る。

グレイの治療を行っていたハズのレアは立ち尽くしていた。

簡潔に言いまとめよう。

彼女は出遅れたのだ。

勢いのまま飛び出したグレイを止めきれず、後から止めようとするも思っていたよりも冷静な様子のグレイにたじろぎ、さらに前に出れなくなる。

そこからあれよあれよという間に戦闘が始まる。

かと思えばそれはコユリによって一時停止させられる。
そんな調子で、レアは出るタイミングを逃してしまったのだ。

「……でも、悪魔マスクの方は心配無さそうなの」

だがレアが呟いた通り、グレイに対する心配は当初残った時程では無かった。

レアが残った思惑としては、グレイはまだ病み上がりだからと感じた。

そして、グレイはリオンとの初戦で一度敗北していることが挙げられる。

前者に関しては、奥義である絶対氷結アイストシエルを放とうとするくらいには元気ではあるし、後者もグレイのリオンに対する罪の意識による無意識での力のセーブが発動しており、思い通りのパフォーマンスが出来ていなかった。

しかしその枷を打ち砕き、暴れる闘牛を解放したのは罪の意識の対象であったリオンであるが故に、もう彼の事は滅多な事がない限り止まりはしないだろう。

それに加え、現在のリオンはナツとの戦闘で消耗している。

どうやら自分の強さに胡座をかいて大して自分を磨かなかつただなどレアはリオンに対して感じていた。

問題があるとすればコユリの方だった。

直接手合わせをしたからこそ分かるが、コユリの底はハッキリ言つてレアにも見えなかった。

観察眼に関しては人より自信のあるレアだが、コユリの魔法は軽く打ち合っただけでは素性が全く分からないのが本音。

しかもたつた今、グレイの言葉がコユリの琴線に触れたのか、彼女も乱入しだした。

手助けしたいが、弟子同士の喧嘩に横槍を入れるほど、レアも無粋では無い。

さつき割り込んだのはあくまで無下に命を投げ捨てようとするグ

レイを止めるために過ぎなかった。

「……なら、レアのやれる事は……」

軽く思考を巡らせたレアは、遺跡の大穴へと身を投げ入れた。

くくく

「どういう意味だ……コユリ」

グレイの表情は、ハッキリ言っただけで優れなかった。

彼の幼少期の頃のコユリに対する感情は『変な奴』というのが正直な感想だ。

魔法は下手くその癖していつちよまえにウルについていこうとする気骨はある。

かと思えば口を開けば出てくるのはリオンの事ばかり。

当時はデリオラに対する憎悪で視界が狭くなっていたしなかったが、その頃のコユリに何でそこまでしてウルについていこうとするのかと聞けば、「アンタには関係ないでしょ」と突っぱねられるだろうことは、今のグレイからすれば容易に想像できた。

それが今となってはどうだ。

あの頃とは真逆の炎の魔法を、それもかなりの高レベルの魔法が自分に向かって牙を剥いている。

「ああ……ごめんなさい、声に出ていたのね……」

グレイの言葉に顔を上げたコユリは、そう呟きながら氷の矢を喰らい終えた獅子を自分の手元へと戻しながらリオンの傍へと歩み寄った。

「コユリ……手出しは不要だ……！ このオレが、グレイ如きに血を流

し、お前に助けられるなど……あつてはならんのだから!!」

しかし地面に伏せられているリオンは近くまで寄ってきたコユリを睨みあげ、あろう事か罵声を浴びせた。

だが、コユリはそんなリオンに何をするでもなく、ただただ冷たい目で見下ろした。

その次の瞬間。

ゴボツ!!

「ガハツ!!!」

「!!?」

なんとコユリが倒れているリオンの腹に蹴りを叩き込んだのだ。

あまりにも突然の事に、リオンもグレイも今コユリが何をしたのか理解が遅れる。

「どういう意味か……だったわよね、グレイ……」

未だに理解が追いつかない状況の中、コユリは再び口を開いた。

なんでもないように話し始めるコユリに、グレイはいつそ不気味さを覚えた。

「絶対氷結アイストンセルについて調べてからずうーつと考えてたの。本当に助けが必要なのは、今もデリオラを捕らえていると同時に囚われてるウルなんじゃないかって」

その言葉を聞いて、グレイは少しハツとなった。

コユリの言わんとしていることが、なんとなくではあるものの理解出来たのだろう。

だがコユリはそれに気づいているのか否か、あるいはどっちでもいいのか、そのまま言葉を紡ぎ続けていく。

「あの日、ウルが氷となってデリオラを封じ込めて、10年の月日が経った。10年だよ？ 子供だった私たちが、こんなに大きくなるまで時間が経った。だっていうのにウルは、物も言えず、移動も出来ず、ただただデリオラと運命を共にするしか無い。ねえ、どんな生き地獄なんだろうね…」

「それ…は…」

グレイは、コユリの言葉に反論出来なかった。

言い淀んでしまった。

考えたこともなかった。

今も生きている師匠を殺してしまうのはいけないことだ。

それは何も間違っていないだろう。

だがそれは同時に、ウルを永遠にあの憎き悪魔と運命を共にするということを意味する事となんら変わりなかった。

それに気づいた故に、グレイは言い淀んでしまった。

反論出来ず、心のどこかで「その通りだ」と微かにでも思ってしまった。

「その様子じゃ、貴方も理解したわね。じゃあ、邪魔はしないで貰えるかしら？ 私の目的は、デリオラからのウルの解放。あの人は、こんなところで縛られていい存在じゃないの。あの人をあの悪魔から解放放たれるなら、私自身どうなろうと構わない」

踵を返し、伸びてしまったりオンの元へ向かおうとするコユリ。

しかし、彼女の最後の言葉がグレイを立ち上がらせた。

「待ちな、コユリ」

「……何？ ウルを解放したら、必然的にあの悪魔も動き出す。リオンにある程度削ってもらって、私が焼却しようとしたんだけど、肝心の彼は自分の力に溺れてダメそうだから、私がアイツを始末しなく

「ちや。ここであまり力を使いたくないのだけだ」

ため息を吐きながらコユリは再びグレイに面を向ける。

対してグレイは、やはりコユリの言葉の節々に思うところはあつたのだろう。

俯いたまましばらく固まっていたが、もう一度コユリをしつかりと見据えた。

「…確かに、お前の言うことは間違つてねえかもしれねえ。ウルは10年も、デリオラを封じて、その間何も出来ずただ氷として生きている。確かにとんだ生き地獄だよな…。けど、ウルとの約束を思い出しちまつたんだ」

そう言つて、グレイが思い返すのは氷になつて行くウルの、弟子たちへ向けた最期の願いだ。

『二人にはもつと世界を見てもらいたい』

二人だけじゃない。

自分に対しても送られた師匠の願いを叶えてあげることこそが、弟子が師匠に対して行える最大の恩返しだ。

「オレはウルの言葉を信じ、西へ向かった。そこで、妖精フェアリーテイルの尻尾にたどり着いたんだ。そこには、ウルにも匹敵するようなすげえ魔導士が山ほどいた。ホント信じられなかった」

たどり着いた先で、グレイは当時のマスターマカロフに、どうにかして氷となつたウルを溶かせないか聞いたものだ。

言葉は濁されたが、その時マカロフは確かに月の雫ムーンドロップの事を思い浮かべていた。

最終的に、その氷を溶かすことはウルを殺すに等しいと言われ、言

葉を呑んだが。

「調べたことだけじゃ分からねえのが世界だ。お前がやろうとしている事は、ウルを殺すっていう事に他ならねえんだ」

「じゃあ何？ グレイはこのままウルに生き地獄を見せ続けるって言いたい訳？」

「そうじゃねえ…！ 他にもウルを救う方法は何かあるハズだろ！」

「何かって何さ!! そんな曖昧な状態でよくそんな事が言えるわね!!」

「デリオラからウルを助け出す方法なんて、もうこれしか…！」

「それの世界を見て探せって言ってるんだよ!! そんな狭エ視野で、一体何が見えるってんだ!!!」

売り言葉に買い言葉。

グレイの言葉を着火剤に、二人の言い合いは激しさを増していった。

苛烈さはさらに増していき、遂に二人は魔法を放ちながらの口論に発展していく。

しかし、言い合いを続けていくごとに、コユリが明らかに疲弊していく様子が、グレイからは見て取れた。

「わかんない…わかんないわよ…!! 私に…どうしろって言っ
…！」

遂にコユリの手元から炎が鎮火され、ヘタリと膝を着いた。それに合わせ、グレイも持っていた氷の剣を粉々に砕いた。そしてそのままゆっくりとコユリに近づく。

「どうするも何も、簡単じゃねエか」

「……へ？」

優しく語りかけてきたグレイに、コユリは素っ頓狂な声を零した。

「お前さ、どつかのギルドに入れよ。ギルドに入って、依頼を受けて、沢山の魔法に触れて、依頼の合間にギルドであった事をウルに話してよ。そうすりゃ、ウルを助ける方法だって絶対見つかるだろ」

「……もし見つからなかったら……？」

「見つかるまで探す。まだまだ人生長エんだ。最初からそんな気分落ちてたら、見つかるモンも見つかんねエよ」

満開の笑顔を見せながらグレイはコユリに手を伸ばす。

コユリはそれとグレイの顔を不思議そうに交互に見て、可笑しそうに顔をくしゃつとした。

「ハハッ……何その脳筋思考……。アンタ本当にグレイ？ デリオラのコト以外何も見えなかった奴とは思えないわね」

「うっ……ウルセエ……！ 今何も見えてねエお前に言われたかねエよ……！！」

「……けど、道は見えた……。アンタが……。見つけさせてくれた……。アリガトね」

急な不意打ちに決まりの悪そう顔をしたグレイ。

しかし差し伸べられた手は変わらず、コユリは口元を綻ばせながらその手を取った。

「さて、偉そうなこと言ったからには、オレも色々動かかねエとな」
「それは後々にお願い。まずはザルテイの月の^{ムーンドリッヅ}の儀式を止めさせないと。それから、あの子たちの説得を……」

グレイに引つ張られる事で立ち上がったコユリがこれからの動きを思案しながら腕を組む。

が、その時。

「ッ!? グレイ!!」

突然コユリがグレイを押しつけた。

突然のコユリの行動に、グレイは呆けた表情を浮かべた次の瞬間。

「アイスメイク ” 白竜 ” !!!」

スノードラゴン

「ガアッ!!!」

「ッ!? コユリッ!!!」

目の前を巨大な氷の竜が横切り、その通り道にいたコユリに喰らいついたので。

この場でこんな芸当が出来る者は一人しか居らず、怒りを爆発させて竜の発生元へと向いた。

「何してやがる!! リオンッ!!!」

「裏切り者に相当の報いを受けさせたにすぎん。全く、あまり無駄な魔力を使わせないで欲しい物だ」

そこには、口元から血を垂らしながら左手を翳したりオンが立っていた。

右手はコユリに蹴られた腹を抑えており、まだ完全に回復はしていない様だった。

翳していた左手を羽織っているコートに手を掛け外し、リオンは身軽な状態になる。

「どう足掻いたところで、デリオラは間もなく復活する。それをお前から落ちこぼれ如きに邪魔されるなど、あつてはならんのだ」

パラインと氷の竜が砕け散り、舞い上がったコユリが地面に叩きつけられる。

グレイはその名前を呼びながら駆け寄り、寝かしつけたまま頭を抱

える。

「ハハ…やっぱバカだアタシ…。盾でも何でも展開してりや、もつとマシに対処出来たのにね…」

自嘲気味に笑うコユリ。

それに対し不安そうな顔をするグレイだが、コユリは「致命傷じゃないわよ」と安心させる為にそう言う。

「ねえグレイ。ちよつと寝るわね…。色々吐き出して疲れちゃった。終わったら起こしてくれるかしら？」

その言葉を聞いてポカンとなったグレイだったが、すぐにハッと笑みを浮かべる。

「アイツを畳んだら、叩き起してやるよ。それまで精々休んでろ」

「…ん、そうさせてもらうわ」

そう言つてコユリは瞼を閉じ、グレイも静かに頭を降ろしてやる。すうすうと規則正しく寝息を立てるコユリを見て一安心したグレイはリオンと相對する。

「遺跡の頂上での一度目、ナツとレアの戦いに乱入しての二度目、そして今回で三度目…。いい加減決着付けようじゃねエか」
「一度言つたハズだ。オレはお前の兄弟子であり、お前より強かった。10年経つた今でも、それは変わらん」

「ならオレももう一度言うぞ。あの頃と一緒にするな。オレは10年前どころか、昨日よりも強くなつてるぞ！」

そう高らかに叫び、グレイは右の拳を左の手のひらに叩きつけた。それを受けリオンは「くだらん」と発して右手を翳す。

「アイスメイク ” 槍騎兵”^{ランス}!!!」
「アイスメイク ” 大驚”^{イェグル}」

両者が展開した魔法陣から魔法が放たれたのは同時だった。敵を討たんと真つ直ぐ飛ぶ無数の槍と驚は、やはり二人の中間地点にて衝突した。

ズギャギャギャ!!と凄まじい衝撃音が響き、白い水蒸気がモクモクと煙幕のように二人の視界を遮る。

リオンはそれを見て翳していた右手を下ろす。

しかしそれは傲慢さ故の油断でしかない。

瞬間、煙幕となった水蒸気の中から氷の槍が飛び出してきたのだ。

「何!?!」と目を見開いて咄嗟にもう一度右手を翳した。

しかし槍は既に懐に入り込んでおり、リオンは何発か槍をモ口に食らう。

直後、リオンは巨大な氷の猿を顕現させ、その手の内に自身の体を隠すことで身を守る。

「オレがグレイ如きに……押し負けた……だと!?!」

氷の槍の雨が止み、猿を砕いて現れたりリオンは脇腹を抑えながら苦悶の表情を浮かべる。

ギリツと歯を噛み締めると、煙幕の中からグレイがゆっくりと歩いて現れた。

「コユリの事情はある程度理解した。だがリオン。お前にはハッキリ言つて情緒酌量の余地がねエよ。ウルを超える為にウルを殺すだど? 呆れて言葉も出ねえぞオレは」

「…なんとも言え。オレは今日という日の為にこの100年を生きてきた」

グレイが現れた瞬間、親の仇かのように睨みつけたリオンだったが、言葉を聞いているうちに落ち着いてきたのか淡々と語りだす。

「この10年、コユリには随分と動いてもらった。仲間と知識を集め、月の光を集めるこの島の存在を知った。そしてデリオラをブラーゴから運び出したのが3年前さ」

「こんなくだらねえ事を3年もやってたのか」

「くだらんだと？ 師が死に、残された弟子が何をもって師を超えられるかよく考えろ!!! デリオラだ!! 師が唯一倒せなかつたデリオラを葬る事でオレは師を超えた事が証明される!!!」

「その向上心は立派はものだが、お前は途中で道を間違えてる事に気がついてねえ!! 何も見えてねえ奴がウルに勝つだど?! 100年早エよ!! 出直してこい!!!」

激情したりオンが手に氷の猛獣を纏ってグレイに振るうも、グレイもそれを的確に避け、一瞬で造形した剣をリオンの胴体に振るった。ズバツ!と斬撃は見事命中するが、グレイはあまりにも手応えが無いことには違和感を感じる。

それもそうだ。
グレイが斬ったのはリオン本人ではなく、リオンの氷像だったからだ。

パリーンと砕け散る氷像に呆気にとられるのも束の間、グレイの背後に回ったりオンが右手に魔力を集中させる。

「アイスメイク ” スノータイガー 白虎 ” !!!」

突然襲ってくる白虎だったが、グレイは慌てる様子も無く冷静に拳を手のひらに置く。

「アイスメイク ” ブリズン 牢獄 ” !!!」

バック宙しながら白虎の攻撃を避け、その頭上まで跳ぶと、襲ってきた白虎を逆に閉じ込める牢獄を作り上げる。

これで決まると思っていたのであろうリオンはまさかの反撃に目を見開く。

「これはお前の姿か、リオン。世界を知らない哀れな猛獣だ」

牢獄の上に立ち、リオンを一瞥したグレイは再び跳ぶ。

一方リオンはグレイの言葉を「くだらん」と一蹴し、閉じ込められた白虎をもう一度彼に襲わせようと牢獄の中で反転させて牢獄を壊そうとする。

「貴様の造形魔法などぶっ壊して……」

しかし、現実はそうならなかった。

リオンがいくら右手をくいつくいつと動かそうと、牢獄は白虎の突進を跳ね返し、攻撃を通さなかった。

「片手での造形はバランスが悪い。だから肝心な時に力が出せねえ」

そしてグレイが着地すると、その手には巨大な氷のバズーカ砲を構えていた。

目の前の光景に、リオンはあんどりと口を開くことしか出来なかった。

結果……。

「アイスキャノン
氷雪砲!!!」

「ぐおおあああああ!!!」

ズドオン!!!とけたたましい音を立てながら氷の砲弾が発射され、リオンに直撃した。

謎の雄叫びが響き、再び地面が斜めに傾き出したのだ。

「……………この声…忘れようがねえ…………」

グレイは斜めになった地面になど気にせず立ち上がり、今も尚響いている雄叫びに耳を傾ける。

自分の心臓の音がハッキリ聞こえ、体が震えるのもイヤという程自覚できた。

「…！…この声…………！！」

「デリオラ…」

そして雄叫びを聞き、倒れていたリオンとコユリも目を覚ました。そのまま彼らも重い体を動かして行った。

一方グレイは震える体を拳を握りしめる事で誤魔化し、覚悟を決めようとしていた。

「(やるしかねえな…………絶対氷結!!!)」
アイストシエル

幾らか震えの収まったグレイは地下へと向かう階段へと歩を進めた。

時のアーク

封印の解放からの雄叫びは島中に響き渡っていた。
遺跡から遠く離れた村の資材置き場だろうがそれは関係ない。
テントが軋み、資材が吹き荒れる。

「な、何今の声…ていうかホントに声だった!？」

遺跡の前でのリオンの手下らを下し、遺跡の内部に既に乗り込んでいたエルザ一行。

その中でルーシイが声を上げる。

確かにキーンと妙な耳鳴りのような音の混じる咆哮など、声かどうかも疑いたくなる。

「ルーシイのお腹の音かも」

「ルーシイのお腹には怪物が飼われているのかしら」

「本気で言ってるとは思えないけどムカつく…」

そうハッピーとフリーシャが身を寄せあつて小言を零すが、あえてルーシイにも聞こえるように普通の音量で言っているのが悪意に満ちている。

ルーシイもジト目で二匹の猫を睨みつけた。

一方エルザは冷や汗を一つタラリと垂らしている。

「例のデリオラとかいう魔物か?」

「そんな…まさか、復活しちやった訳!？」

その言葉を聞いて、ルーシイは目が点になり、頬を両手で覆う。

そんな中、猫二匹が何かを発見して視線をそちらに向けた。

「待つて！ あの光見覚えあるよ!!」

「ムーンドリツプ月の雫かしら！ 建物は傾いてるけど、儀式はまだ続いているのよ」

視線の先には何時ぞやに見た紫の光の道が真っ直ぐ降りていた。
数日前と比べ光は薄いうえに筋も細い。

オオオオオオオオオ
!!!!!!

すると再びデリオラの雄叫びが木霊する。

エルザは「また…」と神妙な表情で眩きながら腕を組んだ。

「ルーシイ何か食べたら?」

「あなたこそネズミに食べられちゃえば」

「じゃあそのお腹の怪物をいつもの鍵で召喚するかしら」

「できるか!!」

漫才を繰り広げるルーシイと猫二匹を背景に、エルザは思考を巡らせる。

「デリオラの声はするが ” ムーンドリツプ月の雫 ” の儀式は続行されている。
つまり、デリオラの復活はまだ完全ではないという事」

考えを口に出して整理し、エルザは上へと上がる階段へと駆け出しながらルーシイらに「来い」と呼びかけた。

しかしそれに対しルーシイはキョトンとした様子で下を指さした。

「デリオラは下だよ?」

「儀式を叩けば、まだ阻止できる!! 遺跡が傾いてまだ直されていないうちに止めればまだ間に合うはずだ! 急げ!!!」

それを聞いて納得した3人はエルザに続いて階段を上り始めた。

くくく

「ナツうー!!」

「は？ レア!?」

所変わって遺跡の真下、デリオラが置かれた場所にはレアがナツの元へとすっ飛んできた。

ここにいるハズの無い相棒にナツは目を丸くさせたが、有無を言わせぬうちにレアが口を開く。

「ごめんなさいなの。もう一度遺跡を傾かせたけど、間に合わなかったの」

それを聞いたナツはハツとなってデリオラの上を見た。

確かに降り注がれていたハズの紫の光はいつの間にか見えなくなっていた。

それが分かってナツはニカツと笑った。

「いや、ナイスだレア！ デリオラの完全復活まで余裕ができた!!」

「ほっほっ……やってくれましたね、リウアイアサン水竜」

しかし、状況が一変したにも関わらずザルティは余裕綽々とした態度を崩す様子は微塵もない。

フワフワとザルティの周辺を浮かぶ水晶玉みたく、掴みどころが無いその様子に、双竜はより気持ちを引き締める。

「モタモタしてらんねえ！ レア、いつもみたいにするぞ!!」

「ん、100万回ぶっ飛ばすの!」

「こちらも早々にケリをつけさせて頂きます……双竜よ……!」

バツと構えをとる双竜と同時に、ザルティは右腕を大きく振りかぶる。

するとザルティの周辺を浮いていた水晶玉はその動きに吊られるようにギユンと急加速してザルティの後方へ飛んだ。

そしてその腕をボールを投げるように振るうと、やはり水晶玉もその動きに吊られてナツとレア目掛けて真っ直ぐ飛んだ。

それに対し、真っ直ぐ迎え撃ったのはレアだった。

「なの!!」

声を上げながら右足を振り抜く。

レアの蹴りは水晶玉に吸い込まれるかの如く綺麗に入り、バキツと叩き割った。

だが、それで終わるわけは無かった。

ザルティが再び手を翳すと、割れた水晶玉は何事も無かったかのようになり元の球体に直ったのだ。

呆気にとられたのもつかの間。

「うぶっ!!?」

レアは再び急加速した水晶玉が顔面にクリーンヒット。

大したダメージは無いものの、空中で体制を崩したレアはナツに横抱きにされ助けられる。

「また直った!」

「私は物体の ” 時 ” を操れます。すなわち水晶を壊れる前の時間に戻したのです」

「時!? ありえないの!!」

「時のアークはあなた方の滅竜魔法と同様、ロストマジック失われた魔法の一種ですからね」

驚愕で目を見開かせる中、ヒュンヒュンと俊敏な動きで自分の手元に水晶玉を戻したザルティが解説する。

それを聞きレアは珍しく声を荒らげた。だがそれも致し方ないだろう。

時間の干渉など、世界の真髄にも干渉しかねないのだから。

しかし現にザルティは水晶玉の時を操り、修復不可能と思われた遺跡の傾きもほんの数分で修復を成してしまっているのだ、疑う余地は無いだろう。

「次は水晶の ” 時 ” を未来へと進めてみましょうか？」

誰に語るでもなくそう言ったザルティは再び水晶玉を双竜へと差し向ける。

瞬間。

キイイン……ギョオオオオ!!!

元から不規則な動きをしていた水晶玉が目にも留まらぬ速度を出し、二人が気づいた時には自分らの遙か後方へと水晶玉は飛んでいた。

かと思えば…。

「うがああ!!!」

「あぐうう!!!」

ドガガガガツ!!と身体全体を無数の衝撃が襲いかかった。

原理は単純、時を進め超加速を得た水晶玉がやたらめつたらに体当たりをかましているだけだ。

だがその神速の域に達したスピードから放たれる体当たりは受け身にならなければ到底耐え切れるものでは無かった。

必死に体を丸め耐えるナツとレアは漸く目が慣れて水晶玉を捉え

始め、ナツがカウンターで炎を纏った拳を叩き込む。

しかし壊すだけでは意味は無く、再び水晶玉は綺麗な球体に形を戻し、お返しと言わんばかりにゴツンとナツの頭へ体当たりをする。

「調子に乗るなの！」

若干の苛立ちが見えるレアが飛んできた水晶玉に合わせて水流を纏った蹴りを放つ。

だが再び叩き壊されるかと思われた水晶玉は、なんとレアの蹴りに当たる直前で動きを止めたのだ。

ピタツとフヨフヨすることも無く完全に停止した水晶玉の姿に、レアは目を丸くさせた。

「止まったの！」

「それはもう……時を止める事もできますぞ」

止まった水晶玉を不満げに覗き込むレアとナツ。

二人がかりであるにも関わらず水晶玉一つに良いようにされているのが気に食わないのだろう。

だが、二人はザルティの魔法に対してある事に気がついた。

「それ……人間には効かねーみてーだな」

「というより、生物に効かないっぽい。効いてたら、デリオラの氷はとつくに溶けてるの」

「……これはこれは……よい所目をつける。リウァイアサン水 竜殿は満点の答えですな」

二人の解答に、今度はザルティが目を見開かせた。

本当に満点のようだった。

ナツは絶対氷結アイストシエルの詳しい概要は知らないが故に疑問符を浮かべたが、レアがザルティが関心している内に軽く説明した。

「けど、お前が一番よく分からないの」

ふとレアがそんな事を声掛け、ザルティの思考は現実に戻ってくる。

しかしレアに言ったことがイマイチ理解できず疑問符を浮かべる。

「悪魔マスク……リオンはコイツを復活させてリベンジマッチ。仲間たちはそれが達成させられれば家族の仇をとれる。みんなそうなの。でもお前、デリオラが目の前で復活したのに、憎しみよりも嬉しさの方が大きいみたいなの……。目的は何なの？」

そう語り、レアの鋭い視線がザルティを射抜く。

暫しの間を置き、ザルティは笑みを更に深めた。

「いやはや……敵いませんなあ。ほっほっほっ」

不気味に笑いながら、ザルティは手元に戻した水晶玉を懐にしまい語り始めた。

「零帝様……いいえ……あんな小僧ごときにはデリオラはまず倒せませぬ。コユリ殿が助太刀して可能性が僅かに生まれる程度でしょうか」「それじゃー大変じゃねーか!! お前が倒すのか!?!」

ザルティの告げる事実になツが慌てふためく。

そしてナツの質問に対してザルティは「とんでもございません」と否定の言葉を返した。

「ただ我がものにしたいたい」

「!!」

「たとえば不死身の怪物であろうと操る術は存在するのです。あれほど

の力、我がものきできたらさぞ楽しそうではございませぬか」

ニヤニヤと笑いながら自分の計画を語るザルティ。

本当にその計画が成功した時のことを想像しているのか、喋るごとに語尾が上がっていく。

しかしそれを聞いた双竜はというと、ツーンとそっぽを向いた。

「なーんだくだらねえな」

「ん、聞いて損したの」

その素っ気ない反応を見て、ザルティの高揚した気持ちも急激に冷めた。

初めて見せる笑み以外の不満そうな表情。

それを知ってか知らずか、ナツは再び口を開く。

「オレ達はてつきり……こう燃えるような目的があつてよう………そんなこんな……」

「ほっほっほっ」

上手く言葉に纏められないのか、身振り手振り説明しようとするナツだったが、それを他でもないザルティが打ち切らせる。

「あなた方にはまだわかりますまい。 ” 力 ” が必要な時は必ず来るといふ事が……」

そう語ったザルティの背中は何処か哀愁が漂う。

だが今現在において、そんなものは双竜にとつては関係無い。

拳に炎、足に水流を纏うは今一度ザルティに対して構えた。

「そんな時は自分と仲間の力を信じる」

「何よりも信頼できる、妖精フェアリーの尻尾テイルの魔導士の力なの」

「自惚れは身を滅ぼしますぞ。天井よ、時を加速し朽ちよ！」

ザルティも手を上に翳しそう告げると、天井がボロボロと崩れ、紫の光と共に瓦礫がガラガラとなだれ込んでくる。

対してナツとレアはザルティへ一直線に跳ぶ。

ザルティは向かってくる双竜に崩れて細かくなつた石礫を加速させて飛ばした。

「その荒ぶる炎と凍てつく水は我が ” 時のアーク ” を捉えられま
すかな!？」

「アークだかポークだか知らねえが…」

「アークもワークも関係無いの…」

…。
体をも貫いてきそうな石礫の群れにナツは拳を、レアは足を構え

「この島から出ていけ!!!」

「この島から出てくの!!!」

一気に振るつた。

その瞬間、二人の炎と水は混ざり合い、ゴバアン!!と大爆発を引き起こし、目の前の石礫を消滅させた。

モクモクと煙が立ち込め、ザルティは唸り声を上げながらそれを払うが、目の前には二人の姿は無かった。

「いない!!?」

「そーいや、オレたちにも時が操れるんだ!」

「は!？」

目を疑ったザルティだったが、声が聞こえその方向へ目を向けると、上を取ったナツがニカツと笑いながら迫ってきていた。

訳の分からない戯言にザルティは素っ頓狂の声を上げるが、再び聞こえる声に意味を半ば理解した。

「といっても、一秒先の未来限定なの」
「ツ!!」

今度は払った煙の中からレアが飛び出してきた。
意図せず上と下を取られ、ザルティは逃げ場を失った。

「一秒後にお前をぶっ飛ばす!!! 火竜の…」
「一秒後にお前をぶっ飛ばす!!! 水竜の…」

そして渾身の一撃が今……。

「鉄拳!!!」
「鉤爪!!!」
「きやああわあああつ!!!」

ザルティの顔面に決まった。
両サイドから叩き込まれた殴打と蹴りによってザルティはグルングルンと回転しながら吹き飛ばされ、そのまま地面に叩きつけられた。

くくく

それと同時刻のこと。

「おおーん……」
「やった!! 月の雫が止まった!!」

エルザが一人月の雫の儀式を行っていたトビーを吹き飛ばした。

一人で儀式を行っていたシユールな様子にハッピーが「コイツ一人でやってたんだ…」と困惑の混じった小言を零した。
全て片付き一件落着……と、そうは問屋が卸さないようだ。

「もう遅エんだよ!!わかれよっ!!!」

吹き飛ばされ倒れたトビーがくわっ!いつもの様に脈略もなくキレル。

だが次の一言に、一同は固まってしまう。

「儀式は終わったんだよ!!!」

「…………え?」

トビーが何を言ったのか一瞬理解が出来なかった。

だが次の瞬間、遺跡の真ん中の魔法陣から紫の光の柱がカツ!と立った。

そして…………。

オオオオオオオオオオオオ
!!!!!!!

今までの中で一番大きな咆哮が島に響いた。

「そ…………そんな…」

「どういう事…………遺跡は傾いてたのよ!!!」

理解ができずフリーシャが叫んだ。

しかし、遺跡の傾きはこの際ほぼ関係なかったのだ。

確かに遺跡が再び傾きデリオラの封印の解除に遅れは生じたが、既にキツカケは与えられていた。

遺跡が傾いた時点で凍らされた部分は下半身のみであり、後は時間の問題だった。

そしてデリオラ完全復活最後のトリガーはザルティが最後に行った地下の天井崩落である。

あれにより上部でせき止められていた月の光が一気に注がれ、デリオラの復活に繋がってしまったのだ。

くくく

オオオオオオオ
!!!!

ボロボロと崩落が重なる中、厄災が復活し、絶望が降臨する。

BURST

ガラガラと天井が崩落する洞窟の中、封印から完全に復活したデリオラが歩を一步進めた。

足を下ろすだけで遺跡全体が揺れ、足元に溜まった水が飛沫を上げる。

その水しぶきを見たグレイは悲痛な表情を見せ、片手で足元に溜まっているその水を掬ってみる。

「(ウル……)」

グレイがそうなるのも無理は無い。

手からこぼれ落ちるその水は、溶けてしまったウルそのものなのだから。

「グレイー!!」

感傷に浸っていると、自分を呼びかける声に気が付きそちらを向いた。

視線の先にはザルテイを追いかけたナツといつの間にか消えていたレアがそこにいた。

「ナツ、レア……!」

「こうなったらやるしかねえ! アイツぶっ倒すぞ!!」

「手は二人よりも三人。手伝ってなの、グレイ」

ナツはデリオラを指さして慌てた様子で訴え、レアは逆に落ち着いた様子で淡々とそう言う。

だがそんな中「ククク…」と笑いが零れ、ズリツと何かが引きずられる音が聞こえる。

三人がその方向に目を向けると、ボロボロになっているリオンの体を無理やり動かしていた。

「お前ら…には…無理だ…！ アレは…オレが…ウルを超える為に…オレが…!! ハハハ…」

「オメーの方が無理だ！ 引っ込んでろ!!」

見開かれた目はデリオラのみを映しており、今のリオンにはナツの声も全く聞こえていなかった。

そんなリオンの脳裏に過ぎるのは、北の大陸で最強の魔導士は誰か尋ねた時のことだ。

その際皆の口から揃って飛び出した名前が『ウル』だった。

リオンがウルに弟子入りする何年も前、娘を失ったシヨックで山に引きこもったというが、終ぞウルに適う魔導士は現れなかったというのだった。

「あの…ウルが…唯一…勝てなかった怪物…今オレが…この手で…倒す…!!」

「まだそんな事言ってるの…リオン」

また新しい声飛び込んで、一同はそちらに目を向ける。

そこにいたのは、左脇腹を右手で抑えながらも確かな足取りでやってきたコユリだった。

コユリはそのままリオンの側までよってしゃがみながら左手を翳した。

「パープルフレアメイク ” 捕獲網” 」

キャプチャーネット

瞬間、リオンの体を覆うように紫の炎の網が現れた。

結果リオンの身体は身動きが取れなくなり、酷い形相でコユリを睨みつけた。

「!? コユリ…! 何をツ!!」
「アンタこそ何言ってるの。グレイに負けた時点でデリオラに勝つなんて不可能よ……」

しかし最もな正論を並べたコユリはふらつきながらも立ち上がり、目の前の怪物を見据えた。

その諦めの目には、いつか見た弱くも確かに燃えようとしている意志の炎が宿っていた。

「ああ……ねえ、ウル…:見てるかな…? 10年かかった。こんなやり方、貴女は認めてくれないでしょうけど、ここが私の到達点」

足元の水…:氷だったウルをすくい上げながらそう零したコユリも、ふと過去に思いを馳せた

脳裏に浮かぶのは、グレイを弟子として迎え入れた日の夜だった。

『あんな男を弟子にするって、どういう事!?!』

『魔法を覚えたいっていうんだ。構わないだろ』

当時既に弟子だったりオンとコユリはグレイの弟子入りに対してはそこまで肯定的では無かった。

特にコユリはその拒絶反応が顕著に出ており、その日の夜にこうして訳を聞きに行ったものだ。

だがコユリの想いが先走り、絶対に言っではいけない禁句を口走ってしまった。

『ウルの子供の代わりなら、私とリオンで十分でしょ!!?!』

瞬間、パァン!!と乾いた音が部屋の中に響いた。

コユリは一瞬何をされたのか理解が出来なかったが、ヒリヒリと痛

む頬に触れ、自分が平手打ちを食らったことは徐々に理解する。

しかし、結局何故そこで叩かれたのかが分からずコユリは「え？」と呆けた声がこぼれ落とした。

『コユリ……私はリオンもお前も、娘の代わりだなどと思つた事は一度もないよ』

そう言いながらウルはコユリと同じ目線にまで腰を落とし、両手をコユリの肩に置いた。

そして、慈愛の女神を目に宿してコユリの両頬を自身の手で覆い、額を軽く合わせる。

『リオンはリオン、お前はお前なんだ。お前たち二人揃つて、私の愛する弟子たちだ』

その言葉はコユリの心に深く刺さり、以後の心の支えにもなつてきていた。

そして現代においてもそれは変わらず、今日という日まで生きてきたのだ。

「こんな事しても、貴女は私を弟子として認めてくれるのかな……。認めてくれるなら、見てて……貴女の仇は……私が……！」

そうしてコユリが弓矢を持つ構えを取り、デリオラを睨みつける。だがしかし……。

ビシッ……！

いつの間にかコユリの背後に回ったグレイが、彼女の首元に手刀を叩き込んだ。

グラツと意識が揺らぎ、コユリはそのまま地面に倒れ伏した。

それと同時にリオンを覆っていた紫の炎の網もフツと消え去った。

「もういいよ、コユリ。後はオレに任せろ」

グレイはそう言いながら再び前が出る。

一応、コユリの意識は不安定とはいえ繋ぎ止められている。

霞む目でグレイを見るコユリは「何をする気？」と聞こうとするも、次にグレイの取った構えを見て、否が応にも理解させられる。

「デリオラはオレが封じる…！」
アイスドシエル
絶対氷結!!!」

そう、グレイは再び両腕を交差させて自身を中心に魔力の渦を巻く。

上で心の中で呟いた通り、氷の魔法の禁術を使って再び目の前の厄災を封じようとしているのだ。

それを見てリオンとコユリは、思いは違えど揃って顔を歪ませた。

「よせグレイ!! あの氷を溶かすのに、どれだけの時間がかかったと思っっているんだ!!! 同じ事の繰り返しだぞ!! いずれ氷は溶け…再びこのオレが挑む!!!」

「バカなこととは止めて、グレイ!!! 貴方までデリオラに縛り付けられるつもり?!? それを発動したら最期、貴方まで永遠にデリオラと共に生きるという、最大の苦しみを味わい続けることになるのよ!!!」

「これしかねえんだ…! 今…奴を止められるのは、これしかねえ!!」

なんとか説得しようと言葉を連ねるも、グレイは聞く耳を持たない。

収束されていく魔力が今か今かと解放の時を待つ。

その時、ザンツとグレイの前に二つの影がデリオラとの間を遮る。

「ナツ! レア!」

思いがけない乱入者に、グレイだけでなく、リオンとコユリもが目を見開かせた。

対して割り込んだ二人はただただ目の前の悪魔を油断なく見上げる。

「オレたちはアイツと戦う」

「封じるなんかより、よっほど確実なの」

「どけっ!! 邪魔だよ!!!」

今グレイがその魔力を解放すれば確実に巻き込まれる位置に立つ二人に、彼は罵声を浴びせて退かせようとするが、二人は動かない。少しの間を置き、ナツが口を開く。

「死んでほしくねえからあの時止めたのに…。オレたちの声は届かなかったのか」

そう言われ、グレイはハツと衝撃を受けたような表情を見せた。

それと同時に彼を中心に渦巻いていた魔力はフツと霧散していった。

「やりたかったらやるの……。その魔法。レアたちはこれから忙しくなるから止める暇も無いの」

「ナツ…レア……」

レアから許しの言葉を貰ったが、グレイは再び魔力を練る気にはならなかった。

なれなかった。

仲間たちは自分の死を望んでいない。

だというのに命を投げ捨てるような真似がどうして出来ようか。

その時、咆哮しているだけだったデリオラが大きく動き出す。

目の前に佇む二つの小さな影を見据え、その大樹のような腕を振り上げた。

「避けるオオオー!!!」

「オレたちは最後まで諦めねエぞ!!!」

「レアたちは最後まで諦めないの!!!」

絶叫が入り乱れる中、ナツとレアは拳にそれぞれの属性を纏わせてデリオラの拳を迎え撃つ。

そしてドゴオオオン!!!と拳の衝突とは思えない轟音が響き渡る。

ギリギリとせめぎ合い、余波が洞窟にさらにダメージを与える。

だが、それは長く続かなかつた。

十秒もしないうちに、両者の拳が弾かれた。

その直後、

ゴボツ!!

そんな音を立てて、デリオラの腕が崩れたのだ。

予想しなかつた事態に、リオンが「え?」と零す。

しかし、異変はまだ終わっていない。

腕が崩れたことがキツカケか、デリオラの身体にピキピキとヒビが入り始めた。

それは全身に走っていき、足、肩、顔と止まることを知らない。

「な、なんだ!? オレらのじゃねえぞ?」

「というより、手応えがスカスカなの」

デリオラの異変を一番疑問に感じたのは、一瞬とはいえデリオラと拳を交わした二人だった。

全力を出してデリオラの攻撃を受け止めたことは間違いないが、デリオラの身体を崩すほどのダメージが溜まっているとは到底思えな

い。

「バ…バカな…！」

「コレ…まさか…!!」

足首が折れ、肩が崩れ落ち、顔が真っ二つに割れる様を見ながら、リオンとコユリは一つの結論にたどり着いた。

それは、実にシンプルな答えだった。

「デリオラは…すでに死んで…」

力が抜けた声でコユリが呟いた。

そう答え合わせした時には、さつきまで圧倒的な存在感を放っていたデリオラはバラバラに崩れ落ち、溜まっていた水溜まりの中へと姿を消した。

「10年間…ウルの水の中で命を徐々に奪われ…オレたちは…その最後の瞬間。見ているというのか…」

既に周りの岩と同化して見分けがなくなつたデリオラの残骸を見つめながらリオンが自身の考察を零し、ガンと地面に拳を叩きつけた。

そしてその瞳には…涙が浮かび上がっていた。

「敵わん…！ オレには…ウルを越えられない…」

長く見続けてきた夢。

それはもう既に叶わないものであるという現実がリオンに襲いかかる。

そして一方で、

「そんな……ウル……貴女はずっと……戦い続けていたというの？」

口元に手を持ち上げ嗚咽を抑える体を起こしたコユリの姿がそこにあつた。

「ごめんなさい…!! 私……私…!!」

ヘタつと膝から崩れ落ちたコユリは顔を両手で覆ってただひたすらに謝り続けた。

不甲斐なくてごめんなさい……諦めが早くてごめんなさい……貴女を信じきれなくてごめんなさい……そんな思いが籠った謝罪の言葉を、遺跡から海へと流れ落ちる水へひたすら吐露し続けた。

「す……すげーな！ お前の師匠!!」

「ん、尊敬するの！」

さらに一方では、ナツとレアが目を丸くさせながらそんな賛辞の言葉を弟子であるグレイに送っていた。

その言葉は、ほとんど彼には届いていなかった。

なぜなら彼は、そんな師匠があの時と同じ言葉をグレイに掛けながら微笑む姿を幻視していた。

——お前の闇は 私が封じよう

「ありがとうございます……師匠……!!」

そうして彼は初めて彼女に向かって『師匠』と呼び、礼を告げた。肩を震わせながら歯を噛み締めるも溢れ出る涙を抑えきれず目元を手で覆うグレイ。

そんな彼にナツはニカツと笑いかけ、レアはフツと微笑を浮かべて見守っていた。

くく

落石も収まり、溶けてしまった氷が遺跡から海へ流れきった頃、屋上にいたルーシイらがナツたちと合流を果たした。

いつも一緒にいたハズの滅竜魔導士と猫のコンビはなんだかんだ一日ぶりの再開となり、ハッピーとフリーシャはそれぞれの相棒であるナツとレアの胸へと真っ直ぐに飛んだ。

ナツとレアはそれを笑顔で抱きとめ、デリオラの暴走が止まった喜びを分かち合う。

だがそれはすぐ中断されることとなる。

理由は単純明快、ナツとレアが振り向いた所でエルザが二人を睨んでいたからだ。

思いもよらない人物の登場に、双竜揃って「ビエエエエ!!」と悲鳴をあげてその場から逃げ出そうとした。

当然エルザが二人を逃がすハズも無く、ナツのマフラーとレアのセーラー服の襟元を掴みかかった。

なんとか逃げ出そうと手足をじたばたさせる二人だが、エルザの力の前では萎縮した双竜など赤子同然だった。

ちなみにハッピーとフリーシャはというと、エルザの姿が見えて早々双竜をスッと献上していた。

信頼があるのか無いのかどっちなのやら……。

そんな茶番を背景に、ルーシイはふとグレイの方へと視線を向けた。

流石に時間が経った事もあって既に泣き止んでおり、リオンに肩を貸していた。

それは何もグレイだけでは無かった。

リオンの左肩をグレイ、そしてその反対をコユリが肩を貸し、互いにバツの悪そうな笑みを浮かべていた。

そんな様子が目に入ったルーシイは何処か嬉しそうに眺めていた。後からグレイが言っていた事だが、ウルの氷は溶けて水になり、そ

して海へと流れていったが、それでもウルは生きているのだと。
それを聞いた誰もがそれを心の中で肯定した。

海となったウルは、三人の弟子をこれからずっと見守るのだ。

『もうケンカしないでね』と……。

村人の秘密

「いあーーーーー!!!
終わった終わったーーーーっ!!!」
「あいさーーーーー!!!」

バタバタが一段落ついた中、代表してナツとハッピーが喜色を浮かべて大声をあげた。

それで気が抜けたのか、ほかの面々も表情が柔らかくなった。

「本当…一時はどうなるかと思ったよ。すごいよね、ウルさんって」

ふうと安堵のため息をついたルーシイがそう零し、師匠への尊敬の言葉にグレイが目尻をもう一つ下げて嬉しそうな笑みを浮かべる。

少ししんみりしていると、ナツとレアがぴよんぴよんと飛び跳ねた。

「これでオレたちもS級クエスト達成だーっ!!」

「やった! やったのー!」

「もしかして、あたしたち ” 2階 ” へ行けるのかなっ!!」

「はは…」

無邪気に喜んでいる双竜に感化されて、ルーシイも目をキラキラさせ始めた。

グレイも今回の件は色々と思うところはあるも、少なからず達成感はあるのか乾いた笑みを浮かべている。

だが、そうは問屋が卸さない。

そうやって喜んでいた面々を、エルザが睨みつけていたのだ。

ゴゴゴゴと威圧を放つ彼女に、6人は顔はサーツと青ざめて冷や汗がドツと流れ始めた。

「そうだ!! お仕置きが待ってたんだ!!」

「その前にやる事があるだろう」

一同の声を代表してルーシイが悲鳴をあげた。

しかしそれは他でもないエルザによって一旦ストップがかけられ、一同は思わず「え?」となる。

「悪魔にされた村人を救う事が今回の仕事の本当の目的ではないのか」

「あ……」

「S級クエストはまだ終わっていない」

「だ……だってデリオラは死んじやっただし……村の呪いだってこれ……」

エルザの言葉に、レアが何か気づいたような……というより、忘れていたことを思い出したかのような反応を示す。

しかしエルザの言ったことに疑問を浮かべたルーシイがそう言うも、フリーシャが口を挟んだ。

「ルーシイ、昨日の夜に遺跡の頂上でルーシイの星霊が言ってたことを思い出すかしら」

「え? えっと……リラの言葉かしら……? 確か……この島の呪いは……月の雫の影響……!! じゃあ、デリオラが死んじやっただから……!!」

「ん、結局何も変わってないの」

「そ、そんなあ……」

「んじやとつとと治してやっかー!!」

「あいさー!!」

「どうやってだよ」

エルザの言わんとしている事を理解して、ルーシイは落胆とする。

その一方で少々、いやかなり考えが楽観的すぎるナツがハッピーとハイタッチしながら軽いノリでそう言うも、グレイに呆れられた。だが、今はもう最初の状況とは違って重要参考人がすぐそこにいる。

「あ」と思い出したかのように一同は岩に背を預けていたりオンとコユリの方へ目を向けた。

そのまま流れるように無言の圧を放ってキリキリ吐けと言外に語る。

だが、返答は望んでいたものとはかけ離れていた。

「オレは知らんぞ」

「右に同じく」

「何だとオ!?!」

「とオ!?!」

顔色一つ変えずにそう言い放つ二人にナツとハッピーはしらばっくれているのかと顔を顰めた。

「だって、あんたたちが知らなかったら他にどうやって呪いを…」

「3年前、この島に来た時村が存在するのは知っていた。しかし、オレたちは村の人々には干渉しなかった」

「その逆もそう。村の人たちから会いに来る事も一度もなかったわ」

ルーシイが問い詰めようと言葉を荒らげたが、それを遮ってリオンが語った内容に言葉を詰まらせる。

続いたコユリの言葉にさらに眉を顰め、代表してエルザが「3年間一度もか?」と問う。

それに対しコユリも首を縦に振った。

「そういえば、遺跡から毎晩のように月の雫ムーンドロップの光が降りていたはずだよね」

「その前提があつたら、この遺跡を調査しなかつたのは確かにおかしな話かしら」

二人の告げた事実にもルーシイも不信感を覚え、顎に手を当てて思考を巡らせる。

フリーシヤもそれに乗つかつて頭を働かせる中、再びリオンが言葉を発する。

「月の雫ムーンドロップの人体への影響についても多少疑問が残る」

「何だよ……今更「オレたちのせいじゃねえ」とでも言うつもりかよ」

言い訳にも聞こえるリオンの言葉にしかめっ面のナツが詰め寄るが、リオンは「考えてもみろ」と淡々と言う。

「3年間、オレたちも同じ光を浴びていたんだぞ」

リオンの告げたそれにルーシイを始めとして何名かが盲点だったと気付かされた。

何か対策を施したのではという反論もここでは飲み込まざるを得ない。

何故なら月の雫ムーンドロップとは如何なる魔法をも解除する魔法なのだ。

そんな魔法を前にすれば対策の魔法など意味を成さない。

仮に長い時間を掛けて対策の魔法を施したとしても、当時氷を溶かすことにしか意識が向いていない3年前の彼らにそこに時間を描け掛けるとは到底思えない。

布や家の屋根も意味は無いだろう。

村の人たちと初対面した時、彼らは全身をすっぽり覆う布に身を包んでいたのだ。

悪魔化した部分を隠す意図もあるだろうが、単純にこれで対策出来ているのであれば現在村の人たちは呪いで苦しんだりなどしていない。

そうなる、「紫の月の光を浴び続けると悪魔化してしまう」という根幹を疑う必要性も現れ始めた。

「精々気をつけなさい。彼らは何かを隠している。まあ、ここから先はギルドの仕事よね？ 事件の黒幕は黒幕らしくここにくたばっているとするわ」

コユリはそう言うのとプイツとそっぽを向いた。

リオンも同じく何も言う気は無い、というか話せる事は話しきったので、コユリと同意見であることを示すためにコユリ同様顔をあさったの方向へ向けて口を閉じた。

そんな二人の少々傲慢な態度に思うところがあるのかナツとルーシイが何か言いたげに顔を顰め、ナツに至っては「そうはいくか」と咎めようと一歩前に出たが、その言葉は結局喉の奥へと引っ込んだ。

「じゃ、さっさと村に戻って事実確認に行くの」

何故ならレアがナツが言葉を発する前に行動に移した事でナツの発言のタイミングを奪ったからだ。

エルザも山頂でトビーからリオンらの事情は聞いてから必要以上に過去を非難する必要性は無いと判断し、レアに「そうだな」と言葉を零してまだ何か言いたげなナツを引っ張っていった。

一人、また一人とその場を去っていく中、グレイだけは未だにその場に残って傷ついている二人を見ていた。

「…何見てやがる」

「リオン、もう噛みつかないの…」

こちらを見つめるグレイを睨み返すリオン。

それと共に吐き捨てられたトゲトゲしい言葉をコユリがリオンの頭にチョップを落としながら諫める。

その光景にグレイは昔を重ねていた。

調子に乗って片手造形をするリオンに拳骨を落として諫めるウルと。

フツと微笑みを浮かべてグレイは口を開いた。

「コユリにも話したが、お前もどつかのギルドに入れよ。仲間がいて、ライバルがいて……。きつと新しい目標が見つかる」

一瞬ハツとなったりオンだったが、すぐさま仏頂面に戻ってまたそっぽを向いた。

「く、くだらん……さっさと行け」

いつもと同じ助言を一蹴するような一言だったが、それは確かに彼の心に刻まれていた。

さて今夜も紫の月が怪しく光り輝き、空から島を見下ろす。

くくく

場所は移動して村の資材置き場。

「あれ？ 誰もいない」

遺跡から戻ってきた妖精の尻尾フェアリーテイル一行だったが、今朝までいたそこに居るはずの村人の声は無くしんと静まっていた。

ナツとレアはここに来ていない故に知らないが、ルーシイらは間違はなくここで一夜を過ごし、ここから再出発した為間違いないと断言できる。

だというにも関わらず人っ子一人いない現状に疑問を覚える。

ハッピーとフリーシャが誰かいないかと大声で呼びかけ、グレイはとりあえず傷薬と包帯を拝借しようとテントに入った。

「皆さん!! 戻りましたか!? た…大変なんです!! とにかく村まで急いでください!!」

そこへハッピーとフリーシヤの声を聞きつけてか、村民の一人が大慌ての様子で走ってきた。

村が無くなったのにこれ以上何があるのかと思い、ルーシイらも走って村の方へと向かった。

そして、その場を目撃していた者たちは揃って目を見開いた。

「な…何これ……」

「村が…復活してるかしら……」

「昨日…村はボロボロになっちゃったのに……」

そう、シエリーらが振りまいたゼリーのせいで消えてしまった村が完全に元通りになっていたのだ。

クレーターののように窪んでいた地面どころか建物までも何もかも元通りの様に戸惑いを隠せない。

「どうなつてんだコリヤ…まるで時間が戻ったみたいだ!!」

「ん! レアたち何もやってないのに……!」

「せっかく直つたんだし、アンタ達は触らない方がいいと思う……」

村民たちが復活した村に有頂天になって狂喜している背景でナツが家をガンガンと、レアがノックの要領でコンコン叩いているとルーシイからそんな苦言が飛ぶ。

「どういう意味だ!」と憤るナツとレアにルーシイは微妙な表情を浮かべながら「そのままの意味よ」と静かに零した。

「あれ? そういえば……」

「ん…時間の魔法って……」

だが双竜はふと思考の海に落ちた。

「といのも、この現象はつき肌身で感じたものだったからだ。ボソツと思わず呟いた二人は仲良く「ほっほっほっ」と陽気に笑うあの狸爺を思い浮かべた。

「まさかな……いや、改心したとか……？」

「あんなつまらない事考えてた奴がなの？」

「だよなー……」

二人がそう思うのも無理は無いだろう。

「デリオラを操って我がものとする等と考えていた男がそう簡単に改心する物なのかと。」

「悩んだ末に出した結論は……」

「ま……いつか」

「ま……いつかなの」

「あいさー」

「かしら」

思考放棄、終わり良ければ全て良しであった。

「あまりにも強引な投げやり度にルーシイも「え？ いいの……？」と思わず聞き返した。」

「と、ルーシイもふと村が消滅したと共に消滅したであろう自分たちの荷物をチェックしにルーシイらが借りた家へと向かうのだった。」

「」

荷物の無事を確認したルーシイは村長の元へとやって来ていた。

「彼はここに来た時から変わらず息子の墓の前であぐらをかいて座し、月の破壊を今か今かと待ち焦がれていた。」

それは村が消滅しても、ボボの墓はレアが守って唯一無事だった故に変わらなかつた。

ナツ達の戦闘の邪魔になるからと退散させられた後、走って戻ってきたくらいなのだから。

「村を元に戻してくれたのはあなた方ですか？」

首を回してルーシイの方へと視線を向けたモカの質問に、ルーシイはタジタジになって否定の言葉を述べようとしたが、モカは話を聞くのが苦手なのかルーシイの返事を待たず言葉でまくし立て始めた。

「それについては感謝します。しかし!!魔導士どの!! 一体いつになつたら月を壊してくれるんですかな!!!ほがーっ!!!」

「月を破壊するのは容易い…」

ひえーつと悲鳴をあげるルーシイを見てか、エルザがさらつと爆弾発言を落としながら入る。

思わぬ朗報にモカはいつもの顰めっ面を破顔させ、仲間たちはエルザの発言に軽く引いていた。

「しかし、その前に確認したい事がある。皆を集めてくれないか」

だがそう言われ、再び話を先延ばしにされるのかとモカは再び仏頂面に戻る。

しかし依頼している側である上に勘違いではあるが村を直してもらったという恩がある故に素直にエルザの指示に従った。

村民たちは初めてナツたちと会合を果たした時みたく、村の内門の前に集まっていた。

「整理しておこう。君たちは紫の月が出てからそのような姿になつてしまった。間違いないか」

妖精たちの代表としてエルザが村民たちの前に立ち改めてそう尋ねた。

「ほがあ…正確にはあの月が出ている間だけこのような姿に…」
「話をまとめると、それは3年前からという事になる」

戸惑った様子でモカが答える。

エルザもそのまま話を続け、その確認に村民たちも「確かにそれくらい経つかも…」と少々曖昧な答えを返す。

「しかし…この島では3年間毎月月の雫ムーンドロップが行われていた。遺跡には一筋の光が毎日のように見えていたハズだ…」

腕を組みながら門の周辺を歩き回るエルザ。

目も閉じて自身の考えを語っていた。

そのせいで、彼女はそれに気が付かなかった。

「きゃあ!!!」

ズボンッ!!!

ルーシイが仕掛けていた落とし穴である。

「お…落とし穴まで復活してたのか…」

「きゃ…きゃあって言った…ぞ…」

「か…かわいいな…」

「つていうか…敵の襲撃があつたのにこんなお茶目したのは誰なの？」

「ルーシイに決まってるかしら」

「やっぱりなの…」

「あたしのせいじゃない!!あたしのせいじゃない!!!」

男性陣が落ちたエルザに対して呆然とし、レアとフリーシヤはこのシリアスな雰囲気をぶち壊したルーシイをいつもにも増したジト目で見た。

現実逃避をするルーシイを背景に、エルザは穴から這い上がる。

「…つまり、この島で一番怪しい場所ではないか」

だがエルザは何事も無かったかのように続けた。
あまりの逞しさに賞賛した。

「なぜ調査しなかったのだ」

しかしその問いに村民たちはザワザワと声を上げて顔を見合わせた。

その表情は何処か険しい。

「そ…それは、村の言い伝えであの遺跡には近づいてはならんと……」
「でも…そんな事言ってる場合じゃ無かったよね。死人も出てるし、ギルドへの報酬額の高さからみても」

モカが代表して口を開いたが、ルーシイの的を射る発言を放つ。

村民たちのざわめきはどよめきに変わり、表情はどんどん険しくなっていく。

「本当の事を話してくれないか？」

モカの額についと汗が流れ落ち、その硬い口を開いた。

だがそれはナツらにとって少々納得が出来なかった。

「そ…それが……ワシらにもよく……わからんです……。正直…あの

遺跡は何度も調査しようと致しました。皆は慣れない武器を持ち、ワシはもみあげをバツチリ整え…何度も遺跡に向かいました。

しかし近づけないのです

遺跡に歩いてても…気がつけば村の門。我々は遺跡に近づけないのです」

遺跡に近づけない。

あまりに突拍子の無いそれに言い訳では無いのかと疑うほどだ。

しかし、村民たちも揃って同じことを言い、さらにその表情は嘘とは思えない本気度があった。

村民たちもナツらも納得出来ない。

だがエルザ、そしてレアの二人だけは反応が違った。

「やはり…か」

「…あー…そういう事なの…」

明らかに理解したと取れる反応に、ルーシイは「え？」となる。

そんな様子を、遠くから観察していた者がいた。

「流石は妖精女王。テイターニアもうこのからくりに気がつくとはねえ。水リヴァイアサン 竜も

普段とは違い相当頭が切れる様子…ほっほっほっ」

自身の両頬を餅のように真っ赤に膨れ上がらせたザルティであった。

「ナツ…レア…着いて来い」

村民たちを一頻り見たエルザは村の見張り台に向かいながら換装を開始。

その状態でナツとレアに声をかける。

「これから月を破壊する」

「おおっ!!!」

「ん、了解なの」

「二」「……ええええええっ!!!?」「」

黄色を基調とし、頭に角のような装飾の鎧……名を巨人の鎧を身にまとったエルザの宣言した。

ナツは目を輝かせ、レアは淡々と了承し、ルーシイ、グレイ、ハツピー、フリーシャの4人は揃って大声を上げたのだった。

届け あの空へ

日付がそろそろ変わり出す頃、不気味に輝く月を見据えたエルザとレア、そして内に秘めるドキドキを押さえ込んでいるが、それが少し漏れているナツは村の見張り台へと上ってきていた。

その3人の様子を村民たちも嬉々とした表情で見ている。

「エルザ。月を壊すなら、あの遺跡の方がいいんじゃない？ ここより高いし」

「レアは十分だと思うの」

「そうだな。それに、遺跡には村人は近づけんからな」

少しソワソワした様子でナツがエルザに聞いたが、代わりにレアが答えてエルザもそれに同意する。

一方見張り台の下ではソワソワしている村民たちの中で違う感情を抱いている者が4名程いる。

「月を…壊すって…：さすがのエルザでもそれは無理…：だよな」

「な…何をするつもりなのだろ…？」

「ドキドキするね」

「いろんな意味でね…」

「それにレアとエルザは何に気づいたのかしら…」

疑問、緊張、興奮。

様々な感情が入り乱れる中、一行はその時を待つ。

そんな中、普段と変わらない様子のレアはエルザにどう破壊するかを尋ねた。

エルザは「そう慌てるな、これから説明する」と微笑を浮かべながらそうレアを説き右手を少々斜めに構えた。

「この鎧は巨人の鎧。投擲力を上げる効果を持つ。そしてこの槍は闇

を退けし破邪の槍」

「それをぶん投げて月を壊すのか!! うおおっ! すごい!!」

「(イヤイヤ…無理だから…:~)」

「んー…それはちよつと無理があると思うの」

「(良かった…珍しくレアがマトモで…)」

「いくら投擲力を上げててもあそこに着く頃には火力が無くなってるの」

「(違う、そうじゃない…:~)」

ドキドキを越してワクワクとしているナツと何故か物凄く真面目に話し合っているレアとエルザにルーシィとグレイは揃って面持ちを暗くして3人を見ていた。

そのテンションについていけないのだ。

「ああ、レアの言う通りだ。だからお前たちの火力を借りてブーストさせたい」

エルザの語った作戦は至ってシンプル。

槍の石突き部分を投げるタイミングに合わせ、魔法を使って殴るだけである。

「巨人の鎧の投擲力と、お前たちの火力を合わせて月を壊す」

「ん、なら蹴りでいくの。ホラ、魔力融合ユニゾンレイドの時みたいなの」

「あー、あんな感じか。おし! わかった!!」

やる事が単純故に作戦会議もすぐに終了した。

そんな様子を下でルーシィとグレイは戦々恐々とした様で見ていた。

「3人とも何であんなにノリノリなんだよ…」

「まさか本当に月が壊れたりしないよね…」

プルプル震える二人を他所に、エルザは「行くぞ」と促した。
槍を大きく振りかぶりそして……!

「双竜!!!」

「おおう!!」

「んん!!」

「そらあ!!!」

「んなのお!!!」

女騎士が呼びかけ、双竜が呼応する。

彼女が槍を投げるためそれから手を放したと同時に二人は槍の石突きを蹴り抜く。

ドン!と鈍い音が響き、一瞬時間が硬直したような感覚を全員が覚えた。

「届けエエええっ!!!」

気合いを込めるようなエルザの叫びと共に、槍は勢い良く飛んで行った。

まるで打ち上げられた巨大な花火、或いは宙の彼方へと旅立つ口ケツトのように、ぐんぐんぐんぐんと天へ上がっていく。

煙の尾を引いた槍は月に吸い込まれるように飛び、やがて見えなくなるまで飛んでいった。

瞬間、ピシヤア!!と、そんな音が響いたが、月に変わり映えは無い。それも束の間。

ピキィ……!

『おおおおおおおっ!!!』
『嘘だぁーっ!!!』

月の中心に大きな亀裂が走り出したのだ。

村民たちは長年の苦しみから解放されると狂喜乱舞の様で声を上げ、未だ目の前の光景が信じられないグレイとルーシイは目を猫のようにパッチリと開かせ、口は顎が外れたと言わんばかりにあんぐりと開けていた。

ピキピキイと亀裂はさらに広がっていく。

そして…。

パリーン!!!

ガラスが割れたようなあまりにも甲高い音が響いた。

それもそうだ、全員の目に入ったのは薄いガラスのような紫の空が割れ、その奥から見慣れた黄色い月が顔を覗かせた光景だった。

「え!?!」

「月!?!」

「これは…!!」

「割れたのは月じゃない……空が割れた…?」

そこを中心に、紫色の空はどんどん崩れ去っていく。

そんな光景に誰もが目を奪われる。

「どうなってんだ!コレあ!!?」

「この島は邪気の膜で覆われていたんだ」

みんなを代表して見張り台から体を突き出して空を見るナツがそう言い、その言葉に後ろにいたエルザが答える。

「ムーンドロップ月の雫によって発生した排気ガスだと思えばいい。それが結晶化して、空に膜を張っていたんだ」

「ちよつと考えればコレは予想出来ることだったの」

至極当然だというふうに答えるレアにルーシィは「どういう事？」と先を促した。

「前提として、月は一つしか無いの。マグノリアから見た月は普通の色だったけど、この島でだけ月は紫に見えていたの。なら疑うべきは月本体じゃなくて、この島の空の方だったの」

そう言われ、彼女も納得の表情をみせる。

約一名理解出来ていない様子だったが…。

その時である。

割れた空は光の粒子になり、村民たちを足元から包み始める。

空に浮かぶ月のような金色の輝きに、ルーシィが「キレイ」と零すのも無理は無いだらう。

「邪気の膜は破れ…この島は本来の輝きを取り戻す」

そして村民たちを包んでいた光はだんだん輝きを失ってその姿を露わにする。

一行の目に映ったのは、相も変わらず悪魔化している村民たちであった。

「けど…戻らねえのか…？」

「そんな…」

「いや、これで元通りなんだ」

変わっていない現状にハッピーの落胆の声があがるが、エルザの一声で眉を顰める。

その中エルザは鎧を元の鎧に戻して見張り台の下に降り、張っていた声を普通の声色に戻す。

「邪気の膜は彼らの姿ではなく、彼らの記憶を冒していたのだ。「夜になると悪魔になってしまおう」という間違った記憶だ」

そこまで言われて、ルーシイも答えにたどり着いたのだろう。

全身の毛という毛が逆立ち、背筋に悪寒が走った。

「まさか」というルーシイの言葉に答えてか、或いは未だに理解出来ないナツに説明する為か、エルザは「そういう事だ」と一呼吸置いて答え合わせを行った。

「彼らは元々悪魔だったのだ」

なんでもないかのように告げられた衝撃の事実。

それに対しての反応はまちまちだった。

ナツは目を見開かせて口をあんぐりと開け、ルーシイは膝から崩れ落ちて耳を劈く金切り声をあげる。

ハッピーは天を仰ぎ、フリーシャはぎやいぎやいとルーシイの頭上を飛び回る。

そしてグレイは口をあんぐり開けたアホ面で本人確認していた。

確認された村民も混乱気味に「うむ」と答えた。

「彼らは人間に変身する力を持っていた。その人間に変身している自分を本来の姿と思い込んでしまった。それが月の雫ムーンドロップによる記憶障害」

「でも……それじゃあ、リオンたちは何で平気だったの?」

「それは多分、”人間” だからなの」

それはそれとして別の疑問が浮かんだルーシイがそう口にすると、今度はレアが引き継いだ。

そしてその流れでフリーシャがレアに何故村民が元々悪魔であるかを聞いた。

「村人の正体の確信は遺跡の事なの。月の光は本来聖なる魔力の源なの。そんな聖なる場所に、闇の住人は近づけないの」
「流石だ……君たちに任せて良かった」

レアが解説を終えると、何処からかそんな声が聞こえてくる。
声の方向へ視線を向けると、誰もが目を疑った。

「魔導士さん、ありがとう」

そこに居たのは、なんと死んだハズの村長モカの息子のボボだったからだ。

「幽霊!!!」

「ああああっ!!!」

「じ…地縛霊なのよ…!」

「船乗りのオッサンか!」

普通登場するはずの無い故人の登場に、ルーシイと猫2匹は揃ってパニックになる。

グレイも言葉こそ冷静だがボボを見る目は完全に幽霊を見た時の目で動揺を隠せていなかった。

そして村民たちもその事実を理解が追いついておらず目の前にいるボボとボボの墓を交互に見ていた。

「胸を刺されたくれエじや、オレたち悪魔は死なねエだろうがよ」

ポカーンとする村民たちを見てボボは豪快に笑う。

だが未だに生きているという事実が受け止めきれないのか、グレイが身を感じた謎を本人に問うた。

「あ…あ…あ…船の上から消えたら…？」
「……」

ボボはしばらく黙っていると…。

シュツ…！

その場から姿を消した。

聞いたグレイも驚きのあまり目をひん剥かせたが、直後にバサツと何か羽ばたく音が聞こえる。

その方向に目を向けると、思わず「おお」という声が溢れ出る。

そこには背中から翼を生やしたボボが飛んでいたのだ。

「あの時は本当の事が言えなくて済まなかった。オレは一人だけ記憶が戻っちまってこの島を離れてたんだ。自分たちを人間だと思い込んでる村のみんなが怖くて怖くて」

ケラケラと笑ってそう語るボボ。

そんな姿を見てか、ようやく現実と理解出来たのか、モカが体を震わせていた。

そしてボボと同様の翼を背中から生やした。

「ボボ…!!!」

「やつと正気に戻ったな、親父」

弾丸の勢いで飛んできたモカをボボはしっかりと受け止め、2人で笑いあった。

そんな2人に感化されてか、他の村民も背中から翼を生やして次々に飛び立つ。

みんなが魅せる顔も、口々に発せられる言葉も、どれもこれも喜色に満ちていた。

「ふふ……悪魔の島…か」
「でもよ……みんなの顔を見てつと……悪魔つてより、天使みてーだな」

悪魔なのに天使。

本来矛盾であるそれだが、誰もナツの言葉を否定しなかった。
笑いながら飛び回る姿を見て、地上にいたみんなも自然と笑顔になつていた。

「今夜は宴じゃーっ!!! 悪魔の宴じゃーっ!!!」

「悪魔の宴つて……なんかすごい響きね…」

直後、苦笑いに変わつたことは言うまでもないだろう。

村民たちが喜びの舞を披露する中、変わらずザルティは観察していた。

その傍らでは、彼の水晶がフワフワと浮かびながら少し発光していた。

「ご覧になりました?」

『ああ……。なぜ村を元通りに?』

「サービス♡」

突如水晶に向かって話しかけると、水晶から男の声が発せられる。
水晶の質問にサムズアップしながら答えたザルティに、水晶は……
いや、水晶の奥で見ていた男は「やれやれ」と呆れたように言った。
そして男……評議員の一人、ジークレインが再び口を開いた。

『しかし……思いのほかやるようだな……妖精の尻尾……。オレたちの邪魔にならなければいいがな』

それを聞いたザルティは、自身の象徴とも取れるその仮面を取った。

中から現れたのは逆立った黒髪の爺さんだった。しかしその体はモヤのような煙に包まれていく。

モヤはだんだんとザルティの時とは違うシルエットを象っていく。逆立った髪は長く流れ、平たい胸板は膨らみ、あらゆる所で曲線が目立っていく。

煙が晴れて現れたのは、黒髪高身長の子……評議員の魔導士にして検証魔導士の一人……ウルティアであった。

「そうね……」

たった一言、ジークレインの言葉に同意したウルティアは、その場を後にした。

~~~~~

夜中に始まった悪魔の宴は、その日の太陽が昇るまで続いた。

宴の途中、零帝一派の幹部にあたるシエリー、ユウカ、トビーが来訪し、謝罪の意としてエルザから1発ずつ殴り飛ばされた話は割愛することとする。

宴の余韻からかみんなの眠気は完全に吹き飛んでおり、妖精一行は流れで帰り支度を整えていた。

そんな中、ルーシイはグレイの顔を覗き込んでいた。

別に惚れなどという話では無く、ルーシイの視線はグレイの額に注視していた。

「キズ……残っちゃいそうね」

「あ？ 別に構わねーよ」

そう、そこにはリオンの攻撃で受けた切り傷がパツクリと現れでて

おり、恐らく一生物の傷になるのだろうとルーシイはほぼ確信していた。

だがグレイはそう言い放って腕を組んだ。

「顔よ？」と尚も心配してそう問うルーシイだったが、グレイは微笑を浮かべた。

「キズなんてどこに増えようが構わねえんだ。目に見える方はな」

「お、上手いこと言うじゃん」

そう締めたグレイに、無用な心配だったと感じウインクしながらグレイに賛辞の言葉を送る。

だが、空気を読めない者が2人ほど…。

「はあ？ 見えないキズって何？」

「んくつ、プハア…背中の中の傷の事なの？」

双竜の2人である。

手に持っている松明の炎にかぶりつきながら頭の中で渦を巻くナツと、バケツいっぱいの水を空中にばら蒔いて細かく水玉を作り、それを団子を食べる要領で食べていたレアがキョトンとしてそう聞いた。

因みに炎を満面の笑みで食べているナツに村民が「悪魔だ…」と恐れ、水玉を食べる姿とその周囲の神秘的な様子のレアに「天使だ…」と崇める。

悪魔が悪魔のような人を恐れ、悪魔が天使のような人を崇めるという珍妙な図が出来上がっていたりする。

分かりやすく水を差されたグレイは顔をムツとさせてナツに詰め寄った。

「うるせーよ！ カッコイイ事言っただからほっとけよ！」

「今のが？」

「……………ん、よく分からないの」

グレイの言葉にナツはさらに眉を顰め、レアも興味は失せたと言わんばかりに再び水玉を食べ始めた。

小話ではあるが、普段ド天然の癖して妙に勘が良いが、どこでそのスイッチが入るかという謎は妖精フェアリーテイルの尻尾の七不思議であるとか無いとか。

いつものように喧嘩をし始めるナツとグレイを見てルーシイはやれやれと言った具合にため息をついた。

その背景ではエルザが村民たちと対面しており、彼らはギョツと目を見開かせていた。

「な…なんと!! 報酬は受け取れない…と?」

「ああ…気持ちだけで結構だ。感謝する」

会話の流れでも分かる通り、エルザは村から報酬を受け取ることを丁重にお断りしていた。

だがモカとしては救われたのに何もお礼はしないというのは随分と気が引けたものだった。

村民たちも意思は同じである。

故にモカが「しかし…」と続けようとした所、エルザが再び口を開く。

「昨夜も話したが、今回の件はギルド側で正式に受理された依頼では無い。一部のバカ共が先走って遂行した仕事だ」

「ほがあ…それでも我々が救われた事には変わりません。ここはギルドへの報酬では無く、友人へのお礼という形で受け取ってくれませぬかの?」

エルザの言葉にモカは朗らかな笑みを浮かべながらそう答えた。

その心の器の深さに、ナツとグレイは喧嘩を止め、ルーシイは信仰

している神が目の前に現れたかのように手を結んでモカたちを見ていた。

レアも食事に一区切りがつき、そちらをじっと見つめていた。

エルザはモカの言葉を受けては微笑を浮かべる。

「そう言われると拒みづらいな」

ようやくエルザが折れてくれたと村民たちは揃って声をあげた。

そして喜んでいるのは何も村民たちだけじゃない。

「700万 J<sup>ジュエル</sup>!!!」

「おおおっ!!!」

「わーいなの!」

「やったあ!!!」

グレイは喧嘩していた時の鬨めつ面が一変して満開の笑顔。

ナツはそれに加えて鼻から火を吹いていた。

レアはいつもハイライトが消えている蒲公英色の瞳に一番星が宿り、ルーシイはバンザイして飛び跳ねながら喜びを表していた。

だが、エルザはタダでは折れてくれない。

「しかし、これを受け取ってしまうとギルド理念に反する。追加報酬の鍵だけありがたく頂く事にしよう」

「いらねーっ!!!」

「なのっ!!」

「いるいる!!!」

まさかの折衷案にナツとグレイは揃って嘆きの咆哮をあげる。

それに呼応してかレアも明確な拒絶の意思を見せたが、慌ててルーシイが引き止めた。

村民たちもここまで強情かと思ったが、何も受け取ってくれないよ

かマシと思ったのか、その案で納得した。

「では、せめてハルジオンまで送りますよ」

「いや、船なら用意できてる」

ならばとボボがそう言うも、再びエルザは報酬の時同様気持ちだけ貰うという旨を伝えた。

思わぬ返答に全員例外無く「え？」となる。

だがエルザは何も言わずに浜辺へ向かおうとしたから、慌ててみんなもそれについていく。

浜辺に出た瞬間、その圧倒的存在感に目を奪われた。

「海賊船!!?」

「まさか強奪して来たのかしら!?!」

「流石はエルザ様!」

そう、目の前にあったのはおどろおどろしい海賊船だった。

どうやらドラゴンをイメージした帆船らしく、船首のドラゴンの首をはじめ、所々にドラゴンの翼を模した装飾品がある。

帆はボロボロながらもかろうじて機能していることもあり、程よく張られて空気を受けようとスタンバイしている。

因みに船長を含めた船員たち全員は既にエルザによって調教済みであり、エルザを「姐さん」と呼び慕っている。

エルザ本人は「何やら気が合ってる」と自覚していなかったが。

「イヤよ!! こんなの乗りたくない!!」

一人黙々をこねるルーシィだったが、ナツが彼女に向かってニカツと笑い、レアはサムズアップしてみせる。

「泳ぐなら付き合うぞ」

「サメ避けなら任せてなの」  
「ムーリーツ!!」

いつもと変わらないレアの表情がドヤ顔に見えるのは何故なのだろう…。

先程よりも強い拒絶で、ルーシイは嫌々ながら海賊船に乗り込んだ。

ナツとレアは最後まで泳いで帰ると駄々をこねていた。

最終的にはエルザが2人まとめて無理やり船に乗せ、船酔いさせる事で大人しくさせた。

エルザの鬼畜さいつものように震え上がっていると、島の方向から声が聞こえてきた。

「みなさあああん!!!ありがとうございまああああす!!!」

ボボがみんなを代表してそう声をあげ、他の者たちも手を振って言葉交えながら送り出した。

そんな様子をガルナ島の崖の上で、リオンとその仲間たちが静かに…いや、1匹の例外を置いて静かに見守っていた。

「…行っちゃったな」

「フガツ…な…泣いてなんかないモンね!!グスツ…」

「なぜ泣く…」

一体どこでそんな絆が芽生えていたのかと質問したくなるくらい号泣するトビー。

そうやって号泣する彼を背後に、シエリーがリオンの方へと視線を向けた。

「いいんですの? せっかく分かり合えた弟弟子さん…すなわちあ…  
…「いいんだ」」



「最後まで言わせてあげなさいよ…」

リオンはシェリーの言葉に食い気味に否定の言葉を述べ、コユリはそんな彼に心の内から溢れ出た言葉で柔らかいツツコミを入れた。しかし返事が無く、不思議に思ったコユリはリオンの顔を覗いてみる。

包帯やガーゼだらけのその顔は見ていて痛々しいが、表情は以前とは別人と言えるほど爽やかであった。

「なあ……ギルドって楽しいか？」

フツと零れ落ちた言葉に、誰もが目を見開いた。

しかしコユリだけは動揺は少なかった。

ゆっくりとリオンの隣に座り、シェリー達を見上げた。

「そうね…私も気になるわ。教えてくれないかしら、先輩方？」

ニコツと笑うコユリに、他の者たちも表情を和らげる。

リオンの憑き物が落ちたかのような晴れ晴れとした顔と、コユリの明るい笑顔に燃える情熱の炎を宿した瞳は、まるでどこまでも広がる青い空と全てを照らす太陽のようであった。

## 人格輪転

魔法評議会会場『E R A』<sup>エラ</sup>

時刻は妖精の尻尾がガルナ島を発つて間もない頃。

「きゃああああつ!!! 何コレエ!!?」

悲鳴が轟いていた。

発生源はジークレインの部屋、声をあげたのはガルナ島で暗躍していたザルティ……もといウルティアだった。

「はっはっは!!! 今頃腫れてきやがった! しかもご丁寧に二箇所同時ときた!!!」

そしてこの部屋の主、ジークレインは彼女の顔を見てこれは傑作と言わんばかりに大爆笑していた。

字面を見ればかなり酷いが、今のウルティアの現状を見れば仕方ないのかもしれない。

なんせ彼女の両頬がぷつくうと膨らんでおり、その顔は某アンパンヒーローのようになっていたのだ。

「そういえば、ナツとレアと戦ったんだったな。感想は?」

お互い少し落ち着いたところで、ジークレインは思い出したかのようにウルティアに聞いた。

両頬を手で押さえながらも痛みで顔を顰めていたウルティアが述べたのは素直な賞賛だった。

「私は半分も力を……いえ、あれ以上続けていたら出さざるを得なかったでしょうね。その上、あの子たちはもつともつと強くなるわ」

それを聞いたジークレインは自然と自分の拳に力が入るのを感じた。

「だろうな…あのイグニールとゼルネールの子だ。オレの夢の為に…燃え続け…荒れ狂うがいい」

冷笑を浮かべたジークレインは、その腹の奥で轟々と野心の炎を燃やしていた。

くくく

フェアリーテイル  
妖精の尻尾の本部があるマグノリアの街。

「帰って来たぞー!!!」

「来たぞー!!!」

朝一番に島を出発した事もあってか、昼ごはんを食べるにはちょうどいい時間帯に帰ってきていた。

S級クエストから五体満足で帰ってきて良い事ではあるのだが、グレイとレアはどこかガツカリといった雰囲気を出していた。

「しっかし、あれだけ苦労して報酬は鍵1個か…」

「ん、せつかくのS級クエストだったのに、ちよつと残念なの」

「正式な仕事ではなかったんだ。これくらいがちょうどいい」

「そうそう、文句言わないの!!」

2人の落胆の声にエルザが口を挟み、その隣でルーシイがにっこおっと満足げな笑みを浮かべて彼女に便乗した。

だがそんなルーシイに対してフリーシャが不満を言い放つ。

「そんな事言つてルーシイはちゃんと得してるじゃないのよ」

だがそんな不満の声を、ルーシイはそっぽを向いて左から右へと聞き流した。

その顔は「さあ〜て何のことでしょうかね♪」と言外に語つたどぼけ顔であつた。

カチンときたフリーシヤは錯覚だろうか、全身から黒いオーラが溢れ出ていた。

「今夜忍び込んで売り飛ばしてやろうかしら…」

「なんてこと言うぞら猫かしら!! 絶対止めてよ!」

「……冗談なのよ」

「ねえ!今の間何!!」

あまりにも『やりかねないオーラ』を放出しているフリーシヤを、ルーシイは割とガチで止めようと声を荒らげた。

フリーシヤのブラックジョークに、ルーシイは自分の寿命が少し縮んだような気がした。

「前にも言つたけど、金色の鍵『黄道十二門の鍵』は世界中にたった12個しかないの。めちやくちやレアなんだからね」

「あの牛やメイドがか?」

「あたしがもつと修行したら、星霊の方がアンタより絶対強いんだから!!」

改めて黄道十二門の鍵について説明したルーシイだったが、実際に戦つたナツはそれを鼻で笑つた。

確かにハコベ山で完全なる不意打ちとはいえタウロスをワンパン、シロツメの街では召喚主が違ふといえどバルゴを2度一撃KOしている。

ルーシイもそれが分かっていたからこそ悔しそうに唸ることしか

出来なかった。

「で……今回ももらった鍵はどんなのなんだ？」

そんな中、グレイがタイミング良く話題を今回の報酬の鍵に戻した。

聞かれたルーシイは上機嫌そうに答えた。

「人馬宮のサジタリウス！」

「人馬だと!!？」

ルーシイの答えにグレイは頭の中で想像を膨らませて驚愕した。しかしルーシイは何となくだがグレイの想像する人馬が逆なのではと読めて微妙な表情を浮かべた。

一般的に人馬と言え、人間の上半身に馬の下半身という半人半獣の生物で弓を持つ姿を想像するだろう。

しかしグレイが思い浮かべたのは馬の顔に首から下が人間の体、最早それは馬の被り物をした人間と表現した方が適切だろう。

余談だが、その傍らで話を聞いていたナツとレアも想像を膨らませていた。

しかしその姿は人でも馬でもなかった。

ナツは醜悪に歪んだ顔をした花からタコの足が生えた、端的に言えば化け物を想像しており、レアはただのイカを想像していた。

もう一度言おう、ただのイカである。

そんなのほほんとした空気も突然終わりを告げる。

「呑気な事だな。まさか帰ったら処分が下るのを忘れた訳ではあるまいな」

「二げっ!？」

「処分…」

「…なの!？」

エルザの言葉に漏れなく全員が目を見開かせてエルザの方を見た。

「ちよつと待って!! それってもうお咎めなしになったんじや……」  
「馬鹿を言うな。お前たちの行動を認めたのは、あくまで私の現場判断だ。罰は罰として受けて貰わねばならん」

ルーシイの抗議の声も虚しく霧散し、エルザに重い現実を叩きつけられる。

「私は今回の件に関しては概ね海容してもいいと思っている。しかし、判断を下すのはマスターだ。私は弁護するつもりは無い。それなりの罰は覚悟しておけ」

そう言うと、真っ先にハッピーとフリーシヤの顔がサーツと青くなる。

「まさかアレをやらされるんじや!!」

「ちよつと待て!!! アレだけはもう二度とやりたくねえ!!!」

「黙るかしらオス共!!! アレの事は口にするだけでも恐ろしいのよ……!!」

「アレって何……!!!?」

青ざめた顔で戦々慄々している3人の会話に共通して『アレ』に、ルーシイは言い知れぬ不安を抱き始める。

3人ほどでは無いがルーシイも肩をビクビクさせていると、その肩をナツがポンと叩いて落ち着かせた。

「気にすんな!」「よくやった」って褒めてくれるさ、じっちゃんなら!

「ん。おじいちゃんは優しいから、」フェアリーテイル「それでこそ妖精の尻尾の魔導士

「じゃ」って褒めてくれるの」

「すこぶるポジティブね、アンタら…」

ルーシイを挟んで双竜がそう言い合い、ある種の現実逃避に見えた彼女はジト目で2人を見た。

だが間を置く暇なくエルザが「いや…」と口を挟んだ。

「アレはほぼ決定だろう。ふふ…腕がなる」

その言葉に、最初こそナツとレアは変化を見せなかった。

だが次第にナツの笑顔は引き攣り、レアはそっぽを向いた。

その時点でルーシイは2人を乾いた目で見始める。

最終的にナツはその引き攣った笑顔のままダラダラと大量に冷や汗をかきだし、レアはあさっての方向を向いて頭を抱えてしゃがんだ。

「行くぞ」

「!? いやだぁー!!! アレだけは!! アレだけは!!! いやだぁー!!!」

「!? ご慈悲を!! どうかご慈悲をエルザ様ぁー!!! アレだけはどうかご勘弁をー!!!」

瞬間、エルザは何時ぞやのようにナツのマフラーとレアのセーラー服の襟元を掴んだ。

そしてそのまま2人を引きずってギルドへと歩き出した。

2人としては逃げようと考えたその瞬間には引きずられていた為に一瞬何事だと思考が止まった。

だがすぐに状況を理解すると、2人揃って泣き喚き始めた。

表情の動かないレアであってもナツと同じように破顔し、口癖の語尾が吹き飛んでいた。

「だからアレって何ー何ー!!?」

それほどまでに彼らを恐怖させているにも関わらず、その正体が分からない。

故にルーシイは彼らとは別種の未知という名の恐怖で体を震わせるのだった。

くくく

「マスターはおられるか!」

数分の後、彼らは無事ギルドへと帰ってきた。

扉を破壊するかの勢いで開けたエルザは開口一番にマスターの確認をしてナツたちを震え上がらせる。

「おかえりなさい。島はどうだった? ちよつとは海で泳げたりした?」

エルザの言葉に最初に返答したのはミラだった。

しかし少々：いやかなりズレた返答に一同は「それ今聞く?」と内心微妙な表情を浮かべたが、顔に出せばエルザになんて言われるか不明だった故にくつと堪えた。

エルザは一応ミラの質問に「それどころではなかった」と真面目に返し、再度マスターの確認をとる。

「評議会のなんたら会合とかなんとかがあつて、昨日から出かけてるぜ」

今度はマカオがマスターの現状を話し、エルザは「そうか」と納得して一応静かになる。

そしてマスターの不在を聞いて、仕置き組は一斉にホツとなった。



「今んとこセーフ！」

「ようし！じーさんが帰ってくるまで、アレはねえな！」

「ん、一安心なの…」

「良かったよオ！オイラたち、まだ地獄を見なくて済むよオ!!」

「始まったら後戻り出来ないかしら。今はこの自由を満喫するのよ…」

「だからアレって何なのよ!!あー気になる…！あー怖い!!実態が分からないから尚更怖い!!」

心の底から安堵するような彼らの言葉と猫2匹の不穏な言葉に、ルーシイはさらに恐怖に駆られて涙を流しながら頭をポカポカ叩き出した。

だがそうして騒いでいると、エルザから「静かにしている！」と叱責されてしまう。

そのままマスターがいつ頃に帰るかを聞くと、ミラからは今日中には帰ってくるとの返答を受け、エルザはビビり散らかすナツらに言い放つ。

「マスターが帰られたらすぐに判断を仰ぐ。S級クエストに勝手に手を出した罪は罪。心の準備をしておけ」

「だからどうという心の準備をすればいいのよオオオオオオ!!」

釘を刺された一同は再び体を震え上がらせ、ルーシイはいつまでもその未知という霧に恐怖心を煽られていた。

そんな中、翼を出したフリーシャが何やら紙切れを1枚持ってフラフラとやって来た。

「レア、なんか珍しい依頼見つけたかしら」

そんな突拍子もない言葉にレアは「ん？」と疑問を覚えながらフ

リーシャが持つてきた依頼書を手に取ってみる。

ナツとグレイもレアが手に持つ依頼書を覗き込んだ。  
するとそこにロキが合流した。

「ああナツ、グレイ、レア、おかえり」

「ロキか…えっとこの文字を…?」

「どうしたの?」

「げえ!? ルーシイも帰ってきてたのか!!?」

ロキの言葉にナツが軽く応対したがすぐに依頼書に目線に戻す。

そこへルーシイが割り込むと、ロキはオーバーとも言えるぐらい仰  
け反ってルーシイから距離をとる。

「当たり前でしょ? ナツたちと一緒に行ってたんだから。なんでそこ  
までビビるの?」

拒絶ともとれる反応にルーシイはムツとしてそう言いながら詰め  
寄る。

しかしロキは「いや…」と誤魔化しながらその場を後にしようと駆  
け出した。

その直後、前を見ていなかったロキはエルザと正面衝突して吹き飛  
ぶ。

その衝撃からロキは意識を落とした。

ルーシイから「弱すぎ…」と呟かれる始末である。

「お前たち、今はそれどころでは無いだろう」

一方エルザはロキがぶつかった事も気づいていないかのようにナ  
ツらと合流した。

あまりにロキが不憫すぎる。

「この文字の意味を解いてください。解けたら50万<sup>ジュエル</sup>J差し上げますって書いてるの。やることの割に破格なの」

「ね？ 珍しい依頼かしら」

一通り目を通したレアはそう呟きながら依頼書を近くのテーブルの上に置いた。

しかし覗き込んでいたグレイは驚いたように声をあげた。

「これ古代文字じゃねえか！ こんな誰が読めんだよ…」

「でも隣に現代語訳があるよ？」

グレイが声をあげたのは、依頼書に意味を解いてほしいと書かれた文字がガルナ島の遺跡でも見た古代文字だったからだ。

しかしハッピーの言う通りその隣には現代語訳が書かれておりそちらであればナツでも読むことが出来た。

「なにになに？ ウゴテル ラスチ ボロカニア…：ダーツ全然わかんねエ!!」

確かにナツが読み上げた文字はまるで意味がわからなかった。

この意味を解けという依頼なのだろうが、ナツが文字を読んだ瞬間異変が起こった。

依頼書の周りを囲んでいた人たちの体から虹色の光が溢れ始めたのだ。

元々お仕置きが待っていることで注目を集めていたナツらは、その光のせいでさらに注目を集める。

ワカバは呑気に「人間お仕置きの恐怖に耐えきれなくなると虹まで出るのか」と感心してマカオにツッコまれていた。

光が収まると、すぐに別の異変が現れた。

「さ…寒いイー！」

「あ？ 氷使いがなんで寒いんだよ」

突然グレイが体を縮こまらせて震え始めたのだ。

顔は青ざめて寒気を訴える彼の姿は異常で、エルフマンからそう問われるも変わらず彼は寒気を訴え続ける。

すると、隣のルーシイも異変が現れ始めた。

「な、なんか…！ 重てエ!!なんか胸の辺りが異常に重てエ!! こ、腰に来る…!!」

「ど、どうしたルーシイ…：…なんか声のトーンヤケに低いぞ」

「そ、そんな事な…ええええええ!!?」

マカオの言った通り何やら声のトーンが低いルーシイが体の不調を訴え始めた。

そしてマカオの問いかけに何故かグレイが反応してテーブルにもたれかかっているルーシイに目を向けると驚愕で体を跳ね上がらせる。

そんな最中、気絶していたロキが目を覚ました。

「アレ…：…オイラ、なんで倒れてたんだっけ？」

「ていうか、僕はなんで立ってるんだ？ そもそも、なんだか僕の視点が低くないか？」

かと思えば、いつもとは全く違う口調で話し始めるロキ。

その傍らで何故かメガネをクイツと持ち上げるような仕草をしたハッピーがどこかキザつたい口調で話す。

そしてふとハッピーがルーシイに視線を向けた時だった。

「うわああああ!!! ガッ！ベッ！ う、うわあああ!!」

まるで化け物を見たかのようにハッピーはルーシイから距離をと

る。

しかし自分がテーブルの上に立っていたのを忘れていたのか、翼を出し忘れていたのか、テーブルから転げ落ちた。

だがそれでも気にせんと言わんばかりに立ち上がって走り出した。

「おいハッピー!!何でオレの顔見て逃げ…は?なんだこの声!」

自分の顔を見て逃げられる事に腹を立てたルーシイがそう声をあげると、何故か今更自分の声に驚くような仕草を見せ、マカオは一連の流れに「なんかいつもとパターン違くない?」と困惑する。

そんなカオスな状況に混沌の種をもう一つ。

「なんだか…体が熱いの…」

「!!!?」

突然ナツが顔を自身の手で扇ぎながらそんな事を言い出した。

普段のナツなら絶対にする事が無いだろう仕草に全員目が点になる。

それに加え、ナツの語尾にレアの口癖がくつついている事も、思考をフリーズさせている原因の一つであった。

「えっと…ナツ…急にどうした…?」

「あ?どうしたって聞かれたって何もねえよ」

「!!!?」

混乱から覚めない中ワカバが代表してナツに聞いてみるが、何故かワカバの問いに答えたのはレアだった。

しかもただレアが答えただけでは無い。

いつものレアなら有り得ない男勝りな口調に、死んでいた表情筋が動いたのだ。

普段瞳孔が少し開いたり、眉がほんの少しピクついたりする程度の

レアの顔に、顰めつ面とはいえ色が付いたのだ。

「……は!? え…レア…お前…」

「一体何を騒いでいる!」

放心状態からいち早く回復したマカオがレアに確認をとろうとするも、テーブルの方から凜とした……と言うには少々幼い声が響いた。

声の方向へ視線を向けると、そこにはキリツとした表情のフリーシャが仁王立ちしていた。

「な…何かしら…この妙に柔らかい胸のコレは」

その傍らで、不思議そうな顔をしたエルザが何故か自身の胸を揉んでいた。

その光景に男性陣が「おおー!」と鼻息を荒くさせた。男なんぞ所詮こんなものである…。

そしてそれを見ていたフリーシャは「なっ!?!」と絶句する。それも束の間のこと。

「止めんかー!!!」

フリーシャはエルザの顔面目掛けて飛び蹴りをかまそうと飛んだが…。

ガンツ!

そんな鈍い音が虚しく響いた。

胸を揉んでいたエルザの服装はいつの間にか私服からまた鎧に戻っており、フリーシャは顔目掛けて飛んだが飛距離が足らずその胸の鎧に足を打ち付ける結果となってしまったのだ。

ジーンと体の芯が震える感覚を覚えたフリーシャはそのまま落ちてしまう。

エルザの口から零れ落ちた「あんまり痛くないのよ」という言葉がさらに虚しさを加速させる。

「何なんだこの猫型体型は……。というかこれは猫そのものだ。私は換装した覚えなどないぞ……!」

落ちた場所で項垂れていたハッピーは早口で自身の体の状態を確認して悶々としている。

それから理解不能な状況がしばらく続いた。

口々に騒いでいるがどれもこれも普段の彼らでは絶対にしないであろう言動に他の者達は呆然としてしまっていた。

「ん、とりあえず理解したの」

「り、理解って、一体何を理解したのよナツう!」

「レアはレアなの」

突然ナツがそう言って 그레이 に詰め寄られるも、ナツは自分がレアだつと言って肩を鷲掴みしていた 그레이 を払う。

「レアたちは、心と体が入れ替わってるの」

『…………ええええええええええ!!?!?!!』

しれつと告げられた事実には、ギルド中から驚愕の声があがった。

「ど、どうやらそうだと見て間違いないだろうな……」

そこへフラフラくつと立ち上がったフリーシャ……もといエルザが復活して会話へ加わる。

「ナツとレア、グレイとルーシイ、ロキとハッピー、そしてあろう事が私とフリーシャが入れ替わったのだ」

「ちよつとーハッピーならまだしも、なんでリーシャがあろう事かつて蔑まれるかしら!!」

「酷いよお、オイラ今関係なかったじゃないかあ!!」

フリールザが誰と誰が入れ替わったかを説明するが、意図していなかった言葉の刃がエルザを攻撃し、全く関係ないハズのロキに飛び火する。

その時、ボタン!とギルドの扉が開かれた。

「古代ウンペラー語の言語魔法……人格輪転チエンジリングが発動したんじや」

評議会のなんとやら会合とやらから帰ってきたマスターマカロフであつた。

フリールザが待つてました!と言わんばかりに一番に駆け寄り、それに続く形で他の者たちもマスターの前に駆け寄る。

「あの依頼書が原因じや。ある呪文を読み上げると、その周囲に居た人々の人格が入れ替わってしまう。これぞ人格輪転チエンジリングじや」

現在彼らに起こっている異変の原因とその発動条件の懇切丁寧な解説を経て、ルーシイがレアの肩にポンと手を置き、中身がナツであるかを確認した。

レアも戸惑いながらも「ああ」と肯定すると、ルーシイは彼女の胸ぐらに掴みかかった。

「てめエなんてことしやがる!!!」

「知るか!!ちよつと依頼書読んでみただけだろーが!!!」

「止めんかルーシイ……いやグレイ。この呪文で入れ替わるのは人格だけでは無い。魔法も入れ替わるのじや」



喧嘩腰のルーシイを制止させ、マカロフは続きを話し、再び聞いていた者たちは口をあんどりさせる。

魔法が入れ替わるとはつまり、元の体の持ち主が自身の魔法になつてしまうという事だ。  
ルーシイ、グレイやナツ、エルザが分かりやすいだろうか。

「最後にもう一つ…」

まだあるのか…!と言わんばかりに、一同は固唾を呑んでマカロフの次の言葉を待つ。

「人格輪転チエンジリングを発動してから30分以内に呪文を解除しないと、未来永劫元に戻れなくなる…!という言い伝えがある」

その瞬間、入れ替わっていた全員の顔が真っ青になる。

慌てて入れ替わってから経過した時間を確認すると、もう既に16分経過とタイムリミットまで半分を過ぎていた。

「じっちゃん!! 元に戻す魔法は!!?」

「うむ…なんせ古代魔法じゃからのう。そんな昔の事はよう…!知らん!!!」

一抹の希望に縋つてマカロフに聞いてみるも、返答は残酷だった。電撃のような衝撃が走った彼らに、その後マカロフが何を言ったかほとんど耳に入っていないかった。

だがマカロフはそんな彼らを気にも停めず、「精々頑張ることじゃ」と言葉を残してその場を去っていつもの定位置に戻って行った。

「だあー!!なんてこった!! ええいこーなったら!!」

一先ず気を持ち直したルーシイ。

だが彼はあろう事か自身の服の裾に手をかけ、その綺麗なお腹をチラ見せさせた。

これには男性陣も頬がピンクに染まる。男なんぞ所詮こんなもん  
…（以下略

「ぎやあああああ!!ちよつとおお!!それだけは止めてええええ!!」

「そつか。中身はグレイだから、脱ぎ癖もルーシイの体に移るんだね。目の前暗くてよく見えないけど」

そしてそんな羞恥行為を元の体の持ち主が認める訳もなく、グレイは乙女な悲鳴をあげながらルーシイを押さえ込んだ。

そんな中ロキは呑気に納得していた。

視界が暗いならそのサングラスを外せとツツコミを入れる者は誰もいなかった。

「…そうだ! リーシャ、ちよつと面白いこと思いついたかしら!」

「はっ! フリーシャ!?! 一体何を!?!」

すると、眺めているだけだったエルザは突然そんな事を言い出した。

嫌な予感がしたフリーシャは何かやかしかしそうな彼女を止めようとするが時すでに遅し。

「換装! かしら!!」

フリーシャエルザの声が一際大きく響き、彼女の体が光に包まれる。

数秒もかからない内に光は消え、さつきとは全く違う姿が顕になる。

ツインテールの紅い髪を魚のヘアバンドで纏め、胸元に「えるぎ」と

名前が入ったゼッケンが縫い付けられたスクール水着を着用。  
そして何故か手には釣り竿を持っていた。

「おお!! コレはコレで!!!」

(略) 男性陣が鼻の下を伸ばし、黄色い歓声をあげた。男なんぞ所詮：  
略

「止めろオオオオオオ!!!」

そして元の体であられもない姿を晒されたフリーシャ<sup>エ</sup>はシユワツ  
チ!にも負けず劣らずの飛び込みパンチを叩き込む。

ゴンツ!

「あ……」

そのハズが、全く意図していなかったエルザ<sup>フリーシャ</sup>のエルボーが  
フリーシャ<sup>エ</sup>の顔面にクリーンヒットした。

何もかも上手くいっていないフリーシャ<sup>エ</sup>は落ちたところでガク  
シツと項垂れた。

「な、なんという事だ…S級魔導士としてのプライドが…!」

「うーん…おかしいのよ、綺麗な天輪の鎧にするつもりだったのに上  
手くいかないかしら」

こっちはこっちで上手くいかないと頭を捻らせていた。

それを見てレア<sup>ナ</sup>がポンツと手を叩いた。

「わかった! 確かに技は入れ替わるけど、中途半端になっちまうん  
だ!」

「案外そういう訳では無いかもなの」

しかしそれはナツ<sup>レア</sup>の言葉によって否定された。

どういう事だと彼の<sup>彼女</sup>の方向へ視線を向けると、松明だったのであろう先端が焦げた木の棒を持ったナツ<sup>レア</sup>とその周囲をフワフワと浮かぶ10個の火の玉が目に入り、全員揃ってギョツと目を見開いた。

「これも慣れっぽいの。レアとナツの魔法は感覚はなんとなく似ていたからすぐに使いこなせたの」

なんでもないように言ったナツ<sup>レア</sup>は火の玉を一口元に寄せてパクッと頬張った。

「ん、美味しい……炎ってこんな味なの……水とは違って辛味があるの」  
「うっほおおおマジか！　じゃあオレも水食えんのか!!？」

ナツ<sup>レア</sup>が完璧にナツの魔法を使うのを見て興奮したレア<sup>ナツ</sup>は絶体絶命の事態であるという中ミラに普段なら頼むことは絶対に無かろう普通の水を頼んだ。

数秒もしないうちに目の前に出されたジヨツキ一杯の水を前にレア<sup>ナツ</sup>は満面の笑みで「いただきまーす！」と挨拶してから口につけたジヨツキを一気に傾けた。

「……ど、どうなんだ？」

レアが当たり前にしていたとはいえ、やはり常人からすれば想像も出来ないような事に挑戦しているナツにみんなの興味が注がれており、エルフマンが代表してレア<sup>ナツ</sup>に聞いてみた。

しばらく沈黙が続いていると…。

「う……うめえ…!!　なんだコレ……プルプルしてんのに噛むとフワツて溶けて、スゲエ優しい味がする……」

「フツ……また一人水の味の魅力に堕ちたの……炎も辛味が癖になって美味しいの……」

「炎もうめえだろ!? けど水も捨て難い……!」

何やら滅竜魔導士たちにしか分からない会話が始まり周りはそのテンションについていけず呆然となった。

そんな時、翼を生やしたハッピー<sup>ロキ</sup>がギルドの門を潜ってきた。

「誰かー!! なんとかしてくれー!!!」

そう叫んだ次の瞬間、彼は突如急降下して「ガベツ!？」と声をあげながら墜落した。

その様子を見た全員が「あー、魔法が中途半端に機能しているんだ」と半ば理解した。

そんな彼を嘲笑うかの如く(そんな意思是断じて無いが)翼を生やしたフリーシャ<sup>エルザ</sup>が安定した飛行を披露しながら舞い降りた。

「おお、なるほど。空を飛ぶとはこういう感じか……等と感心している場合じゃない!! もう時間が無いぞ!!」

手足をジタバタさせながらそう忠告したフリーシャ<sup>エルザ</sup>はまた飛び上がっていった。

しかしそう言われても呪文の解除方法が分からなければ手の打ちようが無いのも事実。

「一体どうしたら……はあ……」

グレイ<sup>ルシイ</sup>はそんな先の見えない状況に大きいため息をつく。

しかし、そのため息と一緒に氷の礫が口からポロポロと垂れ始めた。

「グレイ……じゃなくてルーシイ、口から氷が……」  
「うお!? むぐつ……! キモっ!? もうやだあ……」

慌てて口を抑えたグレイ<sup>ルーシイ</sup>だが、それだけで氷の礫は止まってくれず、未だにポロポロと溢れてきていた。

そんな泣き言を呟いた時だった。

「ルーちゃん、私に任せて!」

そんな頼もしい声が聞こえてきた。

声の方向へと目を向けると、そこには3人の人影が見えた。

それを見てグレイ<sup>ルーシイ</sup>はパアッと顔に光が戻った。

「レビイちゃん!!!」

人影の正体は妖精<sup>フェアリーテイル</sup>の尻尾の中堅チーム『シャドウギア』の3人であつた。

## 輪転の結末 幸か不幸か

チーム『シャドウ・ギア』はレビイを中心に構成された中堅幼なじみチームである。

どうでもいい話であるが、帽子を被った男ジェットはレビイに告白して2秒で玉砕、両肩から連なる容器を下げた男ドロイは同じくレビイに告白して1秒で玉砕した過去を持つ。

それでもレビイへの片思いは今でも続いているのだとか。

「オレたちチーム『シャドウ・ギア』が戻ってきたからには、必ず元に戻してやるぜ！」

「ああ、安心しな！　というわけで……」

「頼んだぜレビイ!!!」

「結局、レビイ一人がなんとかするのね」

ジェットとドロイが安心させるような言葉を掛けてきたかと思えば、2人揃ってレビイを前へと促す。

意気揚々と胸を張ったかと思えば片想い相手に結局全部丸投げというダサさ。

ミラの下直球正論に2人も揃って「アハハ……」と微妙な笑みを浮かべた。

「ありがとう、レビイちゃん！」

「ルーちゃんの為だもん、頑張る！　それに、ルーちゃんの書いた小説……絶対読者第一号になりたいから……！」

最後の言葉をボソツと耳打ちされたルーシイは嬉しそうにコクンと頷いた。

そこへジョッキ一杯の水を両手に持ったレアが割り込んできた。

「んで、どーすんだ？」

「おい危機感持てよナツてめエ…！」

美味しそうに水を流し込むレアナツを憎し憎しといった具合に見るルーグシーレイを背景にレビイは今回の騒動の原因である依頼書を手に取った。

「私、古代文字ちよつと詳しいんだ。だからまずはその依頼書の文字を調べてみる」

レビイは傍らに古代文字ウンペラー語の解読書を置き、以前ルーシーがエバルーの屋敷で日の出デイ・ブレイクの解析にも一役買った本を何倍もの速度で読むことが出来る魔道具、風詠みの眼鏡をかけると、変わらず火の玉を宙に漂わせたナツレアが近づいた。

「時間は多くないの。あむ…間に合うの？」

「だからレア…：危機感…：!!」

「とにかく！…ここはレビイに任せよう!!」

レアナツに続いてのほほんとした様子のナツレアにルーグシーレイが釘を刺すと、キリツとした様子のフリーエルシャザがそう締めて、レビイを集中させようと一旦全員静かになる。

くくく

レビイが解読を始めてから約5分が経過した。

「レビイはその文字読んでも平気なのか？」

ルーグシーレイはふと気になってそう聞いてみた。

実際レビイは時折ウンペラー語と思われる言葉をブツブツと発し



ていたが、レビイ自身にも依頼書にも何か起こるような様子は無かった。

「こーゆー古代の呪文はそのまま読み上げなければ大丈夫なの」

視線を依頼書と書物を交互に落としながらそう答えた。

そんな中、<sup>ハッピー</sup>ロキがうがアと唸った。

「時間がないよオ〜！目の前暗いし、モヤモヤするし、ずっとこのままだったらどうしよう〜…！」

「確かにあの猫型体型に戻れないのは困るかしら。でも換装が成功してないのも不服なのよ……。リベンジ！ 換s「止めんか!!」…。」

未だにそのサングラスを取ればというアドバイスは<sup>ハッピー</sup>ロキには無かった。

その傍らで<sup>フリーシャ</sup>エルザと<sup>エルザ</sup>フリーシャがそんなコントを繰り返していた。

エルザ本人からすれば自分の意思とは関係なしに辱めを受けるのだから決して笑い事では無いのだが。

その時、レビイがパタンと持っていた書物を閉じた。

「どう？ レビイちゃん！」

「何かわかったか!？」

<sup>グレイ</sup>グレイと<sup>グレイ</sup>グレイが代表してひと作業終えたのであろうレビイにそう聞いてみた。

「わかんない…」

しかしレビイの返答は皆さんの期待に応えられるものでは無かった。

沈黙の後に絞り出された声に人格が変わった一同（無論食事に夢中

な双竜以外）は一斉に落胆の声をあげた。

「そうか……私はこれから先、妙な羽の生えた猫として生きていくのか……」

「ちよー！ リーシャの何処が妙だと言うのかしら!?!」

「……うぐぐぐ……だアーツ!!」

「だからそれ止めてよオオ!!」

「うわあああん、モヤモヤするよオ!!」

「僕はもう一生デート出来ず、墜落し続けるのか……」

状況は混沌としていた。

フラフラくつと普段のフリーシャと遜色ない飛びっぷりを披露するフリーシャとその言葉の棘に噛み付いていくエルザ。

特性脱ぎ癖を発動しようとしてさせて男共の視線を集めたうえでまたもやグレイに止められるルーレイ。男なん z (ry…

そして本人にしか分からない嘆きでトホホと泣くロキとハッピー。

「み、みんな落ち着いて！ もっともって考えるから!!」

「マカオ、時間は?」

「後8分。そろそろ腹括った方がいいかもって思ったがお前らなんでそんな落ち着いてんだ……」

「レアたちは入れ替わっても支障は無さそうなの」

慌ててレビイが宥める中レアがそう聞く。

マカオの言うように、時間は既に10分を切っており後が無いのは確かなのだが、双竜に関しては時間が迫っていようとそれほど慌てた様子は無かった。

「フレー！フレー！レ・ビ・イ!!」

そして何もすることが無かったハズのジェットとドロイはレビイ

の後ろで応援していた。

ドロイが胸に抱えた大太鼓を叩き、ジェットがその大太鼓の叩くりズムに合わせて扇子を振った。

結局騒いでもどうすることも出来ず、大人しくレビイの解析結果を待つ事となった。

くくく

「もしくつとこのままだったらどーするよ…」

再び沈黙を破ったのは颯めつ面で頬杖をついていたルーレイだった。

「あ？ どうってなんだよ」

「この先この状態のまま仕事に行くつもりかよ」

「そりゃあ、元に戻んなかったらそうするしかねえだろ。ミラー！おかわり!!」

未だに水をガブガブ食べていたレアが何処か楽観的な様子で聞くと、ムスツとした表情のままのルーレイがそう言う。

彼女の言葉に、レアは持っていたジョッキを掲げながら答えた。

そんな彼女に指先に炎を灯してこねくり回していたナツも便乗した。

「レアはこのままでも大丈夫なの。慣れさえすれば全然問題ないの」

「あのねえ…！ アンタとレア…：…じゃなくてナツはもう適応出来るから何ともないでしょうけど、こんな中途半端な状態じゃあ一体何年かか…」

相も変わらざるのほほんとした様子のナツにグレイが噛み付いた。

しかし自分の言葉を自分の中で反芻しているとハツとなって席か

らガタツと立ち上がった。

「どうした？ グレイ……では無くルーシイ」

「大変よ…今の私たち、ナツとレアを除いてみんな技が中途半端じゃない？ そんな状態で仕事に行つたつて、上手くいきつこないもん!!!」

フリーシャが不思議になり彼女に聞いてみる。

そうして返ってきたのは切羽詰まった声から発せられた当たり前すぎる事実。

だがナツ以外の全員はその言葉にハツとなり、今気づいたというよ  
うな反応を見せた。

「ヤバい!!! 確かにそう言われればかなりヤバい!!!」

「ん？ 気づいて無かったの？」

「何故そんな単純な事に今の今まで気が付かなかったのだ!?!」

途端にレア以外の入れ替わり組は焦りを覚える。

一見なんの問題もない双竜でも、連携という面ではかなりマズイ状況である。

ナツとレア間での連携は問題ない。

しかしハッピーとフリーシャとは確実に失敗するだろう。

ナツもそれは分かっていたが、結局本人たちの問題で自らが干渉できる事では無かった。

故にナツ自身は特に何も言わなかった。

「やはり……やはり猫になってしまったせいかな…」

「聞き捨てならないかしら!! それはリーシャの思考能力がハッピーと同程度と言いたいのかしら!?! 冗談じゃないのよ、間違いないあのバカ兄貴より考えられる頭はあるかしら!!!」

「ヒドイよオ！ エルザもフリーシャも言葉の節々にトゲに加えて毒

もあるよオ！」

ガクツと膝と手をついて項垂れたフリーシャ。

そうしながら放った言葉に再びエルザが噛み付いた。

そして何故か引き合いに出されたロキは涙目になりながら訴えたが、二人揃って聞く耳を持たない。

すると彼は「うわああん！」と声を上げて飛び上がり、エルザを巻き込んでフリーシャの上ののしかかった。

一連の流れを見ていた一同を代表してマカオが「何しようとしたんだ？」と疑問を零す。

「酷いこと言われたから、オイラこんな所出て行ってやるって飛んでいこうとしたんだ……。そしたら羽が無くて……。羽が無くて転んじやったんだ……！」

「な……泣いてないでさっさと退くかしら……。エルザが押しつぶされるのよ……！」

「わ……た……私が悪か……ツタ……た、頼むからどいてくれ……！」

わんわんと泣きだすロキ。

そして幻聴かな、エルザのその言葉を最後にチーンという音が響くと共にフリーシャから白い魂のようなものが幽体離脱していた。

その時だった。

「わかった!!!」

文字の解析を行っていたレヴィが声をあげた。

そこへ戯れていた三人を除いた入れ替わり組が「おお！」と声をあげながら周りを囲った。

「これで魔法が解けるんだね！」

「急げレヴィ、時間がねえ!!」

ハッピーが嬉しそうにそう言い、ルーシイは切羽詰まった様子で言う。

「この古代文字はね、『ここに永遠の入れ替わりをもつて幸せを齎す』って意味なの」

「やった！ レビイちゃんスゴッ！」

「ん？ それって…」

「そんで…!?!」

レビイは解析した結果を得意げに解説し、グレイが感嘆の声で彼女を賞賛した。

だがそこへ違和感を覚えたナツがはて？といった風に零したが、それはレアの大声で掻き消えて続きを促す。

「つまり！ この魔法で入れ替わった人達が永遠に幸せに暮らせますって意味なの!! はあく解けて良かった〜」

「ちよつと待て!!! それじゃあこのままでいろつて意味じゃねーか!!!」

「ん、やっぱ依頼書の文字の意味がわかっただけで、これだとレビイの手元に50万Jが渡るだけなの」

ビシツと指さしながら答えたレビイは晴れやかな笑みを浮かべ、これでぐつすり眠れると言わんばかりに伸びをした。

だが彼女の言葉を聞いた面々は『永遠に』という重すぎる言葉のしかかってくるような感覚を覚え、真つ先にレアが吠えた。

それにナツがプラスアルファして苦言を呈した。

ようやくレビイも気づいたようで「どうしよう…」と頭を抱えると、隣に真剣な表情のグレイが並び立つ。

「レビイちゃん、魔法が解けなきやとダメなのよ。きつと何か方法があるハズよ！ 裏の意味とか…そういうやつ！ そういうのを重点

的に調べてみて!!」

「! うん、頑張る!」

彼女の言葉にもう一度火が灯ったのを感じたレビイはもう一度机に向かった。

そして彼女の復活は、彼らの復活をも意味した。

「フレ―! フレ―! レ・ビ・イ!!!」

「あの応援チーム……却ってウザくねエか……?」

ジエツトとドロイである。

しかしワカバの言う通り、文字の解析に大太鼓を抱えての応援とはハッキリ言って邪魔でしかないだろう。

寧ろよくレビイはこんな環境で集中できるものだ。

「いや、気合いが入っていいと思うぜ! オレも参加してエくれえだ…!!」

だがそんな応援チームを肯定したのは漢気大好きエルフマンだった。

確かに自ら学ランを着るような彼だ。

拳を握りしめてうずうずする彼に、ワカバは思わず「はア?」と零したのは無理ない事だろう。

「違う……これじゃあ余計意味が分からない。ていうか言葉にすらなっていない……んぐぐぐ……!」

今も尚応援の声がギルド内に響く中、レビイは悶々と唸っていた。そして時間も待ってはくれない。

「あと3分!」

「イヤアアアアアア!!」

マカオが何処からかフリップを持ち出して自身のセリフ全く同じ文字を書いて提示していた。

それを一番近くで聞いたグレイルーシイが氷をポロポロと吐き出しながら悲鳴をあげた。

そんな中悟りを開く者が一人。

「魚なのか……。これから毎日…朝も、昼も、夜も……。さ…魚なのか…！」

フリーエルシャザである。

だがすぐに膝をついてしまったあたり、平静では無かった。

悟りの境地まではまだまだなようだった。

「猫じゃらしを見ると嬉しくなってしまうたりするのかア!!?」

「お、落ち着けよフリーシャ…。じゃなくてエルザア!!」

終いには泣き出してしまった。

僧侶への道は遠い…(目指してない)

羽を出して涙を流しながら飛び立ったフリーエルシャザをハッロピーキが同様に羽を出して追いかけてしようとした。

だが忘れてはいけないのが、フリーエルシャザは既に翼エーラを使いこなせているが、ハッロピーキはそうでは無いという事。

残念ながら彼自身は忘れていたらしく、飛び上がった直後に体は急転換して顔から地面へと垂直落下、「グペエ!?!」と声をあげて墜落した。

一方フリーエルシャザは隅の方で丸くなっていた。

普段のエルザであればこんな光景は絶対にありえないだろう。

誰も声を掛けられない中、彼女に近づく影が一つ。



「エルザ…さつきはごめんね、オイラが悪かったよ」

ロッキー<sup>ハッピー</sup>である。

思わぬ謝罪の言葉にフリーシャ<sup>エ</sup>は涙を滲ませながらも笑顔を浮かべて彼の方へ向き直った。

「ハッピー…お前…!」

「喧嘩なんかしてる場合じゃないもんね。仲直りしよ」

「…!! そうだな、私も悪かった」

お互いに謝罪しあって、このまま平和的に解決。

…と、そうはならなかった。

「あい…これ、仲直りの印だよ」

そう言つてロッキー<sup>ハッピー</sup>が渡したのは一匹の魚だった。

そう、魚である。

「…魚…! って、ウワアアアアアアアアアン!!!」

「空気を読みなさいよ!!!」

また泣き出してしまったフリーシャ<sup>エ</sup>。

人格が入れ替わってからメンタルがクソザコナメクジになっていないだろうか…。

しかし魚の事で悩んでいたにも関わらず目の前に魚を出されては仕方ないのかもしれない。

ポカンとしたロッキー<sup>ハッピー</sup>の隣でグレイ<sup>ルーシイ</sup>が大口開けていると、その隣にいたフリーシャ<sup>エ</sup>が呟いた。

「なるほど…エルザはリーシャの姿であるにも関わらず、猫のイメージはハッピーだというのかしら…」

「!? …えつと…エルザ、じゃなくてフリーシャ、さん…：…なんか…怒ってらっしゃいます…?」

ビクツと肩を跳ね上がらせたグレイグレイだったが、その反応は正常である事を記しておく。

なぜなら今のエルザフリーシャは普段のエルザが怒った時の雰囲気と同じだったのだ。

それに加え、彼女は見えてはいけない黒いモヤのようなものを纏っていた。

「怒る? 何言ってるのかしら。リーシャはちよーつとお腹の中でグツグツと何か煮えてるような感覚に落ちてるだけなのよ」

「(めちやくちや怒ってらっしゃる!!!)」

笑顔を浮かべながらそう言うエルザフリーシャだったが、その笑顔は端的に言えば怖いの一言に尽きた。

目元に影が落ちて三日月のようになつり上がった口は彼らの恐怖心をこれでもかというくらい煽った。

「レ、レビィ!! まだか!!」

恐怖から逃れようとルーシィグレイが今も尚机に向かっているレビィにそう聞いた。

自分が戻りたいのは間違いないが、何よりも今誕生したアレを放置するのはマズイと直感したのだ。

しかし彼女彼女の問いに答えたのはフリップを持ったマカオだった。

「これはマジでヤベエ…：1分切った!!」

「てめエ、さつきからなんか楽しんでねえか!? おお!!」

意気揚々とフリップに書かれた「あと1分」の文字を見せながら声

を張るマカオ。

だがそんな彼を見たルーシイが胸ぐらに掴みかかり、憤慨に満ちた声色で聞いた。

詰められたマカオは怒りよりも何処か焦りを彼女から感じ、「そ、そんな事ないって…」と戸惑いながら返した。

「もうちよつと……何となく分かりそうな気がしてきてるんだけど…」

「頑張れ頑張れレ・ビ・イ!! クウ〜!燃える!!」

ふと解析をしていたレビイの口からそんな言葉がこぼれ落ちた。

ホントかと目をそつちへ向けると、いつの間にかエルフマンがジェットとドロイと一緒に混ざって応援していた。

そして自分の応援姿に興奮していた。

二人よりも一回り体が大きいエルフマンの応援姿はさながら応援団長、ワカバからも「似合いすぎだろ」とお墨付きを貰えるほどしように合っている。

「なんじゃ、まくだやつとるんか」

「じーさん! なんか覚えてねエのか?! このままじゃオレたち…」

そうこうしているとマカロフがその場へと戻ってきた。

やはり焦っているのであろうルーシイがそう聞くと、マカロフもうむと悩む素振りを見せる。

すると「ハッ!」と大きな声をあげて注目を集め、泣いていたハズのフリーシャも近くへ寄ってきた。

「そおんな事言われてものオ?」

しかし返答は意味深な反応をしながらも得られたものは無し。

耳を傾けて入れ替わり組は揃ってずっこけた。

だがすぐさま立ち上がったルーシイは再び服の裾に手をかけた。

「だアー!!!もう間に合わねえ!!!」

「だからそれだけは止めてって言ってるでしょ!!!」

捲りあげようとした矢先にグレイが野太い声をあげながら彼女の体に腕を回して締めあげた。

掠れた声でルーシイが「ギブギブ…」と降参を訴え、その後ろでマカロフが鼻の下を伸ばしていた。おとk（

「どれだけ正確かわからねえが、多分……あと40秒!!!」

「多分ってなんだ多分って!!!」

今度は「あと40秒」のフリップを掲げたマカオ。

だが発言は曖昧そのものでレアからのお叱りがとぶ。

するとマカロフが「アーツ!」と声をあげてもう一度注目を集めた。

「一つ思い出したぞ!!」

「なんですか!?!」

ここに来てのどんでん返しか、朗報か悲報か分からないが、入れ替わり組は揃ってマカロフの前に集まり、フリーシャが代表して中身を聞いた。

「この魔法を解くときは1組ずつしか解けないんじや。いっぺんに全員を戻すのは無理だったハズじや」

悲報であった。

そんな事を話している間にも残り時間は（相も変わらずマカオがフリップを掲げる中）30秒くらいとなっており、一度に全員の解呪が不可能とあればもしかしたら元に戻れないペアが発生する可能性が

ある。

それがわかった瞬間始まったのは誰が最初に戻るかの会議だった。

「誰が最初だ!?!」

「当然オレとレアだ!! なあ!?!」

「レアはどっちでもいいの」

「ってうおい!!?!」

「なら、最初はアタシたちからね♪」

「いや! まず僕たちからだ。そうだろう? ハッピー」

「あい! オイラこんなモヤモヤしたのはおさらばするんだ!」

「待て!! 私がこのままだと妖精の尻尾フェアリーテイルはどうなる!?! 最初は私とフ

リーシャだ!!!」

「リーシャはどっちでも…というよりもう少しこのままがいいかしら。畏怖の目で見られるのは中々気分が良かったのよ」

「フリーシャが目覚めてはいけない方向に目覚めかけてるの!! 最初はエルザ達に一票なの!!!」

会議というには、それはもはや口論に近かった。

会議として発言したのはレアのみであり、今の体を気に入れてるフリーシャを除いた全員がオレが私だと罵りあっている。

ハッキリ言ってしまうえば、非常に醜い。

大抵の事は「あらあら」で済ますミラでさえ「人間追い詰められると怖いわね」と遠い目をしていた。

「15秒きつたよ〜!」

「ハッ! わかった!!!」

マカオの余命宣告に近いその言葉とレビイが声を張り上げたのはほぼ同時だった。

待ち望んでいたその声に入れ替わり組は揃ってレビイの前へ集合した。

「12！ 11！」

「レビイちゃん!!」

「こういう事だったの！ つまり説明するとね…」

「きゆうく！ はア〜ち!!グボア!!」

始まったマカオのカウントダウンを背景にレビイは時間が無いにも関わらず説明を始めようとした。

それを止めたのは明らかに楽しんでいた心が浮いて出てきていたマカオを殴り飛ばしたレア<sup>ナツ</sup>だった。

「レビイ!! 時間がねえ！早く!!!」

「わかった！ いくわよ……アルボロヤ テツラ ルビコウ!!!」

急かされたレビイは目を閉じ呪文を唱え、依頼書から金色の輝きが溢れ出す。

一度唱えただけでは終わりでは無い。

この魔法はマカロフの言った通り1組ずつしか解けない。

故にレビイはその後二度三度と繰り返し、計5回呪文を唱えた。

光の文字の柱が立ち上がり、誰もがその光景に目を奪われた。

やがて光が収まると、場を静寂が支配する。

「……あつ！ 元に戻ってる!!!」

「オレもだ!!」

最初に吉報をもたらしたのはルーシイとグレイのペアだった。

戻った事を確認出来た2人は嬉しそうに顔を見合わせた。

それに続くペアがもう一つ。

「うおーっ！ オレも戻ったアーツ!!」

「ん、レアも戻ったの」

ナツとレアのペアであった。

そのままナツは口から火を吹きながらはしやぎ回り、レアはナツが途中で残した水の入ったジョッキに手を伸ばした。

そして慣れた様子で無数の水の玉を自身の周りに浮かせてパクパクと食べ始めた。

「レビイちゃん!!ありがとう!!!」

「やったー!!」

喜びのあまりルーシイはレビイに飛びつき手を握った。

ルーシイのそんな嬉しそうな様子にレビイもガッツポーズで答えた。

「どうやってやったの? 教えて!」

「言葉そのものに意味は無かったの。逆さ読みをやってみたんだ」

ルーシイはさつきは切羽詰まって聞けなかった説明をレビイに促すと、彼女も視線を依頼書に落としてそう紡いだ。

「古代は文字が少なかったから、色んな意味を伝えたいときに反対から読むと別の効力を発揮するようにしていたの。だから呪文を逆さから読んでみたら魔法が解けたの」

理にかなった説明にルーシイは大きく頷き、グレイと合わせて再度礼を告げた。

レビイは「ルーちゃんのためだもん!」と礼を受け取り一件落着。ところが、ハッピーエンドで終わるには他2組の入れ替わり組の反応が無かった。

「と……解けてなアーい!!!」

「エエエエ!!!?」

その時、ロキとハッピーのペアが揃って声をあげた。  
しかもそのまさかの内容にレビイとルーシイが絶叫した。  
それで終わりでは無い。

「私もだ!! 猫のままだぞ!!!」

「リーシャはもうどっちでもいいのよ。恐れおののくがいいかしら  
!!」

「おいフリーシャ!私の体で何をするつもりだ!!」

なんとエルザとフリーシャのペアも元に戻っておらず、変わったまま  
まだったのだ。

カウントダウンを行っていたマカオによると、どうやら僅かな差で  
残り2組は間に合わなかったのだとか。

「そんな! じゃあオイラたち、ずっとこのままだって事!」

「嘘だ!! ずっとこの体で墜落し続けるなんて嫌だ!!」

「悪夢だ!悪夢以外の何物でもない!!!」

「まあまあ、他にも方法があるじやろ」

ハッピー、ロキ、エルザが各々絶望していると、ミラがそんな事を  
言った。

しかし口調がいつものミラとは違ってジジくさい。不思議に思っ  
た全員が声の方向に目を向けると、なんとミラはカウンターテーブル  
の上であぐらをかいていた。

左手にはマカロフがいつも持っている杖を持って肩に担いでおり、  
顔は何処かしかめっ面だ。

しかし自身の発言に違和感を覚えたのか、ミラは「ん?」と目を丸  
くさせた。

一方杖を取られたマカロフはというと…。



「なんだか…私背が縮んでない!? ……あ」

顔に手を添えてキョロキョロと何処か乙女っぽい反応だった。

ここまでくれば猿でも状況は理解できる。

「まさかミラさん!!?」

「じ…じーさんとミラが入れ替わってんぞ!!?」

「なんとこのこのナイスバディ!!!ウツハツハツハツハ!!!」

「い…イヤア!それだけはイヤアア!!」

喜色の声をあげて自身の胸を張るミラとそれを見て噎れた声で悲鳴をあげるマカロフ。

どうやらレビィの唱えた不発の呪文が誤作動を起こして周りを巻き込んでしまったようだ。

ここで思い出すべき事は、レビィが唱えた呪文の数は5回。

そのうち成功が2発、暴発が1発という現状。

さて残り2発はどうなってしまったのか。

フリーシヤが顔を青くさせながら「もしや…」と周りに目を向けてみた。

「漢は諦めが肝心だぞロキ!!! あ?なんだこの酒くせえ体は…」

「!?ちよつと!!何よこれ!?なんで私がエルフマン!!! アーツ…なんか急激に酔いが覚めてきた…」

「おいドロイ…あ!?!」

「なんだよジェット…ウエツ!?!」

「オレたち入れ替わってんぞ!!?」

「お前たちは入れ替わってもさして問題ないじゃろ」

予想通り残りの2発もしっかり暴発しており、カナとエルフマン、ジェットとドロイが巻き込まれていた。

ジェットとドロイに関してはミラマカロフからそう言われる始末であったが…。

するとミラマカロフが「それにしても…」と再び目を輝かせだした。

「これはまた夢のようなナイスバディ…」

「イヤア!!!レビイなんとかしてえ!!!」

場は完全にカオスと化していた。

悲鳴をあげる者、呆然とする者、ぎやいのぎやいのと喚く者。

冷静な者などほとんどおらず、混沌はどんどんと極まっていく。

「もう……私の手には負えない……です」

あまりのカオスっぷりにレビイも匙を投げてしまった。

場の收拾がつかず、結局制限時間の半分以上を過ぎるまで荒れに荒れたのだった。

## 回想 双竜誕生 ドラゴンの子

ここは妖精の尻尾本部内にある書庫。

そこへ暇を持って余っていたルーシーがやって来ていた。

というのも、いつも彼女を誘うナツとレアは「久しぶりに2人で仕事行こうぜ!」「OKなの!」という具合にさつさとギルドを飛び出したのだ。

いつも彼らと一緒にの猫2匹はどうしたのかといえ、昨日ギルド内を大騒がせした人格輪転事件が大きく関係していた。

あの後その場で人格が入れ替わったマカロフとミラ、カナとエルフマン、ジェットとドロイはほぼ諦めていたレビイを説得してなんとか元に戻した。

理論はあっていたのだ、制限時間も余裕があれば呪文さえ間違えないう限り戻せない道理は無かった。

問題であるロキ、ハツピー、エルザ、フリーシャの4人はレアの提案でガルナ島へと蜻蛉返りしていた。

彼女の案は至ってシンプル。  
今すぐガルナに戻って月の雫をその身に受けるというものだった。

島で散々呪いだなんだと言われた月の雫であるが、元々はあらゆる魔法を解除する解呪の魔法なのだ。

使用した際に発生する邪気さえ適切に対処すればなんら問題は無いし、人間に対しては無害であることは既にリオンたちが証明している。

人格輪転も魔法だ。

いかに未来永劫元に戻らないと言われていようと、あの絶対氷結をも溶かす月の魔力を前にすればかたなしだろう。

そういう訳ですっかりルーシーは暇になってしまったのだ。

なんの目的も無くフラフラとギルド内をさまよって書庫に寄ってみると、彼女は巨大な本棚にかかったハシゴの上で何やら作業をしていたミラを発見した。

「ミラさん!! 何してるんですかー?」

「古い資料の整理よ」

「アタシも手伝います!!」

昨日色々あったばつかなのに凄いなあと心中で感銘を受け、ボールを投げられて取りに行く犬の如くルーシイは手を挙げて手伝いを申し出る。

ミラは朗らかな笑みを浮かべた。

「お願いしていいかしら」

「はアーい! お易い御用です!!」

ガッテン!とサムズアップしてみせたルーシイはすぐにミラの元へと駆け寄り、作業内容を聞いて手伝い始めたのだった。

~~~~~

「それでナツもレアもアタシを巻き込んで……酷いと思いませんか?」

「フフっ…でもそういう所が可愛いのよねえ」

ルーシイが手伝い始めてから約三十分が経過した。

その間、ルーシイは如何にして自分がS級クエストに巻き込まれたかを（自分が被害を被ったように少し脚色して）話した。

ミラはいつもの様に笑ってそう言ったが、ルーシイは「そうかなあ」と唇をとんがらせた。

「ナツの子供っぽいところも、レアのちよつと意地っ張りなところも、ルーシイ好きでしょ?」

「…………え!？」

突然の「好き」という言葉に反応してか、ルーシイは驚いて大きく仰け反った。

しかしそれがいけなかった。

ルーシイが仰け反ったのは、なんとさつきまでミラが乗っていたハシゴの上であったのだ。

普通に高さがあるところでそんな行為をとればバランスを崩すことは必至。

掴みかかった本棚から大量の本をぶちまけながらルーシイは盛大に落ち、ドシーン!と大音を立てながら尻もちをついた。

「大丈夫!!？」

「あつははは……すみません、こういうの慣れてなくて……」

心配して駆け寄ったミラだったが、笑って応えるルーシイを見てとりあえず大きな怪我は無さそうだと安心した。

対してルーシイは自分の下敷きになっているぐちやぐちやに散らばった本の山を見てあちやーと顔を顰めている。

ふと、自身の手元を見た。

「ん? なんだろう……この絵」

「わア……懐かしい……!」

目に入ったのは一冊の本から飛び出した2枚の絵だった。

1枚の大きい方の絵は大勢の人が描かれていた。

その真ん中では桜色のツンツン頭の少年と、水色のロングヘアーに白いベレー帽を被った少女が何やら喧嘩をしていた。

もう1枚の小さい方の絵は先程の大きな絵で喧嘩をしていた2人が白髪のボブカットの少女を挟んで仲良くこちらに向かって笑顔を見せていた。

ルーシイは不思議そうに2枚の絵を拾い上げると、後ろから覗き込んだミラがそう零した。

それを聞いて、ルーシイはこれがなんなのか何となくわかった。

「コレ……この真ん中で喧嘩してるのって、昔のナツとレアですか!?」
「そうよ」

答えは是であつた。

ルーシイは頭の中に今の仲間の姿をトレースして、2枚の絵のうち、大きい方の絵の周りを囲んでいる人物たちを見た。

「じゃあ、これがグレイで……こつちが……カナ? って、マカオとワカバ!!? 若ツ!!」

そうして確認していると、ルーシイはハッと何時ぞやの記憶を思い出し、ミラに真相を聞いてみる事にした。

「そういえば前、エルザたちと初めてチームを組んだ時、行きの列車でエルザが昔はナツとレアの仲は凄く悪かったって聞いたんですけど、本当なんですか!?!」

「ええ、本当よ」

「じゃ、じゃあ!! どうやって今の2人の関係になったんですか!?!」

「そうね……アレは、私がまだ妖精の尻尾フェアリーテイルに入っつてすぐの事だから……今から、6年前くらい前ね」

それを皮切りにミラはルーシイに語り始めた。

くくく

6年前の妖精の尻尾フェアリーテイル、雰囲気は今と変わらずワイワイと賑わっていた。

そしてナツの喧嘩も6年前から健在だった。
だがその相手はグレイでは無かった。

勿論ナツとグレイの不仲は6年前も同じで出会えば喧嘩することは多かった。

しかし彼にとっては当時グレイよりも気に入らない者が存在したのだ。

「くたばれレア!!」

「ぐっ…! いい加減に消火されるの…!!」

そう、現在の彼の相棒とも言える双竜の片割れであるレアである。

先にルーシイが聞いた通り、当時の2人の関係は現在のナツとグレイ以上に悪く、まさに水と油の関係。

面を合わせれば喧嘩は当たり前であり、いつも2人の喧嘩を止めていたエルザは当時を振り返ると、決まって眉を困ったように下げて『骨が折れたものだ』と語っている。

2人の関係がここまで拗れたのには原因がある。

これよりもさらに1年前、ナツとレアはほぼ同じタイミングでギルドに入った。

最初は同じ滅竜魔導士同士気が合うかと思われた。

しかしその思惑はナツ本人によって破壊された。

『水を飲むんじゃないやなくて食うって…変なやつだな。オレは水なんかよりもよりも火を食った方が絶対いいな!』

その言葉は水リヴァイアサン竜の逆鱗に触れてしまった。

次の瞬間、ナツの顔面に拳がめり込んでいた。

受け身を取り切れずボールのように何度か跳ねて壁に叩きつけられる。

ナツが鼻と口辺りを抑えながら立ち上がって文句を言うよりも先に、レアの抑揚の無い声が静かに響いた。

『水を…ゼルネールを…バカにするな…!!』

レアの表情から感情の色は完全に消えていた。

大きな蒲公英色の瞳は四白眼となつてユラユラと揺れていたが、視線という名の釘はしっかりとナツに刺されていた。

だがレアはその目を閉じたかと思えば、フツと嘲るような微笑をナツに向けた。

『レアからすれば火を食べる事の方が理解不能なの。口の中焦げ臭そうなの。ん……ナツなら焦げた食パンも美味しく食べられるんじゃないの?』

それを聞いた瞬間、ナツの中で何かがプツンと切れた。

するとナツは足から炎を吹き出してレアに急接近し、そのまま炎を纏つた拳を振り抜いた。

だがタダで受ける気が無いレアは水流を手に纏つてナツの燃える拳を真正面から受け止めた。

ギリギリとせめぎ合う中、2人の視線だけは相手を仕留める為にとお互い離れなかった。

『上等だ…黒焦げにしてやるよ…!!』

『その前にレアが鎮火して流してやるの』

これが2人の因縁の始まりだった。

この後2人の喧嘩は激熱化して周りを巻き込む大惨事になってしまった。

最終的にはカンカンに怒ったマカロフが2人の頭に拳骨を叩きつけて終幕となった。

だがこの日以降、2人は最初にも述べたように面を合わせれば喧嘩するようになってしまったのだ。

そんな2人だったが、ギルドで過ごしている間では悲しい共通点があった。

ナツは仕事の時以外はレア、グレイ、エルザなど誰かと喧嘩する毎日を過ごし、レアも仕事以外はナツと喧嘩するか、1人席に座って食事をしているかの2択しか無かった。

そう、2人とも真に気を許せる存在というのはあまり居なかったのだ。

~~~~~

そんなある日のこと。

レアがいつもと同じ無表情で食事をしていると、ボタン！と扉が開いた。

目を向けると、あの憎たらしい少年ナツが何やらタマゴを抱えて笑顔でマカロフの元へ一直線に駆けていた。

いつもの様に仕掛けようかと考えたレアだったが、それよりもナツが抱えているタマゴが気になり一旦保留にした。

タマゴはナツが両腕で抱えても手が届かないくらい大きく、殻には何やら奇妙な紫のまだら模様が入っていた。

「タマゴだー!! タマゴ拾った!!!」

「ンなもん一体どこで?」

「東の森で拾ったんだ!」

「東の森…」

あとから聞いた話によれば、ナツが言う東の森で修行をしていた時に突如頭上から降ってきたのだという。

「んだよ、ナツにしちゃ気が利くじゃねーか。みんなで食おうってか?」

「グレイ服…」

「うおっ!？」

椅子にどっかかりと座ったグレイが関心と言わんばかりの笑みを浮かべてそう尋ねると、横からカナがお小言を零す。

余談だが、この頃のカナは未来で水着スタイル樽から直接飲酒する系女に進化するとは到底思えないワンピースを着た清楚な女の子である。

グレイのいつもの反応にカナがため息をつくとき、ナツがマカロフに向かって掲げていたタマゴを再び腕の中に抱えた。

「冗談じゃねえ! これはドラゴンのタマゴなんだ、孵すんだよ!」

「ドラゴンなの?」

思わぬ返しにマカロフ以外の者は揃って目を丸くさせ、中でもレアの反応が顕著で、ナツの言葉に思わず反応していた。

だが興奮冷めぬ様子のナツは座布団の上に置いたタマゴを満面の笑みでまじまじと見た。

「見ろよ! この辺の模様とか竜の爪みたいだし!!」

「そ…そうか…?」

確かにタマゴのまだら模様は円というより楕円の横を尖らせて角を作り、さらに楕円全体をぐにやりと曲げたような形をしており、竜の爪というより爪で切り裂かれた跡のように見えなくもない。

グレイとカナがナツが指さした模様を同じようにまじまじと見ていると、ナツは笑みのままマカロフの方へと振り向いた。

「つーわけで、じっちゃん! ドラゴン、誕生させてやってくれ!!」

「なアにを言うかバカモン!!!」

しかしマカロフから返ってきたのは叱責であった。

当然願いを聞いてもらえろと思っていたナツは驚いたように目を見開かせた。

「この世に生命を冒読する魔法など無いわ。生命は愛より生まれるもの。どんな魔法もそれには及ばん」

厳格な声でそう語り聞かせるマカロフ。

だが聞かされた当人はポカーンと口を開けており、マカロフの言葉を理解出来ているとは言い難い様子であった。

「何言ってるのか全然わかんねえ」

「ガキには早すぎたか」

案の定全く理解など出来ていなかったナツにマカロフはため息をついた。

そこへカシヤンカシヤンと鎧の音が近づく。

「つまり孵化させたければ一生懸命自分の力でやってみろという事だ。普段物を壊すことしかしていないからな。生命の誕生を学ぶには良い機会だ」

「エルザ!!」

声の主はもちろんエルザであった。

ちようど仕事から帰ってきたところらしく、遠くでマカロフの話を聞き、微笑を浮かべながらナツにそう言葉を送った。

因みにレアとグレイはこの頃から既に苦手意識の刷り込みが完了しており、彼女の登場と同時に顔を歪めた。

「エルザが帰ってきたってえ!!?」

その時、そんな声がギルド内にこだまする。

それに反応してエルザが視線を向け、眉がピクリと動いた。

視線の先には白髪ポニーテールの少女がいた。

黒のキャミソールとホットパンツという現代のカナよりほんの少し控えめだが十分な露出度の高さであり、紫のリボンで束ねた髪をたなびかせながら鋭い眼光がギラつく。

「この前の続きやるよ！ かかっておいで!!」

「また喧嘩?」

手をクイツクイツと曲げて挑発する少女。

その背後で同じ白髪のボブカットの少女が呆れたように発するが完全に聞く耳持たずだった。

するとエルザが挑発に乗った。

「フツ……そういえばまだ決着が着いていなかったな…ミラ!!」

なんとポニテ少女の正体は現在の妖精の尻尾の看板娘であるミラ  
ジェーン・ストラウスであった。

現在のミラしか知らなければ想像も出来ないだろうが当時のミラは簡潔に纏めると、手につかない程のじゃじゃ馬娘である。

性格はナツ以上に短気で、口より先に手が出る。

そして何よりも今との一番の相違点はエルザを目の敵とし、仲は当時のナツとレア同様最悪だったという事だろう。

「くたばれエルザア!!」

「泣かすぞミラジェーン!!!」

さらに実力も申し分無かった。

エルザと真正面から殴り合える力を持ち、後に彼女も妖精の尻尾の  
S級魔導士の1人として名を馳せるようになる。

「エルザの奴……アレでオレたちに喧嘩するなって言うから頭くるよな……」

「ん……納得出来ないの……」

しかしいぎ2人が喧嘩を始めればどつきあいながら互いの容姿をデイスリあうだけの低レベルなものであった。

だがなまじ実力もある分ナツの喧嘩と比べたら被害は大きくタチが悪い。

普段エルザに喧嘩を止められるナツ、レア、グレイは揃って微妙そうな表情を浮かべる。

グレイとレアが文句を垂れ流すと、ナツは喧嘩する2人を見ながらポキポキと指を鳴らした。

「くっそー…エルザもミラもいつかまとめてぶっ倒してやる!!」

「まったくもう、強がりばかり言ったら女の子に嫌われちゃうよ」

だがナツの闘志に水を差すかのような言葉が飛び込んだ。

ナツはムツとなりながら声の方へ顔を向けると、さっきまでミラと一緒にいた白髪のボブカットの少女がそこにいた。

「るっせーんだよりサーナ」

「ねえナツ、そのタマゴ私も一緒に育てていい?」

少女、名をリサーナはナツの文句など聞こえてないかのように話題をタマゴに戻した。

それを聞くや否や、ナツはペアと顔を明るくさせた。

「手伝ってくれんのか!？」

「うん!! なんか面白そうだし、タマゴ育てるの」

「育てるってなんか違うね…?」

「ん、タマゴは孵すのであって育てるのは生まれた子だと思ふの…」

リサーナの言葉にグレイとレアがツツコムがナツにとってはその事はどうでもよかった。

「タマゴどころか生物、それこそ虫の一匹ですら育てたことが無いナツにとってタマゴを孵す知識など正に皆無であった。」

「どうすれば孵るんだろう……」

「あつためればいいんだよ」

ナツの疑問の声に答えたりサーナ。

それを聞いた瞬間、彼はリサーナの言葉に「あつためる!？」とオウム返しにし、目をギラつかせた。

「オレの得意分野じゃねえか!!」

誰もが嫌な予感がした瞬間、予想通りナツはとんでもない凶行にでた。

「ウツヒヨオオオオオオ!!!」

「ぎやああああああ!!!」

「バカなの!!?」

「アホかお前!!!」

なんとナツはタマゴを持ち上げたかと思えば自身の炎のブレスをそれに向けて吐き出したのだ。

リサーナが悲鳴をあげ、レアがどつき、グレイがタマゴを回収することなどか止めさせた。

心做しかタマゴの顔(?)が青くなっている。

「もう！ダメだよ!! そんなに強くしたら焦げちゃうでしょ!!?」



「ビーバーだよー！」

マーモットである。

全身を茶色に近い濃い赤の毛で包まれた、子供たちの2倍の大きさはあろうマーモットが怒り顔でナツとレアを見下ろしていた。

その正体は、テイクオーバー接収と呼ばれる魔法によって変身を遂げたりサーナである。

タマゴを巻き込む。

それを聞いて2人はさっきの剣幕が嘘かのように大人しくなった。

ナツはもちろんの事、レアとてタマゴから生まれるだろう生命の命を奪う気は無いのだ。

ナツは舌打ちしながらそっぽを向き、レアは帽子を被り直して踵を返した。

「お、おいレアどこ行くんだ…?」

「ハコベ山…：山の中腹でバルカンの討伐依頼に行ってくるの。数が数だから長くなる…：多分一週間は戻らないの」

そう淡々と告げたレアはさっさとギルドを後にしてしまった。

みんなその背中を多少差異はあれど少し不安そうな表情で見つめた。

しかしナツに限っては相変わらず不貞腐れた表情でダンマリを決め込み、大事そうにタマゴを抱えていた。

くくく

「う…ほお…」

轟々と吹雪く中、ドシーンと音を立てて崩れ落ちた巨体。

その前方には白のベレー帽を被った少女がすまし顔でパンパンと自身の服をはたいた。



「これで6…なの」

ふうと息をついたレアは拠点としている洞窟に向かって歩を進めた。

レアがハコベ山にやって来て行っている仕事はギルドでも言った通りバルカンの討伐である。

凶悪モンスターの一体として数えられるバルカンだが、レアが引き受けた依頼の討伐数は驚異の40体。

しかし流石は後に水リヴァイアサン竜と呼ばれる魔導士に成長する少女。

本人曰く猿などに負ける道理など微塵も無かった。

「…：…水温調節…まだ下手くそなの…：…」

しかし彼女もまだまだ発展途上。

今では当たり前のように使えている水温調整による水の状態変化は完全に習得出来ていない。

氷であろうと自身の魔力に変換する水の滅竜魔法だが、結局魔力補給は「水」でなければいけないのだ。

吹雪が吹く雪山という環境下では雪解け水などを確保するなど不可能であった。

結果的にレアは1日に6匹倒すというノルマを立て、魔力の回復は時間をかけてゆっくり行うことにしたのだ。

やがて拠点の洞窟に到着し、レアは自身のリュックから着火が可能な魔道具を取り出して焚き火を焚く。

「…：…火」

パチパチと音を立てながら逆立つ炎を見て、レアはふと因縁の相手の顔が思い浮かんだ。

「……………」

ボソツとこぼれ落ちた言葉にレアはゾワツと自身の毛が逆立つ感覚を覚えながら、焚き火のそばに置いていた溶けた氷が入っていたコップを手に取り、グイツとその中の水を飲み干した。

普段の彼女ならしないであろう乱雑な食事にレアは後からハツと なって深いため息をついた。

「はアー…なんでレアはアイツがいない所でもアイツに翻弄されてるの…?」

そんな思考に落ちたレアだったが、ブンブンと首を横に振って煩惱を消し去ろうとする。

それでも消えなかった為に、レアはバカバカしいと無理やり終止符を打って寝袋に潜り込んだ。

パチパチと燃える焚き火の音をBGMにしながら、レアはまどろみの中へと落ちていった。

くくく

コココココン……コココココン……

ふと、そんな音がレアの耳に飛び込んだ。

キツツキが木をつつくような音に不快感を覚えながらゆつくりと目を開ける。

「んぐ……………ッ!!?」

瞬間文字通り飛び起きた。

目を覚ましたレアの視界に映ったのは一面の白だった。

突然の異常事態にレアは寝袋がちぎれんばかりに強引に抜けて足に水流を纏って警戒を強めた。

だがその警戒は全くの無意味である事を自覚するのはすぐだった。

「……タマゴ……？」

そう、白の正体はタマゴの殻の部分だったのだ。

ナツがギルドに持ち帰ったタマゴと同等の大きさであり、赤い花のような不思議な柄が入っていた。

いつかの時と同様レアがタマゴをまじまじと観察していた時だった。

「……っ？……わっ!？」

タマゴがぴよぴよこと小さく跳ねたかと思えば、レアの腕の中へと独りでに飛び込んだのだ。

慌ててキャッチすると…。

コココココン……

自分が目を覚ますキツカケとなった音がタマゴから聞こえてきたのだ。

タマゴが自ら勝手に動く様子に、レアの頭ではハテナが渦巻いていた。

しかし、自身の腕の中におさまるタマゴを見て、レアの中で一つの考えが思い浮かぶ。

根拠などは無かったが、直感的に感じたことである。

「……レアと……一緒にいたいのか？」

コココココン……

再びタマゴから音が鳴る。

その音は心做しかそれまでのよりも甲高く聞こえ、レアは何となく「当たり前！」と言っているような気がした。

「……」

だが、レアは少し困ったように眉根を寄せた。  
ハッキリ言ってしまうえば、今のレアにはこのタマゴを育てる余裕が無いのだ。

本人曰く、バカ食いしてバカみたいに所持金を減らしているどっかのバカとは違って（本人の前で言って大喧嘩したのは内緒）レアはゼルネールを探す為にあちこち行っていたから、電車代に馬車代と出費が嵩張っているとの事だった。

しかしその思考に至った時、レアは根本的な問題に気がついた。

「君……ママはどうしたの？」

そう、このタマゴの母親の問題である。

これ程の大きさのタマゴだ。

ナツじゃないが、ドラゴンのタマゴだと言われても信じ込みそうな程の巨大なタマゴ。

それを産んだ母親は一体どんな存在なのか。

最悪の場合、これが自分では対処しきれない凶悪モンスターのタマゴの可能性もある。

そうなれば、ますます自分には手に余る事案だ。

……

しかし、タマゴからの返答は無かった。

ここまでのタマゴの動きを見るに明確な意思疎通は困難であろうと、軽い応対くらいは可能であると考えているレア。

だが今の質問に対しての返答は無し。

つまるところそれは……

「……ママが何か……分からないの？」

コココココン……

是と返したであろうタマゴの返答。

それを聞いて、レアは衝撃に駆られていた。  
まだタマゴとはいえ母親についてが分からないとはと。  
その時、フツとレアの頭の中で苦い思い出が蘇る。

『ゼルネールう……』

ゼルネールが居なくなってしまったあの日である。

レアはキュツと胸が締め付けられるような感覚を覚えると同時に、  
腕の中のタマゴを自分と重ねていた。

「この子も……一人ぼっち……」

そう口に出すと、彼女の意思は固まった。

「じゃあ、レアが教えてあげるの……！ レアが君のママになってあげるの!!」

すると、とんでもない事を口走った。

いつもの天然が発動した上にツツコム者も居ないが故にトントン  
拍子で話が進んでいく。

「レアはゼルネールの……ドラゴンの子なの！ そのレアの子なら、  
君もドラゴンの子になるの!!!」

まるで意味がわからんぞ。

しかし本人は嬉しそうな上に、タマゴも再びコココココン……と音  
を立ててレアの気持ちに答えているようだった。

ここに野次を飛ばすのは無粋だろう。

レアは柔らかなく微笑んで慈愛の眼差しをタマゴにたっぷり浴び  
せながら、優しい手つきでタマゴを撫でたのだった。